

# 小糸尾萩野遺跡発掘調査報告

—猪谷榆原道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告Ⅰ—

2017年

公益財団法人 富山県文化振興財団  
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

# 小糸尾萩野遺跡発掘調査報告

—猪谷榆原道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告Ⅰ—

2017年

公益財団法人 富山県文化振興財団  
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

# 序

富山高山連絡道路は、災害に強い幹線道路ネットワークをつくるため、富山市から岐阜県高山市へ至る地域高規格道路として計画されました。このうち富山市猪谷から榆原までの区間が猪谷榆原道路と定められ、平成22年度には富山市庵谷から榆原までの区間の供用が開始されました。現在は、猪谷から片掛までの区間で建設工事が進められています。

猪谷榆原道路の建設に伴い、当事務所では平成17年度から計画路線内の遺跡を発掘調査してまいりました。本書は、平成25年度から26年度にかけて実施した富山市小糸尾萩野遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査の結果、縄文時代と江戸時代の遺構や遺物がみつかりました。縄文時代の堅穴建物や土坑墓の発見により、当時の集落の様子が明らかとなりました。また江戸時代の飛騨街道東道と推定される道路跡の発見は、飛騨との流通のあり方やかつて周辺にあった銀山の経営を考える上で、重要な手がかりを与えてくれるものです。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録には現れることのない往時の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成29年3月

# 例　　言

- 1 本書は富山県富山市小糸地内に所在する小糸尾萩野遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は国土交通省北陸地方整備局からの委託を受けて、公益財団法人富山県文化振興財団が行った。
- 3 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間 平成 25 (2013) 年 6 月 10 日～平成 25 (2013) 年 7 月 22 日  
平成 26 (2014) 年 9 月 16 日～平成 26 (2014) 年 11 月 27 日

整理期間 平成 28 (2016) 年 4 月 1 日～平成 29 (2017) 年 3 月 31 日
- 4 調査に関する全ての資料と出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。
- 5 本書の編集は、田中が担当した。本書のうち、第 I ～ IV ・ VI 章の執筆は田中道子、青山晃、朝田亜紀子が担当し、分担は文末に記した。自然科学分析は、石材鑑定については明治大学 研究・知財戦略機構 黒耀石研究センター客員教授 中村由克氏に依頼し、玉稿を賜った。種実遺体同定は島田亮仁が行い、その他は専門機関に委託し、これらの成果は第 V 章に収録した。
- 6 遺跡の略号は、市町村番号に遺跡名を統合「01 K O - 地区名」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 7 遺構の略号は以下のとおりである。

S B : 掘立柱建物, S D : 溝, S F : 道路状遺構, S I : 壊穴建物, S K : 土坑墓・埋設土器・土坑, S P : 柱穴, S X : 倒木痕
- 8 遺構番号は、調査時に地区ごとに付した番号に一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は遺構の種類にかかわらず連番とするが、掘立柱建物には新たに番号を付した。各地区的遺構番号に加算した数値は次のとおりである。

A ・ B ・ C 地区 : 加算せず, D 地区 : + 700
- 9 本書で示す座標は平面直角座標系第 7 系（世界測地系）を基準とする。方位は全て真北、標高は海拔高である。
- 10 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。

遺構 掘立柱建物 : 1/100, 壊穴建物・土坑 : 1/40, 土坑墓・埋設土器 : 1/20  
遺物 繩文土器・陶磁器・石器 : 1/3
- 11 土層・遺構埋土・土器胎土・赤彩等の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 12 遺物は縄文土器 1 ~ 500 番台、石器等 600 番台、中近世の遺物 700 番台とし、それぞれ連番を付す。  
本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。
- 13 遺物の炭化物や赤彩等は図中に凡例を示した。
- 14 施釉陶磁器の釉の掛かる範囲は 1 点鎖線で示す。
- 15 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。凡例は以下のとおりである。
  - ① 遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、特記欄に「新>古」と示す。
  - ② 模様・土器法量の（ ）内は現存長を表す。
  - ③ 重量は g 単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。
- 16 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々からご教示・ご協力を得た。記して謝意を表する。

神保孝造、松永篤志、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山市埋蔵文化財センター（敬称略、五十音順）

# 目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 発掘作業の経過と方法	2
3 整理作業の経過と方法	5
4 調査成果の公開	6
第Ⅱ章 位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
第Ⅲ章 縄文時代	11
1 概要	11
2 遺構	11
3 遺物	41
第Ⅳ章 近世	100
1 遺構	100
2 遺物	102
第Ⅴ章 自然科学分析	107
1 概要	107
2 小糸尾荻野遺跡における石器石材と原産地推定	107
3 種実遺体同定	116
4 放射性炭素年代測定	117
5 漆塗膜分析	121
第VI章 総括	123
1 縄文時代	123
2 近世の道路状遺構について	129
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	調査遺跡位置図	1	第63図	近世遺物実測図	105
第2図	調査地区割図	3	第64図	小糸尾萩野遺跡の石器石材環境	113
第3図	基本層序	4	第65図	曆年較正結果	120
第4図	周辺の地質	8	第66図	曆年代の分布	120
第5図	周辺の遺跡位置	9	第67図	土器外面赤色塗膜の赤外分光スペクトル図	122
第6~11図	遺構全体図	18~24	第68図	遺構配置図	124
第12~23図	縄文時代遺構実測図	26~34・36~40	第69図	縄文土器底部の圧痕種類	125
第24~60図	縄文時代遺物実測図	46~74・90~98	第70図	縄文土器胎土のタイプ別比率	126
第61図	近世遺構実測図	103	第71図	県界街道東道推定ルートと周辺の主要交通路	131
第62図	道路状遺構SF3の推定延長	104	第72図	道路状遺構で検出されたピット群	134

## 表目次

第1表	既往の調査一覧	2	第15表	磨製石斧の石材 透閃石岩-蛇紋岩の内訳	113
第2表	調査体制	3	第16表	小糸尾萩野遺跡出土の石器・石製品石材の属性一覧	114
第3表	調査一覧	3	第17表	石材の分類と記載	115
第4表	整理体制	5	第18表	種実遺体同定結果一覧	116
第5表	周辺遺跡一覧	10	第19表	形態的特徴	116
第6表	堅穴建物一覧	25	第20表	測定試料および処理	117
第7表	掘立柱建物一覧	35	第21表	放射性炭素年代測定および曆年較正の結果	118
第8表	掘立柱建物柱穴一覧	35	第22表	分析対象	121
第9表	土坑墓・土坑一覧	39	第23表	生漆の赤外吸収位置とその強度	121
第10表	縄文土器一覧	75	第24表	X線分析結果	122
第11表	石製品一覧	99	第25表	塗膜分析結果	122
第12表	陶器等一覧	106	第26表	小糸尾萩野遺跡出土の縄文土器胎土	126
第13表	金属製品一覧	106	第27表	近世道路状遺構の諸例	137
第14表	磨製石斧の石材内訳	113			

## 写真図版目次

図版1	遠景	図版9	全景	図版17	土坑墓
図版2	堅穴建物・土坑墓	図版10・11	堅穴建物	図版18	土坑墓・土坑
図版3	土坑墓	図版12	道路状遺構	図版19~27	縄文土器
図版4~6	縄文土器	図版13	全景	図版28	縄文土器・石製品
図版7	石製品・陶器等・金属製品	図版14	堅穴建物・掘立柱建物	図版29・30	石製品
図版8	航空写真	図版15・16	掘立柱建物		

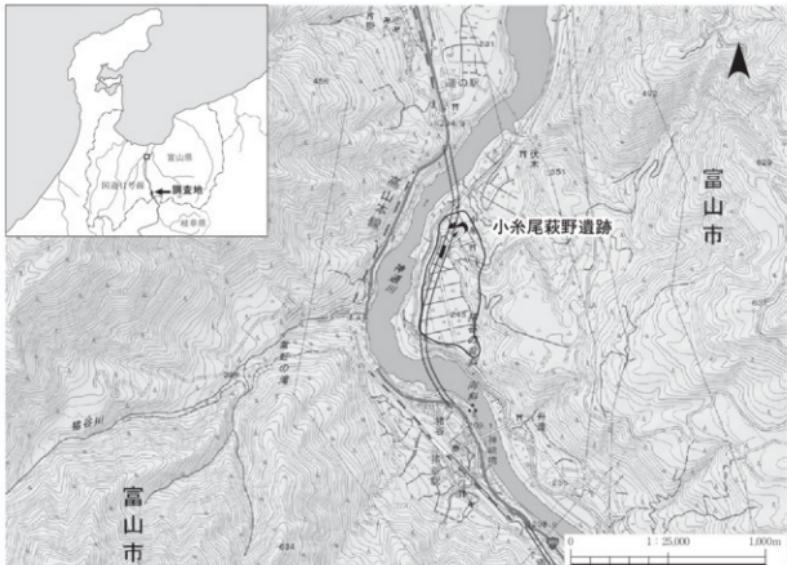
# 第Ⅰ章 調査の経過

## 1 調査に至る経緯

### (1) 調査の契機

国道41号線は富山市から岐阜県を経て愛知県名古屋市へ至る幹線道路である。その間の富山市から岐阜県高山市までの延長約80kmの区間が「富山高山連絡道路」で、地域の発展や地域間の連携を目的とし、北陸自動車道、東海北陸自動車道、中部縦貫自動車道などの高規格幹線道路を補完する地域高規格道路として平成6年に路線指定された。富山高山連絡道路のうち、富山市猪谷～榆原間延長7.4kmは「猪谷榆原道路」として事前通行規制区間の回避、急カーブ・急勾配の区間及び冬期交通障害の回避や災害に強い幹線道路ネットワークの形成等を目的に整備が進められることとなった。平成14(2002)年度に工事着手、平成22(2010)年度には富山市榆原～庵谷間3.0kmの供用が開始され、現在は富山市片掛～猪谷間16kmの工事が進められており、今回の調査はこれに伴うものである。

平成12(2000)年に建設省(現国土交通省)から猪谷榆原道路の建設計画が示された。これを受け、路線予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、富山県教育委員会(以下、県教委)が主体となり分布調査を実施することとなった。分布調査は、平成12(2000)年度と平成20(2008)年度に富山県埋蔵文化財センター(以下、県センター)が実施した。また平成18年度には、富山市教育委員会(以下、富山市教委)が旧大沢野町域における詳細分布調査の一環として周辺の分布調査を実施している。富山市小糸地内では、小糸西遺跡(現伏木遺跡)、小糸西B遺跡(現伏木谷内遺跡)が新たに発見さ



第1図 調査遺跡位置図 背景図データソース：国土地理院電子地形図 1:25,000

れるとともに、小糸遺跡、小萩野遺跡が範囲拡大・統合され、小糸・小萩野遺跡となった。その後、平成 25 年 3 月に所在地の字名から、小糸尾萩野遺跡に改称された。

分布調査の結果報告を受けて、埋蔵文化財包蔵地の今後の取扱いについて検討が行われた。その結果、遺跡のより明確な範囲と内容について把握するため、包蔵地確認調査を実施することになった。小糸・尾萩野遺跡の確認調査は、平成 24 (2012) 年度に公益財團法人富山県文化振興財團（以下、財團）が用地買取済みの 6,600m<sup>2</sup>について実施し、縄文時代の遺構・遺物を確認した。確認調査の結果を受け、国交省・県教委・富山市教委・財團で協議した結果、財團が本調査を受託することで合意し、平成 25 (2013) 年度に本調査を実施した（A 地区）。隣接する 10,800m<sup>2</sup>については、用地買取の終了した平成 25 (2013) 年度に県センターが包蔵地確認調査を実施し、縄文時代の遺構・遺物を確認したため、引き続き財團が平成 26 (2014) 年度に本調査を実施した（B・C・D 地区）。

## （2）既往の調査

小糸尾萩野遺跡の既往の調査は、第 1 表のとおりである。

第1表 既往の調査一覧

調査方法	年度	調査主体	調査面積 (対象面積)	文献
分有調査	平成12	県教委	—	—
	平成18	富山市教委	—	—
	平成20	県センター	—	富山県埋蔵文化財センター「富山県埋蔵文化財センター年報 平成20年度」
確認調査	平成24	財團	442m <sup>2</sup> (6,600m <sup>2</sup> )	富山県埋蔵文化財財團「平成24年度埋蔵文化財年報」 富山県埋蔵文化財センター「2013[平成24年度埋蔵文化財年報]」
	平成25	県センター	321m <sup>2</sup> (10,800m <sup>2</sup> )	富山県埋蔵文化財センター「2013[富山県埋蔵文化財センター年報 平成25年度]」
本調査	平成25	財團	1200m <sup>2</sup>	富山県埋蔵文化財財團「2014[平成25年度埋蔵文化財年報]」 富山県埋蔵文化財センター「2014[富山県埋蔵文化財センター年報 平成25年度]」
	平成26	財團	2,490m <sup>2</sup>	富山県埋蔵文化財財團「2015[平成26年度埋蔵文化財年報]」 富山県埋蔵文化財センター「2015[富山県埋蔵文化財センター年報 平成26年度]」

## 2 発掘作業の経過と方法

### （1）発掘作業の経過と方法

発掘調査の作業工程及びその方法・内容は、平成 16 (2004) 年 10 月に文化庁が示した『行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての標準（報告）』、及び平成 22 (2010) 年 3 月に文化庁が発行した『発掘調査の一びき－集落遺跡発掘編－』に則って進めた。

発掘調査の基準となるグリッドの設定には、世界測地系による国家座標（平面直角座標系第 7 系）を用いた。X + 53240・Y + 6330 を X O Y O の起点とし、南北方向を X 軸、東西方向を Y 軸とした。グリッドは 2 m 方眼とし、各グリッド名は北東角の X 軸・Y 軸の座標とした。発掘範囲は X 2 ~ X 134、Y 4 ~ Y 98 である。

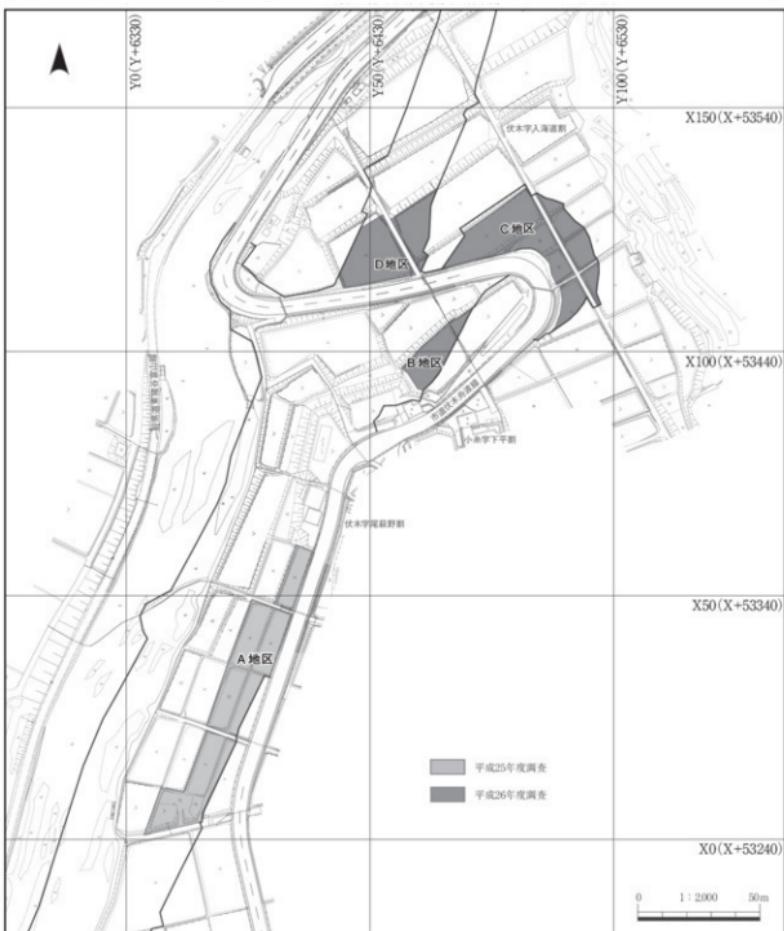
本調査は、平成 24 年度の確認調査によって範囲が確定した A 地区から着手した。ただし、A 地区については、平成 25 年度に実施した本発掘調査時には、他地区の本調査の有無が不明であったため地区名を付さず、平成 26 年度の本調査範囲 3 地区が確定した時点で A 地区とした。B 地区は S 字状に曲がる市道伏木舟渡線の南側とし、市道北側については東部分を C 地区、西部分を D 地区とした。

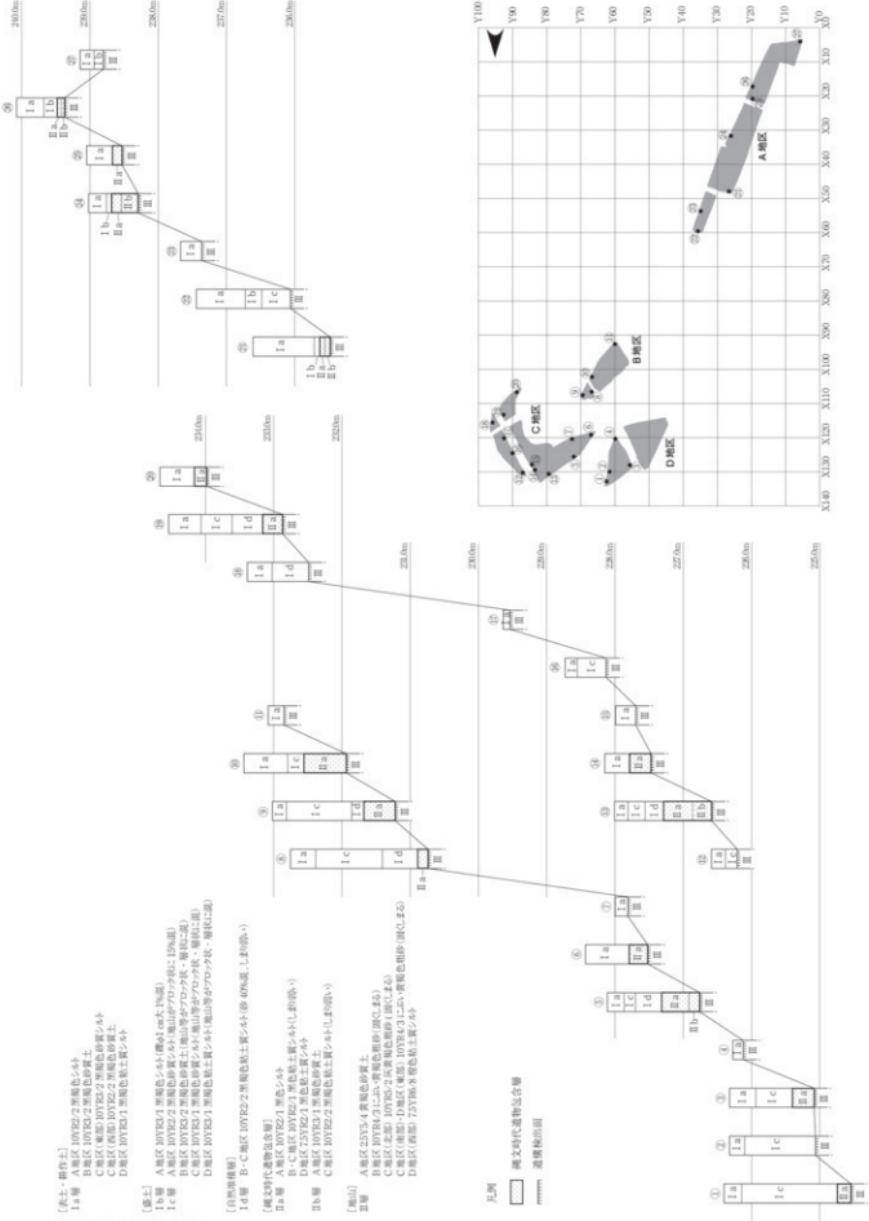
第2表 調査体制

実施年度	総括	調査事業担当				
		所長 岸本 雅敏	副所長 池野 正男	総務	総務課長 松尾 互 主任 江本 拓一	
平成25					調査課長 烏田美佐子 チーフ 中川 道子 主任 青山 晃	
平成26	総括	所長 岸本 雅敏	副所長 池野 正男	総務	総務課長 松尾 互 チーフ 青山 晃	調査課長 烏田美佐子 主任 烏田 亮仁 主任 朝田恵紀子

第3表 調査一覧

地区	検出面	調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺物
A	近世-純文	平成25年6月10日~7月22日	22日間	1700m <sup>2</sup>	中川 道子 青山 晃	純文土器, 陶器, 越中織戸, 伊万里, 唐津, 石製品, 銅管
B				320m <sup>2</sup>		土坑, 倒木頭
C	純文	平成26年9月16日~11月27日	43日間	1250m <sup>2</sup>	烏田 亮仁 朝田恵紀子	堅穴建物, 墓立柱建物, 土坑墓, 土坑, 倒木頭
D				790m <sup>2</sup>		堅立柱建物, 土坑





### 第3回 基本層序

## (2) 層序

基本層序は、Ⅰ層：表土・盛土等、Ⅱ層：縄文時代遺物包含層、Ⅲ層：地山である。

Ⅰ層は、表土・耕作土（Ⅰa層）、盛土（Ⅰb・Ⅰc層）、自然堆積土（Ⅰd層）からなる。Ⅰb・Ⅰc層は圃場整備に伴う盛土である。Ⅰb層は疊混じりでA地区でのみ確認し、Ⅰc層は砂混じりで全地区において確認した。Ⅰc層は旧地形の傾斜と造成された田面の高さに応じて堆積の厚さに大きな違いがあり、ほとんど無い箇所がある一方で1.5m以上の堆積がみられる箇所もある。Ⅰd層は黒褐色粘土質シルトを基調とする無遺物層で、B・C地区に堆積が認められた。

Ⅱ層は、縄文時代中期を主体とする時期の遺物包含層で、Ⅱa・Ⅱbに細分した。Ⅱa層は黒色粘土質シルトを基調とするしまりの弱い土層で、圃場整備による削平をうけた範囲を除く調査区のほぼ全域で確認した。Ⅱb層は黒褐色砂質土や黒褐色粘土質シルトを基調とし、地山への漸移層と考える。Ⅱa・Ⅱb層が包含する遺物は、調査地区によって若干の時期差がみられるが、縄文時代中期中葉が出土遺物の中心となる。

Ⅲ層は、黄褐色砂質土やにぶい黄褐色・褐灰色粗砂、あるいは橙色粘土質シルトを基調とする無遺物層である。遺構検出面はⅢ層上面であり、A地区では縄文時代と近世、B・C・D地区では縄文時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は239.4～224.5mを測り、調査区南東から北西に向かって大きく傾斜する地形である。X 116～134列Y 55～83列範囲内において、多くの遺構を検出した。

## 3 整理作業の経過と方法

出土遺物は、調査年度内に洗浄、注記、分類を行った。土器のバインダー処理は、A地区出土土器のうち自然科学分析を行わないものに限って実施した。石製品、金属製品についてはメモ写真を撮影し、整理台帳を作成した。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は、平成28(2016)年4月に開始した。4～12月は土器・陶磁器の接合・復元、6～12月は遺物の実測と挿図作成・デジタルトレース、11～1月は遺物の写真撮影、図版作成、10～12月は原稿執筆、編集、翌平成29(2017)年1～3月は印刷、校正を行った。

土器・陶磁器の接合・復元は室内整理作業員が行った。遺物の実測は職員と室内整理作業員が行い、遺物実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺物の写真撮影は職員が行った。遺構・遺物の挿図は、派遣オペレーターがデジタルデータ化を行い、印刷原稿とした。遺構実測図と写真は各台帳を作成して整理し、遺物カードとともにパソコンコンピューターを使用してデータ入力した。データ入力は職員が行い、室内整理作業員が補足した。遺構・遺物のデータは観察表として掲載した。自然科学分析は専門業者に委託し、結果報告を掲載した。(朝田亞紀子)

第4表 整理体制

実施年度	調査事業担当							
	統括	所長	岸本 雅敏	統務	統務課長	松尾 互	調査統括	調査課長
平成28					主査	青山 晃	担当	副主幹
								田中 道子

## 4 調査成果の公開

### (1) 遺跡説明会

各年度の発掘調査の成果を広く一般に公開するため、現地において遺跡説明会を開催した。

#### A 平成 25(2013)年 7月 20日(土)午前 10時～12時開催

梅雨明け前ではあったが、好天に恵まれ、地元住民を中心に約 70 名の参加があった。調査成果の目玉として、縄文時代の竪穴住居と近世の道路跡を見られるように見学コースを設定し、調査員が概要を説明した。当地は以前から縄文時代の遺物が多く採取される遺跡として地元の方々に知られていたが、本格的な発掘調査が行われるのは今回が初めてであったため、竪穴建物を興味深そうに見学する姿がみられた。



また、現地に設置した出土品展示コーナーでは、出土した縄文土器に感心したり、展示してある石器と自宅にあるものに似ているなどと話したり、興味は尽きないようであった。 (青山 晃)

#### B 平成 26(2014)年 11月 22日(土)午前 10時～12時開催

当日は好天に恵まれ、約 100 名の参加があった。見学コースは、縄文時代の竪穴建物と土坑墓を間近に見られるよう、調査区内を縦断する形で設定した。遺構が密集している 2箇所において調査員が説明を行い、あわせて参加者からの質問にも対応した。土坑墓からは副葬品と考える赤漆塗りの縄文土器が出土しており、これらを目の当たりにした参加者の中には、どのような人物が埋葬されていたのかと想像を巡らせる方も見受けられた。現場事務所では、今回の調査で出土した縄文土器や石器、



炭化したクリの実などを展示した。写真を撮りながら熱心に質問をする方が多く見られた。

(朝田亞紀子)

### (2) 調査成果報告会

#### 平成 27年 3月 21日(土)午後 1時～4時 富山県民会館 611号室

この調査成果報告会は、当事務所が実施した発掘調査及び遺物整理の最新成果を広く一般に公開するもので、初回となる平成 26 年度は県内 5 遺跡の発掘調査と 4 遺跡の遺物整理成果を報告し、県内外から 100 名余の参加があった。小糸尾萩野遺跡については、発掘調査によって明らかになった遺跡の概要説明と土坑墓出土の土器などを展示・解説した。 (田中道子)



# 第Ⅱ章 位置と環境

## 1 地理的環境

小糸尾萩野遺跡は富山市（旧大沢野町）小糸に所在する。富山市は平成17年4月に大沢野町外5町村が旧富山市と合併したこと、その市域は豊富な魚介類を育む富山湾から3,000メートル級の山々が連なる雄大な立山連峰までの広範囲なものとなった。旧大沢野町は富山県中央南部に位置し、南の猪谷は岐阜県飛騨市と接する。南北に流れる神通川は岐阜県飛騨市宮村の川上岳を源とし、神通峡谷や片路峠をつくり、笠津で扇状地の要となり富山平野を形成し富山湾に注ぐ。神通川の両岸には河岸段丘が形成されており、とくに右岸が顕著である。上位から船崎台地、大沢野台地、笠津台地とよばれ、さらに南部の下夕地区には高位の片掛期、中位の榆原期、低位の笠津期が見られ、狹隘な段丘上有るやや開けた平地は水田・畑に利用されている。これらの河岸段丘が形成されたのは2~3万年前で、大沢野の神通第3ダム付近の崖から発見された「ナウマン象」の化石が示準である。神通峡は県定公園、片路峠は自然保全地域として県指定を受けている四季の変化が美しい所で、角礫凝灰岩の岩肌がゴツゴツと切り立ったようになっている。神通峡にある横山榆原衝上断層は白亜紀に起った地殻変動でできたもので、国指定天然記念物であり、国道41号から見ることができるほか、猪谷の神峠橋付近には向斜構造、横山には背斜構造がみられ、今から6,000万年前の地殻変動の大きさを物語っている。また神通峡には変成岩類が多くみられるが、なかでも日本で最も古い古生代の岩石である「飛騨片麻岩」が多くみられる。小糸尾萩野遺跡は岐阜県境まで約2km、標高約240mの神通川右岸の高位河岸段丘上にあり、現状は水田であるが、ほ場整備以前は桑畠として利用されていた。

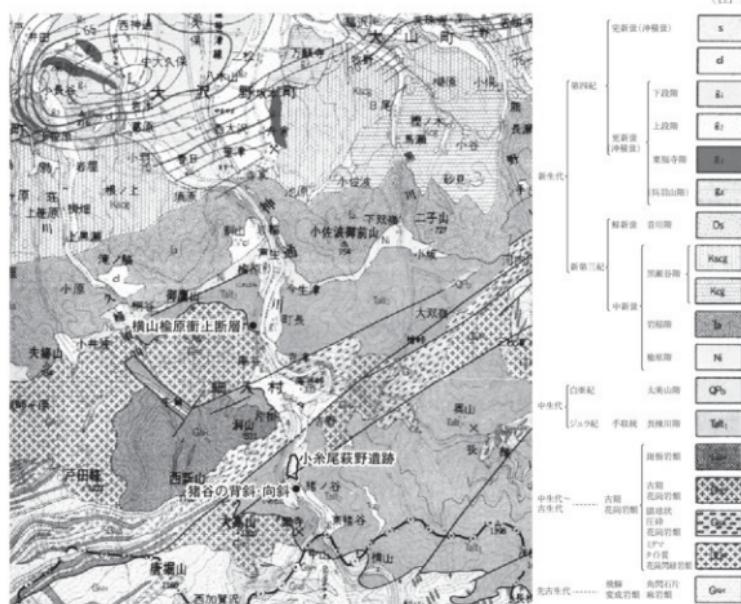
## 2 歴史的環境

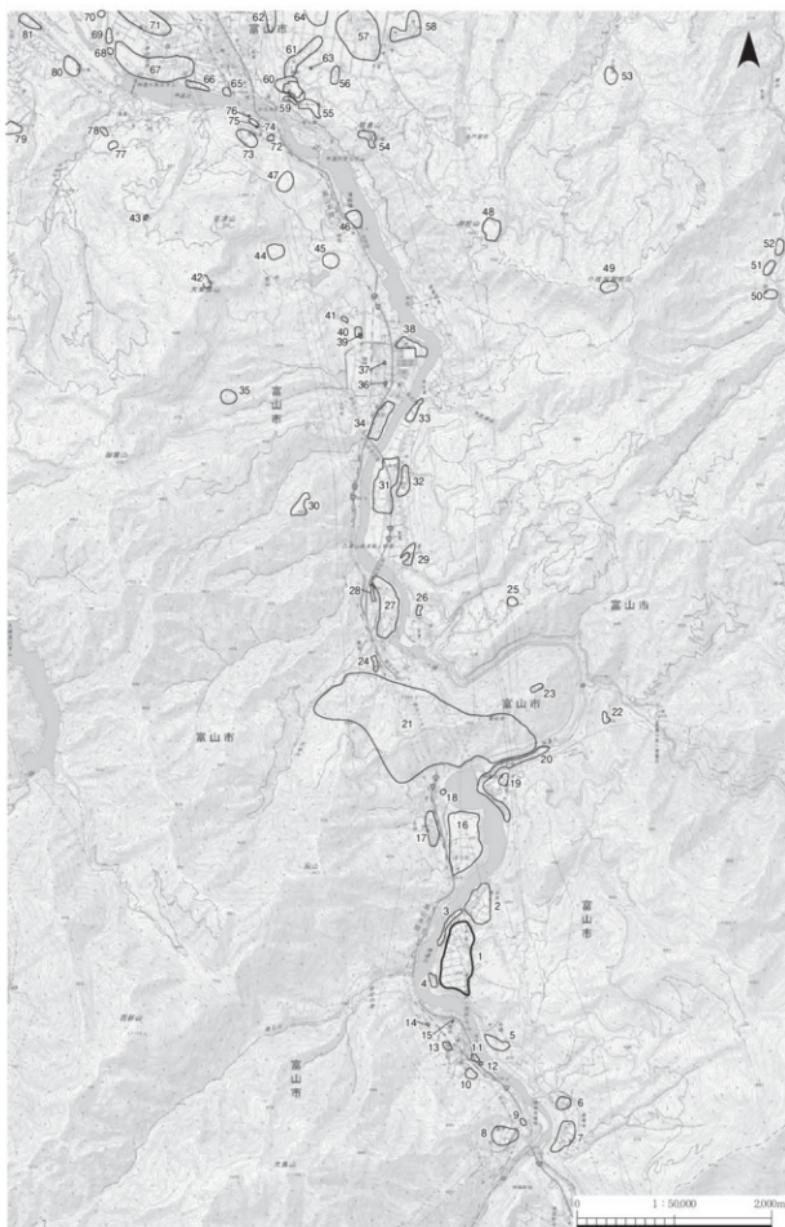
神通川の河岸段丘上には古くから人々の生活が営まれており、扇頂部高位段丘の船崎台地の崖縁には国指定史跡である直坂遺跡(60)、直坂Ⅱ・Ⅲ遺跡(61・62)といった旧石器時代、縄文時代草創期・早期の遺跡が集中している。直坂遺跡の旧石器時代の石器群は中部高地系、東北日本の石刃技法、西日本の瀬戸内技法など、周囲の多様な石器文化がもたらされたことを示し、この地の地理的特質を表している。縄文時代早期から中期には低位段丘の笠津台地に春日遺跡(67)、神通川上流の高位段丘崖縁には片掛遺跡(16)や布尻遺跡(31)がある。布尻遺跡は中期後半~後期初めを中心とした竪穴建物が23棟確認され、県内では例が少ない平面形が六角形の堅穴建物が特筆される。出土遺物は多く、早期から晩期にかけての縄文土器の外、土偶や石器、石棒や石刀などの祭祀に関わる石器類が出土しており、長期間にわたり人が住み続けている中核的集落である。これらの遺跡からは富山県東部から新潟県糸魚川市周辺の遺跡で製作された蛇紋岩製の磨製石斧やヒスイの玉類、飛騨南部に産する下呂石製の石鎌等、岐阜県飛騨市の塙屋金清神社遺跡で製作された石棒などが出土しており、神通川沿いのルートを利用してさまざまな産地から製品としてあるいは石材として流通していたことがわかる。このほか中期には寺津遺跡(26)、庵谷遺跡(27)、榆原遺跡(34)といった小規模な遺跡が河岸段丘上に確認されているほか、寺津東遺跡(25)、須原上井山遺跡(43)が山腹緩斜面に確認され、遺跡数の増加と河岸段丘以外での生活があったことが明らかとなってきた。神通川流域の後期・晩期

については遺跡数が減少し、中位段丘や低位段丘に立地するようになる。笠津台地に立地する春日遺跡は石棒・御物石器・石刀や石冠などの祭祀用石器の出土が特徴的である。弥生時代の遺跡としては直坂II遺跡(61)があるが、出土した遺物は中期の櫛描文系の土器がわずかで、詳細は不明である。古墳時代、古代の遺跡も少なく、なかなか開発が進まない地域であったことがうかがわれる。

中世以降もこの神通川に沿った山間地を通るルートは越中と飛騨とを結ぶ重要な役割を果たしており、戦国期では、飛騨側から塙屋氏が進出して交通の要衝である猿倉山山頂に猿倉城跡(54)を築城するなど、越中の平野・海浜部から飛騨の山間地への塙や海産物などの物資流通路確保を目的の一つとして、この地域を重要視していたことを示している。近世以降、神通川水系は河口の岩瀬から上流の寺津まで米などの農産物や特産物、人を運ぶ主要な交通路であった一方、神通川両岸は飛騨街道として物資の運搬が盛んに行われていた。神通川上流は耕地が狭いため、飛騨街道沿いの村に住む人々は街道を往来する物資を牛に積んで運搬することで生計を補っており、この荷駄運送は文禄三年(1594)に前田利家が百姓に対し許可した特権であり、慶長六年(1601)に前田長種のより再度認められた営業権である。神通川右岸側の飛騨街道東道には加賀藩の東猪谷関所、左岸側の飛騨街道西道には富山藩の西猪谷関所、現在の猪谷関跡(11)が設置され、越中からの米・塙・魚をはじめあらゆる日用品や農具、飛騨からの板材木・楮・茶・煙草・蠶などの流通物資を取り締まり、口銭を徴収していた。この盛んな流通は飛越国境付近に開発された吉野銀山遺跡や庵谷・片掛銀山遺跡(20・21)ともかかわりがあったと考えられる。文物や人の交通は江戸時代初期には東道が主流であったが、富山藩が分藩した寛永十六年(1639)頃から西道が盛んになり、それは現在、神通川左岸段丘線を走り「ぶり・ノーベル出世街道」とも呼ばれる国道41号に継承され、日本海側の富山と岐阜高山を経由して名古屋を中心とした中部圏を結ぶ主要幹線道路として変わらず重要な役割を果たしている。

(田中道子)





第5図 周辺の遺跡位置 (1/50,000) 背景図データソース：国土地理院電子地形図1:25,000

第5表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	種類	時代	No	遺跡名	種類	時代
1	小山尾古野遺跡	散布地	縄文-古世	41	西下山遺跡	散布地	平安-近世
2	伏木遺跡	散布地	縄文	42	大乗山山城跡	城照(山城)	鎌倉-室町
3	伏木谷内遺跡	散布地	縄文	43	頭原上井山遺跡	散布地	繩文(早)-縄文(前)
4	舟渡小舟遺跡	散布地	縄文	44	定期上井船	岩船	弥生-古墳?
5	舟渡遺跡	散布地	縄文中-後-云浜	45	石垣船跡	散布地	縄文(中)
6	東尾谷舟後遺跡	散布地	中世	46	石船八十舟遺跡	不明	不明
7	東尾谷舟跡	散布地	縄文中-後-云浜	47	上野山七ツ塚	塚	中世
8	蟹寺遺跡	散布地	縄文	48	舟曾前山山道跡	祭祀	平安
9	蟹寺山城跡	城照(山城)	縄文-室町	49	小佐波前山山道跡	祭祀	平安
10	猪谷跡跡	散布地	縄文(中)	50	西山道跡	散布地	旧石器
11	猪谷跡跡	開所	近世	51	西山道跡	散布地	縄文
12	猪谷川原遺跡	散布地	縄文(中-後)-古代	52	宮野道跡	散布地	縄文(前-中)
13	中沢川遺跡	散布地	縄文中-後-云浜	53	中尾城跡	城照(山城)	室町-戦国
14	牛沢遺跡	散布地	縄文古代	54	龍ヶ崎城跡	城照(山城)	鎌倉-室町
15	旦暮遺跡	散布地	縄文	55	舟曾西山道跡	散布地	縄文(中)
16	片桐遺跡	集落	縄文(早-晚)-古代-中世-近世	56	舟前舟内遺跡	散布地	縄文-中世
17	片桐西舟跡	散布地	縄文(中)	57	舟前舟永遺跡	散布地	中世-近世
18	片桐舟内遺跡	散布地	縄文	58	寺家船跡	城照	中世
19	吉野遺跡	散布地	縄文	59	直坂谷跡	城照(山城)	戦国
20	吉野山山道跡	私山	近世-近代	60	直坂谷跡	集落	旧石器-縄文(早-中)-弥生-古代
21	庵谷片桐飯山遺跡	私山	近世-近代	61	直坂舟道跡	集落	旧石器-縄文(早-中)-弥生-古代
22	薄瀬宿跡	城照	中世	62	直坂舟道跡	散布地	旧石器-縄文
23	下山宿跡	城照(山城)	戦国	63	直坂舟道跡	散布地	縄文-鎌倉-室町
24	上野遺跡	散布地	縄文中-後-云浜	64	直坂舟永道跡	散布地	縄文-中世
25	寺津東舟跡	散布地	縄文(中)-古代-中世	65	留佐野舟道跡	散布地	縄文-中世
26	寺津舟跡	集落	縄文(中-後)	66	留津道跡	散布地	縄文
27	庵谷舟跡	散布地-城照	縄文(前-中)-縄文-室町	67	伊日道跡	集落	縄文(中-後)-中世
28	庵谷西舟跡	散布地	縄文中-後-云浜	68	兵丸舟道跡	散布地	縄文(晚)
29	布尻舟道跡	散布地	縄文	69	長走道跡	散布地	縄文(晚)-平安-中世
30	藤原山城跡	城照(山城)	縄文-室町	70	長人舟道跡	散布地	縄文(晚)
31	布尻遺跡	集落	縄文(早-晚)-古代-中世-近世	71	舟引兵走道跡	散布地	縄文(早-中-後)-弥生-古代
32	布尻舟道跡	散布地	縄文古代-中世	72	久太木舟道跡	散布地	縄文-近世
33	今生舟道跡	散布地	縄文-古世	73	西船津道跡	散布地	縄文(中)-鎌倉-室町
34	船見舟跡	散布地	縄文(中-後)	74	五輪寺古石砾群	墓	中世
35	山田舟道跡	散布地	縄文(中)	75	前田舟跡	散布地	中世-近世
36	中島舟跡	散布地	中世	76	隅田堀と音堀	その他	近世
37	五輪寺古石砾群	墓	中世	77	頭原七人塚	塚	中世
38	篠原山舟道跡	散布地	縄文-中世	78	頭原舟跡	散布地	不明
39	福島山系北端基壇	墓	縄文-室町	79	下伏曾跡	城照(山城)	戦国
40	篠原舟跡	城照(山城)	縄文-室町-云浜	80	法船舟跡	社寺-塚	中世-近世
				81	小羽畠田遺跡	散布地	縄文-中世-近世

## 参考文献

- 大沢町立教育委員会 1977「富山県大沢町布尻遺跡緊急発掘調査概要」  
 大沢町立 2005「大沢町野町誌」  
 富山県 1974「富山県史」史料編V 近世下  
 富山県上新川郡大沢町役場 1958「大沢町野町誌」上巻  
 富山県教育委員会 1973「富山県大沢町 直坂遺跡発掘調査概要」  
 富山県教育委員会 1976「富山県大沢町 直坂II 遺跡発掘調査概要」  
 富山県教育委員会 1979「富山県歴史の道調査報告書-飛騨街道(その1)~」  
 編入村 1987「細入村史」通史編(上巻)  
 編入村 1989「細入村史」史料編(下巻)

# 第Ⅲ章 縄文時代

## 1 概 要

縄文時代中期の堅穴建物3棟、掘立柱建物9棟、土坑墓14基、埋設土器3基、土坑420基、倒木痕25基を検出した。詳細時期は新崎式から上山田式で、南に位置するA地区がやや古く、北のB・C・D地区がやや新しい傾向にあり、集落が南から北へ移動した可能性がある。掘立柱建物は2間×1間、1間×1間があり、梁に小さな棟持ち柱をもつものが多い。2間×1間の掘立柱建物の中には梁から張り出す位置に棟持ち柱をもつため、平面形が六角形状となるものがある。土坑墓は平面形が楕円形と円形になるものがあり、その規模から埋葬形態は屈葬であったと推測する。副葬品としては縄文土器、石器がある。副葬された縄文土器の中には、埋納されたと考える有孔鍔付土器のほか、遺体の被覆に用いられた可能性がある深鉢の大型破片がある。倒木痕はB地区やC地区南東部の急傾斜な場所に多く、当時は食糧採集等に利用された森林であったとみられる。

## 2 遺 構

### (1) 堅穴建物

#### 4号堅穴建物 (SI4、第12図、図版10・11)

A区南側に位置し、確認した建物の中では最も標高が高く、約239mを測る緩傾斜地にある。建物の西半部が試掘トレンチによって消失しているが、平面形は楕円形とみられる。長軸は6.1mを測り、短軸は4.3mと推定される。建物全体がほ場整備による削平を受けており、遺存している深さは0.15mと浅い。床面は地山を掘り込んだ面を利用し、貼り床は認められない。建物北東部分の床面は他の範囲より0.1m程高く、テラス状となっている。主柱穴はP1～3・5～7・9・11・37の9基と考へる。これらの平面形は円形や楕円形を呈し、径0.3～0.4m、深さ0.3～0.7mの規模となる。P4・8も同様の規模であり、柱穴であった可能性もある。この他に床面上からは径0.1～0.15m程の土坑が45基検出されている。これらは間仕切りなど屋内空間の利用に伴う可能性があるが、その実態は判然としない。また南東部分には幅、深さとも0.1m前後の細く深い溝が壁に沿って確認され、壁構築に関連するものと考えられる。これらの埋土も建物とほぼ同質である。地床炉は床面中央よりやや南西寄りに位置する。1×0.8mの不整楕円形を呈し、掘り込みは0.06mと浅く、焼土の形成も顕著ではない。建物中央からやや北東寄りでは、いわゆるロート状ピット<sup>注1</sup>に相当するP12を検出した。P12の平面形は1.2×1.1mの楕円形を呈する。掘り込みは西側が深くなるような段差を有し、浅い部分で0.15m、深い部分で0.5mを測る。深部の平面形は方形を呈し、底面の四隅には径0.15m内外のピットを検出した。また、北西には幅0.1cm、深さ0.05cmの細い溝がP12を囲むように沿っており、縁辺部が土手状となる。浅い部分では縄文土器(11)が押し潰された状態、石皿(648)が据えられた状態で出土した。縄文土器(1～18)・擦石(633・634・640)、黒曜石剥片(605・606)が出土した。

地床炉の南端に重複するSK5は円形の土坑で、SI4の埋没後に掘り込まれている。出土遺物には縄文土器(109・110)、磨製石斧未完成(615)があるが、SI4の埋土中にあったものが二次的に混入した可能性もあり、SK5自体の時期は判然としない。

(田中道子)

注1 古川知明 1996「ロート状ピットを伴う縄文中期堅穴住居跡について - 北陸型特殊ピットの検討 - 」『考古学と遺跡の保護 甘柏 健先生退官記念論集』甘柏 健先生退官記念論集刊行会

**400号竪穴建物 (SI400、第13・14図、図版2・14)**

C地区北、標高227mの緩斜面に位置する。北東部と北西部が調査区外にかかるため全体形は不明であるが、平面形は楕円形となるようである。北西部でSI401と新旧の切り合い関係があり、SI401よりも新しい段階の建物である。ただし第13図d断面において、SI401埋没後に縄文時代の遺物包含層が堆積し、SI400はこれを切り込むことを確認しているため、SI401廃絶直後の建て替えではなく、SI401とはある程度の時期差があると考えられる。柱穴はP1～P4の4基を検出した。南西部に貯蔵穴をもつ。建物掘形の長さは最大で4.51m、床面までの深さは深いところで0.81mを測る。南部の壁際にいて、幅約0.2m、深さ約0.1mの壁溝が巡るのを確認した。SI400は南から北へ傾斜する斜面に立地し、壁溝は南側にのみ認められるため、雨水の流入を防ぐ目的があったと思われる。床面は平滑に削って整えており、貼床は認められない。地山が非常に硬化した粗砂で安定しているため、貼床等の工夫は不要であったためと思われる。炉や床面における被熱の痕跡は検出していない。4基の柱穴のうちP1・P2は全形を確認できたが、P3は貯蔵穴（K1）と重複するため、またP4は東部分が調査区外にかかるため、判然としない。P1・P2は長さ0.3～0.5m、深さ0.4～0.5mを測り、埋土は黒褐色粗砂や黒色砂質シルトを基調とする。壁溝と重複する範囲でP5・P6を検出したが、SI401にみられるような壁板を支える柱の可能性がある。貯蔵穴は1.97×1.23m、深さ0.41mを測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂を基調とする。

出土遺物は縄文土器（19～73）、磨製石斧（619・620）、石皿（647・649・650・651）、擦石（636・637）、二次加工剥片（610）、石剥片（611）、炭化材がある。出土遺物のほとんどは埋土上層～中層から出土しており、建物廃絶後の捨て場としての窪地利用に伴うものと考えられる。

**401号竪穴建物 (SI401、第13図、図版2・14)**

C地区北に位置する。北東部でSI400と新旧の切り合い関係があり、SI400よりも古い段階の建物である。南の一部のみの検出で、大部分が調査区外にかかるため全体形は不明である。現状で長さ3.09m、深さ0.45mを測る。南壁に幅約0.15m、深さ約0.1mの壁溝が巡り、溝内部で等間隔に並ぶP1～P3を検出した。壁板を支える柱の可能性がある。炉、貼床は認められなかった。中央で検出したSK525は主柱穴の可能性がある。

出土遺物は縄文土器（74～76）、擦石（638・639）がある。

**(2) 掘立柱建物****1号掘立柱建物 (SB1、第15図、図版14・15)**

C地区北西に位置し、SB2と重複する。主柱は6本で、桁行2間、梁行1間である。梁から張り出す位置に小さな棟持ち柱を持つため、平面形は六角形状となる。桁行4.90m、梁行2.96m、面積14.50m<sup>2</sup>である。主軸はN-43°-Eで、等高線とほぼ平行に配置し、SB2・3と建物方位がほぼ同じである。主柱穴の平面形は全て楕円形で、規模は長さ0.48～0.75m、深さ0.53～0.93mを測る。柱間距離は桁行が2.30～2.67m、梁行が2.82～2.96mを測る。

出土遺物はSP295・SP423の縄文土器（77・78）がある。

**2号掘立柱建物 (SB2、第15図、図版14・15)**

C地区北西に位置し、SB1と重複する。主柱は4本で、桁行1間、梁行1間である。梁には小さな棟持ち柱を持つ。桁行3.28m、梁行2.30m、面積7.54m<sup>2</sup>である。主軸はN-42°-Eで、等高線とほぼ平行に配置し、SB1・3と建物方位がほぼ同じである。主柱穴の平面形は全て楕円形で、規模は長

さ 0.51 ~ 1.16 m, 深さ 0.42 ~ 0.93 m を測る。柱間距離は桁行が 3.25 ~ 3.28 m, 梁行が 2.28 ~ 2.30 m を測る。

出土遺物は SP320 の縄文土器がある。

### 3号掘立柱建物 (SB3, 第 16 図, 図版 14 ~ 16)

C 地区の北西, SB1・2 の南に位置する。主柱は 4 本で 桁行 1 間, 梁行 1 間である。梁にはやや南東寄りに棟持ち柱を持つ。桁行 3.67 m, 梁行 2.14 m, 面積 7.85 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 45° - E で SB1・2 と建物方位がほぼ同じである。主柱穴の平面形には円形と梢円形があり、規模は長さ 0.3 ~ 0.65 m, 深さ 0.37 ~ 0.51 m を測る。柱間距離は桁行が 3.57 ~ 3.67 m, 梁行が 2.14 ~ 2.32 m を測る。

出土遺物は SP279 の縄文土器, SP287 の擦石 (641) がある。

### 4号掘立柱建物 (SB4, 第 16 図, 図版 14 ~ 16)

C 地区北西に位置し, SB5 と重複する。主柱は 6 本で, 桁行 2 間, 梁行 1 間である。梁から張り出す位置にやや小さな棟持ち柱を持つため, 平面形は六角形状となる。桁行 4.80 m, 梁行 3.36 m, 面積 16.13 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 28° - E で SB5 と建物方位がほぼ同じである。主柱穴の平面形には円形と梢円形があり、規模は長さ 0.34 ~ 0.74 m, 深さ 0.35 ~ 0.51 m を測る。柱間距離は桁行が 2.22 ~ 2.60 m, 梁行が 3.12 ~ 3.36 m を測る。

出土遺物は SP345・SP404 の縄文土器がある。

### 5号掘立柱建物 (SB5, 第 17 図, 図版 14 ~ 16)

C 地区北西に位置し, SB4 と重複する。主柱は 6 本で, 桁行 6 間, 梁行 1 間である。梁からわざわざ張り出す位置に小さな棟持ち柱を持つため, 平面形は六角形状となる。桁行 4.07 m, 梁行 3.62 m, 面積 14.73 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 28° - E で SB4 と建物方位がほぼ同じである。主柱穴の平面形は円形と梢円形があり、規模は長さ 0.27 ~ 0.7 m, 深さ 0.3 ~ 0.51 m を測る。柱間距離は桁行が 1.90 ~ 2.12 m, 梁行が 3.62 ~ 3.70 m を測る。出土遺物はない。

### 6号掘立柱建物 (SB6, 第 17 図, 図版 14 ~ 16)

D 地区東に位置し, SB7・8 と重複する。主柱は 6 本で, 桁行 2 間, 梁行 1 間である。桁行 4.10 m, 梁行 1.58 m, 面積 6.48 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 87° - E である。柱穴の平面形は梢円形が主体で、規模は長さ 0.43 ~ 0.97 m, 深さ 0.29 ~ 0.66 m を測る。柱間距離は桁行が 1.87 ~ 2.12 m, 梁行が 1.35 ~ 1.58 m を測る。

出土遺物は SP743・SP799 (80) の縄文土器がある。

### 7号掘立柱建物 (SB7, 第 18 図, 図版 14 ~ 16)

D 地区東に位置し, SB6・8 と重複する。一部が調査区外にかかるため南東隅の柱穴を欠く。桁行 2 間, 梁行 1 間である。桁行 4.95 m, 梁行 1.94 m, 面積 9.60 m<sup>2</sup> である。主軸は N - 80° - E である。柱穴の平面形は全て梢円形で、規模は長さ 0.44 ~ 0.75 m, 深さ 0.42 ~ 0.61 m を測る。柱間距離は桁行が 2.37 ~ 2.45 m, 梁行が 1.94 m を測る。

出土遺物は SP758・SP770 (82)・SP798 (80・81) の縄文土器がある。

### 8号掘立柱建物 (SB8, 第 18 図, 図版 14 ~ 16)

D 地区東に位置し, SB6・7 と重複する。東側が調査区外に延びるため、桁行 1 間, 梁行 1 間の 4 基の柱穴を確認するにとどまる。主軸は N - 76° - E である。柱穴の平面形は円形と梢円形があり、規模は長さ 0.3 ~ 0.61 m, 深さ 0.34 ~ 0.45 m を測る。柱間距離は桁行が 1.97 ~ 2.12 m, 梁行が 1.82 m を測る。

出土遺物はSP781の縄文土器（83～85）とクリの種実、SP796の縄文土器（79）がある。

#### 9号掘立柱建物（SB9、第18図、図版14～16）

D地区の東、SB7～9の北西に位置する。北西側が圃場整備の際に削平されているが、3基の柱穴を確認し、桁行1間以上、梁行1間と考えた。主軸はN-87°-Eである。柱穴の平面形は全て円形で、規模は長さ0.51～0.66m、深さ0.47～0.52mを測る。柱間距離は桁行が2.50m、梁行が1.76mを測る。

出土遺物はSP764の縄文土器（86）がある。

### （3）土坑墓

#### 201号土坑墓（SK201、第22図、図版18）

C地区西端に位置し、北西側の一部が調査区外にかかる。平面形は楕円形で、長さ1.34m、深さ0.42mを測る。長軸両端で掘形が崩れたような形状であり、本来は長軸1.1m程度の規模であったと考えられる。幅は現状で0.66mを測るが、調査区外の北西部がもう少し広がる可能性が高い。掘形は南西部から南部が直角に近い角度で、北東部がやや斜めに掘り込み、底面は平滑に整える。副葬品はないが、規模や形状から土坑墓と判断した。

出土遺物は縄文土器の深鉢胴部片3点があるが、いずれも小片で、埋納品ではないと思われる。

#### 203号土坑墓（SK203、第19図、図版2）

C地区西に位置する。副葬品はないが、規模や形状から土坑墓と判断したものである。西に隣接するSK204と一緒にいる。SK204とは底面の高さに約0.2mの高低差があるため別遺構と判断できるが、土層の切り合いは不明瞭である。断面図をみると西側掘形から0.65mを測る位置から西部にかけて新しい掘り込みがあるが、これをSK203の掘り込みとすると完掘の平面形と齟齬が生じるため、SK203の上に更にもう一つの土坑が重複する可能性を考えたい。SK203の上面で自然石3点を検出したが、SK203に伴うものか、新しい掘り込みに伴うかは判然としない。大きな自然石を墓標として使用する事例も各地で報告されているが<sup>注2</sup>、仮にこの自然石がそのような役割を持っていたものとすると、当初から3点が置かれたのか、付近の土坑墓の再葬にあたって集められたものであるのかは不明である。SK203の平面形は円形に近く、南北の長さ1.15m、深さ0.37mを測る。

出土遺物は縄文土器の深鉢胴部片1点があるが、小片であるため埋納品ではないと考える。

#### 204号土坑墓（SK204、第19図、図版2）

C地区西に位置し、東に位置するSK203と一緒にいる。北西部は調査区外にかかる。SK203とは底面の高さに約0.2mの高低差があるため別遺構と判断できるが、土層の切り合いは不明瞭である。北部から副葬品と考えられる縄文土器（87）が横に倒れた状態でほぼ完形で出土した。平面形が不整形であるため、遺構検出当初はSK203も含めて三つの遺構の重複と捉えたが、遺構掘削を進め、西側二つの遺構の底面が段差なく平滑であり、出土した縄文土器が広がりをもって埋まっていたことから、一つの遺構と判断した。規模は、SK203との境から調査区の際までの長さ1.31m、南北の長さ1.06m、深さ0.55mを測る。

副葬された縄文土器（87）は中期中葉の粗製深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

#### 207号土坑墓（SK207、第19図、図版2）

C地区西に位置し、南部は調査区外にかかる。平面形は楕円形で、東西の長さ0.85m、深さ0.18mを測り、比較的小さく浅い土坑墓である。内部の長軸東寄りから副葬品と考えられる縄文土器（89・90）が出土した。このうち有孔鍔付土器（89）は遺物包含層出土破片と接合する。今回の調査で検注2 阿部友寿 2015「配石墓・配石遺構における遺構更新の意義」『季刊考古学』第130号

出した土坑墓において、土坑墓の副葬品と他の地点から出土した破片が接合する事例は他にない。SK207が浅い造りであり、後世の攪乱を受けている可能性が考えられる。

出土遺物には縄文土器（88～90）がある。

#### 208号土坑墓（SK208、第22図、図版18）

C地区西に位置し、SK203の北に隣接する。副葬品はないが、規模や形状から土坑墓と判断したものである。平面形は円形で、長さ0.99～1.13m、深さ0.68mを測る。出土遺物はない。

#### 218号土坑墓（SK218、第19図、図版2）

C地区西に位置し、北西部は調査区外にかかる。平面形は円形か梢円形で、南北の長さ1.20m、深さ0.73mを測る。遺構を検出した当初は東側の一部を確認するにとどまったが、下層北寄りで縄文土器の比較的大きな破片が2点出土した（第19図b断面、91）。この縄文土器が副葬品である可能性を考え、最終的に調査区を可能な限り広げて平面形を確認し掘削を進めたところ、内部北東寄りにおいて縄文土器が大小2個体出土した。

副葬された縄文土器（91・92）は押し潰された状態で出土した。いずれも中期中葉の粗製深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

#### 255号土坑墓（SK255、第20図、図版2）

C地区西に位置する。平面形は円形で、長さ0.98～1.11m、深さ0.29mを測る。内部北西隅から副葬品と考えられる縄文土器（95）が倒立の状態で出土した。

副葬された縄文土器（95）は中期中葉の粗製深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

#### 258号土坑墓（SK258、第22図、図版18）

C地区北西に位置する。平面形は梢円形で、長さ1.49m、幅1.28m、深さ0.49mを測る。副葬品はないが、規模や形状から土坑墓と判断したものである。出土遺物はない。

#### 260号土坑墓（SK260、第20図、図版3・17）

C地区西に位置する。平面形は梢円形で、長さ1.33m、幅1.14m、深さ0.46mを測る。内部南東隅から縄文土器（96）、北寄りから石鎚（604）が出土した。縄文土器（96）は完形ではなく、底部および胴部の約半分を欠き、大きな破片数点に分かれている。倒立および横に倒れた状態で出土した。遺体の顔部あるいは一部を覆う土器被覆葬に用いられたものと考える。石鎚は底面の硬化した地山に貼り付くような状態で出土した。石鎚は遺構を完掘した際には発見できず、調査終盤において底面に広がるシミ状の地山を薄く削平した際に出土した。石鎚は無斑晶質安山岩製で灰色を呈し、長身で両面とも丁寧に剥離加工する。先端を欠損しており、埋納儀礼の存在がうかがえる。

副葬された縄文土器は中期中葉の深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

#### 261号土坑墓（SK261、第20図、図版3）

C地区北西に位置する。平面形はややいびつな円形で、長さ0.95～1.07m、深さ0.12mを測る。内部南東隅から縄文土器（98）が破片で出土した。おそらく副葬品と考えられるが、遺存状態はあまり良くない。土坑の深さが浅いため、SK207と同様に後世の攪乱を受けている可能性がある。

副葬された縄文土器（98）は中期中葉の深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

#### 265号土坑墓（SK265、第21図、図版3）

C地区北西に位置する。平面形は円形で、長さ1.01～1.13m、深さ0.26mを測る。内部南隅から縄文土器（97）と擦石（635）が出土した。いずれも副葬品と考えられる。副葬された縄文土器（97）は中期中葉の粗製深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

**266号土坑墓（SK266、第20図、図版3）**

C地区北西に位置する。平面形はやいびつな楕円形で、長さ1.03m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。内部西隅から副葬品と考えられる縄文土器（99）が出土した。おそらく一個体と考えられるが遺存状態があまり良好ではない。浅いため後世の攪乱を受けている可能性を考えられる。

副葬された縄文土器（99）は中期中葉の深鉢であることから、当該期の土坑墓と考えられる。

**305号土坑墓（SK305、第22図）**

C地区北西に位置する。SB1範囲内にわずかにかかる。東西端に小穴があるが平面形は楕円形とみられ、長さ1.55m、幅0.96m、深さ0.52mを測る。

出土遺物は縄文土器の深鉢口縁部片と胴部片があるが、小片であるため埋納品ではないと思われる。

**390号土坑墓（SK390、第21図、図版3・17）**

C地区北西、他の土坑墓群からは北東に離れて位置する。SB4・5範囲内にあり、北西には埋設土器が出土したSK391が隣接する。平面形は楕円形で、長さ1.26m、幅0.99m、深さ0.41mを測る。内部北東隅から縄文土器深鉢（101）、有孔鍔付土器（100）が出土した。縄文土器深鉢は口縁部から胴部にかけてほぼ完形であるが、底部のみを欠く。大きな破片が倒立および横に倒れた状態で出土しており、SK260の深鉢（96）と共に点が多い。SK260と同様に遺体の顔部あるいは一部を覆う土器被覆葬に用いられたものと考える。有孔鍔付土器は正位で出土した。ほぼ完形であり、埋納されたと考える。また遺構の南半分を掘削した際、中層付近から琥珀製の玉（601）が出土し、副葬された可能性がある。

出土した縄文土器（101～103）と有孔鍔付土器（100）は中期前葉もしくは中期中葉でも古段階にあたり、他の土坑墓群よりは古い段階のものと考える。

**(4) 埋設土器****225号埋設土器（SK225、第21図、図版2）**

C地区西に位置する。平面形は不整形で、掘形規模は長さ0.61m、幅0.61m、深さ0.29mを測る。縄文土器（93）は掘形北西部で正位に据えられた状態で出土した。他に縄文土器（94）が出土している。

**391号埋設土器（SK391、第21図、図版3）**

C地区北西、土坑墓SK390の西に位置する。平面形は円形で、掘形規模は長さ0.32～0.37m、深さ0.37mを測る。縄文土器（106）は掘形西寄りで正位に据えられた状態で出土した。

**810号埋設土器（SK810、第21図、図版3）**

D地区の東に位置する。平面形は円形で、掘形規模は長さ0.36～0.38m、深さ0.06mを測る。縄文土器は掘形中央部で正位に据えられた状態で検出したが、胴部のみであり、口縁部と底部を欠く。

（朝田亜紀子）

**(5) 土 坑****5号土坑（SK5、第12図）**

A地区SI4の内部に位置し、地床炉の南端に重複している。平面形は円形を呈し、長さ0.78m、幅0.76m、深さ0.35mを測る。出土遺物には縄文土器（109・110）、磨製石斧未成品（615）があるが、SI4のものが二次的に混入した可能性もあり、SK5自体の時期は判然としない。

## 58号土坑（SK58、第23図）

A地区北側、標高236.5mの傾斜地に位置する。掘形東側の掘り込みはほぼ垂直で、平面形は円形を呈し、径1.05m、深さ0.25mを測る。出土遺物は縄文土器がある。

## 59・60号土坑（SK59・60、第23図、図版18）

A地区北端、標高236.5mの傾斜地に位置する。SK59は北部分が調査区外となるが、平面形は円形と推定する。掘形の東側は地形の段に沿ってほぼ垂直に掘り下げられ、底面にかけて直角に屈曲し、底面は水平で、西は削平により掘り込みが確認できない。底部南寄りにSK60を検出した。長さ0.3m、幅0.22m、深さ0.33mを測り、平面形は梢円形を呈する。出土遺物はない。

## 253号土坑（SK253、第23図）

C地区北西に位置する。長さ0.92m、幅0.65m、深さ0.26mを測り、平面形は梢円形を呈する。出土遺物は縄文土器（111）がある。

## 278号土坑（SK278、第23図）

C地区SB3の南に位置し、平面形は不整形を呈する。出土遺物は縄文土器（112）がある。

## 282号土坑（SK282、第23図）

C地区SB3の内部に位置し、平面形は円形を呈する。出土遺物は縄文土器（113）がある。

## 304号土坑（SK304、第23図）

C地区SB1の内部に位置し、平面形は梢円形を呈する。出土遺物はない。

## 319号土坑（SK319、第23図）

C地区SB1・2の内部に位置し、平面形は梢円形を呈する。出土遺物は縄文土器（105）がある。

## 364号土坑（SK364、第23図）

C地区SB4・5の東に位置し、平面形は円形を呈する。出土遺物は縄文土器（114）がある。

## 403号土坑（SK403、第23図）

C地区SB1・2の東に位置し、平面形は円形を呈する。出土遺物は縄文土器（115）がある。

## 422号土坑（SK422、第23図）

C地区SB1・2の北東に位置し、平面形は不整形を呈する。出土遺物は縄文土器がある。

## 448号土坑（SK448、第23図）

C地区SB4・5の北に位置し、平面形は梢円形を呈する。出土遺物は縄文土器（116）がある。

## 495号土坑（SK495、第23図）

C地区的南に位置する。長さ0.96m、幅0.52m、深さ0.21mを測り、平面形は不整形を呈する。出土遺物は縄文土器（117～119）がある。

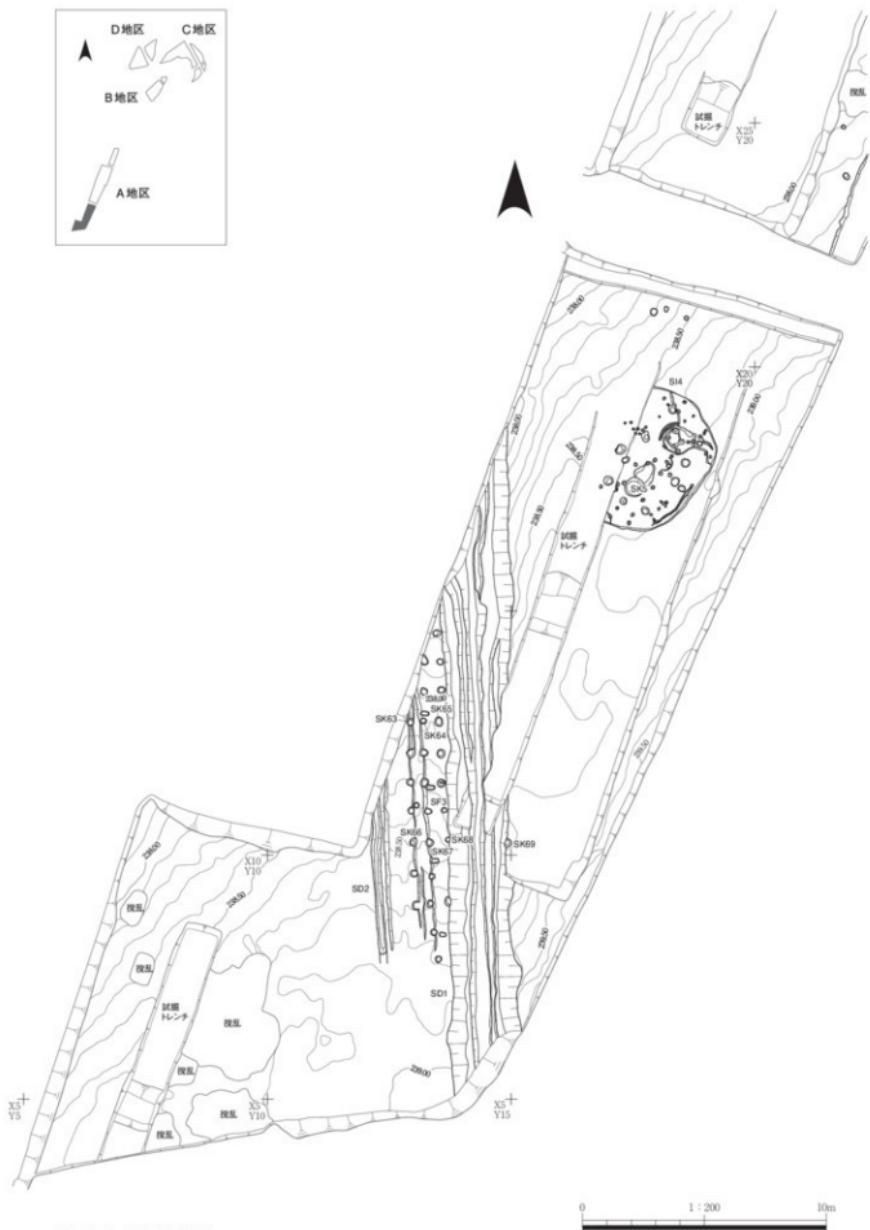
## 496号土坑（SK496、第23図、図版18）

C地区的南に位置し、平面形は梢円形を呈する。出土遺物は縄文土器（120・121）がある。

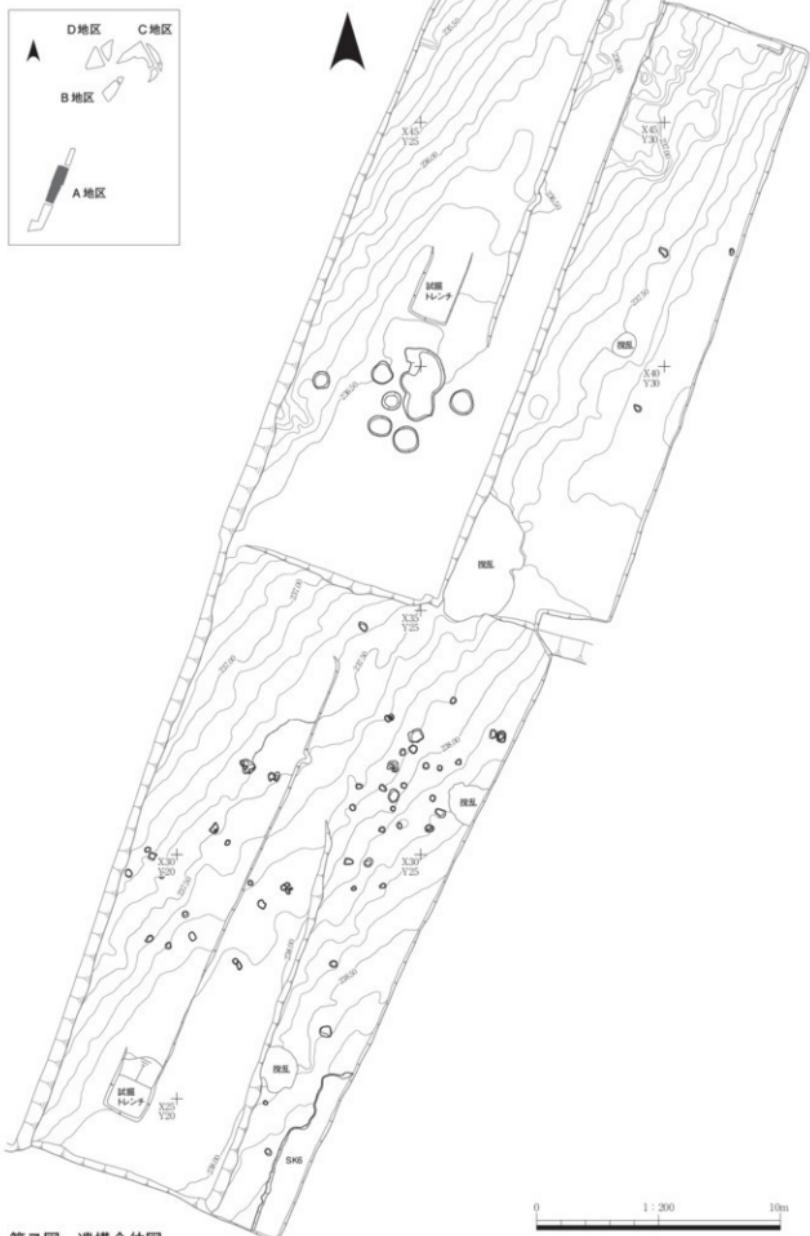
## 705号土坑（SK705、第23図、図版18）

D地区SB7の南に位置し、平面形は梢円形を呈する。出土遺物は縄文土器（124）がある。

（田中道子）

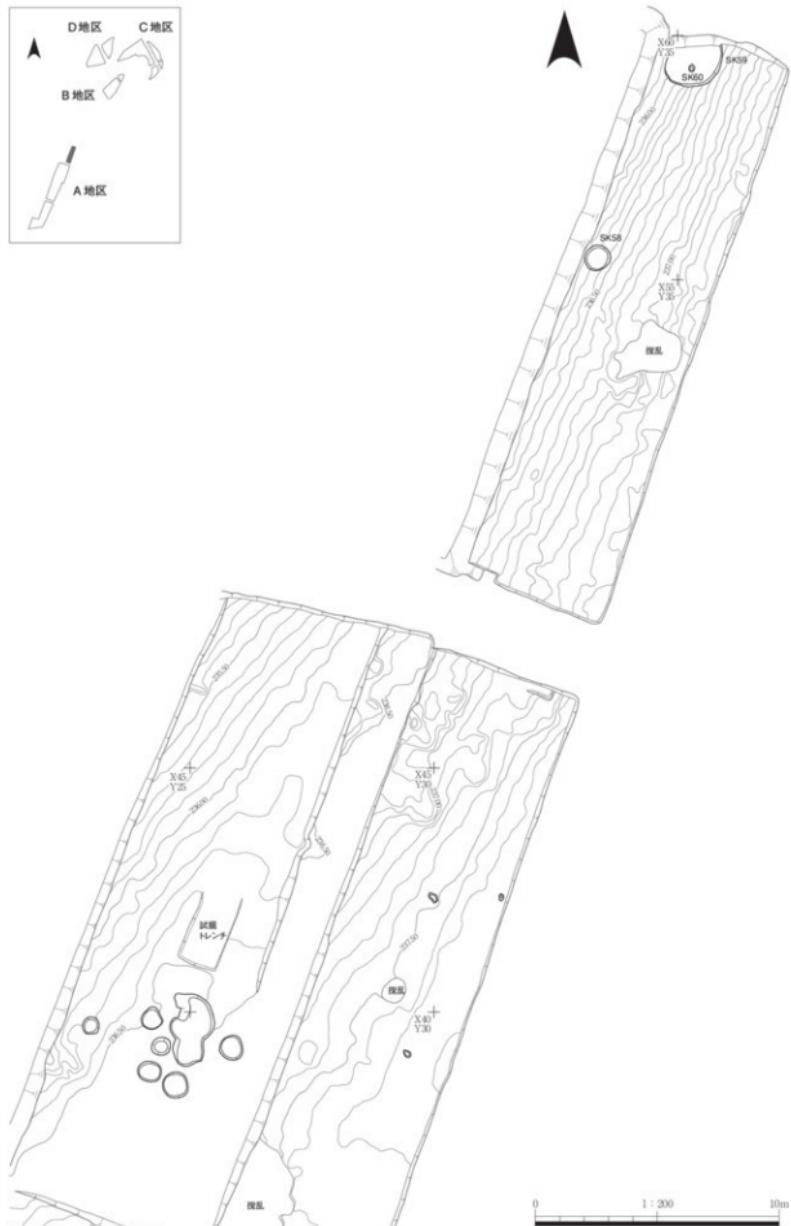


第6図 遺構全体図  
A地区(1)



第7図 遺構全体図  
A地区(2)

## 2 造構



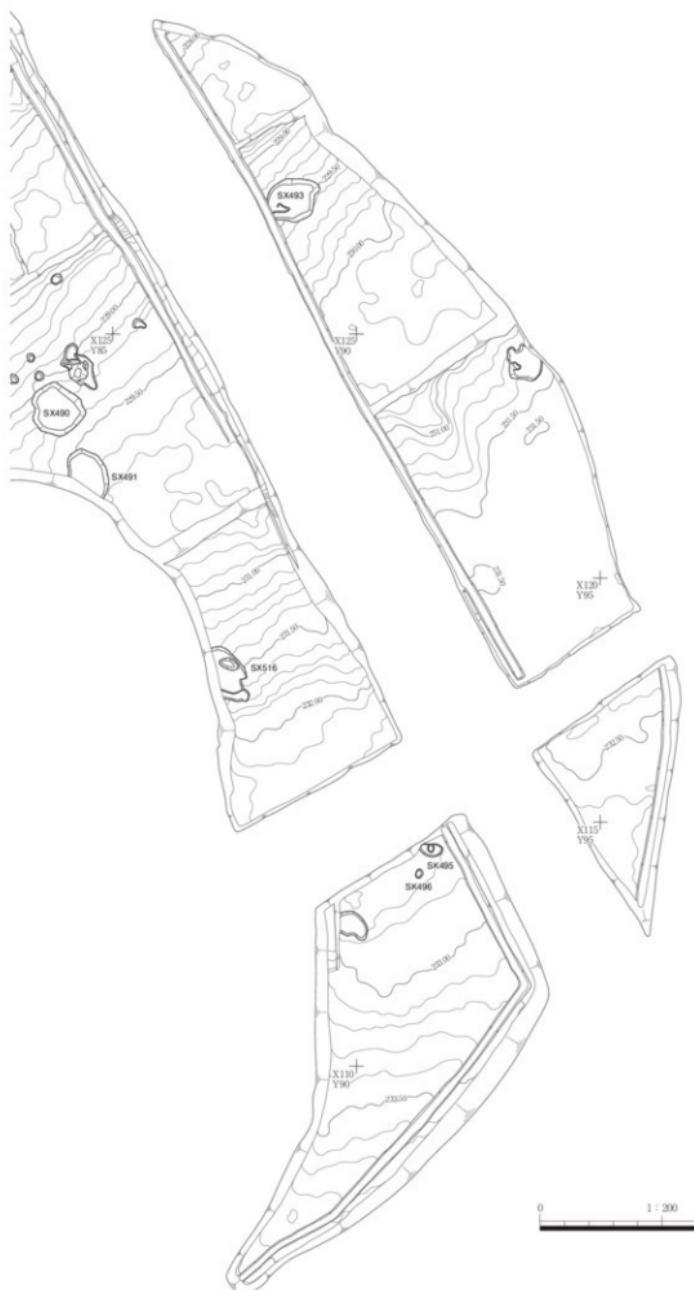
第8図 造構全体図  
A地区(3)

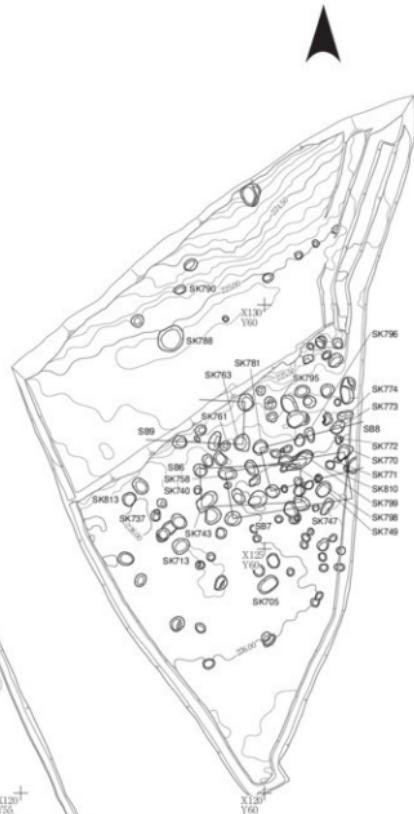
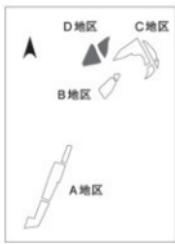


第9図 遺構全体図  
B地区



第10図 遺構全体図  
C地区





第11図 遺構全体図  
D地区

第6表 壇穴建物一覧

遺構番号	種類	平面形	長(m)	幅(m)	深(m)	出土遺物		望月合5	特記事項	神國	岡版
						縄文土器(1~18) 砥石(633~634~640) 潤片(605~606) 石皿(648)	石皿(648)				
S4	S4	壇穴建物	楕円	6.10	(4.30)			<SK5			10
S4-P1		主柱穴	楕円	0.27	0.28	0.55					11
S4-P2		主柱穴	円	0.29	0.29	0.35					11
S4-P3		主柱穴	円	0.40	0.38	0.61					
S4-P4			楕円	0.49	0.35	0.14					
S4-P5		主柱穴	楕円	0.22	0.30	0.26					
S4-P6		主柱穴	楕円	0.44	0.30	0.56					
S4-P7		主柱穴	楕円	0.38	0.34	0.33					
S4-P8			楕円	0.37	0.23	0.17					
S4-P9		主柱穴	楕円	0.37	0.29	(0.50) 潤石(640)					11
S4-P10			不規形	0.54	(0.30)	0.20					11
S4-P11		主柱穴	楕円	0.35	0.35	0.35					11
S4-P12			楕円	1.23	1.08	0.53	石皿(648)				10-11
S4-P13			楕円	0.15	0.11	0.14					
S4-P14			楕円	0.17	0.12	0.16					
S4-P15			楕円	0.17	0.13	0.12					
S4-P16			楕円	0.16	0.13	0.17					
S4-P17			不規形	0.13	0.10	0.12					
S4-P18			楕円	0.19	0.10	0.14					
S4-P19			楕円	0.12	0.10	0.29					
S4-P20			楕円	0.07	0.06	0.06					
S4-P21			楕円	0.12	0.10	0.11					
S4-P22			楕円	0.09	0.07	0.03					
S4-P23			楕円	0.14	0.09	0.09					
S4-P24			円	0.17	0.16	0.15					
S4-P25			楕円	0.17	0.11	0.25					
S4-P26			楕円	0.13	0.11	0.08					
S4-P27			楕円	0.16	0.14	0.11					
S4-P28			円	0.15	0.14	0.10					
S4-P29			円	0.08	0.07	0.09					
S4-P30			楕円	0.18	0.16	0.27					
S4-P31			楕円	0.13	0.10	0.24					
S4-P32			楕円	0.16	0.10	0.17					
S4-P33			楕円	0.15	0.11	0.09					
S4-P34			楕円	0.11	0.09	0.13					
S4-P35			楕円	0.13	0.09	0.15					
S4-P36			楕円	0.13	0.10	0.15					
S4-P37	主柱穴	円	0.23	0.22	0.25						
S4-P38		楕円	0.12	0.10	0.14						
S4-P39		楕円	0.13	0.11	0.19						
S4-P40		楕円	0.10		0.05						
S4-P41		楕円	0.14	0.11	0.08						
S4-P42		楕円	0.15	(0.12)	0.07						
S4-P43		楕円	0.16	0.14	0.28						
S4-P44		楕円	(0.22)	(0.16)	(0.26)						
S4-P45		楕円	(0.16)	(0.10)	(0.42)						
S4-P46		楕円	(0.14)	(0.14)	(0.24)						
S4-P47		円	0.11	0.10	0.06						
S4-P48		楕円	0.12	0.10	0.13						
S4-P49		楕円	0.12	0.09	0.11						
S4-P50		円	0.10	0.10	0.18						
S4-P51		円	0.10	0.10	0.13						
S4-P52		円	0.15	0.12	0.15						
S4-P53		円	0.13	0.12	0.11						
S4-P54		楕円	0.14	0.11	0.23						
S4-P55		楕円	(0.28)	(0.22)	(0.46)						
S4-P56		楕円	(0.27)	(0.26)	(0.49)						
S4-P57		楕円	(0.27)	(0.23)	(0.48)						
S4-P58		楕円	(0.27)	(0.17)	(0.48)						
S4-P59		楕円	0.25	0.25	0.14						
S4-P60		楕円	0.20	0.20	0.19						
S4-P61		楕円	0.18	0.16	0.19						
S4-P62		楕円	0.15	0.14	0.06						
S4-P63		楕円	0.26	0.20	0.24						
S4-P64		楕円	0.20	0.17	0.07						
S400	S400	壇穴建物	楕円	(4.51)	(3.26)	0.82					2-14
S400-P1		主柱穴	楕円	0.52	0.43	0.49					
S400-P2		主柱穴	楕円	0.38	0.33	0.55	縄文土器				
S400-P3		主柱穴	楕円	0.52	(0.45)	0.46					
S400-P4		主柱穴	楕円	0.53	(0.17)	0.22					
S400-P5		柱穴	円	0.11	0.10	0.08					
S400-P6		柱穴	円	0.15	0.12	0.27					
S400-K1		壇穴	楕円	1.97	1.23	0.43					
S401	S401	壇穴建物	楕円	(3.09)	(0.58)	0.45	縄文土器(74~76) 砥石(638~639)				2-14
S401-P1		柱穴	楕円	0.23	0.14	0.22					
S401-P2		柱穴	円	0.23	0.20	0.32					
S401-P3		柱穴	円	0.27	0.19	0.34					



第12図 桶文時代遺構実測図

SI4

**S14**  
1. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、灰化物20%、  
礁石約20%、土質30%)  
2. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、礁石約20%、  
土質30%)  
3. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、礁石約20%、  
土質30%)

**SK5**

4. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、礁石約20%、  
土質30%)  
5. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(10YR 2/2 黑褐色砂質土+3%  
礁石約20%、土質30%)

**S14-P9**

6. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、礁石約20%、  
土質30%)  
7. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(10YR 2/2 黑褐色砂質土+3%  
礁石約20%、土質30%)

**S14-P12**

8. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、礁石約20%、  
其他物20%)

**S14-清**

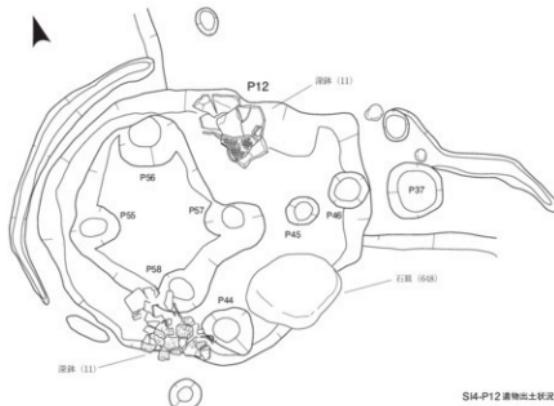
9. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%)

**S14-P10**

10. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、灰化物20%)

**S14-P11**

11. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約10%、礁石10%)



S14-P12出土状況

**S14-P13 S14-P14**

238.80m  
b b

**S14-P18 S14-P30**

238.80m  
m m

**S14-P38 S14-P39**

238.80m  
n n

238.80m  
o o

**S14-P13-P14 共通**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%、礁石約5%)

**S14-P17-P18 共通**

1. 10YR 2/2 黑褐色砂質土

2. 10YR 3/2 黑褐色砂質土

**S14-P19**

1. 10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%、礁石約5%)

**S14-P20 S14-P21 共通**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%)

**S14-D40**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%)

**S14-P31**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%)

**S14-P32 S14-P35**

238.80m  
q q

**S14-P33 S14-P34**

238.80m  
r r

**S14-P36**238.80m  
s s**S14-P37**238.80m  
t t**S14-P12 S14-P57 S14-P45 S14-P46**

238.80m  
u u

**S14-P45**

1. 10YR 2/2 黑褐色砂質土

2. 10YR 3/2 黑褐色砂質土

(地山約5%、礁石約5%)

**S14-P56**

3. 10YR 2/2 黑褐色砂質土

4. 10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%、礁石約5%)

**S14-P44**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%、礁石約5%)

**S14-P12**

1. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約5%、礁石約5%)

2. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約5%、礁石約5%)

3. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約5%、礁石約5%)

4. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約5%、礁石約5%)

**S14-P55**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%、礁石約5%)

5. 10YR 2/2 黑褐色砂質土  
(地山約5%、礁石約5%)**S14-P56**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%)

**S14-P57**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

(地山約5%)

**S14-P58**

10YR 2/2 黑褐色砂質土

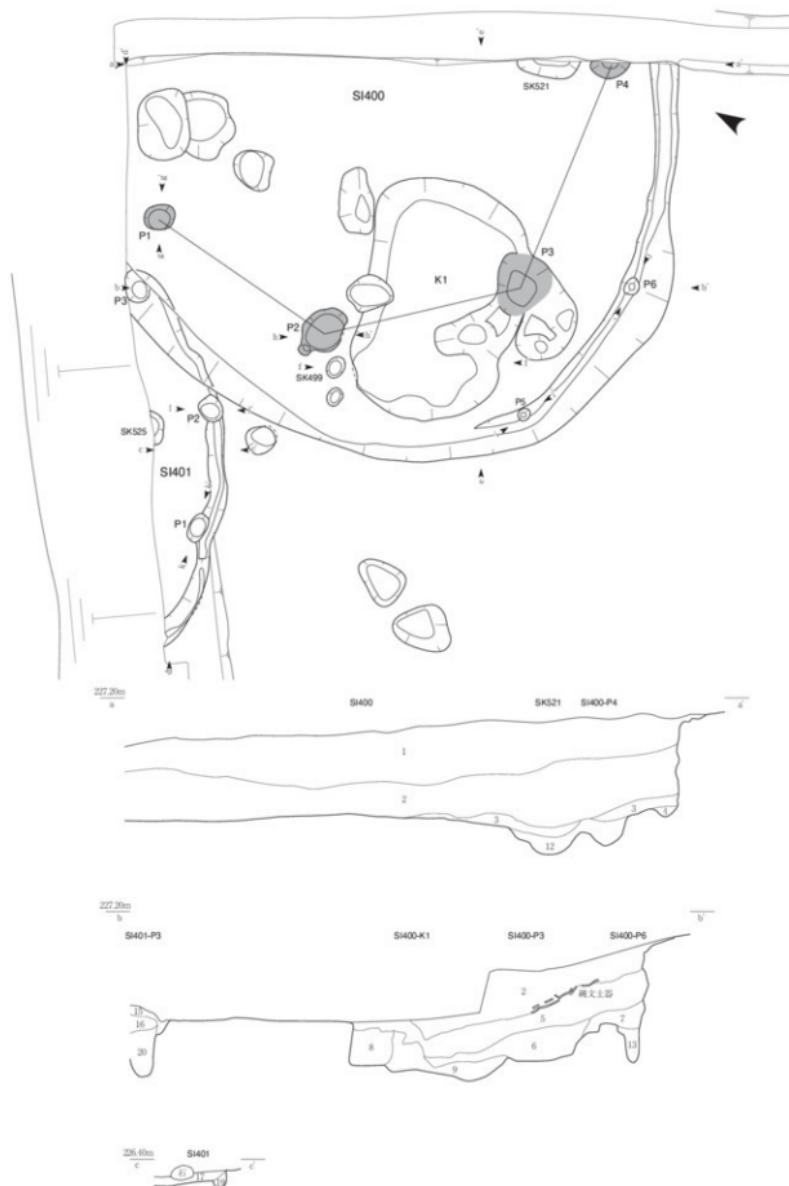
(地山約5%)

●地山: 2.5YS 1/4 黑褐色砂質土

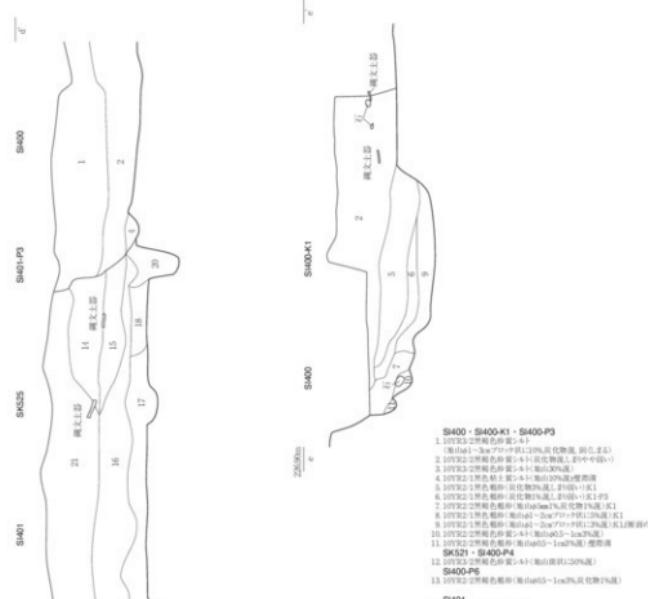
●礁石: 10YR 3/2 黑褐色砂質土

(地山約5%)

1: 20 (地山100mm)  
1: 40 (礁石100mm)1m  
2m



第13図 桶文時代遺構実測図  
SI400 SI401

**SK400・SK400-K1・SK400-P3**

1. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4)
2. (施) (a) - 3w プローフ(10%灰化物)、(b) (1.2%)
3. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4)
4. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物)
5. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物)
6. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (c) (1.2%)
7. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (d) (1.2%)
8. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (e) (1.2%)
9. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (f) (1.2%)
10. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (g) (1.2%)
11. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (h) (1.2%)
12. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (i) (1.2%)
13. 10Y32-2 黄褐色色鉢(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (j) (1.2%)

**SK401**

14. 10Y32-2 黄褐色土器(4)
15. 10Y32-2 黄褐色土器(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (k) (1.2%)
16. 10Y32-2 黄褐色土器(4)
17. 10Y32-2 黄褐色土器(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (l) (1.2%)
18. 10Y32-2 黄褐色土器(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (m) (1.2%)
19. 10Y32-2 黄褐色土器(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (n) (1.2%)

**SK401-P3**

20. 10Y32-2 黄褐色土器(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (o) (1.2%)

**縄文時代遺物名鑑**

21. 10Y32-2 黄褐色土器(4) - 3w プローフ(10%灰化物) - (p) (1.2%)



**SK400-P1**  
10Y32-2 黄褐色色鉢(施)(a) - 3w プローフ(10%灰化物) - 3w プローフ(10%灰化物)

**SK499**  
2. 10Y32-2 黄褐色色鉢(施)(a) (b) - 3w プローフ(10%灰化物)

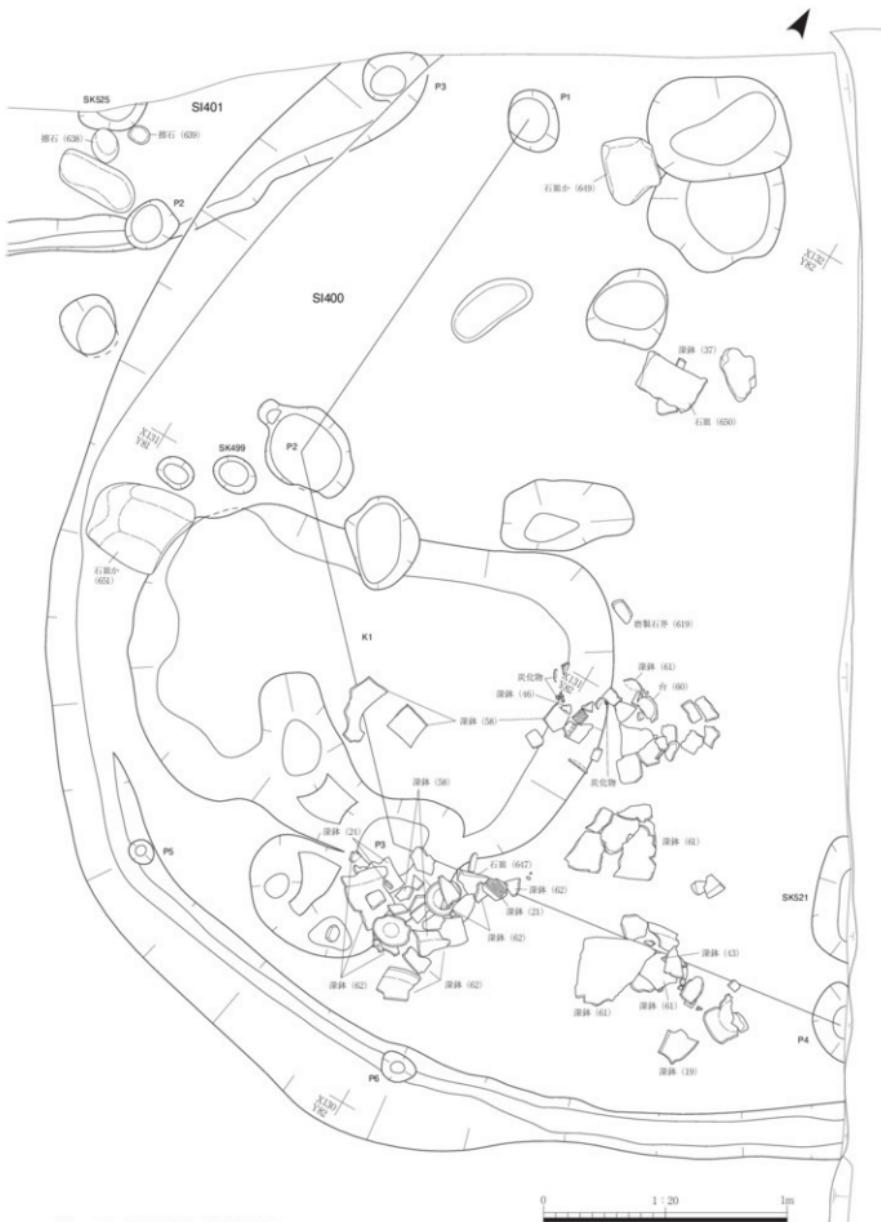
**SK400-P5**  
10Y32-2 黄褐色色鉢  
(施)(a) (b) - 3w プローフ(10%灰化物)

**SK400-P6**  
10Y32-2 黄褐色色鉢  
(施)(a) (b) - 3w プローフ(10%灰化物)

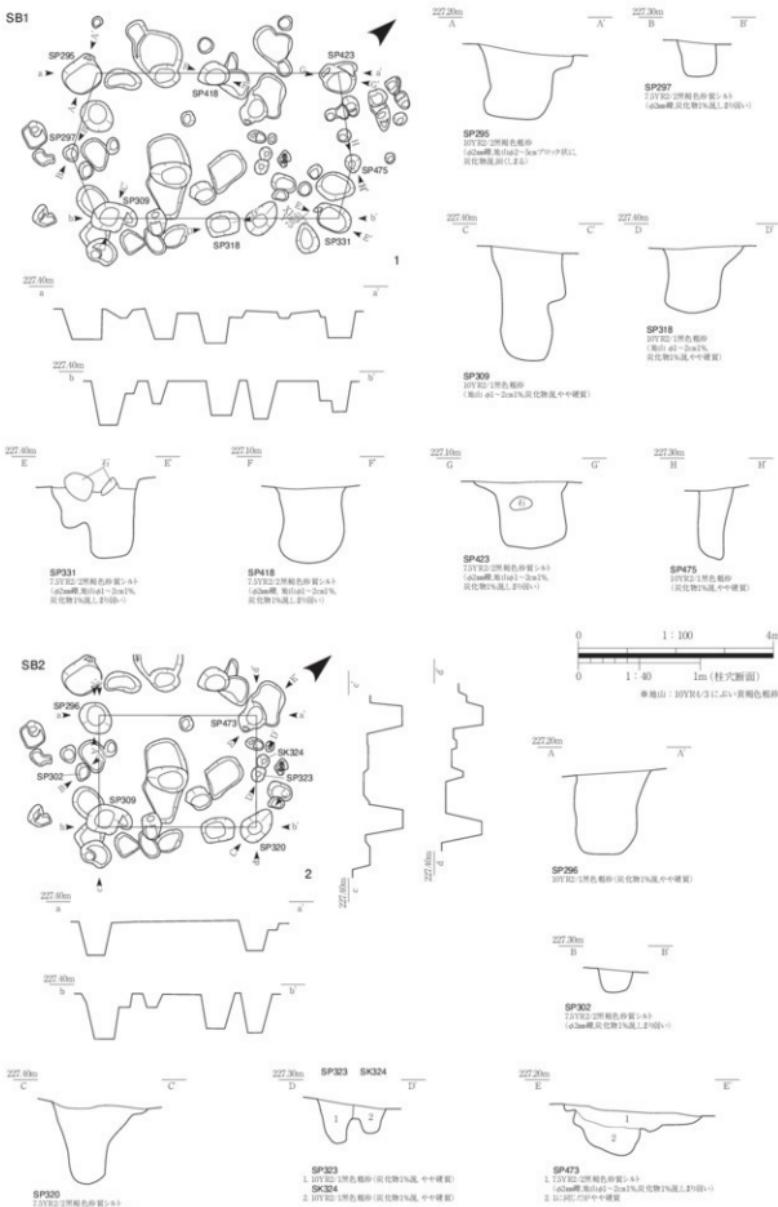
**SK401-P1**  
10Y32-2 黄褐色色鉢  
(施)(a) (b) - 3w プローフ(10%灰化物) - 3w プローフ(10%灰化物)

**SK401-P2**  
10Y32-2 黄褐色色鉢  
(施)(a) (b) - 3w プローフ(10%灰化物) - 3w プローフ(10%灰化物)

地山 : 10Y32-2 黄褐色色鉢  
1 : 40 2m

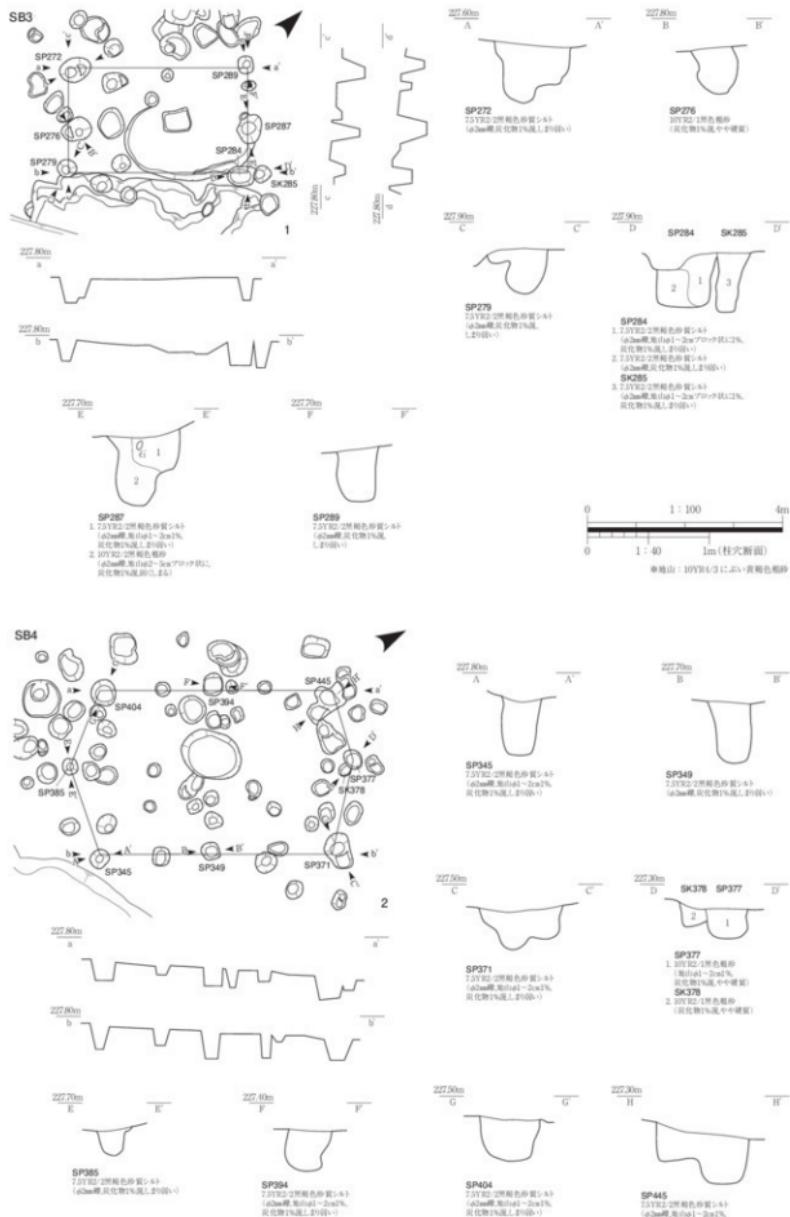


第14図 繩文時代遺構実測図  
SI400・SI401遺物出土状況



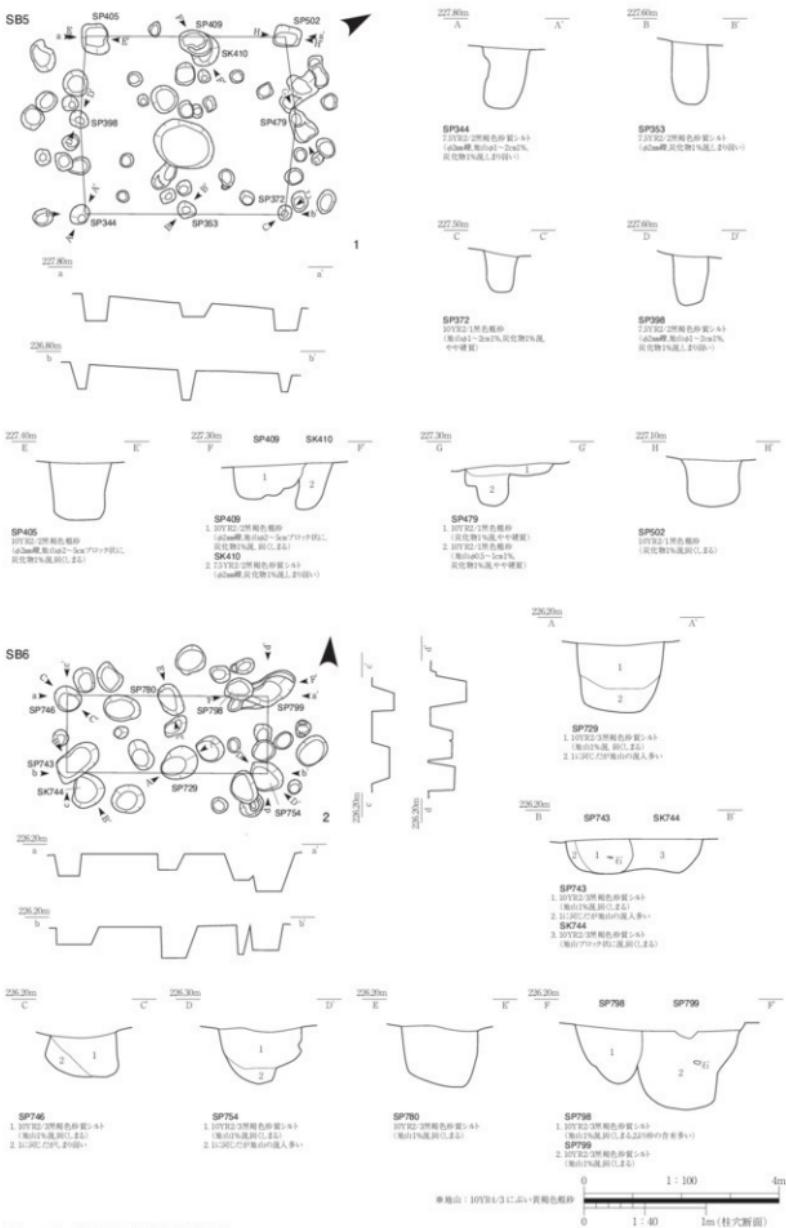
第15図 繩文時代遺構実測図

1. SB1 2. SB2



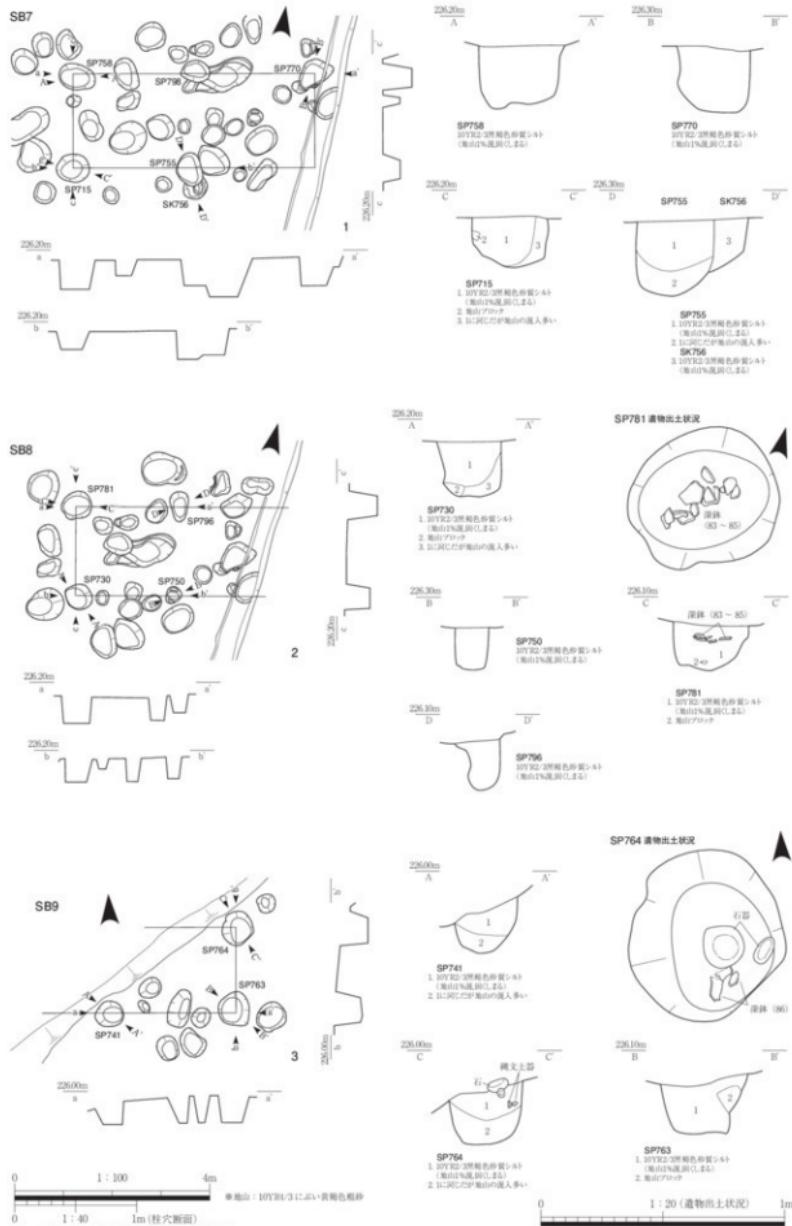
第16図 繩文時代遺構実測図

1. SB3 2. SB4



第17図 繩文時代遺構実測図

1. SB5 2. SB6



第18図 繩文時代遺構実測図

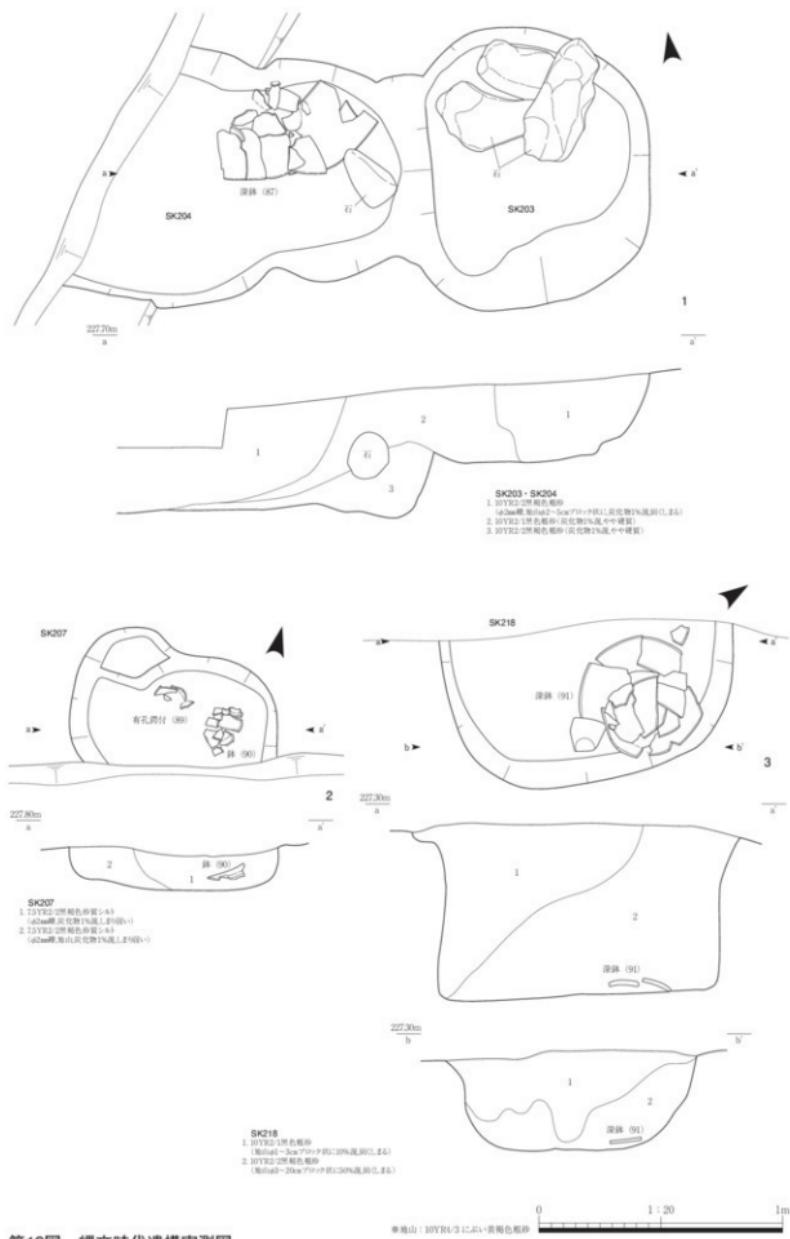
1. SB7 2. SB8 3. SB9

第7表 挖立柱建物一覧

建物	柱径 柱間	要行具 柱間	要行長 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	方空		柱穴	備考	辨図	IDlk
SB1	2	1	4.90	2.96	1450	N-43°E	SP256 SP297 SP309 SP318 SP321 SP418 SP423 SP475		15	
SB2	1	1	3.28	2.30	754	N-42°E	SP296 SP302 SP309 SP320 SP323 SP473			
SB3	1	1	3.62	2.14	785	N-45°E	SP272 SP266 SP279 SP284 SP285 SP299		16	
SB4	2	1	4.80	3.06	1613	N-28°E	SP245 SP249 SP251 SP257 SP265 SP284 SP404 SP445			
SB5	6	1	4.67	3.62	1473	N-28°E	SP344 SP433 SP352 SP398 SP465 SP499 SP479 SP502		17	
SB6	2	1	4.10	1.58	648	N-87°E	SP729 SP743 SP746 SP754 SP780 SP299			
SB7	2	1	4.95	1.94	960	N-80°E	SP715 SP725 SP758 SP779 SP798			
SB8	1	1	1.97	1.82	359	N-26°E	SP730 SP750 SP781 SP796		18	
SB9	1	1	2.50	1.76	440	N-87°E	SP741 SP763 SP764			

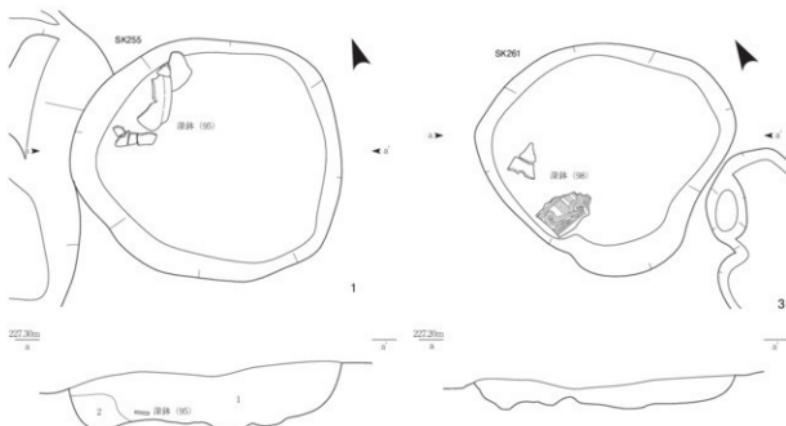
第8表 挖立柱建物柱穴一覧

建物	種類	時期	平面形			長 (m)	幅 (m)	深 (m)	出土遺物	切年合	辨図	図版
			柱	柱	柱							
SB1	主柱		円			0.75	0.69	0.61	縄文土器(77)		15	
	側持ち柱		円			0.34	0.32	0.30				
	主柱		円			0.68	0.49	0.55			15	
	主柱		円			0.70	0.52	0.57			15	
	主柱		円			0.62	0.44	0.62			15	
	主柱		円			0.67	0.63	0.53	縄文土器(78)		15	
SB1-SB2	主柱		円			0.37	0.31	0.60			15	
	主柱		円			0.66	0.59	0.93			15	
SB2	主柱		円			0.72	0.60	0.69			15	
	側持ち柱		円			0.35	0.30	0.20			15	
	主柱		円			0.28	0.51	0.64	縄文土器		15	
	側持ち柱		円			0.31	0.27	0.36			15	
SB3	主柱		円			1.16	0.79	0.42			15	
	主柱		円			0.65	0.48	0.51			16	
SB3	主柱		円			0.63	0.48	0.39			16	
	主柱		円			0.38	0.36	0.37	縄文土器		16	
	主柱		円			0.54	0.40	0.44			16	
	側持ち柱		円			0.59	0.47	0.63	鹿石(641)		16	
SB4	主柱		円			0.36	0.30	0.44			16	
	主柱		円			0.41	0.35	0.48	縄文土器		16	
SB4	主柱		円			0.36	0.34	0.50			16	
	主柱		円			0.74	0.54	0.37			16	
	側持ち柱		円			0.43	0.35	0.24			16	
	側持ち柱		円			0.34	0.31	0.23			16	
SB4	主柱		円			0.47	0.39	0.35			16	
	主柱		円			0.55	0.51	0.36	縄文土器		16	
SB4	主柱		円			0.92	0.58	0.51			16	
	主柱		円			0.39	0.36	0.51			16	
SB5	主柱		円			0.38	0.35	0.51			16	
	主柱		円			0.31	0.27	0.34			16	
	側持ち柱		円			0.40	0.33	0.43			16	
	主柱		円			0.63	0.52	0.47			16	
SB5	主柱		円			0.70	0.50	0.30			17	
	側持ち柱		円			0.74	0.34	0.33			17	
SB5	主柱		円			0.54	0.42	0.38			17	
	側持ち柱		円			0.54	0.42	0.38			17	
SB6	主柱		円			0.78	0.60	0.58			16	
	主柱		円			0.95	0.53	0.29	縄文土器		16	
SB7	主柱		円			0.67	0.52	0.61			16	
	主柱		円			0.75	0.52	0.51	縄文土器		16	
	主柱		円			0.68	0.51	0.54	縄文土器(82)		16	
	主柱		円			0.57	0.44	0.49	縄文土器(80-81)自然石		16	
SB8	主柱		円			0.53	0.52	0.45			16	
	主柱		円			0.36	0.30	0.34			16	
SB8	主柱		円			0.61	0.55	0.41	縄文土器(83-85)種美		16	
	主柱		円			0.61	0.34	0.42	縄文土器(79)		16	
SB9	主柱		円			0.58	0.51	0.47			16	
	主柱		円			0.66	0.64	0.49	縄文土器		16	
SB9	主柱		円			0.66	0.64	0.52	縄文土器(86)		16	



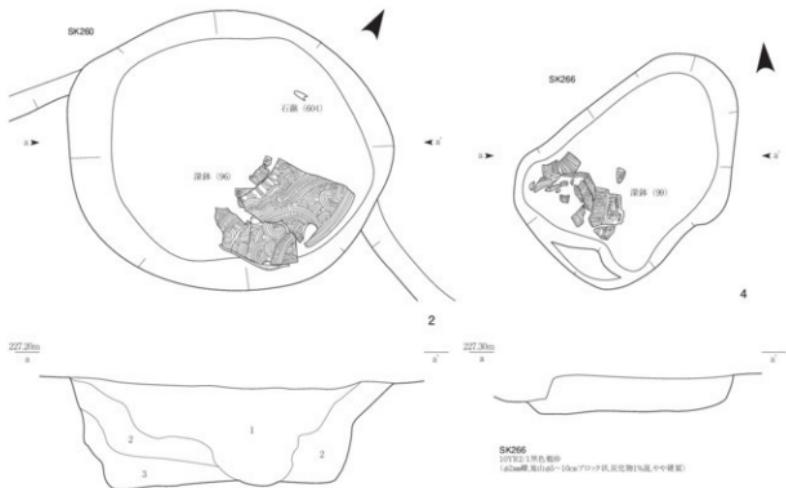
第19図 繩文時代遺構実測図

1. SK203・SK204 2. SK207 3. SK218



**SK255**  
1. 21YR 4/2 黄褐色粗砂 (d2mm粗, 粒径2~3mm) フリット状, 長石微1%, 鉄1.1%  
2. 23YR 2/2 黑褐色粗砂 (d2mm粗, 长石微1%) 鉄1.2% (1.1%)

**SK261**  
1. 21YR 2/2 黑褐色粗砂 (d2mm粗, 长石微1%) 鉄1.0% (0.9%)



**SK260**  
1. 21YR 2/2 黑褐色粗砂 (d2mm粗, 粒径2~3mm) フリット状, 长石微1%, 铁1.1%  
2. 21YR 4/2 黑褐色粗砂 (d2mm粗, 粒径2~3mm) フリット状, 长石微1%, 铁1.1%  
3. 21YR 4/2 黑褐色粗砂 (d2mm粗, 粒径2~3mm) フリット状, 长石微1%, 铁1.1%

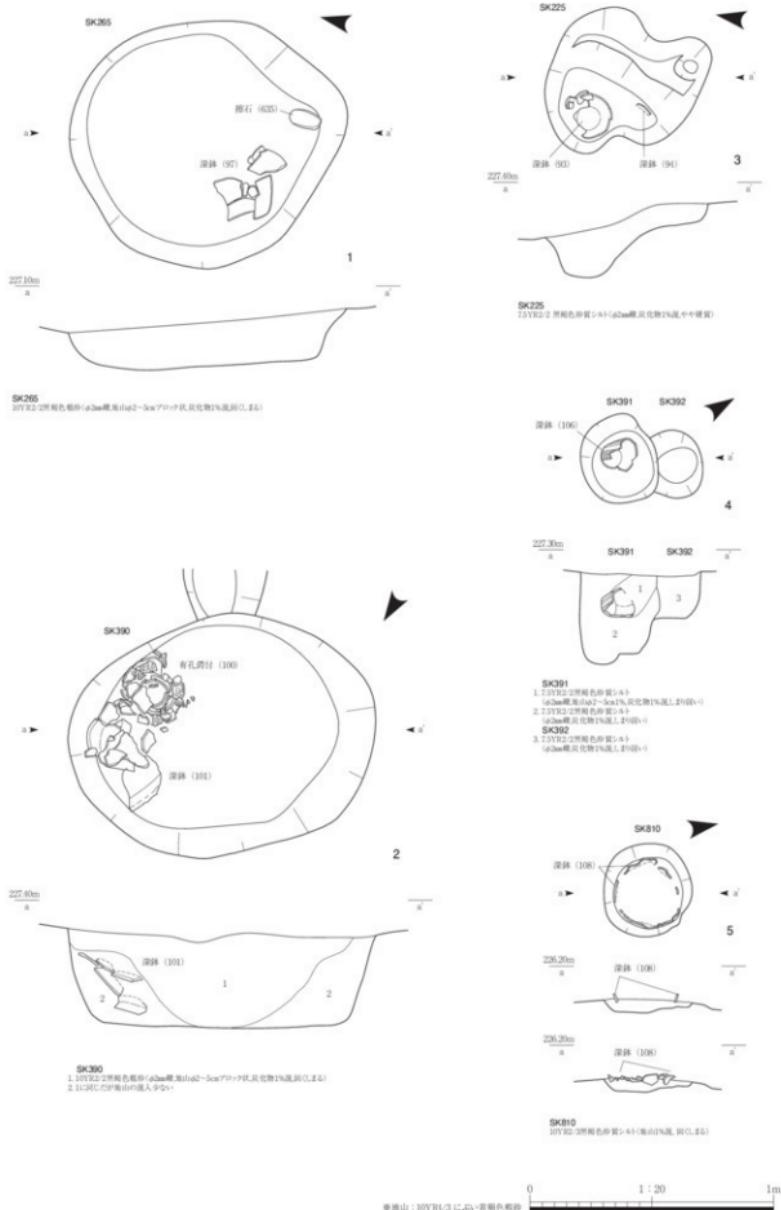
**SK266**  
10YR 4/2 黑褐色粗砂 (d2mm粗, 粒径2~3mm) フリット状, 长石微1%, 铁1.1%



第20図 繩文時代遺構実測図

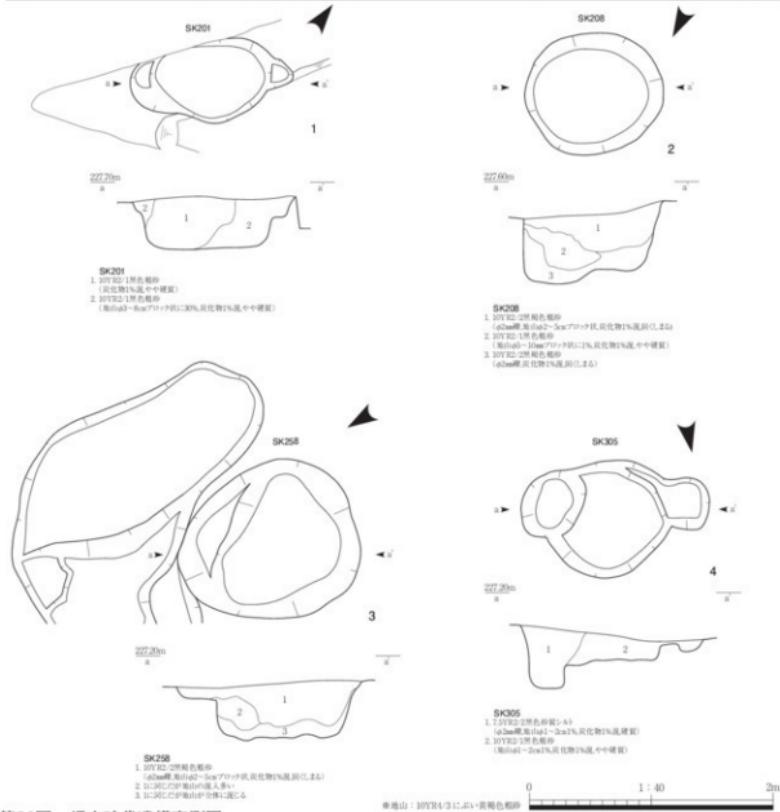
1. SK255
2. SK260
3. SK261
4. SK266

## 2 造構



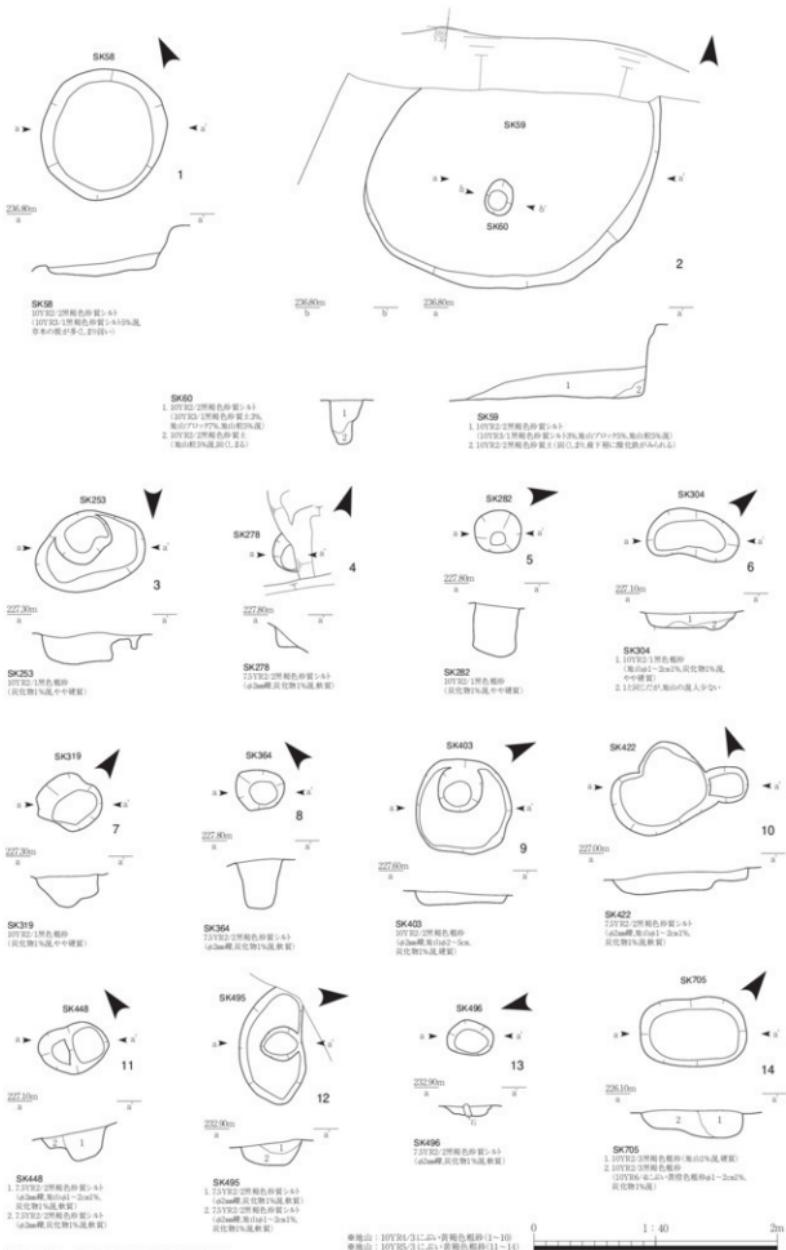
第9表 土坑墓・土坑一覧

遺跡番号	種類	平面形	長(m)	幅(m)	深(m)	備考	出土遺物	特記事項	切り合い	削頭	回数		
SK-201	土坑	円	0.78	0.76	0.35		縄文土器(109~110), 磁製石斧未完成品(6)5, 石核(6)2		>SK4	12			
SK-203	土坑墓	円	1.00	0.98	0.35		縄文土器(87)				19	2	
SK-304	土坑墓	不規	1.31	1.06	0.55		縄文土器(88~90)				20	3	
SK-207	土坑墓	円	0.85	0.57	0.18		縄文土器(91~92)					3	
SK-218	土坑墓	円	1.20	0.66	0.73		縄文土器(93~95)					3~17	
SK-255	土坑墓	円	1.11	0.98	0.59		縄文土器(96)					3	
SK-256	土坑墓	円	1.00	0.98	0.59		縄文土器(97)					3~17	
SK-261	土坑墓	円	1.07	0.95	0.32		縄文土器(98)					3	
SK-266	土坑墓	円	1.03	0.70	0.15		縄文土器(99)					21	3~17
SK-275	土坑墓	不規	0.61	0.61	0.29		縄文土器(93~94)					3	
SK-295	土坑墓	円	1.13	1.03	0.26		縄文土器(97), 鋼刀(6)5	埋設土器				21	3~17
SK-300	土坑墓	円	0.77	0.52	0.41		縄文土器(100~103), 鋼刀(6)6	埋設土器				21	3~17
SK-301	土坑墓	円	0.78	0.52	0.41		縄文土器(104)	埋設土器				21	3~17
SK-310	土坑墓	円	0.38	0.30	0.06		縄文土器(107~108)	埋設土器				22	18
SK-320	土坑墓	円	1.24	0.66	0.42		縄文土器(104)					22	18
SK-308	土坑墓	円	1.13	0.99	0.68								
SK-318	土坑墓	円	1.25	0.96	0.49								
SK-328	土坑墓	円	1.05	1.04	0.26								
SK-359	土坑墓	円	0.43	2.10	0.57								18
SK-600	土坑墓	円	0.30	0.22	0.33								
SK-653	土坑墓	円	0.56	0.65	0.26		縄文土器(111)	SK59底面にて検出					
SK-654	土坑墓	円	0.41	0.30	0.26		縄文土器(112)						
SK-657	土坑墓	円	0.40	0.35	0.44		縄文土器(113)						
SK-304	土坑墓	円	0.77	0.38	0.14								
SK-319	土坑墓	円	0.54	0.48	0.26		縄文土器(105)						
SK-364	土坑	円	0.46	0.32	0.39		縄文土器(114)						
SK-365	土坑	円	0.46	0.32	0.39		縄文土器(115)						
SK-322	土坑	不規	1.12	0.68	0.19		縄文土器(116)						
SK-348	土坑墓	円	0.58	0.38	0.28		縄文土器(116)						
SK-655	土坑墓	不規	0.96	0.52	0.21		縄文土器(117~119)						
SK-656	土坑墓	不規	0.38	0.28	0.08		縄文土器(120~121)						
SK-706	土坑	円	0.87	0.63	0.22		縄文土器(121)						18



第22図 檻文時代遺構実測図

1. SK201 2. SK208 3. SK258 4. SK305



第23図 桜文時代遺構実測図

1. SK58
2. SK59 · 60
3. SK253
4. SK278
5. SK282
6. SK304
7. SK319
8. SK364
9. SK403
10. SK422
11. SK448
12. SK495
13. SK496
14. SK705

### 3 遺 物

縄文時代の出土遺物は、遺物整理箱にして142箱あり、その内訳は縄文土器130箱、石製品11箱、種実遺体等1箱である。主体となる時代は、縄文時代中期前葉～中葉の新崎式～上山田式であるが、包含層出土の縄文土器には早期中葉、中期～晚期のものがある。石製品は打製石斧・磨製石斧を主体とするが、土坑墓出土の琥珀製の丸玉をはじめとして、黒曜石、下呂石など他地域との交流を示す製品や石材がみられる。

#### (1) 縄文土器

##### A 遺構出土

1～18はSI4出土（第24・25図、図版19・24）。1・2・6・8～10・16は連続爪形文、ヘラ状工具による刺突を施すもの。2は波状口縁で、無文部にヘラ状工具による刺突を施す。6は同一個体であるが接合しない。口縁部に縦位短沈線、横位半隆起線と無文帯がある。4・5は蓮華状文を施すもの。4は同一個体だが接合しない。体部は斜行縄文に半隆起線を縦位にまばらに施す。14～16は半隆起線による渦巻文や曲線を施すもの。15は縦位半隆起線文を斜行縄文の上に施す。16は斜行縄文が残るが、半隆起線による直線、曲線、渦巻文を全面に施し、半隆起線間を沈線で充填する。底部に圧痕があるが詳細は不明<sup>注3</sup>。17は隆帯が垂下し、縦位、横位半隆起線による区画内に正位格子目文を充填し、底部に圧痕がある。11～13・18は全面縄文のもの。11は平縁に3箇所、12は4箇所の突起がある。18の底部にはスダレ状圧痕がある。時期は5・6が新崎式、外は新崎～上山田式である。

19～73はSI400出土（第25～31図、図版19・20・24・25）。19～57は隆帯や半隆起線を主体とした文様を施すもの。19・27・32・54・55は隆帶上に連続爪形文がある。19は隆帶や半隆起線の間を蓮華状文で充填する。20は半隆起線の渦巻文が2単位配されるが全く同じパターンではない。半隆起線間には蓮華状キザミを充填する。21・22は大きく聞く胴部にキザミのある隆帶が渦を巻く。21は楕円形区画内に蓮華状文刺突を施す。32は三ツ山突起があり、連続爪形文が2列、半隆起線の間にヘラ状工具によるキザミや楔形刺突を施す。54の体部上部は斜行する隆帶が先端で渦を巻き、半隆起線やキザミが施され、体部下部は縄文のみで、底部にスダレ状圧痕がある。55は胴部に綾格文を施す。57は胴上部に弧状の半隆起線文があるので、内面に炭化物、外面にススが付着する<sup>注4</sup>。34・38・41・43は隆帶上をヘラ状工具で刻むもの。34はW字状文がある。44は隆帶上を綾杉状にキザミ、楕円区画内に細沈線を充填するもので新道式系のもの。23・35・37・40・47は方形や楕円形の区画がある。35の区画内は無文で縁をヘラキザミする。37は楕円区画の上縁に楔形キザミ、区画下に縦位半隆起線文を施す。47是有孔鈎付土器で、撲糸文と半隆起線内に赤彩が残る。25・26は波状口縁で、25は口縁に沿った半隆起線文の下に蓮華状文を施す。28・31は頭部に縄文原体の押圧がある。42は無文帯の上下に沈線による斜格子目文がある。46の楔形キザミは途中でキザミの方向を変える。48は縦位半隆起線間に斜行沈線を充填する。51は全面に縦位半隆起線を施し、底部にスダレ状圧痕がある。50は細い粘土紐を方形に貼付け、隆帶上から体部にかけて縄文を施すもので、氣屋式のものか。

58は口縁を棒状工具のようなもので細かくキザミ、小波状とし、全面に縄文を施す。頭部屈曲部には隆帶の中央を連続指圧した突帯がつく。

59・60は台。59は器高が高く、広がるが、60はほぼ垂直で、先端が内側に肥厚する。

61～73は全面に縄文を施すもの。器形にはキャリバー形と直線的に開く逆台形がある。62・73の注3 繩物圧痕について、松永篤知氏よりご教示いただいた。

注4 放射性炭素年代測定では<sup>14</sup>C年代は4405±20<sup>14</sup>C BP（詳細は第V章4を参照）

底部にはスダレ状圧痕がある。66・68～70は圧痕があるが詳細は不明。

時期は新崎式～上山田式が主体であるが、50の気屋式が最も新しい時期を示す。しかし、小破片で1点のみの出土であり、時期を決定づけることは難しいと考える。

74～76はSI401出土（第32図、図版25）。74～76は半隆起線や隆帯を施すもの。74は突起があり、無文部に三叉文状抉り、75は渦巻状の隆帶上をキザミ、縦位半隆起線間をヘラ描き短沈線で充填する。

77はSP295（SB1）出土（第32図、図版25）。口縁部から胴部にかけて直線的で、胴下部にかけて窄まる器形で、同一個体であるが接合しない。口縁端部は棒状工具によるキザミ、口縁部には繩文原体の押圧が3列、胴部外面は上半部がR L、下半部がL Rの斜行繩文が施される。口縁部には補修孔とみられる2孔がある。時期は前期初頭の花積下層式併行期のもの。

78はSP423（SB1）出土（第32図、図版25）。半隆起線による渦巻文と縦位ヘラ描き平行線を施す。新道式系のものか。

80はSP798・799（SB7）出土（第32図、図版25）。半隆起線による曲線と無文部にヘラ状工具による楔形キザミを施すもの。

81はSP798・800（SB7）出土（第32図、図版25）。パネル文で、浅く刻まれた隆帯でU字状に区画し、左右および最も突出した下端の3箇所にW字状の刺突がある。区画内にはU字状の沈線文が対称に施され、中央を刺突する。一部に赤彩が残る。胎土も胎土色も在地系のものとは異なり、搬入されたと考える。勝坂（戸井尻I）式併行期のもの。82はSP770・SK771（SB7）出土（第32図）。斜行繩文の胴部破片。

83～85はSP781（SB8）出土（第32図、図版21）。83は胴部が無文の深鉢。底部にはスダレ状圧痕がある。84は縦位繩文、85は繩文を施す。84は串田新～気屋式のもの。

86はSP764（SB9）出土（第32図、図版25）。口縁部上面に沈線により渦巻文を描き、玉抱き三叉文に似せた文様を施す。渦巻文は6箇所とみられる。口縁外面は無文で、ススが付着する。

87はSK204出土（第33図、図版21）。頸部のくびれが弱く口縁が直線的に開く器形。全面に繩文を施し、口縁部に補修孔がある。底部には網代圧痕（2本超え1本潜り1本送り）がある<sup>注5</sup>。

88～90はSK207出土（第33図、図版6・21・26）。88・89は有孔釦付土器。88の隆帯はつまみ上げて突起状となる。穿孔は1.2～2cm間隔で施され、口縁部内面にはベンガラ漆による赤彩がわずかに残る。89はやや張った胴部に斜行繩文が施され、底部に圧痕がある。内面にはベンガラ漆が残る。90は口縁部～頸部が無文で、頸部に繩文原体を押圧している。時期は新崎～串田新式と幅がある。

91・92はSK218出土（第34図、図版21）。全面に斜行繩文を施す深鉢。91は直線的に開く逆台形、92はキャリバー形である。91は4箇所に三角形突起があり、口縁部に繩文原体を押圧する。口縁部より14cm下にはススが付着し、内底面から12cm程に炭化物が付着する<sup>注6</sup>。92は口縁部に沈線が1条巡る。

93・94はSK225出土（第34図、図版21）。93はやや眼らんで立ち上がった胴部が大きく外傾して開き、底部に圧痕がある。94は半隆起線による楕円形区画内に楔形キザミを施す。新道式系のもの。

95はSK255出土（第35図）。外傾して直線的にのびる胴部が肩部で内屈する器形で、同一個体だが接合しない。全面に斜行繩文を施し、内面にはコゲが付着する。

96はSK260出土（第35図、図版22）。キャリバー形の深鉢。口縁部に横位半隆起線、胴部上半はキザミのある隆帯と半隆起線が渦巻状やS字状に施され、その間をヘラキザミで充填し、下半は縦位半隆起線が施されるが斜行繩文が残る。

97はSK265出土（第35図、図版22）。全面に斜行繩文が施される粗製の深鉢。

注5 放射性炭素年代測定では<sup>14</sup>C年代は4380±20<sup>14</sup>C BP（詳細は第V章4を参照）

注6 放射性炭素年代測定では<sup>14</sup>C年代は4400±20<sup>14</sup>C BP（同上）

98はSK261出土（第36図、図版26）。やや胴が張り、口縁部が外反する器形で、同一個体だが接合しない。口唇部に突起があり、口縁部は突起から斜行した隆帯の先端が渦を巻く。胴部は斜行縄文で、底部に圧痕がある。内面にコゲが付着する。

99はSK266出土（第37図、図版22）。円形透孔のある4頂部2組1対の突起をもち、口縁部は櫛状工具による刺突と三叉文状の抉りを施す。胴部は縦位半隆起線間にヘラ状工具によるキザミを施す。

100～103はSK390出土（第37図、図版6・22）。100は肩が張りかばちやのような形の有孔鈎付土器で、胴部上半と内面にベンガラ漆を塗る<sup>注7</sup>。円孔のある把手により4分割された上半部の2面にU字状の沈線文、把手の両側から赤彩面を囲むように斜行沈線文を施す。101はキャリバー形の深鉢で入字状突起を3箇所配し、頸部に縄文原体を押圧、全面に斜行縄文を施す。外面にはスヌが厚く付着する<sup>注8</sup>。

104はSK201出土（第37図、図版26）。半隆起線の渦巻文が施される。

105はSK319出土（第38図、図版22）。三ツ山突起がある平縁、口縁部の半隆起線下に斜行縄文を施す。

106はSK391出土（第38図、図版22）。全面に縦位半隆起線を施し、底部にスタレ状圧痕がある<sup>注9</sup>。107・108はSK810出土（第38図）。107は外面に斜行縄文、内面にユビオサエがある。

109・110はSK5出土（第38図、図版26）。109は胴部が直線的に開き、口縁部が内湾する器形で、平縁に小突起が4箇所貼り付けられる。110は半隆起線の方形区画内をヘラ描沈線で充填する。

113はSK282出土（第38図）。隆帯は剥離しているが、隆帯に沿って半隆起線の渦巻文がある。

114はSK364出土（第38図、図版26）。口縁内面が肥厚、口縁端部はヨコナデ、胴部は斜行縄文を施す。

115はSK403出土（第38図、図版26）。口唇部は平坦に四角く仕上げ、斜行縄文を施す。

116はSK448出土（第38図、図版26）。半隆起線の渦巻文を施す。

117～119はSK495出土（第38図、図版26）。117・118は縦位半隆起線を施すもので、118は格子目状沈線がある。119は縦位縄文を施す。

120・121はSK496出土（第38図、図版26）。120はキザミのある隆帯が渦を巻く。121は口縁端部が肥厚し、沈線による楕円区画がある。

122はSK603出土、123はSK614出土、124はSK705出土（第38図）。ともに斜行縄文を施す。

125はSK761出土（第38図、図版26）。三ツ山突起の一部を欠損する。キザミのある隆帯は渦を巻く。

126はSK773出土（第38図）。外面はナデ、底部に圧痕はみられない。

127はSK788出土（第38図、図版22）。口唇部に半隆起線を施し、外面に黒斑、スヌが付着する。

128はSK790出土（第38図）、129はSK795出土（第38図）。外面に斜行縄文を施す。

#### B 包含層出土（第39～51図 130～586、図版6・23・26～28）

130は口唇部が四角く、ボジ楕円形の回転押型文を横位帯状に施すもので、その下に円形刺突を施し、スヌが付着する。時期は早期中葉で、出土した縄文土器の中で最も古いもののである。

131は口唇部に棒状工具による刺突と羽状縄文を施す。132は条痕状の調整後、ヘラ描沈線文を施す。133は尖底。131～133は早期末～前期のもの。

134～137・139・140・143は蓮華状文を施すもの。138は口唇部が肥厚し、入字状突起をもつ。

141・142・145はヘラ描沈線文を施すもので、141は三叉文状抉り、145は方形区画をもつ。144・146・149は横位無文帶上縁に楔形キザミをもつ。147・148・150～152・154は方形区画やB字状区画をもつ。147・148・151は正位格子目文を充填する。153・155～158は半隆起線文を施す。153はU字状の半隆起線文、155は斜格子目文、157は鋸歯状文、158は連続刺突がある。134～158は新崎式のもの。

159は口頭部がくの字状に屈曲する浅鉢。外面はミガキ状ヨコナデ調整で、円形文とそれから伸び

<sup>注7</sup> 漆塗膜分析による（詳細は第V章5を参照）

<sup>注8</sup> 放射性炭素年代測定では<sup>14</sup>C年代は4425±20<sup>30</sup>C BP（詳細は第V章4を参照）

<sup>注9</sup> 放射性炭素年代測定では<sup>14</sup>C年代は4380±20<sup>30</sup>C BP（同上）

る粘土帯を貼り付けており、粘土帯にはわずかに赤色漆が残っている。160～164・166・171～175・177・179・180・182はキザミのある隆帯をもつ。160はW字状に似せた突起と楕円形沈線文、交互刺突文を施す。161・164・180は眼鏡状突起や三ツ山突起をもつ。182は波状口縁で内面を肥厚させる。167～169・170・187は隆帯を刻まないもので、167には眼鏡状突起、168には三ツ山突起と三叉文状抉りがある。169・170はキャリバー形の器形で、外面は隆帯と半隆起線を全面に施す。170は隆帯が斜行して先端が渦を巻く。187は突起から円を描く隆帯と半隆起線による半円文が組み合わされ、胴部下部には緩く渦を巻く隆帯の先端が大きく突出する。181は円形透孔がある橋状把手。加曾利E系のものか。159～170・172～182・187は上山田式のもの。

183・185・188～192・195・197～200はキザミのある隆帯をもつ口縁部の破片。183はヘラキザミ、185は口唇部の隆帯に綾杉状キザミ、195は棒状工具による連続刺突、198は連続爪形文を施し、しの字状突起をもつ。186は口縁部に斜格子目文、頭部に隆帯の中央を連続指圧した突起がある。193・194・196は隆帯にキザミがない口縁部の破片。193は4波頭の波状口縁に沿って楔形キザミ、胴部に半隆起線の渦巻文などを施し、地紋の斜行繩文が残る。201・202は蓮華状文をもつ。201は口唇部を綾にキザミ、突起状にする。202は1弁に2本の沈線が引かれる。203～208・212・214・215・217・225～230・235・237・238・240・247～249・255はキザミのある隆帯をもつ胴部の破片。204・228は区画内に三叉文や円形の抉り、212・227・230はヘラ状工具による刺突や楔形キザミを施す。キザミのない隆帯、あるいは半隆起線を主体にするものには、楔形キザミ（209・220・244・257）、蓮華状文刺突（211・224・258・261）、ヘラ状刺突（216）、ヘラ描沈線文（222）、短沈線状キザミ（223）、三叉文・円形の抉り（242・246・276）などを施すものがある。251～254は隆帯をユビオサエする。279～281は敷物圧痕があり、279は網代圧痕（2本超え1本潜りで1本送りと2本送りを繰り返す）。280はスダレ状圧痕である。282～284は口唇部に連続爪形文を施す。282は無文区画内にも爪形文を施し、284は入組状突起をもつ。316～319は隆帯の両側に連続爪形文やキザミを施す新道式系統もの。316はJ字状浮文、三角形と半円形の区画文がある。320～330は外面がナデ調整で、321は面取り状の口唇部をユビキザミし、329は頭部の屈曲部に繩文原体を押圧する。331～341・343～345・347・349・350・352・354～360は頭部に繩文を施す。口縁部が無文と全面施文があり、口縁形態も平縁・波状口縁・突起をもつものがある。338・344・355は口唇部端面にも繩文を施す。332・340・341・350・352・354・360は頭部に繩文原体を押圧する。183～186・188～360は新崎式～上山田式のもの。

361は内湾する口縁部に楕円形に隆帯を貼り付ける。362～367は口縁部に半隆起線を施すもので、端部の形態は引き出すものや四角いもの、肥厚するものなどがある。371は隆帯を入字状に貼付ける。361～375は上山田式～古府式のもの。

380は有孔鍔付土器。ヘラ描沈線文を施し、わずかに赤色漆が残る。381は体上部をくの字状に屈曲させ、横位区画内に沈線で渦巻文を描き、連続刺突を施す。376～382は上山田式～串田新式のもの。

383・384・386・394～403は葉脈状文をもつ。383・384・386・394～397は葉脈が隆帯、398・400・401は基葉脈が隆帯で、ヘラ描葉脈がある。402・403は葉脈に沿って連続刺突がある。388は三角刺突、389は楕円形の連続刺突、393は口縁端部に貼り付けた隆帯の下に連続三角刺突を横位、綾位に施す。404は有孔鍔付土器。上下2本の横位沈線により隆帯状にする。383～404は串田新式のもの。

405・410は口縁部が無文で、綾位沈線文、408・418は横位指頭沈線文がある。409は隆帯に横位連続刺突、414はヘラ状刺突、416は棒状刺突する。411・412・417・419は平行沈線間に列点を施す。422は突起。粘土紐をしの字状に貼り付け、縁辺に円形刺突を施す。427～430は台付鉢で、427は胴

部に縦位沈線文、430は円形透孔を沈線が縁取る。431～439・456・464～476は胴部から底部の破片。胴部は431が繩文地に沈線による方形区画文、432は縦位沈線文、436～438は突線文。繩文のみがあり、423～426・434・439・465・467～472・474は縦位繩文である。底部の敷物圧痕は431・432・434・435・437・438・469・474・476が網代圧痕、466・475はスダレ状圧痕である。435は接合しない破片（第47図右側の拓本）に密なもじり編みがあり、別個体の可能性がある。436～438は岩崎野式、405～435・439・456・464～476は串田新式～気屋式のもの。

440～443は口縁部に半隆起線がある。口縁部の形態は面取り状のもの（440）、肥厚するもの（442）がある。444は貼付円文のある鉢。445～447は全面繩文のもの。446は口唇部を絡条体でキザミ、447は平行沈線を施す。454は外反する胴部に細い粘土紐を貼り付けて半円文や円文を描き、内面には炭化物が付着する。455は半隆起線による区画内に交互に三叉文状抉りを施す。458・459は浅鉢。458は口縁部がくの字状に屈曲し、平行沈線がある。459は緩やかに内湾し、横位半隆起線があり、内面に赤色漆がわずかに残る。460は両端に剥離痕がある把手。461は台形土器。頂部にユビオサエが残り、外面に赤彩がうっすらと残る。440～455・457～463は中期に属するもの。

477は入字状突起で、口縁部外面に絡条体を押圧、内面にユビオサエが残る。478・480・482は口縁部に連続三角形刺突するもので、482は無文帯の上下に施す。479は綾杉状キザミがある。481・486・487は細かい繩文地に平行沈線をひく。486は沈線による円形区画内に繩文が残り、487は沈線間の繩文を交互に磨り消す。485は低い隆帶の三角形区画と、隆帶に沿った櫛歯状沈線を施す。489は粘土紐を横位波状に貼り付ける。491は無文地に連続キザミ、横位沈線・鍵手状沈線を施す。492は細かい繩文地に平行沈線、三叉文、くずれた羊齒状文がある。489は曾利式、491は八日市新保式とみられ、477～488・490は後期の気屋式のもの。

493～495・497・498は外面が条痕のもの。493～495は横位、497・498は縦位。口唇部は493が棒状刺突、494がユビキザミ、495はキザミが磨滅している。496は平行沈線間に列点文がある。499・500は口縁部が内湾する鉢。499は口唇部に沈線、口縁部には工字文状隆帯があり、内部には繩文が残る。500は細かい繩文地で、磨消ヨコナデ、平行沈線を施す。502は底部から胴部にやや脹らみをもつて直線的に開き、内外面ヨコナデ調整する。503は浅鉢。外面は不規則な繩文を施し、内面のミガキは丁寧で、わずかに赤彩が残る。493～496は中屋式、497～503は晩期のもの。

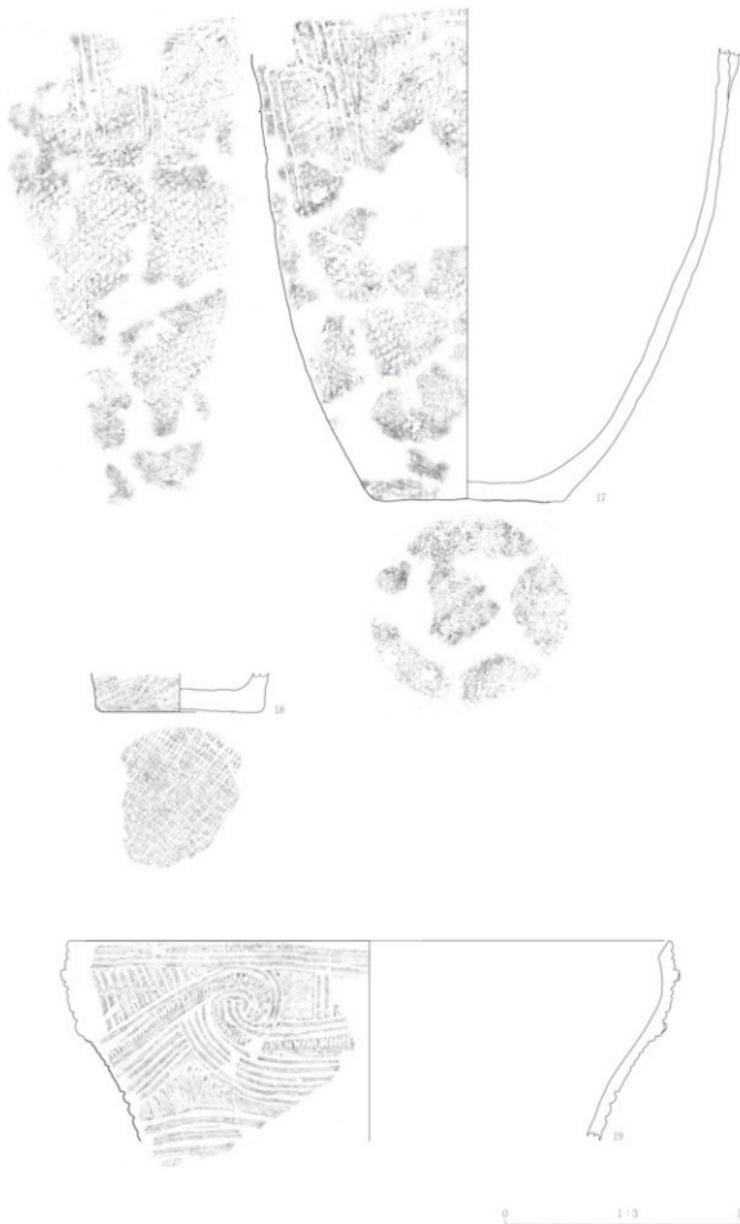
504～507・508は突起。504は円形隆帯を貼り付ける。505・507・508は沈線文を施すもので、508は頂部の渦巻沈線文が垂下する。504～507は中期、508は気屋式のもの。

509は口縁部がくの字状に屈曲する小型の鉢で、外面に樹枝状の隆帯を貼り付ける。隆帯は断面三角形で、6単位が配されると推測する。内面には炭化物、外面にはススが付着している。510～523・526・527は口縁部が無文で、平行沈線文または半隆起線を施すもの。524～539・541～548・550～560は口縁部から胴部に繩文を施すもの。口縁部の形態には内側に肥厚するもの、突起を貼り付けるもの、口唇部端面にも繩文があるもの、繩文原体を押圧するものがある。535・536・544は頸部に繩文原体を押圧する。561～581は胴部から底部の破片。底部外面にスダレ状圧痕、網代圧痕、カゴ底圧痕などの敷物圧痕があるものも多い。582・583は浅鉢。口縁部が開き、端部が肥厚する582と口縁部が直立する583がある。584は有孔釦付土器。穿孔の間隔は3cm、釦は高さのない隆帯で、外面はヨコナデ調整である。585・586は土製円盤。586は磨滅が激しく、条がわずかに残るのみである。584は中期ものとみられるが、509～583は詳細時期の決め手を欠くため、出土遺物の主体となる中期～晩期のものとしてまとめた。

（田中道子）



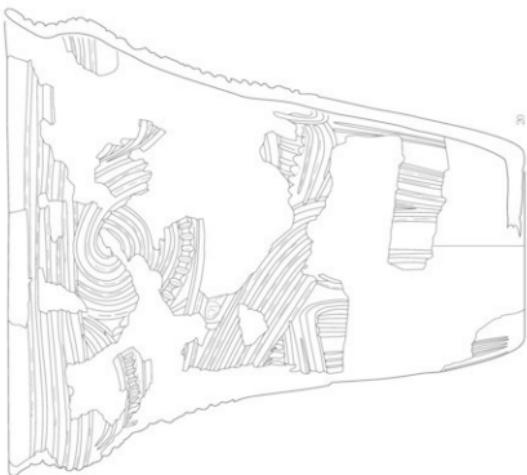
第24図 桧文時代遺物実測図 (1/3)  
SI4(1~16)



第25図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SI4(17・18) SI400(19)



第26図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SI400(20~22)



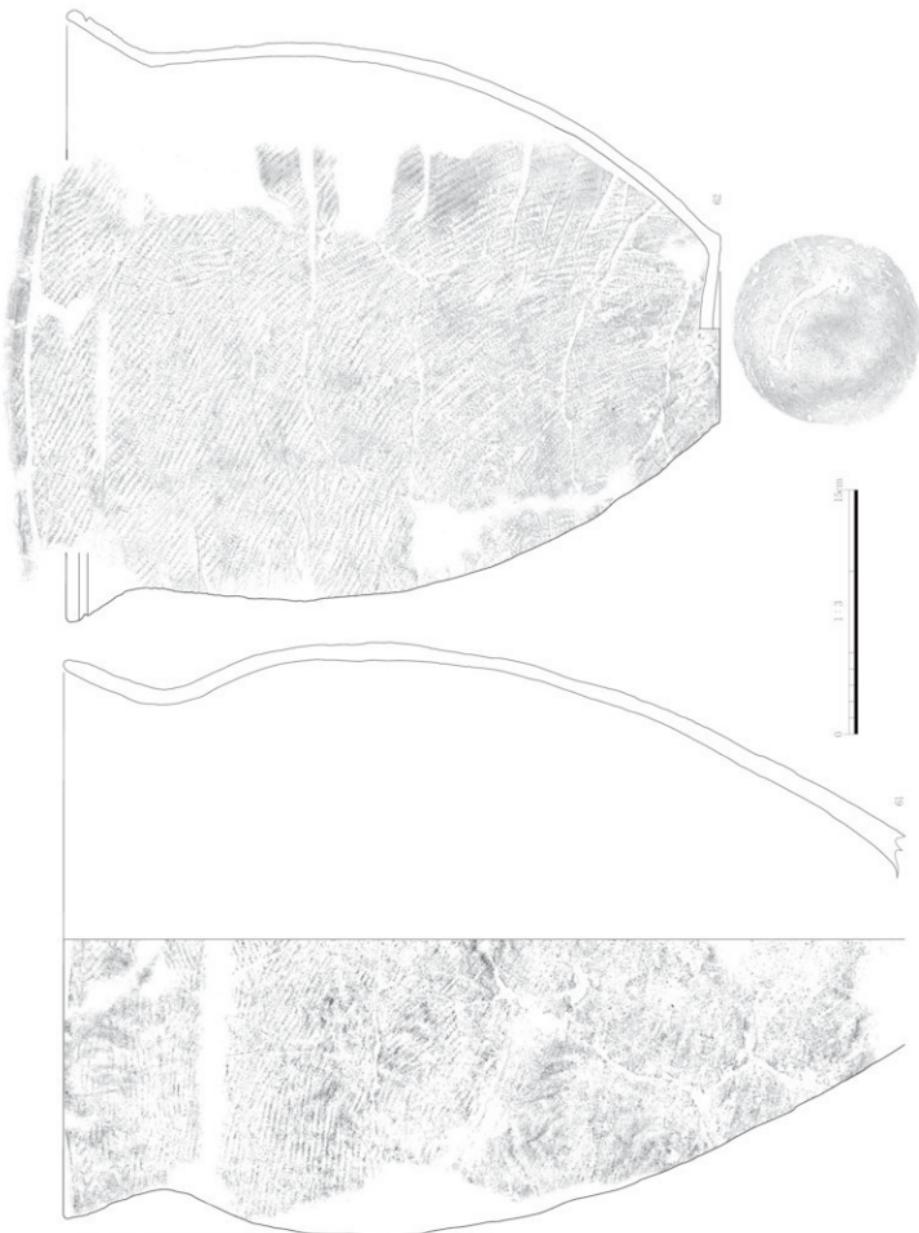


第27図 檜文時代遺物実測図 (1/3)

SI400(23~51)



第28図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SM400(52~60)

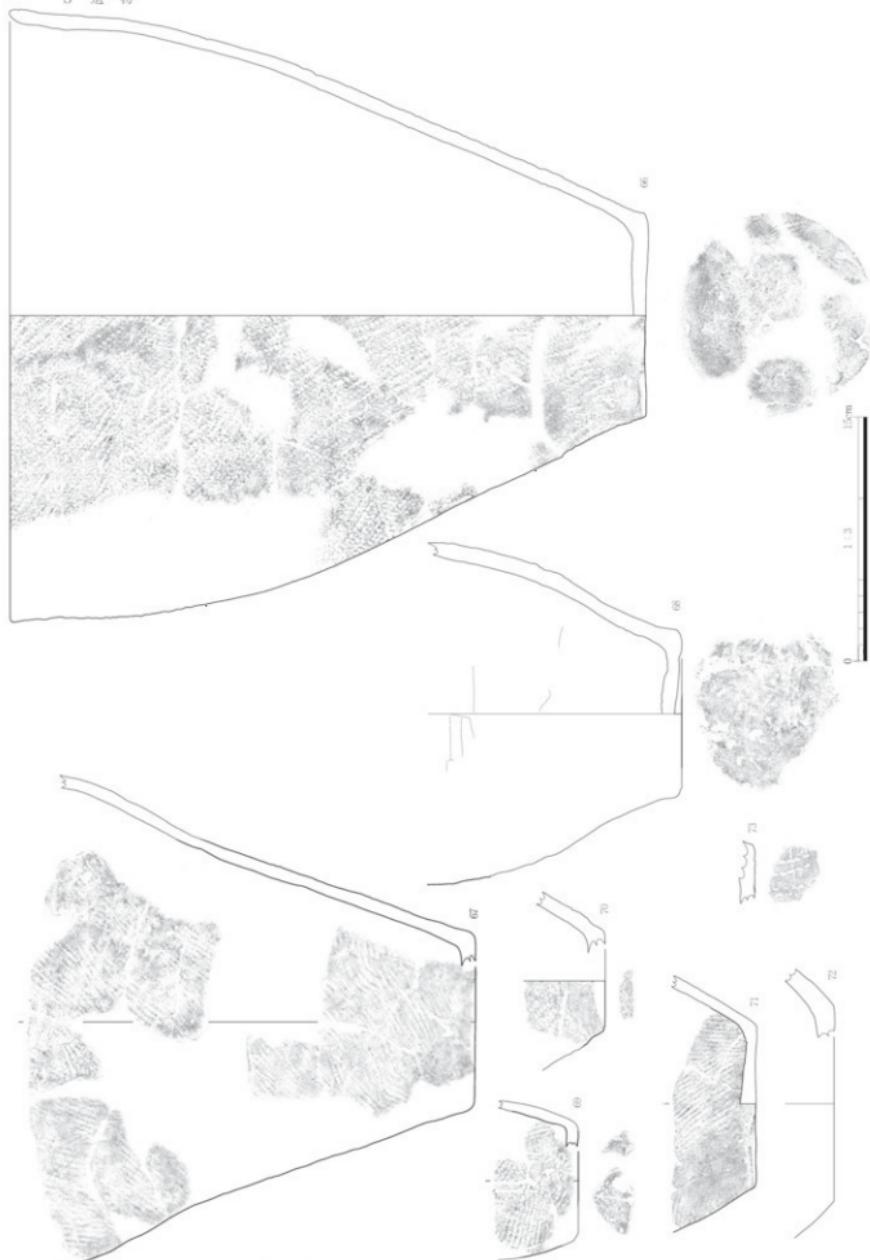


第29図 縄文時代遺物実測図 (1/3)  
SI400(61-62)

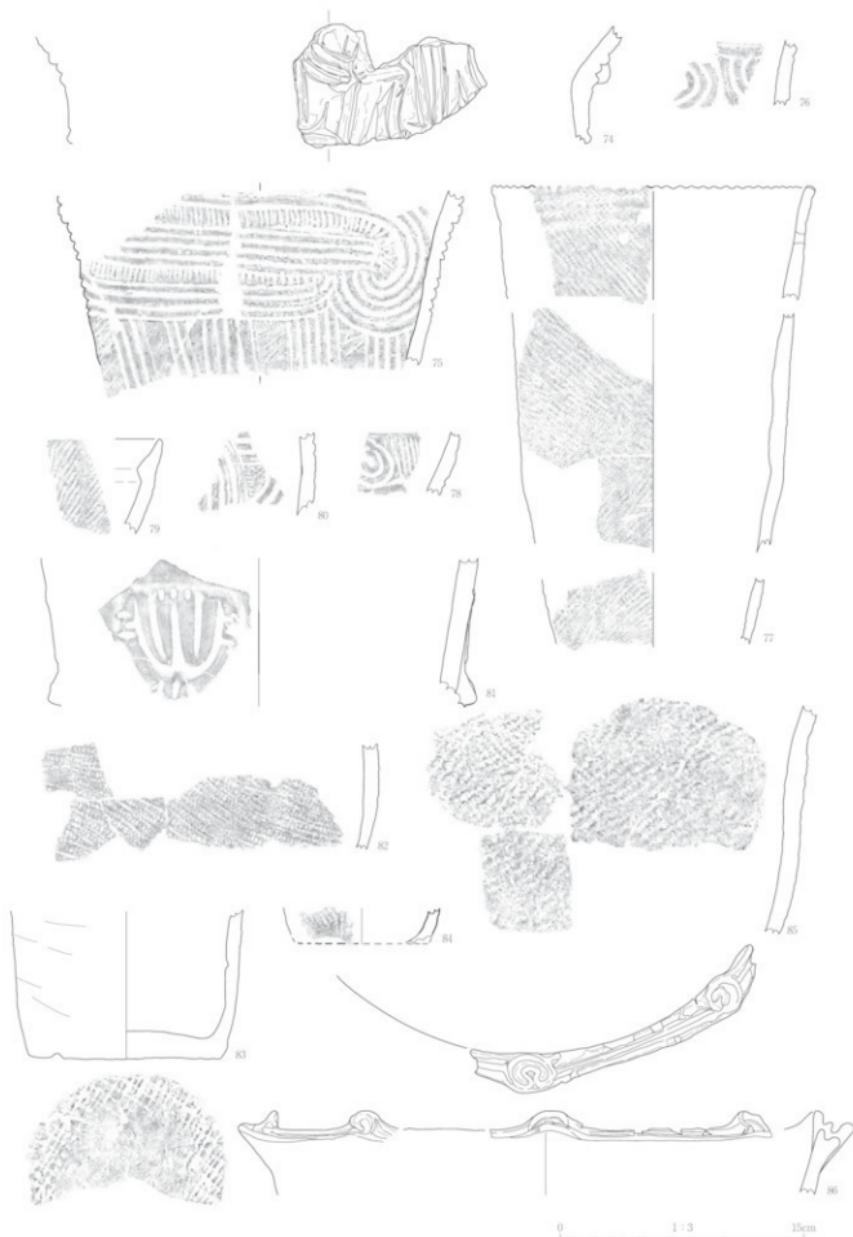


第30図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SI400(63~65)

3 遺物

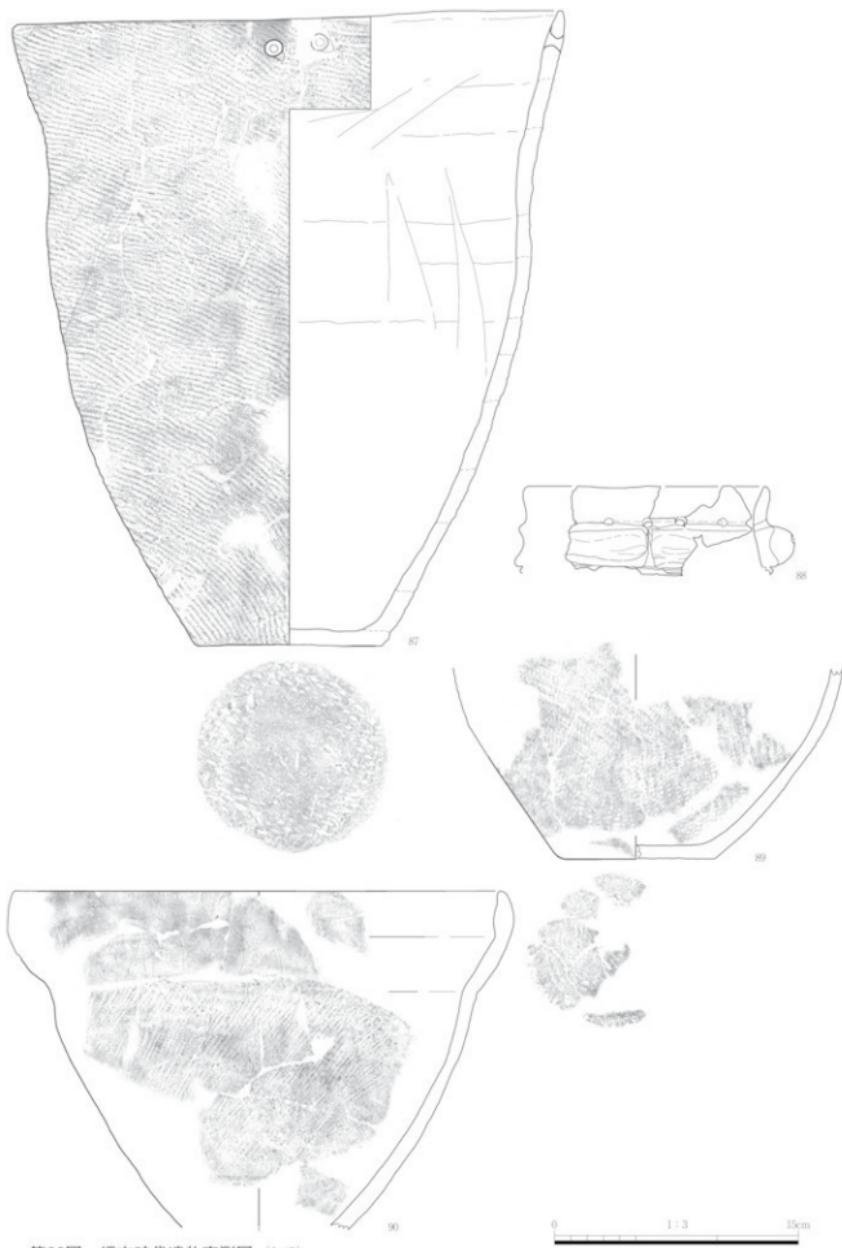


第31図 桶文時代遺物実測図 (1/3)  
SI400(66~73)

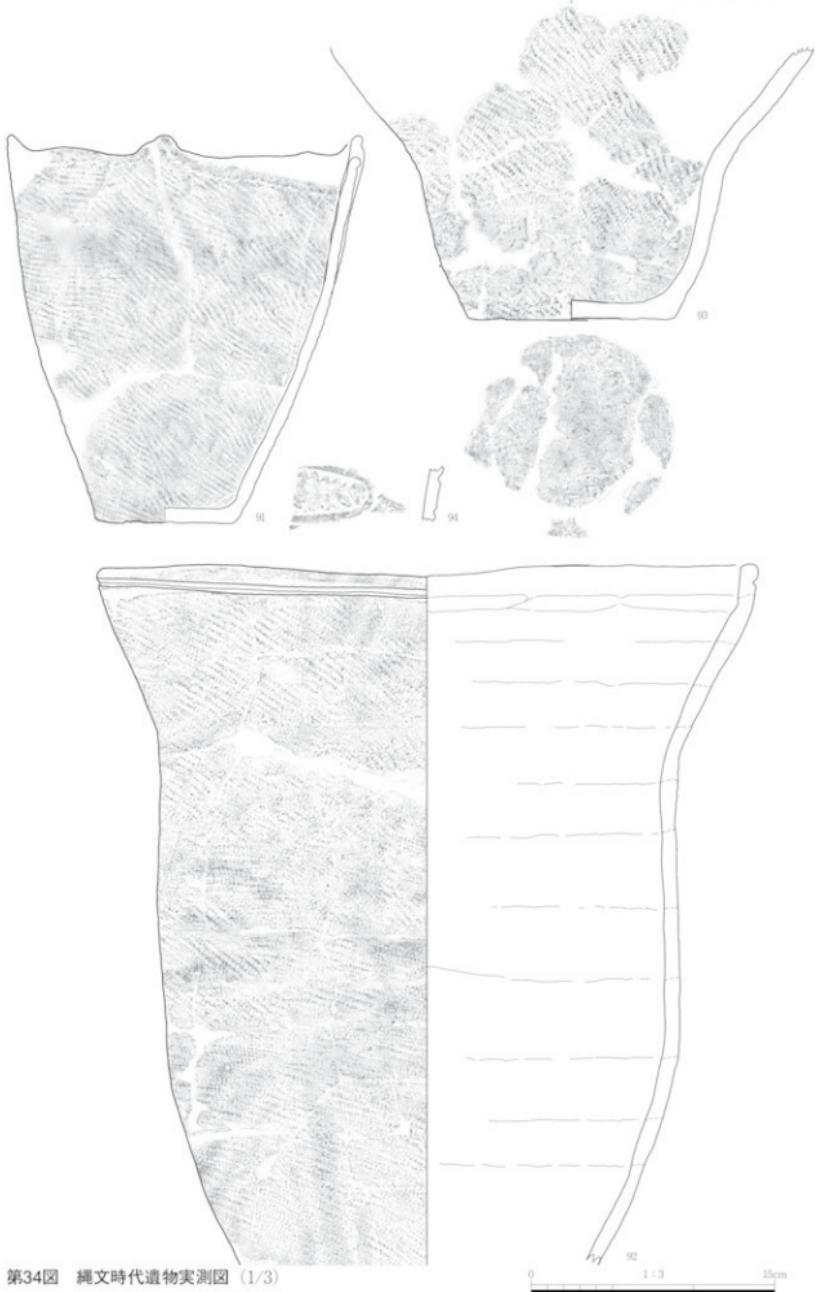


第32図 繩文時代遺物実測図 (1/3)

SI401(74~76) SB1(77·78) SB7(80~82) SB8(79·83~85) SB9(86)



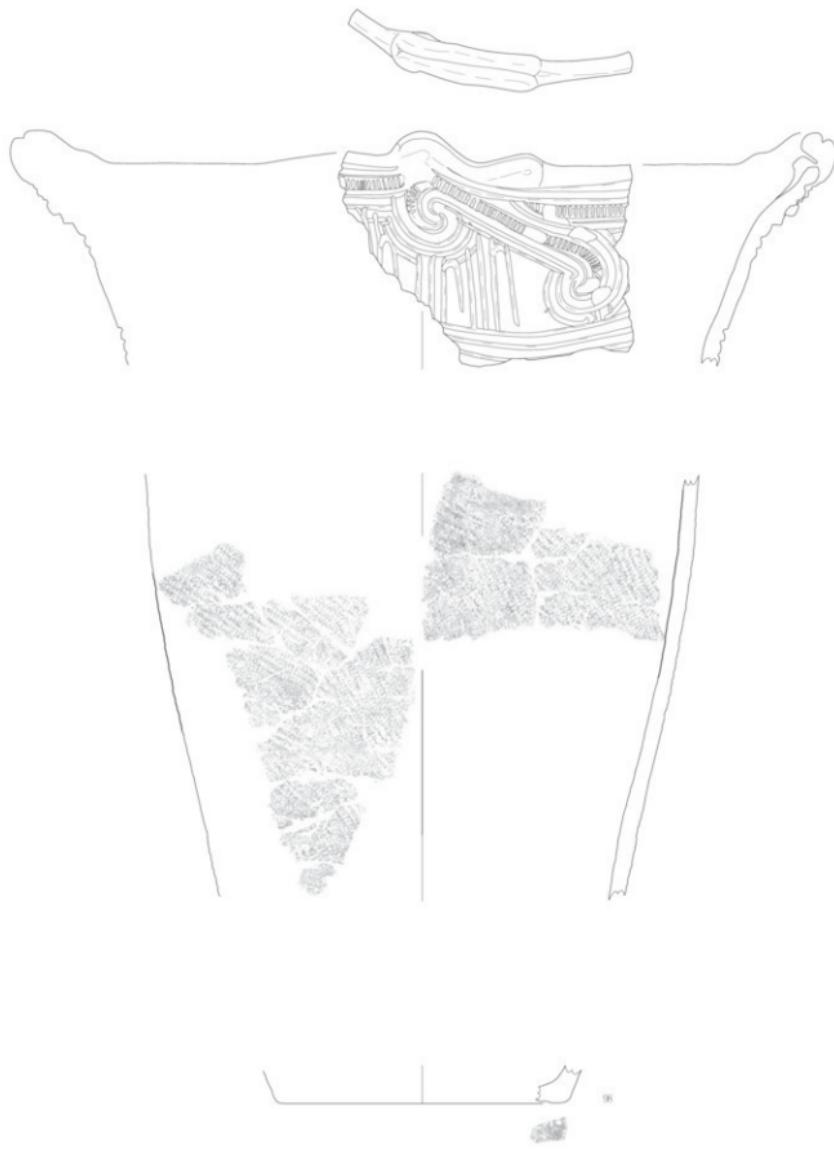
第33図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SK204(87) SK207(88~90)



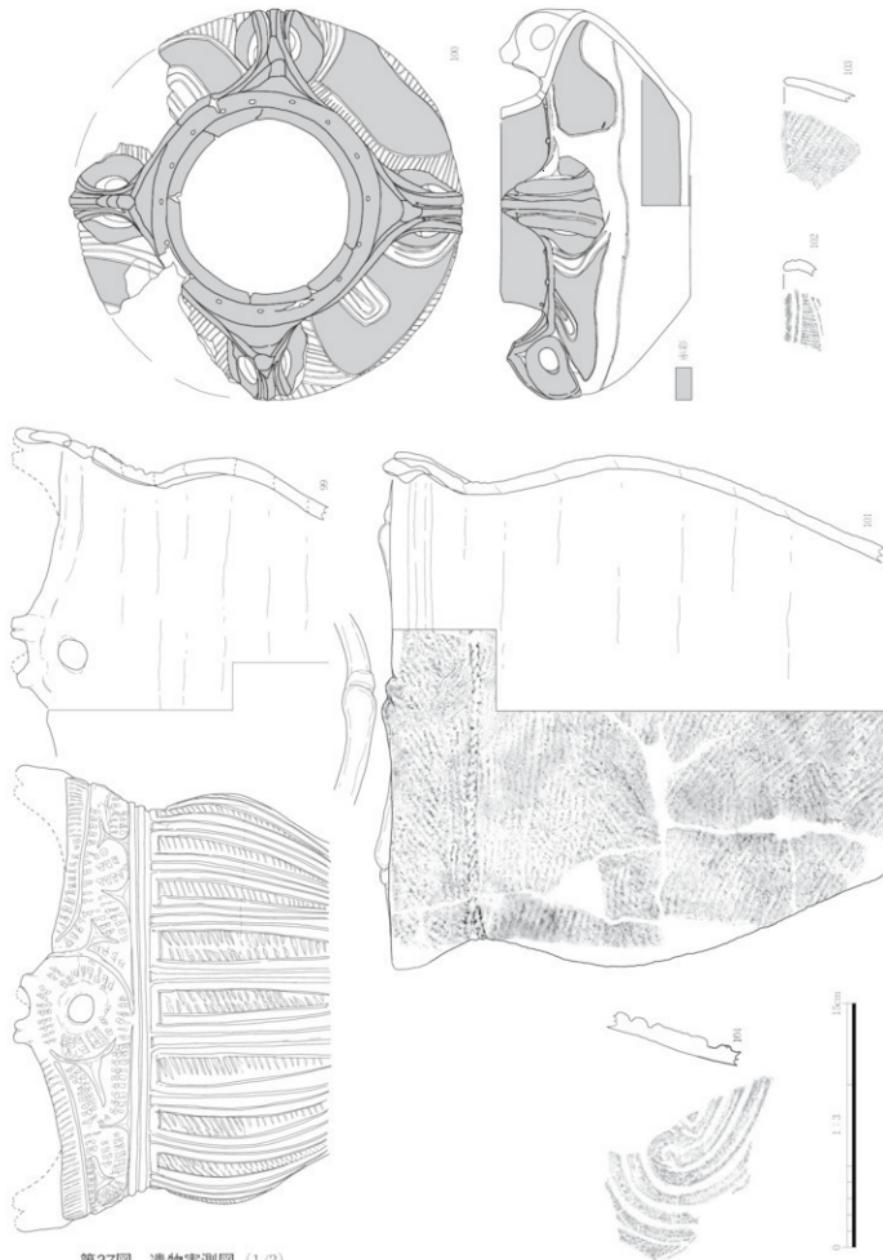
第34図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SK218(91・92) SK225(93・94)



第35図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SK255(95) SK260(96) SK265(97)



第36図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
SK261(98)

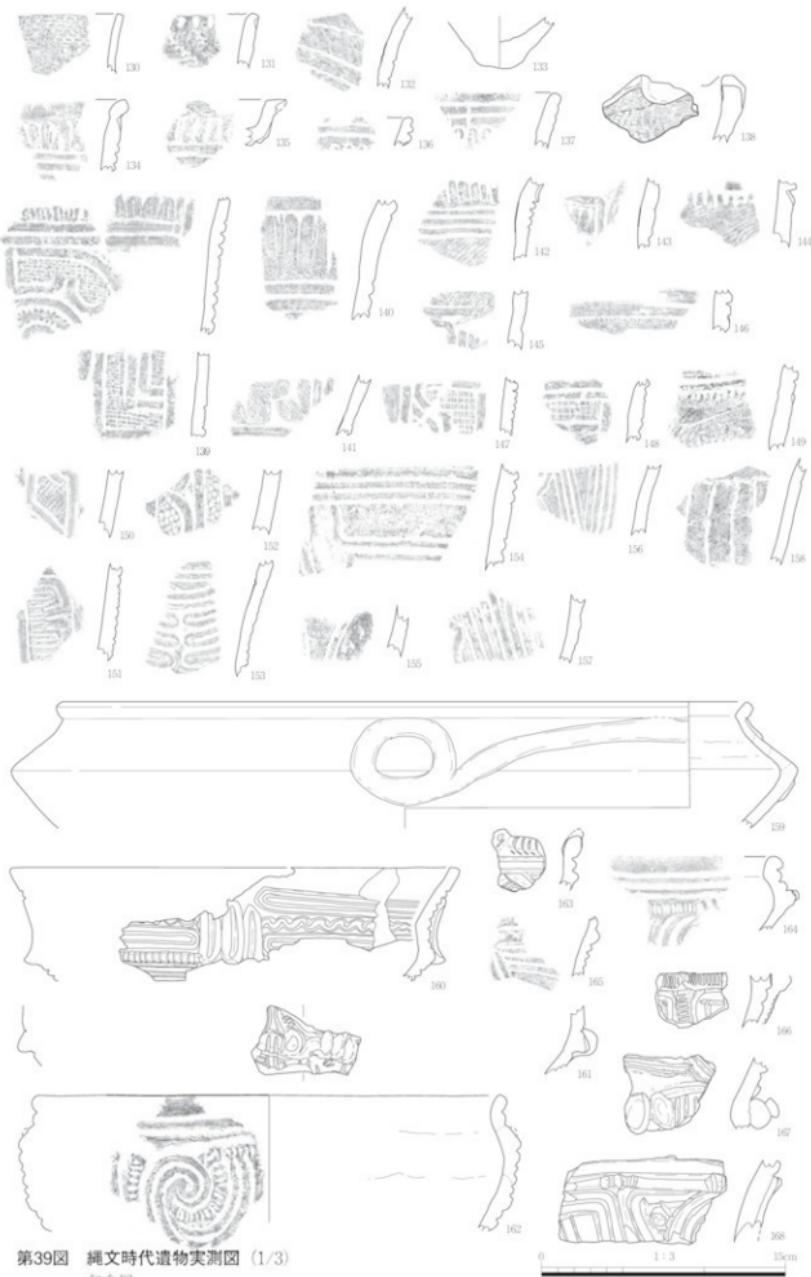


第37図 遺物実測図 (1/3)  
SK266(99) SK390(100~103) SK201(104)

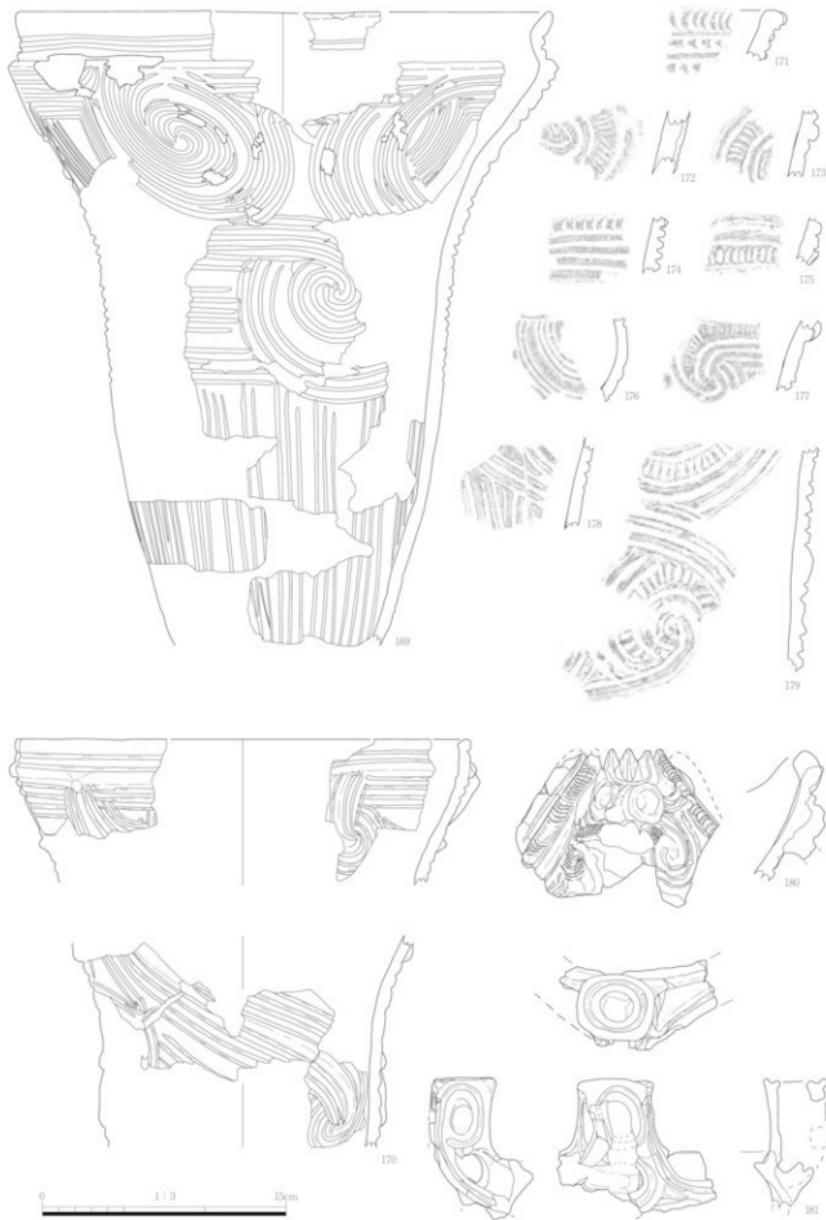


第38図 繩文時代遺物実測図（1/3）

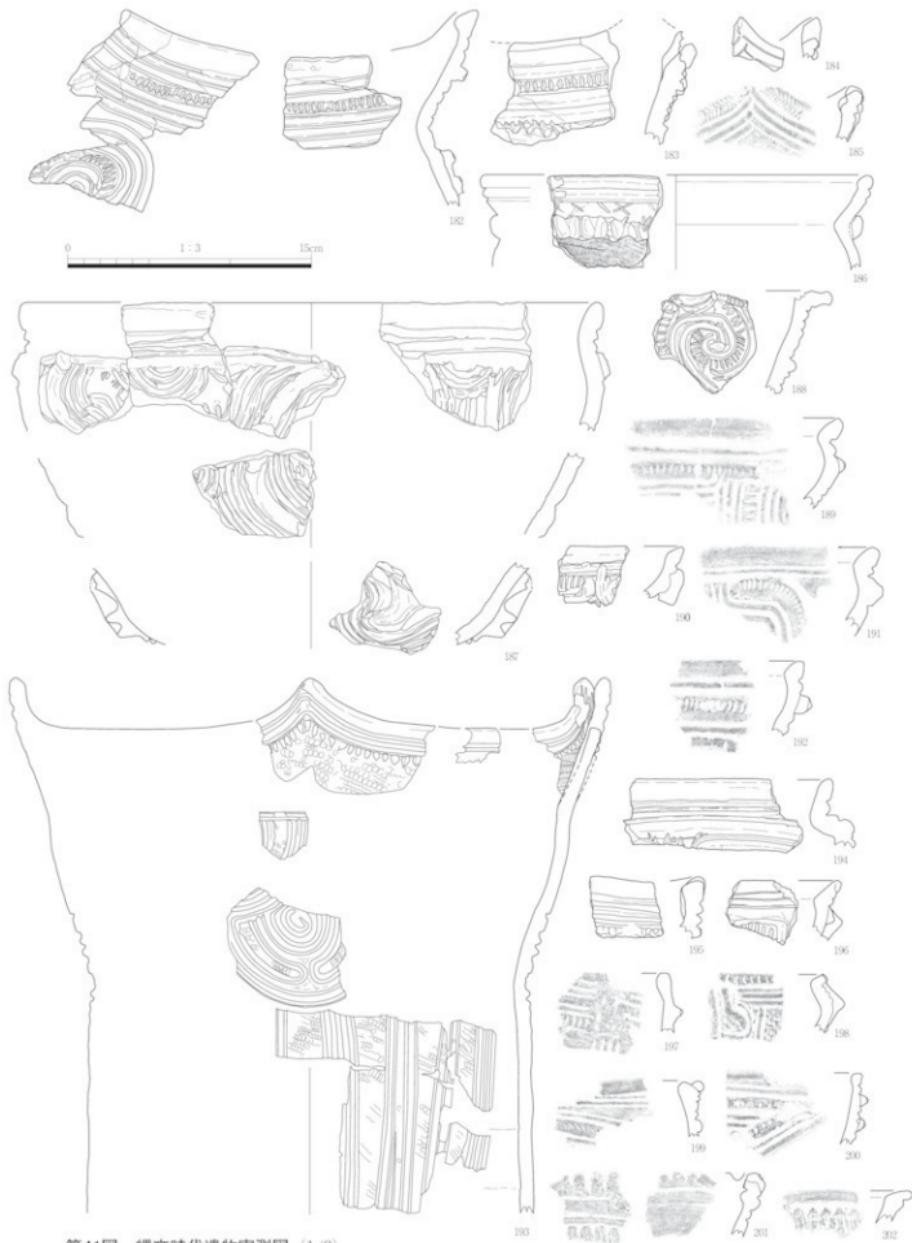
SK319(105) SK391(106) SK810(107-108) SK5(109-110) SK253(111) SK278(112) SK282(113)  
 SK364(114) SK403(115) SK448(116) SK495(117-119) SK496(120-121) SK603(122) SK614(123)  
 SK705(124) SK761(125) SK773(126) SK788(127) SK790(128) SK795(129)



第39図 桶文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第40図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第41図 檜文時代遺物実測図 (1/3)

包含層



第42図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第43図 縄文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層

0 1:3 15cm



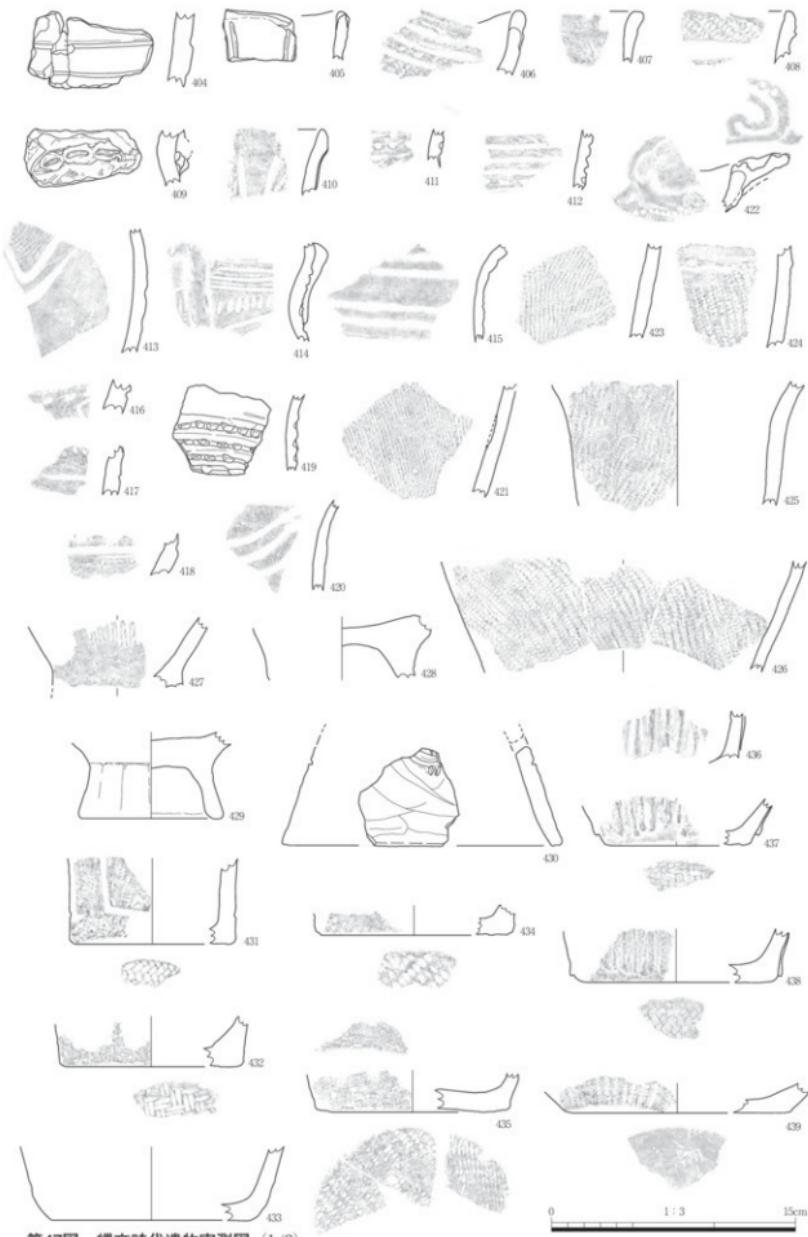
第44図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第45図 桶文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第46図 繩文時代遺物実測図（1/3）  
包含層



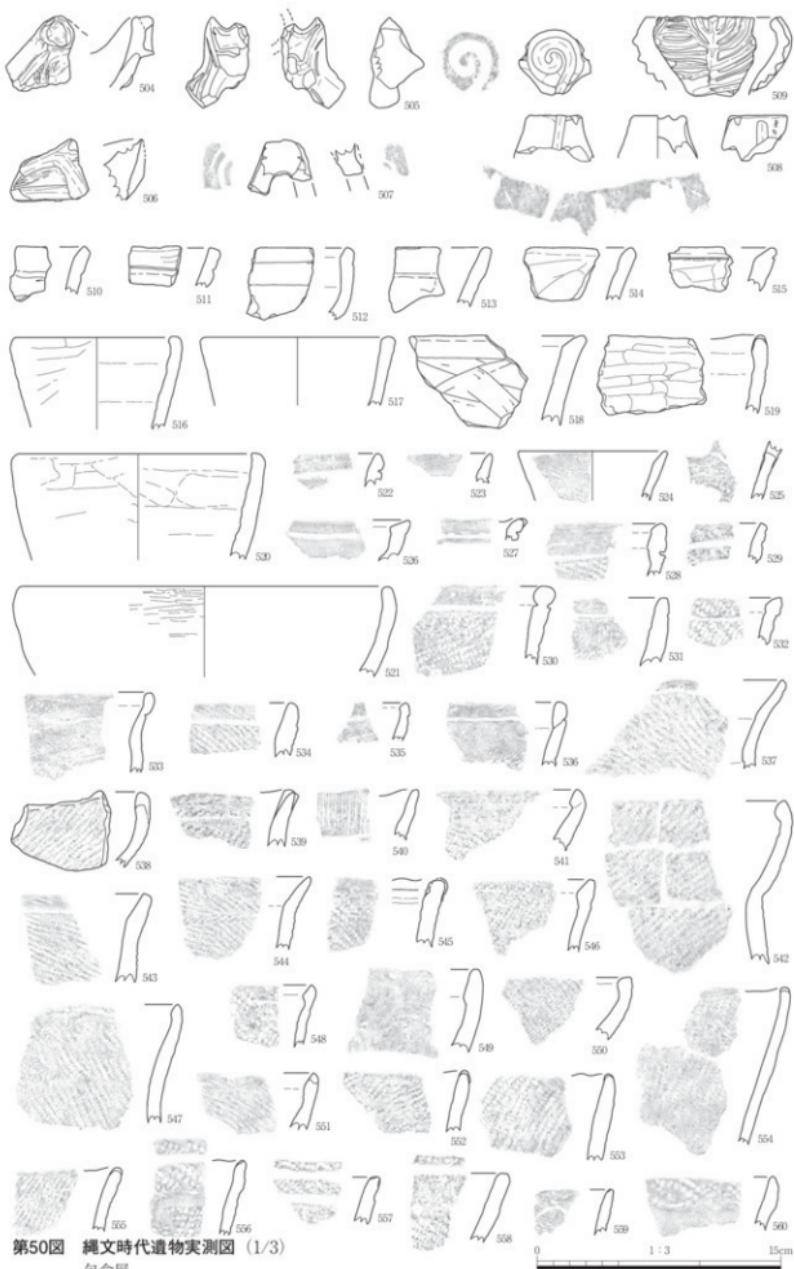
第47図 桶文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



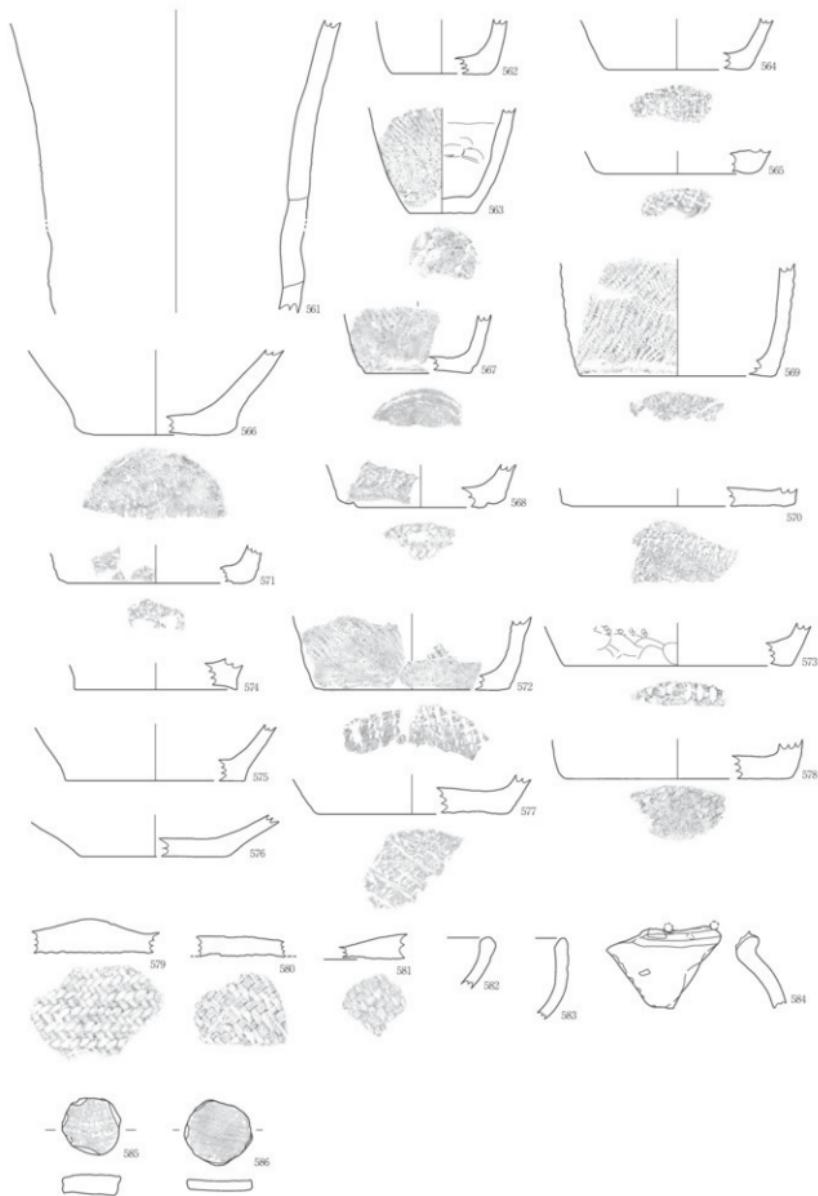
第48図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第49図 桶文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第50図 繩文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



第51図 桜文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層

0 1:3 15cm

第10表 縄文土器一覽（1）

第10表 純文土器一覽 (2)

第10表 細文土器一覧（3）

番号	形態	縦 (cm)	横 (cm)	高さ (cm)	目録	直徑 (cm)	底面	内面	外面	底上地	底下地	縫合	縫合部
81 22	D S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
82 D S4722					1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
83 31	D S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
84 31	D S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
85 31	D S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
86 25	D S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
87 21	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
88 26	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
89 6	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
90 23	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
91 31	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
92 21	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
93 31	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
94 96	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
95 96	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
96 22	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
97 22	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
98 36	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
99 22	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
100 6	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
101 22	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
102 26	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
103 22	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
104 32	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
105 22	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
106 32	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
107 D S4706					3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
108 26	A S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
109 26	A S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
110 26	A S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
111 C S4706					3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
112 C S4706					3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
113 C S4706					3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
114 26	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
115 26	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80
116 26	C S4706	3.80	2.80	1.00	1.00	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80	3.80

第10表 級文土器一覽 (4)

第10表 繩文土器一覽 (5)

第10表 繩文土器一覧 (6)

番号	部類	器形	寸法	底	縁	口縁	内縁	外縁	内縫	外縫	内底	外底	内底縫	外底縫	内底縫縫合部	外底縫縫合部	
199	C	111	90	圓	直縁	19mm	19mm	D									
200	C	111	90	圓	直縁	19mm	19mm	C									
201	C	112	94	圓	直縁	19mm	19mm	C									
202	C	112	96	圓	直縁	19mm	19mm	E									
203	B	101	65	圓	直縁	19mm	19mm	E									
204	C	113	96	圓	直縁	19mm	19mm	D									
205	B	106	98	圓	直縁	19mm	19mm	D									
206	C	112	93	圓	直縁	19mm	19mm	D									
207	C	112	93	圓	直縁	19mm	19mm	D									
208	D	111	93	圓	直縁	19mm	19mm	D									
209	C	111	93	圓	直縁	19mm	19mm	C									
210	C	113	93	圓	直縁	19mm	19mm	D									
211	C	113	99	圓	直縁	19mm	19mm	C									
212	C	117	106	圓	直縁	19mm	19mm	F									
213	C	111	92	圓	直縁	19mm	19mm	F									
214	C	112	90	圓	直縁	19mm	19mm	C									
215	C	112	90	圓	直縁	19mm	19mm	C									
216	C	110	91	圓	直縁	19mm	19mm	C									
217	C	110	94	圓	直縁	19mm	19mm	D									
218	C	110	98	圓	直縁	19mm	19mm	D									
219	C	110	98	圓	直縁	19mm	19mm	D									
220	C	110	98	圓	直縁	19mm	19mm	D									
221	C	110	98	圓	直縁	19mm	19mm	A									
222	C	118	107	圓	直縁	19mm	19mm	D									
223	C	118	107	圓	直縁	19mm	19mm	D									
224	C	112	93	圓	直縁	19mm	19mm	D									
225	C	112	93	圓	直縁	19mm	19mm	D									
226	C	113	74	209	直縁	19mm	19mm	C									
227	C	116	23	209	直縁	19mm	19mm	F									
228	C	116	26	209	直縁	19mm	19mm	D									
229	D	119	96	圓	直縁	19mm	19mm	D									
230	B	100	63	209	直縁	19mm	19mm	F									
231	C	111	62	209	直縁	19mm	19mm	D									
232	C	116	66	210	直縁	19mm	19mm	D									
233	C	116	66	209	直縁	19mm	19mm	D									
234	C	116	66	209	直縁	19mm	19mm	D									
235	C	116	66	209	直縁	19mm	19mm	D									
236	C	116	66	209	直縁	19mm	19mm	C									

第10表 繩文土器一覽 (7)

第10表 紹文土器一覽(8)

第10表 繩文土器一覽 (9)

表第10 繩文土器一覽 (10)

第10表 繩文土器一覽 (11)

表第10 繩文土器一覽 (12)

第10表 線文土器一覽 (13)

第10表 細文土器一覽 (14)

## (2) 石製品

石器を含む石製品は110点出土し、遺存状態の良い52点を図化、掲載している。型式分類は朝日町境A遺跡を参考にした<sup>注10</sup>。石材は中村氏による鑑定結果を観察表に記入し、第V章に報文を掲載した。

601は琥珀製の丸玉（第52図、図版7）。土坑墓SK390出土。表面は磨かれているが、かなり脆く一部欠損している。孔は中心からややずれている。琥珀の産地は日本に数箇所あるが、その赤褐色の色調から岩手県久慈市など東日本産とみられ<sup>注11</sup>。製品として搬入されたものと考える。

602～604は石鏡（第52図、図版7）。全て無茎凹型で、602は片面の側縁を細かく丁寧に剥離加工する。604は土坑墓SK260から出土し、先端を欠損するが、長身で両面とも丁寧に剥離加工する。早期以前のものである可能性がある。石材は602が下呂石、603は無斑晶質安山岩である。

605～607・611は剥片、608～610は二次加工剥片（第52図、図版7）。605・606・609・610は自然面を一部残す。607・609は横長剥片、608・610・611は縦長剥片である。605・606はSI4から出土した。610はSI400から出土した石刃状剥片で、片面の片縁のみに細かい剥離加工がある。石材は605・606が黒曜石。透明度が高く、信州産の諏訪系か和田系とみられる<sup>注12</sup>。609は下呂石。610は珪質頁岩で、早期以前の可能性が高い<sup>注13</sup>。

612は石核（第52図）。全面に剥離面があり、2面は大きな剥離ではなく直角な面をなす。石材は珪質頁岩。SK5から出土したが、SI4出土の石製品には同じ石材のものはない。

613～622は磨製石斧（第53図、図版28）。刃先が撥形に開く613・614・622、緩やかに開く615・618・620、短冊形の616・617・619・621がある。616・617は剥離面にも研磨されていることから、再加工とみられる。621の基部には敲打痕があり、再利用された可能性がある。石材は蛇紋岩が2点、透閃石岩7点、輝綠岩1点で、A地区出土のものは蛇紋岩と輝綠岩である。

623～631は打製石斧（第54・55図、図版29）。短冊形624・625・628～630、撥形623・626、分銅形627・630がある。片面に自然面を残すものが多く、628は裏面の中央に柄装着痕がみられる。623・630は刃部に土ズレとみられる摩耗痕がある。631は近世の溝SD1から出土した。基部は折れているが残存長13.3cm、刃部の幅11.6cmを測る大型のもので、石材は礫岩である。

632～641は擦石（第55・56図、図版29）。632は平坦面中央と側縁に敲打痕があり、敲石としても使用されたことがわかる。637はSI400から出土したもので、ススが帯状に付着している。石材は閃綠岩3点、アレナイト質砂岩2点、顯晶質安山岩2点、閃綠斑岩2点、マイロナイト1点であり、SI4およびSI400は同一遺構から異石材のものが出土している。

642・643は石錘（第57図、図版30）。いずれも打欠きによって糸かけを作り出している。

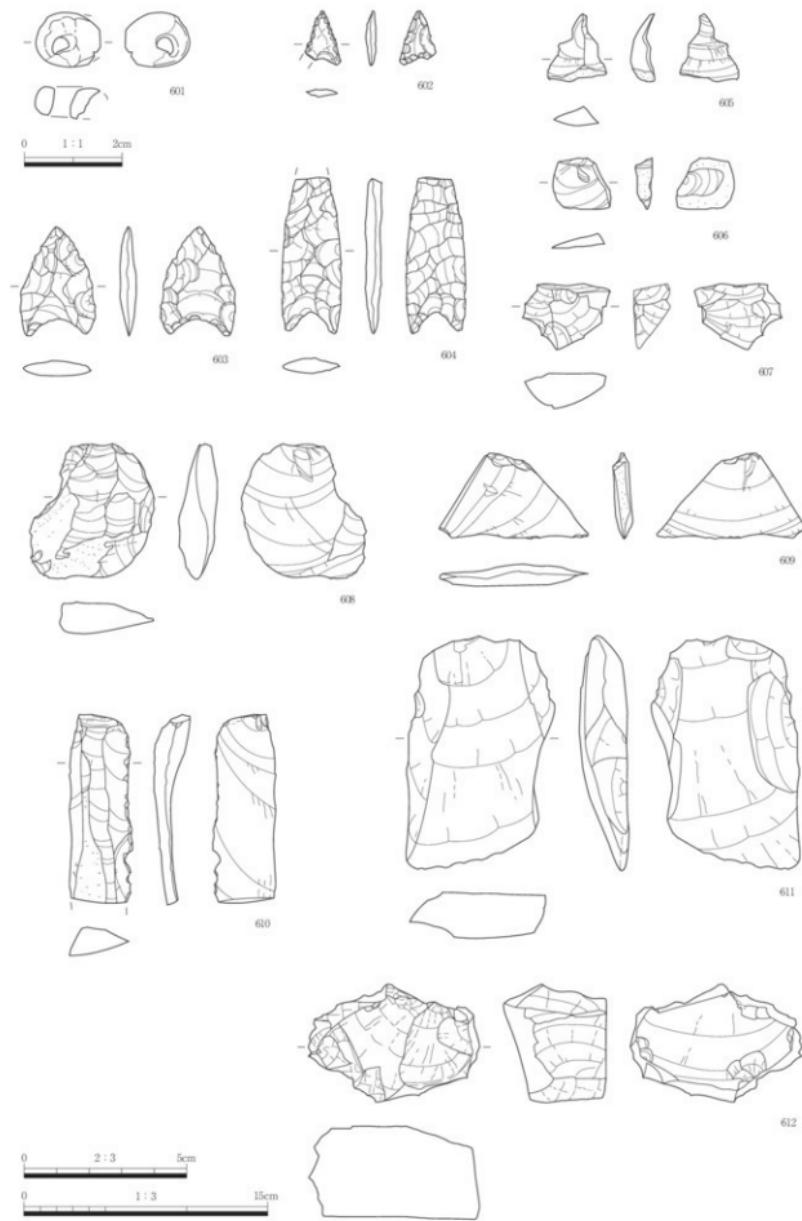
644是有溝砥石（第57図、図版30）。砥面の中央に幅0.4cmの溝状の凹みが1本あり、砥面は使い込まれている。溝状の凹みのない面には敲打痕があり、敲石に転用されたと考えられる。

645・646は石棒（第57図、図版30）。645は両端を欠損しており、全面に研磨痕がみられる。646は先端部の一部とみられる。端面は研磨され平坦で、装飾はなく、全面に研磨痕がみられる。石材は凝灰岩で、645は塩屋石とみられ、飛驒地方からの搬入品と考えられる。

647～652は石皿（第57～60図、図版30）。扁平な647・649・650と、縁に厚みのある648、全体に厚みのある651・652があり、647～649には据え置くための加工とみられる擦面がある。648は周縁を敲打加工し、台石としての使用もうかがえる磨滅もみられる。647・650には擦痕が明瞭に残る。651はSI400出土。表面は石皿と砥石、裏面は砥石と台石、天面は石皿、左側面は砥石として使用されている。652は三面の平坦面を作り出し、いずれも使い込まれている。石材は全て砂岩。（田中道子）

注10 富山県教育委員会 1990『北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編5 境A遺跡石器編』

注11・12・13 中村氏のご教示による。

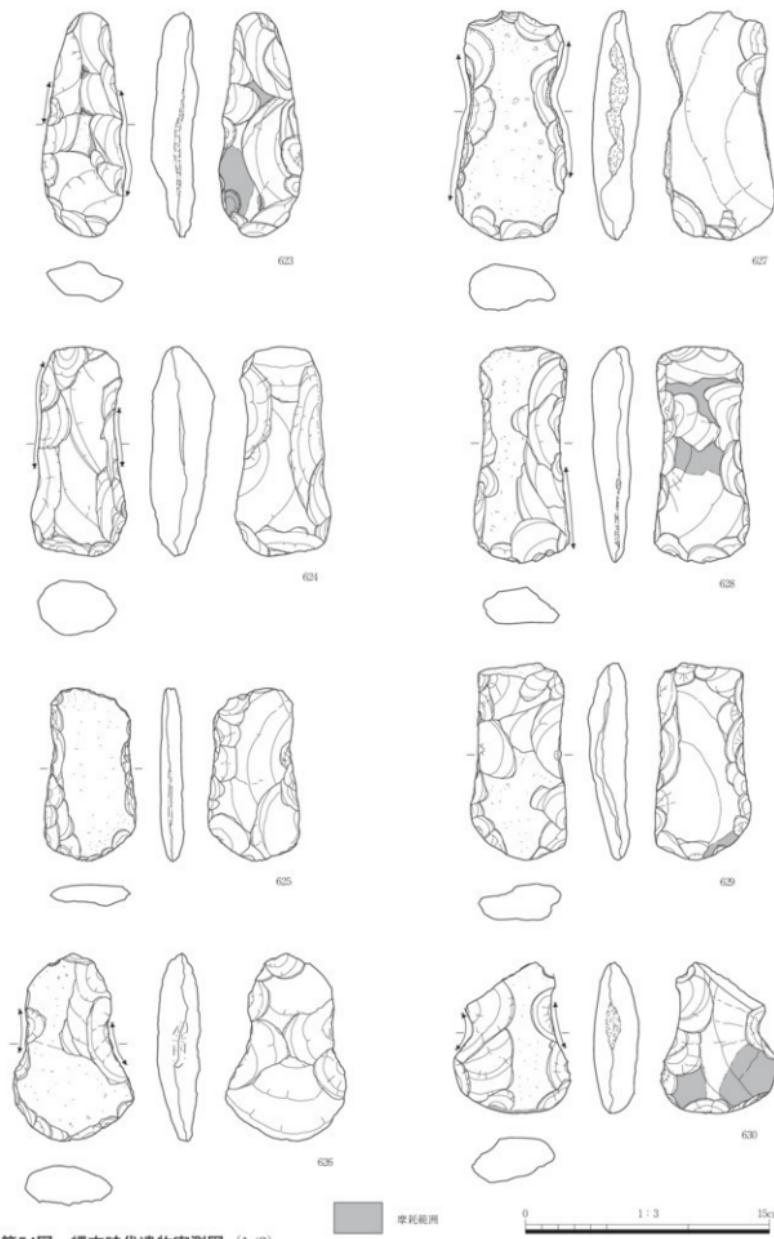


第52図 檻文時代遺物実測図 (601 1/1, 602~611 2/3, 612 1/3)  
SK390(601) SK260(604) SI4(605・606) SK772(607) SI400(610・611) SK5(612) 包含層

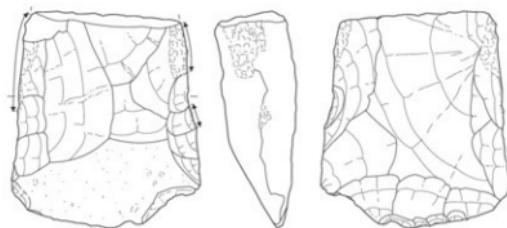


第53図 繩文時代遺物実測図（1/3）

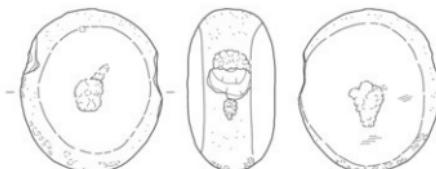
SD1(613) SK5(615) SI400(619・620) 包含層



第54図 桶文時代遺物実測図 (1/3)  
包含層



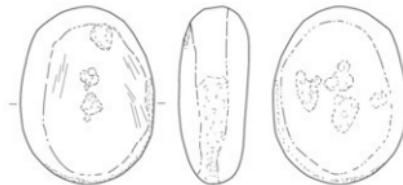
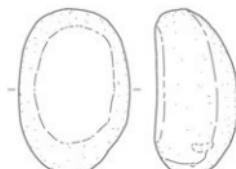
631



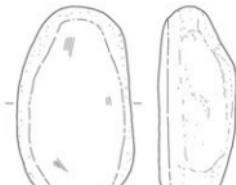
632



634



633



635



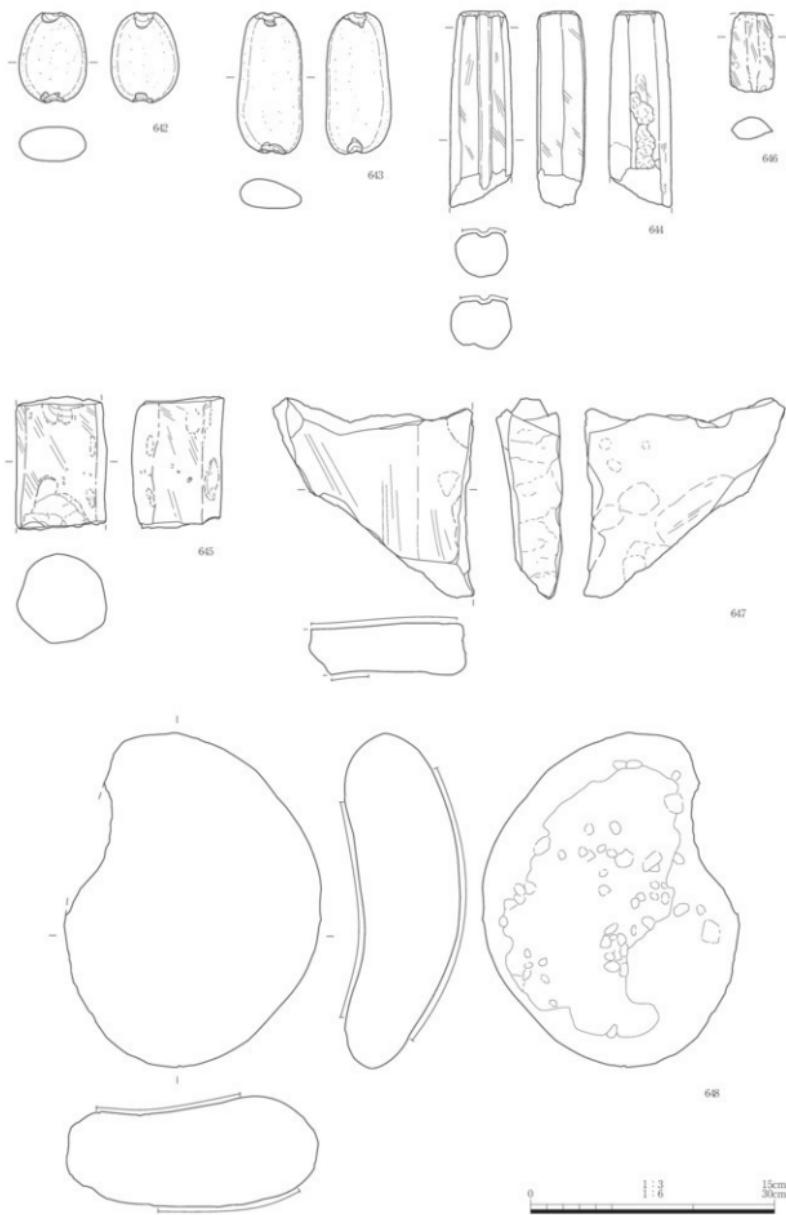
第55図 繩文時代遺物実測図 (1/3)

SD1(631) SI4(633・634) SK265(635) 包含層

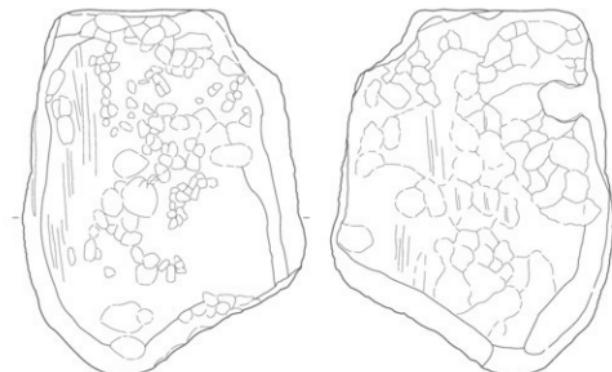


第56図 楩文時代遺物実測図 (1/3)

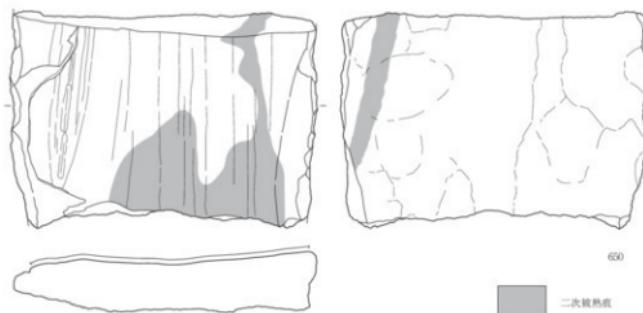
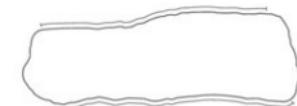
SI400(636・637) SI401(638・639) SI4(640) SB3(641)



第57図 繩文時代遺物実測図 (642~647 1/3, 648 1/6)  
SI400(647) SI4(648) 包含層



649



650

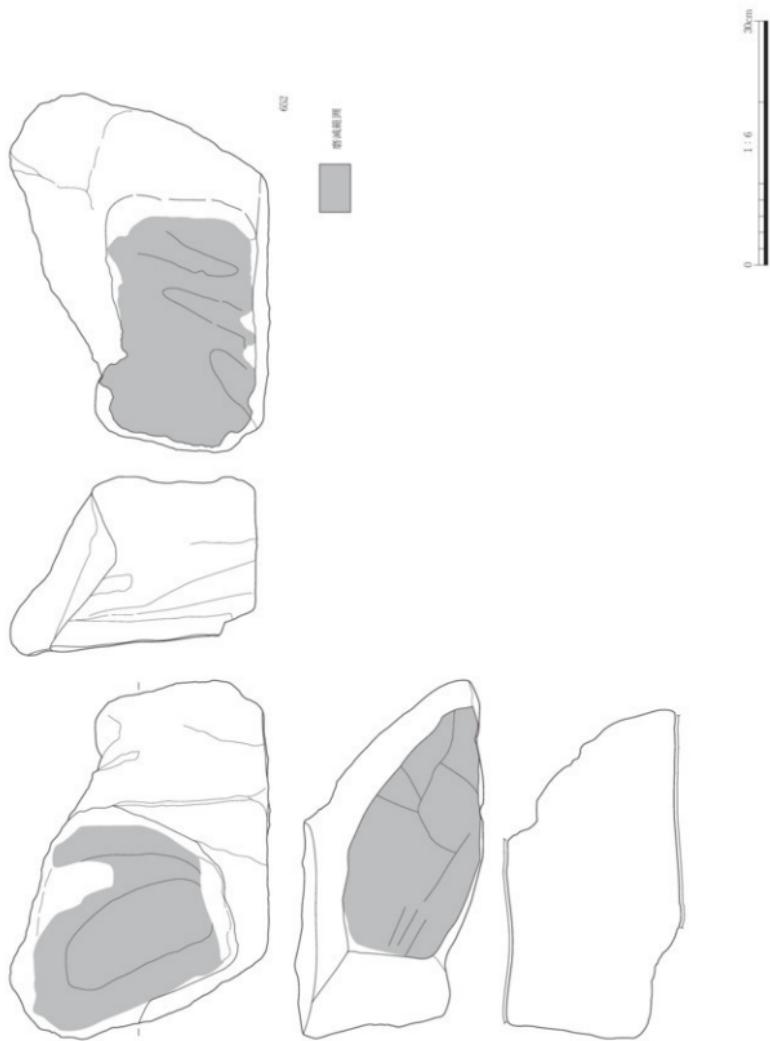
二次被熱痕



第58図 繩文時代遺物実測図 (1/4)  
SI400(649・650)



第59図 繩文時代遺物実測図 (1/4)  
SI400(651)



第60図 繩文時代遺物実測図 (1/6)  
SK397(652)

第11表 石製品一覧

種別	通称	番号	同名	地区	通 勘	出土地点	種類	法 (cm)	長	幅	厚	重	材質	備考
		601	7	C	S820	無	石器	1.0	1.3	1.2	0.8	0.8	砂岩	AMG
		602	7	A		X125Y74_118	石器	1.6	1.1	0.2	0.34	3.7	砂岩	GR
		603	7	C	S820	無	石器	3.3	2.3	1.3	3.13	無	砂岩	AN3
		604	7	C	S820	無	石器	1.8	0.5	0.5	0.38	3.7	砂岩	DAC
		605	7	A	S14	無	石器	2.1	1.8	0.6	1.20	無	砂岩	OB
		606	7	A	S14	無	石器	1.6	1.8	0.5	1.17	無	砂岩	OB
		607	7	D	S8272	X101Y65_118	石器(白色斑状)	2.5	2.0	1.0	3.65	無	白色斑状	GT
		608	7	B		X125Y65_118	石器(白色)	4.1	3.8	1.1	1.62	3.7	砂岩(石英)	JA1
		609	7	C	S1409	X131Y82	石器	3.6	4.6	0.6	5.28	3.7	砂岩	SHS
		610	7	C	S1409	無	石器(白色)	5.8	1.9	0.9	8.55	11	白雲母	SHS
		611	7	C	S1409	無	石器(白色)	7.0	4.0	1.5	13.85	3.7	白色	GT
		612	7	A	S85	無	石器	10.5	6.1	0.6	62.00	11	白雲母	SHS
		613	28	A	S101	X135Y15	石器	5.7	6.7	0.6	10.96	無	石器	SH RA
		614	28	A	S101	X101Y65_1-118	石器	3.3	1.3	1.3	4.52	無	石器	TA-G2
		615	28	A	S805	無	石器	5.7	4.6	1.3	7.24	無	石器	DA7
		616	28	C	S805	無	石器	11.0	5.4	2.3	26.61	11	白雲母	TA-B
		617	28	D	S127Y59_118	石器	12.3	5.1	2.2	21.48	11	白雲母	TA-B	
		618	28	C	S1409	X125Y80_118	石器	14.0	6.3	2.6	43.63	11	白雲母	TA-B
		619	28	C	S1409	無	石器	11.4	5.7	2.4	24.49	11	白雲母	TA-B
		620	28	C	S1409	X132Y82	石器	9.0	5.0	1.5	18.69	11	白雲母	TA-B
		621	28	C	S127Y52	X125Y82_118	石器	14.6	5.5	2.4	40.03	11	白雲母	TA-B
		622	28	A	S101	X111Y29	石器	1.68	1.68	1.68	5.79	無	石器	SH SOB
		623	29	B	S101	X105Y63_118	石器	13.9	5.2	2.9	18.06	無	石器	AN-C
		624	29	B	S101	X101Y65_1-118	石器	13.0	6.0	4.0	36.75	11	白雲母	GDS
		625	29	A	S127Y22_118	石器	10.7	5.7	1.5	16.71	11	白雲母	DA	
		626	29	D	S127Y61_118	石器	11.6	2.6	2.6	32.63	11	白雲母	DO-POR	
		627	29	D	S127Y59_118	石器	14.2	6.9	3.9	32.87	11	白雲母	DA	
		628	29	C	S1409	X125Y75_118	石器	13.4	2.6	2.6	25.66	11	白雲母	DA
		629	29	C	S1409	X125Y75_118	石器	12.2	5.9	3.5	30.11	11	白雲母	DA
		630	29	C	S101Y65_118	石器	1.72	1.72	1.72	10.54	11	白雲母	DO-POR	
		631	29	A	S101	X101Y65_1-118	石器	13.3	11.6	4.6	9.60	無	石器	CON
		632	29	C	S125Y96_118	石器	10.1	8.8	5.4	62.50	7.7	少白雲母	SGV	
		633	29	A	S14	無	石器	11.0	8.3	4.2	50.95	7.7	少白雲母	SAA
		634	29	A	S14	無	石器	10.3	5.3	5.2	51.27	6	少白雲母	AN-C
		635	29	C	S1295	無	石器	12.5	7.3	4.8	67.72	7.7	少白雲母	AN-C
		636	29	C	S1409	747	石器	14.6	8.9	5.2	98.00	7.7	少白雲母	DO-POR
		637	29	C	S1409	無	石器	10.5	9.3	6.7	9.98	6	少白雲母	AN-C
		638	29	C	S101	無	石器	12.5	9.0	5.9	9.60	6	少白雲母	DO
		639	29	C	S101	無	石器	12.5	8.2	5.2	53.88	7.7	少白雲母	DO
		640	29	A	S1A49	無	石器	11.2	10.0	6.3	9.70	7.7	少白雲母	DO-POR
		641	29	C	S1292	無	石器	9.4	8.4	5.2	59.82	7.7	少白雲母	DO
		642	30	D	S127Y61_118	石器	5.6	4.1	2.1	69.94	7.7	少白雲母	SAA	
		643	30	D	S127Y61_118	石器	8.7	4.0	1.8	92.11	7.7	少白雲母	AN-C	
		644	30	A	S127Y63_118	石器	12.2	3.0	2.0	20.91	7.7	少白雲母	SGV	
		645	30	A	S127Y63_118	石器	5.6	5.6	3.68	30.38	7.7	少白雲母	TU	
		646	30	C	S101Y65_118	石器	1.49	1.49	1.49	20.95	7.7	少白雲母	SGV	
		647	30	C	S101	無	石器	12.0	11.5	3.0	50.35	7.7	少白雲母	SAA
		648	30	A	S1A42	無	石器	4.0	30.3	11.3	29.00	7.7	少白雲母	DO
		649	30	C	S101	無	石器	30.0	20.0	6.0	26.00	6	少白雲母	SA
		650	30	C	S101	無	石器	24.5	16.5	4.5	30.00	6	少白雲母	SA
		651	30	C	S101	無	石器	4.0	30.0	15.0	42.00	6	少白雲母	SA
		652	30	C	S1292	無	石器	4.0	30.0	15.0	32.00	6	少白雲母	SA

## 第IV章 近世

### 1 遺構

#### (1) 道路状遺構

3号道路状遺構 (SF3, 第61・62図, 図版1・12)

A地区の南端に位置する。SD1・2を側溝とし、その間が路面として機能していたと考えられる。

側溝であるSD1は、その西側壁面の上端では長さ20.1mを確認した。路面もSD1の西側に沿って形成されていたと考えられるが、近年の農地整備により南側が削平されており、路面を確認することのできた長さは14.1mとなった。この削平により、路面西側のSD2も南側が消失している。

路面幅は2.7～2.8m、側溝中心間の距離は4.1mを測る。埋土は路面直上に5層の黒褐色砂質土が0.1～0.2mの厚みで堆積する。この層はSD1埋土の上面まで覆っている。道路の最終的な廃絶時期に近い段階での堆積土と考えられるが、遺物の包含は無い。この上に1～4層が堆積している。1・2層は旧耕作土 (Ia層)、3・4層は農地整備時の土地変更に伴う層 (Ib層)と考えられる。

路面は南から北へ向かって下がっていく傾斜路である。調査区内で路面が残存している範囲では、水平距離14.1mに対し垂直距離で1.0mの高低差が生じており、その勾配は7.1%<sup>注1</sup>となる。

路面上では、側溝に平行する溝・段差やピットが確認された。路面の東側から順に説明すると、まずSD1西側の0.6～1.2m付近で段差があり、そこから西側は0.05m程高くなる。さらに路面中央付近では深さ0.05m程の不明瞭な溝が検出された。その溝から西側1.0～1.1mで段差があり、さらに0.05m程高くなる。この段差から0.1～0.2m西側にSD2が位置している。また、路面中央の溝とSD1西側の段差沿い、及びSD1の西壁上端沿いでは、円～楕円形のピットが検出された。これらのピットは径0.3m、深さ0.1m程の規模となる。道路軸方向では1.1m、道路横断方向では0.6～0.7mのはば等間隔に並んでいる。これらの埋土は黒褐色砂質シルトで、しまりがなく、路面の凹凸を補修するような性格とは考えにくい。また、路面直上の埋土と同質であり、開口した状態であった溝・ピットが路面と共に埋没したと考えられる。こうした状況から、道路が廃絶する手前の段階では、路面上には溝・段差や規則的に配置されたピットにより、凹凸がある状態であったこととなる。

路面上で堅守された規則的なピット群は、近江俊秀氏の示した波板状凹凸面 (近江1995)でのIV群に相当する。IV群は円形の浅い土坑が一定間隔で並び、平坦な場所で集落に伴うIV-1群と、尾根・丘陵上の遺跡での切り通しとなるようなIV-2群に分けられている。SF3は段丘縁辺の斜面に形成された傾斜路であることから、IV-2群に該当しよう。ピット群は道路廃絶後に路面や側溝と同時に埋没していると考えられることから、道路整備の基礎工事に伴うような性格のものではない。柵や杭列の存在も想定されるが、ピットは浅く、そうした構造物があった可能性は低いと思われる。一方、同じく路面上にある溝・段差も、いくつかの役割が想定される。一つは路面を仕切り、先述のピット群とともに路面の東半分に何らかの機能を持たせていた可能性がある。もう一つは路面中央付近の溝と段差は道路整備段階の幅員を示すもので、後にSD2まで拡幅された可能性もある。こうした推測をすることも出来るが、いずれにしても決定的な根拠はなく、その性格は判然としない。

このSF3を北側へ延長した場合、平成24年度の包蔵地確認調査での試掘トレンチ（以下、H24-T No.で表記）を通過する。そのH24-T9の北端では近世段階と考えられる落ち込みが確認された。その幅は少なくとも2m程度となる。この落ち込み部分は、規模や位置的なことから路面の延長部分

であった可能性が考えられる。また、SF3北端とH24-T9北端の水平距離は16m、SF3北端の路面とH24-T9での落ち込み部分底面の高低差は12mある。その勾配は7.5%となり、SF3での勾配と近い値を示す。

## (2) 溝

### 1号溝 (SD1、第61図、図版12)

SD1はSF3の東側側溝である。幅は2.5~3.0mを測る。壁面は両側ともに階段状を呈し、底面から1~2段の段差がある。底面での幅は0.2~0.5mとなる。深さは東壁面で約1.2~1.6m、路面側となる西壁面では約0.7~0.8mを測る。埋土は6~8層となる。段階的に埋没し、徐々に浅い側溝となり、5層の堆積時にはわずかに浅い溝となっていたと考えられる。

埋土中からは越中瀬戸(701・702)・唐津(703・704)・伊万里・珠洲・繩文土器・打製石斧が出土した。近世段階の遺物が埋没の時期に近いと考えられる。それらは17世紀後半頃の所産と見られることから、SD1の埋没はそれ以降と想定される。SD1が掘削された時期、すなわちSF3の整備時期を明確に示す遺物は無いものの、中世段階の遺物もほとんど無いことから、近世以降である可能性が高い。こうした状況から、SF3が道路として機能していた時期は17世紀前半が中心であったと推測される。

なお、このSD1の続きと考えられる溝が、H24-T12・14で確認された。これらのトレンチでは、削平により路面が確認できないため、その傾斜を知ることは出来ない。そこで、確認された溝の底面での傾斜を参考としたい。H24-T14北端とSD1の南端までの傾斜を第61図下段に示した。それによると水平距離が88m、高低差は6.3mで、勾配は7.2%となり、SF3の路面で確認した勾配とほぼ等しくなる。SD1の北側に続く延長部分で、路面から側溝底面までの深さが一定であったとすれば、勾配7.1%前後の傾斜路がH24-T14付近まで続いていることになる。

H24-T14より北側では、段丘面上に設定した平成25年度のトレンチ（以下、H25-T No.で表記）があるが、道路側溝の続きとなるような溝や近世段階の遺物は無く、こちら側に道路が延伸する可能性は低い。こうした点から、道路延長推定線は段丘面沿いの崖線付近を通る可能性がある。仮にH24-T14からH25-T11・22の西側を通り、H25-T13西側の田面付近に至るとした場合、H24-T14とH25-T13西側田面までの水平距離は106m、その高低差は7.5mであり、勾配は7.1%となる。先に算出したSD1からH24-T14にかけての傾斜と近い数値を示す。H25-T13より北では、現況の道路付近に続くと考えた場合、H25-T13西側の田面付近から下位の段丘面までは水平距離が260.6m、高低差は27.6mを測る。勾配は10.6%で、傾斜はきつくなる。

一方、SD1の南側では平坦な段丘面が広がっており、路面の傾斜は弱くなり、平坦な道が続いていると考えられる。

### 2号溝 (SD2、第61図、図版12)

SD2はSF3の西側側溝である。幅0.3~0.4m、深さ0.12~0.25mを測る。埋土となる9層は黒褐色砂質シルトで、しまりは弱い。路面上で検出されたビットと同色・同質の埋土を基調とする。両者とも土質は5層に類似していることから、9層も同時期に形成されたと考えられる。路面上で確認された段差・溝も5層により埋没しており、路面上の段・溝・ビット群は道路廃絶段階のはば同時期に埋没したと考えられる。出土遺物は無い。

## 2 遺物

調査区全体として近世の遺物は出土量が少ない。調査区が傾斜地にあり、当該期の居住域として土地利用するには適していなかったことが関係すると考えられる。また、縄文時代以降では、中世段階のものがわずかに出土しており、併せて提示しておきたい（第63図、図版7）。

A地区のSD1の出土遺物として越中瀬戸（701・702）、唐津（703・704）がある。701・702は鉄軸皿で、内面に軸止めの段は無い内禿皿である。宮田進一氏のⅢ期（宮田1997）に比定される。703は灰軸の皿、704は白化粧土の刷毛塗りを施した碗となる。共に九州陶磁編年（九州近世陶磁学会2000）のⅢ期に比定される。SD1の出土遺物で提示できるものは小破片で、量も僅かであるが、これらの時期的な様相から、SD1の埋没は少なくとも17世紀後半以降と判断した。

包含層出土の遺物には、青磁（705）・越中瀬戸（706～710）・唐津（711～714）・伊万里（716・717）・その他（715・718～721）がある。705は龍泉窯系青磁の碗である。口縁部の小破片で、上田分類（上田1982）のD類に比定される。706～708は越中瀬戸の灰軸皿である。707に軸止めの段は無く、底部は三角形状の削り出し高台となる。708は軸止めの段があり、見込に印花文が押され、底部は削り込み高台となる。708が宮田編年Ⅱ期、707がⅢ期に相当する。709は鋳軸の擂鉢である。底径外側は回転糸切り未調整で、体部の立ち上がりは緩やかである。710は匣鉢で、底部外側を除き鉄軸が施される。唐津の内、711・712・714は白化粧土による刷毛目文を施しており、九州陶磁編年Ⅲ期以降の所産と考えられる。713は鉄軸の碗で高台脇の削り込みは明瞭で、体部との境には水平な面を作り出す。九州陶磁編年Ⅱ期としておく。伊万里の716は碗、717は蛇の目凹形高台の皿である。後者は九州陶磁編年Ⅳ期の途中、18世紀第2四半期から九州陶磁編年Ⅴ期までの時期幅がある。715は产地不明の擂鉢で、内面と体部外側に鉄軸を施す。内面と高台外縁に重ね焼きの痕が残る。718は陶胎染付の碗である。719は瀬戸美濃の鉢と思われる。見込にトチ痕が残り、高台内に墨書があるが判読は出来ない。720は羽口の先端部で、内径は推定3cmとなる。金属製品として、721の煙管がある。吸口部で、羅字側の断面形は六角形を呈する。

以上の様に、17世紀前半から19世紀代にまで至る近世全般の遺物を確認することが出来た。出土量が少ないとため、近世における土地利用の趨勢を明確にすることは難しいが、17世紀後半頃が僅かに目立つということのみ指摘しておきたい。

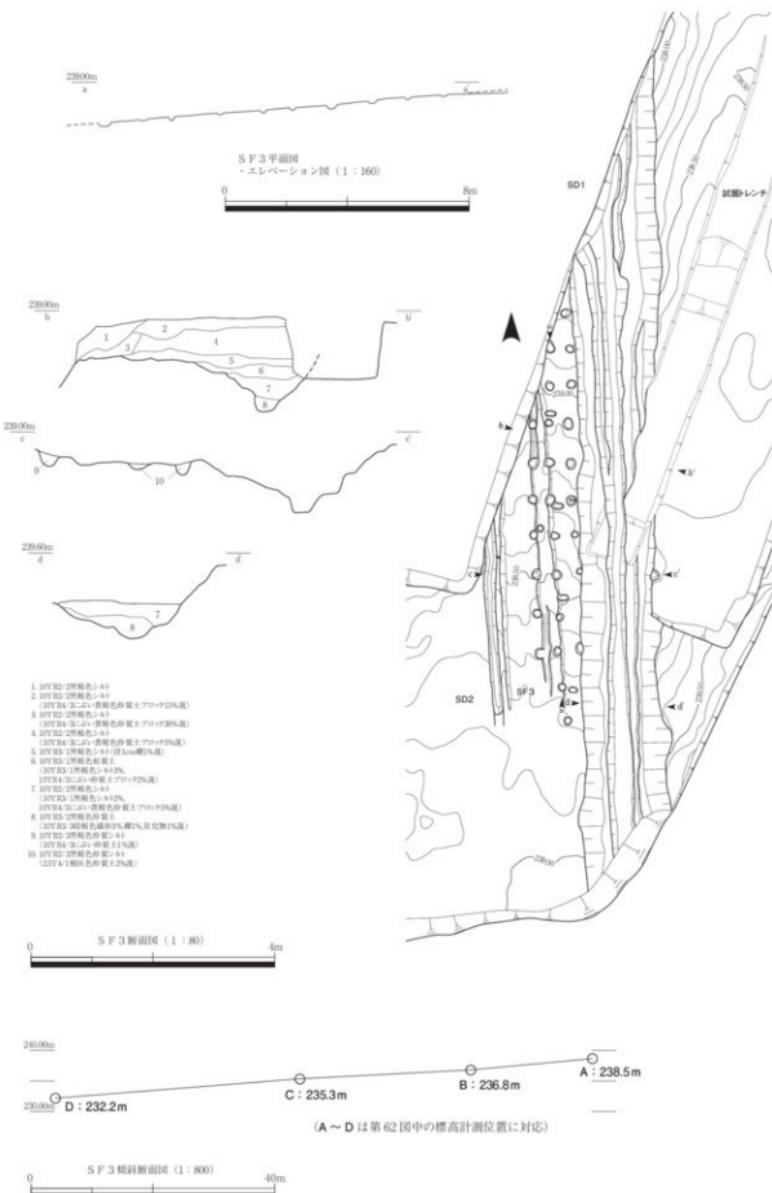
（青山 晃）

## 注

注1 傾斜した道路の勾配については、「%」での表記が一般的である。これは水平距離100mに対して、垂直距離が何m上下動するのかを示す。求め方は、勾配（%） = 垂直距離（m） × 100 / 水平距離（m）となる。今回はこの式で求められた数値の小数点第2位を四捨五入して示している。

## 参考文献

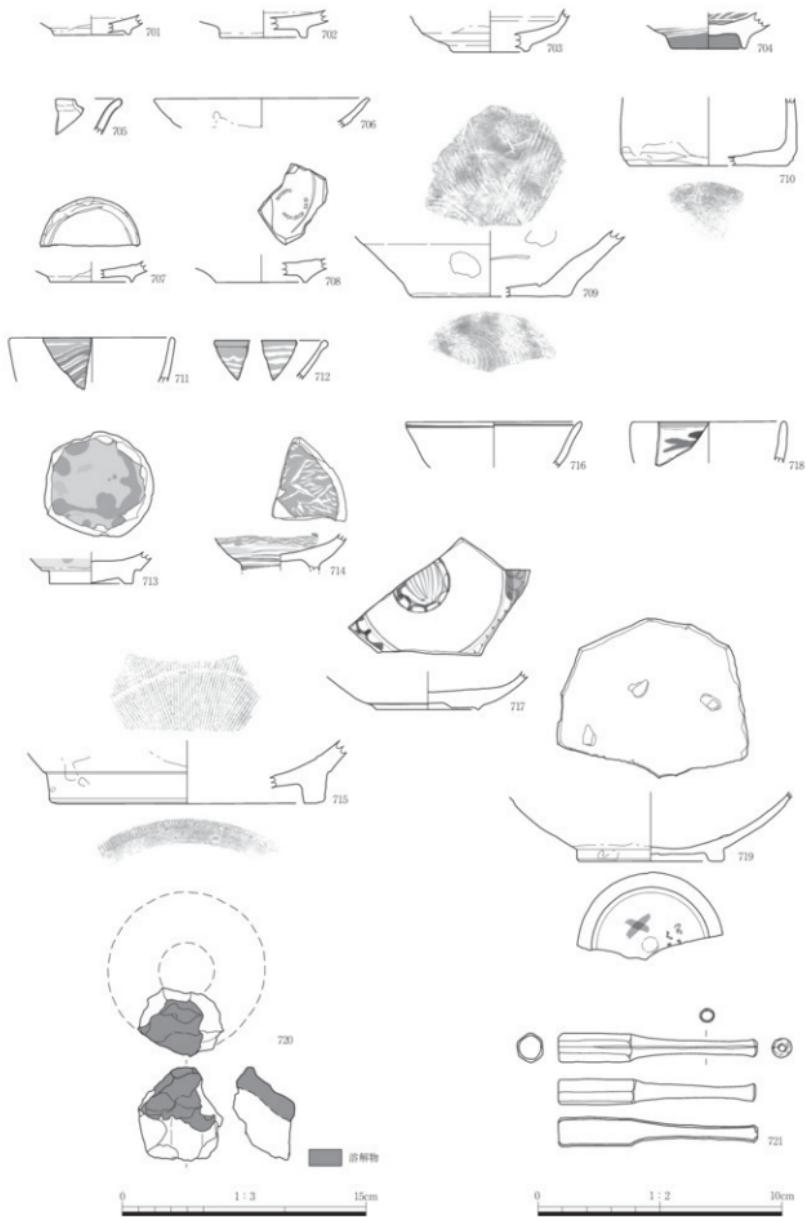
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
- 近江俊秀 1996「道路遺構の構造－波板状凹凸面を中心として－」『古代文化第47巻第4号』（財）古代學教會
- 九州近世陶磁学会 2000「九州陶磁の編年」桂書房
- 宮田進一 1997「越中瀬戸の変遷と分布」「中近世の北陸」桂書房



第61図 近世遺構実測図



第62図 道路状造構SF3の推定延長



第63図 近世遺物実測図 (701~720 1/3, 721 1/2)  
SD1(701~704) 包含層

第12表 陶磁器等一覽

種別 番号	品名 番号	規格 寸法	通積 X.Y	重量 kg	種類	形態	口径 (mm)	重量 (kg)	底径 (mm)	背斜 角度	詳細形態		底号	上色 色系	底色 色系	備考
											底面 形状	側面 形状				
701	A SD1	XSY15 等	底中直口	三			(1.2)	(50)	20%	近鉛 (PC底平-18°前)	578Z6	稍色	57R2/2	偏赤褐色	偏紅色發亮。	
702	A SD1	XSY15 等	底中直口	三			(1.6)	(54)	25%	近鉛 (PC底平-18°前)	578Z7	稍色	57R5/2	灰褐色	偏紅色發亮。	
703	A SD1	XSY14 (160-180)円	直口	三			(2.6)	(48)	10%	近鉛 (160-180)円	10786.2	灰黃褐色	107Y7.1	兩白色		
704	A SD1	XSY15 等	直口	三			(2.7)	(46)	50%	近鉛 (160-180)円	23178.4	12.5-橙色	透明地	明毛口		
705	C	X114793 等	青釉	圓						中腹	上田分離瓶	578Z8.1	灰白色	107Y6.2	オリーブ灰色	
706	A	XSY16 等	底中直口	三			15	(1.8)		洗狀	10786.2	灰黃褐色	107Y8.3	深綠色		
707	B	X107720 等	底中直口	三			(1.3)	51		近鉛 (PC底平-18°前)	578Z8.4	12.5-褐色	107Y7.3	深黃色	見這次人燒痕	
708	A	X32327 等	底中直口	三			(1.5)	56		近鉛 (PC底平-18°前)	72Y78.3	12.5-褐色	107Y6.2	見這次人燒痕	見這次人燒痕文	
709	C	X123780 等	底中直口	三			(4.0)	96		近鉛 (PC底平-18°前)	10787.4	12.5-深褐色	N/A	深色	鈎13.4m12.8m1.9m 鈎9.4m12.8m1.9m 內面垂綠	
710	B	X104765 等	底中直口	三			(4.2)	97		近鉛 (PC底平-18°前)	23173.9	深黃色	107Y8.3	褐色	圓圈二三行有	
63	7						10	(27)		近鉛 (160-180)円	578Z9.1	黑褐色	透明地	明毛口		
711	B	X104765 等	直口	三						近鉛 (160-180)円	10785.4	12.5-黃褐色	透明地	明毛口		
712	B	X104765 等	直口	三						近鉛 (160-180)円	72Y75.4	12.5-褐色	透明地	明毛口		
713	B	X106708 等	直口	三			(1.9)	51		近鉛 (160-180)円	10784.2	12.5-黃褐色	透明地	高行		
714	A	X10716 等	直口	三			(2.3)	(50)		近鉛 (160-180)円	578A/2	灰褐色	透明地	明毛口		
715	B	X30363 等	底中直口	三			(3.8)	169		近鉛 (PC底平-18°前)	72Y76.4	12.5-褐色	107Y4.4	見這次人燒痕	見這次人燒痕	
716	A	X38735 等	伊万里	圓			(10)	(28)		近鉛 (PC第22-24周)	73Y74.1	灰白色	23P94.4	翠綠色		
717	B	X39164 等	伊万里	圓			(2.3)	64		近鉛 (PC第22-24周)	N/A	灰白色	23P94.6	藍白相間		
718	B	X105764 等	底中直口	三			9.2	(25)		近鉛 (PC底平-18°前)	57S.1	灰白色	107GJ.1	褐灰青色		
719	B	X105764 等	底中直口	三			(4.0)	90		近鉛 (PC底平-18°前)	107Y6.3	12.5-黃褐色	透明地	見這次人燒痕	高行青黑色	
720	A	X31329 等	直口	三			96	(57)						漆紋竹紋		

第13表 金屬製品一覽

種別 番号	品名 番号	規格 寸法	通積 X.Y	重量 kg	種類	底面 形状	側面 形状	底号	上色 色系	底色 色系	備考	
63	721	7	A	X11115	圓		圓管(Φ17)		良	10.11	11.00	圓管

# 第V章 自然科学分析

## 1 概要

小糸尾萩野遺跡に暮らした人々の生活を復元することを目的とし、発掘調査で出土した土器、石器、炭化物、種実遺体などを、自然科学の視点から分析した。石器の石材鑑定では使用石材の特徴から他地域との交流、種実遺体同定では周囲の植生や生活環境、土器付着炭化物の脂肪酸分析および放射性炭素年代測定では食生活と年代、土器付着炭化物の放射性炭素年代測定では住居や土坑墓の年代、土器外面の漆塗膜分析では漆塗り技術を解明、復元することができた。(田中道子)

## 2 小糸尾萩野遺跡における石器石材と原産地推定

### (1) はじめに

小糸尾萩野遺跡は富山市南部の神通川右岸の河岸段丘に位置し、富山・岐阜県境から飛騨地方の各地の礫が流れ込む地域にある。

本稿は、小糸尾萩野遺跡出土の石器、石製品の使用石材について、詳細な記載をおこなうことが中心である。石材鑑定では、微視的な岩石鑑定をおこなう目的で、おもに色調、構成粒子の粒度、岩石組織、節理等の多寡、玉髓の充填による珪化の度合、含有物の種類・量、表面の外観、風化の程度などに着目した。

石材の観察・記載には、非破壊方法を用い、実体顕微鏡ニコン SMZ-745T で主に 20 倍～100 倍で検鏡・観察し、写真撮影は、マイクロネット社製スーパーシステム（デジカメ）を使用した（写真は 139～146 頁に掲載）。比重測定は水中に石器を木綿糸でつるすアルキメデス法による。磁性テストは、10cm の糸につるした外形 8mm、厚さ 3mm のリング状の強力なネオジム磁石を石器に近づけ、磁石に引き付けられる力の強さを 4 段階（強い方から 3, 2, 1+, 1-）に区分する。レベル 3（強）は磁石が約 1cm の距離で強く引き付けられて落ちない。レベル 2（中）は磁石が約 5mm の距離でやや強く引き付けられ、自重で落ちる。レベル 1+（弱）は磁石が約 2～3mm の距離で弱く引きつけられ、レベル 1-（極めて弱）は磁石がごくわずかに反応するか、ほとんど反応しない。

帶磁率計は Kappameter KT-6 を使用し、単位は  $\times 10^{-5}$  SI ユニットである（中村 2011b, 2013）。光沢度は堀場製作所グロスチェック IG-331 を使用し、岩石鉱物表面の光沢の度合いを計測した。とくに磨製石斧等の研磨の状況をよく反映している（第 16 表）。なお、石材の細区分については、主に富山県小竹貝塚（中村 2014）でおこなった分類名に従った（第 17 表）。

### (2) 剥片石器の石材

黒曜石、下呂石、無斑晶質安山岩、デイサイト、玉髓、碧玉、珪質頁岩、チャート、緑色凝灰岩などがあるが、点数は少ない。

**黒曜石 OB：** 黒曜石は、黒色、灰色で、透明から半透明である。黒曜石は点数が少ない。

2 点の顕微鏡観察を実施した。黒曜石遺物は実体顕微鏡のステージ上に透明の台の上に乗せ、薄い緑辺部を斜め下方からの透過照明を当てることにより、晶子形態の観察をおこなうことができ、晶子

形態の用語は中村（2008）に従った。写真1・2は極めて透明度が高いもので、わずかに微球体を含むのみである。このように晶子等の不純物をふくまない透明度の高いものは、信州産のうちで鷹山などの和田系と諒訪系の一部に見られる特徴である。写真3・4は微球体が層状に集合するもので、透明感がある。いずれも諒訪系か和田系の黒曜石と推定される。

**下呂石 GE**：岐阜県下呂市湯ヶ峰に分布する湯ヶ峰流紋岩（下呂石）は、黒灰色、緻密・ガラス質で、黒曜石とサスカイトのはば中間的な透明感と質感をもつ。黒灰色で薄いところは透明感がある石材である。風化した面は白く渦る（写真6）が、これは主に斜長石が白渦しているためである。ガラス質で、透過光でみると微小な黒色、細粒板状の黒雲母が見られることが判断基準となる（写真9）。剥離面の肌理は黒曜石よりは粗い。

**無斑品質安山岩 AN**：安山岩はシリカ（二酸化珪素）の含有量が中間的な噴出岩で、日本の火山では最も多く見られる。無斑品質安山岩は溶岩が急冷されてできたもので、黒色で緻密質な岩石である。一般に石基中のガラスの含有量が増加するほど、見かけは黒色、緻密質で、ガラス状の光沢を有するようになり、ガラス質（玻璃質）といえるものになる。

写真10・11は輝石安山岩質の無斑品質安山岩である。流理構造がみられる。中部地方北部では無斑品質安山岩は長野・新潟県境の関田山地、能登半島北部の柳田累層と門前周辺、福井県勝山市報恩寺山、東尋坊などに知られており、富山県下では西部から東部まで帶状に分布する中新世の岩稲累層に多く、東部では一部、黒瀬谷累層の中の安山岩中にも分布する（中村2009, 2011a）。概して輝石や斜長石の微細な斑晶がわずかに含まれる。この分布域の中で大半を占めるのは顯品質の安山岩であり、石器石材となる無斑品質のものは多くはない。

**玉髓 CL**：石英の微細な結晶が、網目（纖維）状に集まった鉱物である。硬度6で、比重は石英とはほとんど変わらず硬い鉱物。透明感があり、乳白色のものが一般的であるが、不純物が入って赤や緑などの色がついたものも多い。シリカ（二酸化珪素）に富んだ火成岩や岩脈に伴って、二次的に火山岩の空洞中に热水が浸み込んで（热水作用）、内部に充填して結晶が生じる。色調から6タイプに分類される中で、CL4がみられる。

CL4（写真14～16）は暗黄褐色系で、透明感をもつ。低温の热水起源か堆積岩起源と推定される。新第三紀の地層中のものと推定され、産地は大規模でないが富山県の医王山累層を中心に、一部、岩稲累層も含み富山県西部にみられ、南砺市周辺が最大の産地である。新潟県の相川層、津川層、長野県の内村層、また能登半島などの新第三紀中新世の地層中にもみられる。

**碧玉（鉄石英）JA**：玉髓が酸化鉄などの不純物により、色がついたものを碧玉という。貝殻状の割れ口を呈し、不透明で、赤、褐、黄褐、黒などの多様な色を示す。色調によって赤玉、黄玉、青玉などと呼ばれることがある。黒鉱鉄床、火成岩の接触珪化帯などに塊状または細脈状をなして産する热水性の鉱物。新第三紀中新世の初期～中期の火成活動にしばしば見られる。

玉髓・碧玉（鉄石英）は、筆者の石材調査によれば、南砺市の小矢部川、同支流の大谷川、糸谷川、打尾川、山田川、千谷川などでわずかに礫がみられる。おもに医王山累層の分布域とその周辺の热水活動が盛んであったと推定される地域内に、岩石の割れ目や空洞に、脈状、玉状に産すると推定される。なお、この分布域には、JA1～JA4が多く、横山真駒石とされる石材に類似するものは産しない。

本遺跡では、色調から6タイプに分類される中で、JA1とJA4がみられる。JA1は赤色タイプ（赤玉）である（写真17・18）。JA4は黄褐色タイプ（黄玉）である（写真19・20）。とくに19には0.1～0.2mmほどの魚卵状の構造が多くみられるが、これはコロフォーム組織といい、低温热水中でゲル状物質

が沈殿した初期の形状を残したものである。

**頁岩 SH：**頁岩は珪化の度合いと色調および凝灰質の有無により、6分類される。SH3は光沢のない暗褐色系の珪質頁岩である。珪化は弱い。SH4は灰褐色系の珪質頁岩で、光沢が少ない。写真21は放散虫化石を含む。

**チャート CH：**チャートはシリカ（二酸化珪素）が90%以上を占めていて、細粒・均質で、緻密で硬い岩石である。微細な石英が集まっているため、剥片石器に適した貝殻状断口を示す。CH2灰色系チャート（写真25・26）には、0.1mm前後の円形の斑点で、内部は透明の玉髄で充填された放散虫化石が多く含まれている。チャートにはしばしば節理や石英脈が多く入る（写真26）ために、剥離面が平滑でなく、破損することが多い。

富山県域にはチャートは分布しないが、神通川上流の岐阜県飛騨地方に美濃帯の三疊系-ジュラ系が広く分布しているので、その中にチャートが多く含まれる場所がある。CH2とCH1が多い。CH1は長野県の奈川赤褐色チャートに一致する石材で、乗鞍山をはさんだ西側の岐阜県丹生川と朝日川の間に分布する美濃帯に由来するものと考えられる。CH2も同様で、チャートはみな神通川の礫を採集したものと推定される。また、新第三紀の輪原累層などにも礫として含まれる。

**緑色凝灰岩 GT：**写真27～29は酸性的細粒火山灰からなる緑色凝灰岩である。石英、斜長石、軽石を多く含む。写真29は火山ガラスが集中した部分である。

### （3）石斧の石材記載

磨製石斧32点のうち、多いものから透閃石岩18点、蛇紋岩6点、輝綠岩（粗粒玄武岩）3点、角閃岩2点、緑色凝灰岩、結晶片岩、濃飛流紋岩が各1点である。このほか、打製石斧には、輝綠岩、閃綠岩、閃錫ひん岩、凝灰岩、礫岩、片麻岩がある。

**透閃石岩 TR：**透閃石岩は透明～灰色の透閃石（トレモナイト）と緑色の緑閃石（アクチノライト）の結晶の集合体であり、比重は2.9～3.0前後で、硬度5～6と硬く、衝撃に対しては極めて丈夫な岩石である。透閃石、緑閃石はともにカルシウム角閃石の一種である。透閃石のMgの一部がFeに置き換わることで緑閃石になり、両者は固溶体をなしており、色調だけでは判断できない。

蛇紋岩との見分け方は、磁石に引きつけられる力が極めて弱いこと、比重が大きいことでは分類でき、実体顕微鏡で結晶を確認することがもとめられる。また、透閃石岩の中に部分的に角閃石（岩）や蛇紋石（岩）が含まれるものもみられる。透閃石岩は色調と透明感、結晶の大きさなどの特徴により8分類される（中村2011b）。磨製石斧の32点のうち、透閃石岩のA1（写真30・31）が1点、B（写真32～41）が12点、C（写真42～45）が2点、D2（写真46・47）が1点、不明2点の計18点であった。A1は透明感のある緑・暗灰色系の軟玉タイプのもので、写真30は細粒のものである。Bは結晶が大きく、暗色と白色系の両者が混合したもので、暗色系が優先するタイプである。CもBと同様で、白色系が優先するものである。写真42は緑閃石～透閃石の針状結晶がよく観察できる。D2は透明感のない細粒型で、白色系のものである。写真46はきわめて細粒緻密なものである。不明2点にはやや磁性があり、若干、蛇紋石が含まれている。

透閃石岩は姫川、青海川の流域の長野県白馬村から新潟県糸魚川市にかけての青海-蓮華地域の蛇紋岩岩体の中に含まれるものである。膨大な量の蛇紋岩の岩体の中にごく少量の透閃石岩が含まれる状態だと思われ、透閃石岩はきわめて限られた存在である。

**蛇紋岩 SE：**暗緑色、黄緑色、褐色の蛇紋石が集まった岩石。蛇紋石は硬度2.5～3.5、比重が2.4～2.6

と、透閃石と比べるといずれも小さく、蛇紋岩は衝撃に対してそれほど強固ではなく、表面には暗色のすじが入るものが多い。暗色部は磁鉄鉱の結晶が集合しており、そのために蛇紋岩は磁石に極めて強く引きつけられ、帶磁率も大きい。

蛇紋岩6点のうち、II Aが2点、II Bが1点、II Cが2点、II Dが1点である。写真50・51、54・55、58には、黒色粒状の磁鉄鉱が多く含まれている。蛇紋岩II Dと透閃石岩の不明2点は、一般的な蛇紋岩より比重が高く、帶磁率はやや低いものである。これらは比重が小さく、柔らかく、崩れやすい本来の蛇紋岩ではなく、多少なりとも热水との交代作用を被って硬質になる透閃石岩化の過程にある岩石と推定される。

蛇紋岩は北陸地方では、飛驒外縁帯とされる地質構造帯に伴っており、長野－新潟－富山県境部の青海－蓮華地域が、面積・ボリュームともに最大である。青海－蓮華地域は、姫川、青海川の流域の長野県白馬村から新潟県糸魚川市にかけての超苦鉄質岩類の中に含まれ、広い分布を示す。主な蛇紋岩メランジ帯は、①姫川本流ぞいの姫川渓谷地域、②青海地域、③大所川上流～朝日岳地域、④八方尾根北方地域に見られる。

**角閃岩 AM**：黒色の長柱状の角閃石が集合した岩石。比重29～31前後。透閃石岩と同様に、硬度5.5～6と硬く、衝撃に対しては極めて丈夫な岩石である。角閃岩は苦鉄質変成岩類に含まれるもので、青海－蓮華地域に産する。詳細な産地は不明である。写真64・66は角閃石の黒色・針状結晶が多くみられる。

**輝綠岩（粗粒玄武岩）DIA**：写真68・70・72は黒色の普通輝石か角閃石と思われる黒色の鉱物の中に斜長石の長柱状（拍子木状）の自形結晶が多数、多方向に入り込むオフィティック組織がみられることが特徴である。玄武岩質の半深成岩であり、脈岩として産することが多い。粗粒玄武岩（ドレライト）ともよばれる。

**閃綠岩 DIO**：写真74・75は、角閃石、斜長石などの等粒状の斑晶があつまる。

**閃綠斑岩 DIO-POR**：写真76・77は閃綠岩より角閃石などの有色鉱物が少ない半深成岩である。

**濃飛流紋岩 NOH**：濃飛流紋岩は飛驒～東濃地方を中心に分布する中生代白亜紀～新生代古第三紀の酸性火山岩類の総称である。主要な岩相は、火碎流などによる高温の火山灰や軽石などの火碎物が熱で溶けて固結した溶結凝灰岩である。写真78は軽石などが引き伸ばされて断面が細長いレンズ状になるユータキシティック組織だと思われる。石英が含まれる。

**緑色凝灰岩 GT**：写真80・81は斜長石、軽石、細粒の磁鉄鉱を多く含み、有色鉱物はあまり多くない。

**凝灰岩 TU**：写真82・83は、碎屑性の組織がみられる凝灰岩である。

**礫岩 CON**：写真84～86は礫岩である。円磨された石英や長石類を含む。固結がよく、濃飛流紋岩類に含まれるもの可能性がある。

**塩基性結晶片岩 SCH**：写真87・88は、塩基性結晶片岩と思われる。

**片麻岩 GNS**：写真89・90は、角閃石、斜長石、石英などがよくめだつ片麻岩である。

#### （4）装身具・石製品の石材記載

琥珀と凝灰岩が各1点ある。

**琥珀 AMB**：写真93～96は、主に針葉樹の樹脂が化石化した琥珀である。極暗赤褐色で、樹脂光沢をもち、風化によりひびが入っている。小竹貝塚出土の垂飾（4059）と色調、外観は類似する。

**凝灰岩 TU**：写真97・98は球形の石英、黒雲母のやや大きな結晶および角閃石を含む灰色でダイサイ

ト質の凝灰岩である。岐阜県飛騨市宮川のいわゆる塩谷石である可能性があるが、溶結組織は未確認である。

### (5) 碳石器の石材記載

安山岩（顕晶質）、閃綠岩、花こう閃綠岩、凝灰岩、砂岩、マイロナイトが各1点ある。

顕晶質安山岩 AN-C：緻密な無斑晶質に対して数mm以上の斑晶がめだつ顕晶質の、通常の安山岩が1点ある。写真99・100は、灰色タイプで、輝石類を含む。

閃綠岩 DIO：安山岩質(中性)の深成岩で、写真101・102は角閃石、斜長石などの大きな結晶からなる。

花こう閃綠岩 GR-DIO：閃綠岩と花こう岩の中間的な色調で、角閃石、黒雲母を含み、石英、長石類が多い。

アレナイト質砂岩 SA-A：写真105・106は砂粒子が主体で粘土分が少ないアレナイト質砂岩である。長石と石英がほぼ同量の、長石質アレナイトである。アレナイト質砂岩はとくに磨石に多く用いられる。

凝灰岩 TU：写真107・108は細粒の酸性凝灰岩である。有色鉱物は少ない。

マイロナイト MYL：花こう岩に似ているが、弱い片理がみられる。

### (6) 磨製石斧の石材の特徴

小糸尾萩野遺跡（縄文中期）の石器で特筆されるのは、総点数が多くない中で磨製石斧の占める割合が大きいことである。磨製石斧の報告例が多い遺跡で、厳密な石材鑑定がされた小竹貝塚（縄文前期）、平岡遺跡（縄文前期）、境A遺跡（縄文中～晚期）の石材組成と比較し、石斧石材について考察する（第14表）。

いずれの遺跡でも透閃石岩が主体となり、蛇紋岩が次いで多いが、小竹貝塚は蛇紋岩より角閃岩が多く占める。これ以外の石材は補完的な存在でそれぞれおおむね5%以下である。しかし、このような傾向の中で小糸尾萩野遺跡では、輝綠岩（粗粒玄武岩）が9.7%と高率であり、さらに打製石斧にも複数含まれていることは特筆できる点である。富山県内の他遺跡でほとんど使用されない輝綠岩が多いことは、この石材が小糸尾萩野遺跡に近い産地のものであることを示唆している。

次に磨製石斧の石材として主体的な存在である透閃石岩と蛇紋岩の細分グループの構成割合を検討する（第15表）。小糸尾萩野遺跡の透閃石岩と蛇紋岩は、総数では富山県内の遺跡と同様な傾向を示すが、透閃石岩の中でBタイプが50%と極めて片寄った組成である。A1、D2などの細粒のタイプが少なく、粗粒・混合型のBが多いことは、際立った特徴である。

富山県下の遺跡における縄文時代磨製石斧に使われる透閃石岩、蛇紋岩は、ともに新潟・富山県境域の青海～蓮華地域産の石材であると考えてきた（中村2014）が、再考を要する出土例になると思われる。土谷（2007、2013）は、北陸～近畿に分布する「蛇紋岩製石斧」の石材の中に複数産地のものが含まれることを論じている。この論考であつかわれている「石材」の記述が難解で、筆者の細分グループとの比較はできないでいる。この当否は別としても、土谷氏が論じているように複数産地の透閃石岩、蛇紋岩の存在を検討する必要がある。

北陸地方では、蛇紋岩は飛騨外縁帯に伴っており、長野～新潟～富山県境部の青海～蓮華地域のほか、小規模であるが、岐阜県高山市上宝町蒲田地域、高山市清見町樋谷地域、福井県大野市伊勢地域に小規模岩体が分布する。また、福井県大飯地域には、夜久野塩基性岩類の中に蛇紋岩体が分布する。

小糸尾萩野遺跡は富山・岐阜県境に近く、上宝・蒲田地域は神通川上流に位置することから、飛騨地方の透閃石岩がもたらされている可能性がある。本遺跡の透閃石岩Bタイプに類似する石材が飛騨地方の縄文時代遺跡で使用されているかどうか、上宝地区において自然界に小糸尾萩野遺跡の石器石材に近い透閃石岩が存在するかどうか、今後検討することが求められる。

#### (7) 小糸尾萩野遺跡の石材環境

小糸尾萩野遺跡で使用された石器石材は、多くの地域から搬入されている。大きくみると、在地系、新潟・富山県境域、飛騨系、信州系、新潟系、および遠来の琥珀である（第64図）。

在地系としては、富山県内の岩稲累層と県東部では一部、黒瀬谷累層中に含まれる無斑晶質安山岩、県西部の南砺市付近に多い玉髓・碧玉などがあげられる。顯晶質安山岩は在地のものと思われる。また、礫石器石材の閃綠岩、花こう閃綠岩、凝灰岩、マイロナイトなどは、原産地が岐阜県内のものもあると思われるが、主として神通川の河川礫として供給されたものと推定される。

新潟・富山県境域の石材は、石斧石材の透閃石岩、蛇紋岩、角閃岩である。飛騨系には、下呂市湯ヶ峰産の下呂石、美濃帶のチャート、濃飛流紋岩類、塩谷石などである。チャートと濃飛流紋岩は、神通川に流下した河川礫が採集された可能性がある。さらに透閃石岩Bは神通川上流の飛騨産のものが多く含まれる可能性がある。信州系には、和田系・諏訪系と推定される黒曜石がある。新潟系は、珪質頁岩である。新潟県の中・北越産のものと推定される。

遠來のものとしては、琥珀1点がある。外観からは小竹貝塚の石材に近似しており、色調からは岐阜県瑞浪市（新生代中新世）のものは排除でき、岩手県久慈市、福島県いわき市、千葉県銚子市（いずれも中生代白亜紀）などのいずれかのものと推定される。

なお、石斧石材に含まれる輝綠岩（粗粒玄武岩）の産地は不明である。

（明治大学黒曜石研究センター 中村由克）

#### 文献

- 土谷恭夫 2007 「磨製石斧の供給」『縄文時代の考古学6 ものづくり』232-239. 同成社  
 土谷恭夫 2013 「石斧流通試論」『立命館大学考古学論集』VI, 41-52.  
 中村由克 2008 「上ノ原遺跡の石器石材とその原産地・採集地の推定」『上ノ原遺跡（第5次・県道地点）』信濃町教育委員会, 199-231: 461-497 (国版).  
 中村由克 2009 「日本海沿岸・富山地域における石器石材環境1」『日本第四紀学会講演要旨集』39, 140-141.  
 中村由克 a 2011 「旧石器時代北陸の石材環境」『考古学ジャーナル』610号, 7-10.  
 中村由克 b 2011 「旧石器時代における石斧の石材鑑定」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』19, 31-54.  
 中村由克 2013 「富山県境A遺跡における縄文時代磨製石斧の石材利用」『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』21号, 9-28.  
 中村由克 2014 「石材とその原産地の推定」『小竹貝塚発掘報告（第2分冊）』富山県文化振興財团, 43-72.  
 中村由克 2015 「石材とその原産地推定」『平岡遺跡発掘報告』富山県文化振興財团, 277-296.

このほか、関係範囲の地質調査所発行の5万分の1地質図幅、20万分の1地質図幅を参考にした。

第14表 磨製石斧の石材内訳

	透閃石岩	蛇紋岩	輝綠岩	角閃岩	緑色凝灰岩	緑色岩	闊灰岩	閃綠岩	ひん岩	その他	总数
	TR	SE	DIA	AM	GT	GRS	TU			OR	
小糸尾萩野	18	6	3	2	1					2	32 点
	58.1	19.4	9.7	6.5	32					65	%
小竹貝塚	64	18	1	38		7	4		1	7	140 点
	45.7	12.9	0.7	27.1		50	29		0.7	5.0	%
平岡	78	21	1	2		4	2	2			110 点
	70.9	19.1	0.9	1.8		36	18	18			%
境A 大型品	33	12		1				1	1	1	32 点
	63.5	23.1		1.9				1.9	1.9	1.9	58 %
境A 小型品	69	2		2				1		4	29 点
	87.3	38		2.5				13		5.1	%

第15表 磨製石斧の石材 透閃石岩－蛇紋岩の内訳

	A1	A2	B	B0	C	CO	D1	D2	不明	透閃石岩	IA	IB	IC	ID	不明	蛇紋岩	総合計
小糸尾萩野 縄文中期	1		12		2			1	2	18	2	1	2	1		6	24 点
	42		50.0		8.3			42	8.3	75	8.3	42	8.3	4.2		25	%
小竹貝塚 縄文前期	45	3	7		4			1	4	64	3	4	5	3	3	18	82 点
	54.8	37	85		4.9			12	49	78.0	37	49	61	37	37	22.0	%
平岡 縄文前期	15	16	5		15	1		23	3	78	6	5	5	5		21	99 点
	19.2	16.2	5.1		15.2	1.0		23.2	3.0	78.8	6.1	5.1	5.1	5.1		21.2	%
境A 大型品 縄文中～晚期	8		9	2	11	2		1		33	5	1	1	5		12	45 点
	17.8		20.0	4.4	24.4	4.4		22		73.3	11.1	22	22	11.1		26.7	%
境A 小型品 縄文中～晚期	13	16	4		8	10	4	14		69	3					3	72 点
	18.1	22.2	5.6		11.1	13.9	5.6	19.4		95.8	4.2					4.2	%



第64図 小糸尾萩野遺跡の石器石材環境

第16表 小糸尾萩野遺跡出土の石器・石製品石材の属性一覧

No.	台帳番号	遺物番号	記号	石材名	色調	マンセル表示	比重	帶磁率	磁石テスト	光沢度	備考
1	130090	605	OB	黒曜石	透明	—	—	—	—	1-	
2	130091	606	OB	黒曜石	透明～暗灰色	—	—	—	—	1+	
3	130073	602	GB	下呂石	灰色	N4-0	—	—	—	1+-2	
4	140102	609	GE	下呂石	灰色	N4-0	—	—	—	2	
5	140104	603	AN-3	無機晶質安山岩	灰色	10Y5/1	—	—	—	3-2	
6	140125	604	DAC	デイサホ	灰色	N5-0	—	—	—	2	無機晶質
7	140116	—	CL-4	玉髓	にじみ・黄褐色	10YR6-3	—	—	—	6	1-
8	140012	608	JA-1	碧玉	暗赤灰色	10R3/1	—	—	—	3	1-
9	140135	—	JA-4	碧玉	褐色	10YR4/4	—	—	—	4	1-
10	140143	610	SH-S	珪質頁岩	灰黄色	25Y7/2	—	—	—	5	1-
11	130083	612	SH-S	珪質頁岩	暗赤黄色	25Y5/2	—	—	—	10	1-
12	140115	—	CH-2	チャート	暗灰色	10GY5/1	—	—	—	7	1-
13	140142	611	GT	緑色巖灰岩	明るい緑色	5GY7/2	—	—	—	10	1-
14	140118	—	TR-A1	透閃石岩	青灰色	50G5/1	298	23	1+	3	受熱
15	140103	616	TR-B	透閃石岩	明るい緑色	5GY7/1	291	45	1+	2	
16	140106	621	TR-B	透閃石岩	緑色	75GY5/1	296	46	1+	1	受熱
17	140111	620	TR-B	透閃石岩	灰白色	25Y7/5	291	25	1+	5	
18	140120	—	TR-B	透閃石岩	オリーブ色	5GY6.5/1	300	15	1+	4	
19	140126	619	TR-B	透閃石岩	にじみ・黄色	25Y6/3	285	43	1+	2	
20	140015	—	TR-C	透閃石岩	明るい灰色	10GY7/1	282	23	1+	1	
21	140123	—	TR-C	透閃石岩	明るい灰色	10G7/1	277	19	1+	1	
22	140005	614	TR-D2	透閃石岩	灰白色	25GY8/1	294	12	1-	4	
23	140308	—	SE-EA	蛇紋岩	灰白色	10Y7/1	241	2185	3	1	
24	130085	613	SE-EA	蛇紋岩	青灰色	10BG5/1	248	1140	3	2	
25	130082	622	SE-EB	蛇紋岩	灰色	5Y4/1	272	1940	3	3	
26	140316	—	SE-EC	蛇紋岩	にじみ・黄褐色	10YR6/4	257	421	3	2	
27	140319	—	SE-EC	蛇紋岩	灰色	10Y5/1	248	271	2	2	
28	130081	—	SE-ED	蛇紋岩	緑灰色	7.5GY5.5/1	274	592	2	8	
29	130071	—	TR-SE	透閃石岩(蛇紋石含む)	暗灰色	10GY5/1	286	292	2	6	
30	140013	—	TR-SE	透閃石岩(蛇紋石含む)	緑灰色	7.5GY6/1	291	136	2	4	
31	140309	—	AM	角閃岩	暗赤黄色	23Y5/2	286	67	1+	2	
32	140146	—	AM	角閃岩	黃灰色	25Y4/1	300	8	1+	2	
33	140109	—	DIA	輝綠岩(粗粒玄武岩)	明るい緑色	25GY7/1	269	29	1+	2	受熱
34	130074	—	DIA	輝綠岩(粗粒玄武岩)	灰色	5Y6/1	280	40	1+	1	
35	140108	628	DIA	輝綠岩(粗粒玄武岩)	灰色	5Y6.5/1	254	2760	3	1	
36	140313	—	DIO	閃綠岩	灰オリーブ色	5Y5.5/2	280	30	1+	1	
37	140312	626	DIO-POR	閃綠斑岩	灰オリーブ色	5Y6/2	—	1200	—	3	
38	140112	—	NOH	透飛来奴岩	暗灰黄色	23Y4.5/2	—	53	2		
39	140149	—	GT	緑色巖灰岩	オリーブ色	25GY6/1	240	172	3	3	
40	130076	—	TU	凝灰岩	灰色	5Y6/1	255	17	1-	1	
41	130086	631	CON	襯岩	灰白色	25Y7/1	—	8	1-		
42	140131	—	CON	襯岩	灰オリーブ色	5Y5.5/2	—	7	1-		
43	130072	—	SCH	堆積性結晶片岩	青灰色	10BY6/1	271	18	1-	1-	
44	140004	624	GNS	片麻岩	オリーブ色	5GY5/1	289	752	3	1	
45	130084	615	DIA?	輝綠岩?	黃灰色	23Y5/3	261	11	1+	1	
46	140144	601	AMB	珊瑚	珊瑚赤褐色	7.5R2/3	—	1	1-		
47	130077	645	TU	凝灰岩	暗黄色	25Y6/2	—	44	1+		
48	130088	634	AN-C	珪晶質安山岩	黃灰色	23Y6/1	—	1060	3		
49	140128	638	DIO	閃綠岩	灰白色	25Y8/1	—	1140	3		
50	140122	—	GR-DIO	花こう岩緑岩	灰白色	25Y8/2	—	1480	3		
51	140004	644	SA-A	アラバイト矽岩	にじみ・黄色	25Y6/4	—	1	1-		
52	140002	—	TU-acid	酸性巖灰岩	灰白色	25Y8/1	—	5	1-		
53	140130	—	MYL	マイナード	灰白色	25Y7.5/1	—	14	1-		

第17表 石材の分類と記載 (『平岡進路発掘調査報告』P286から転載・一部改変)

中村由克(2014)「小竹貝殻」による

無斑品質安山岩	
AN1	黒色、微細質タイプ。0.5mm以上の斜長石をわずかにふくしまれに微細な輝石を含む。基質は黒色、均質で微晶質と思われる。
AN2	灰黒色タイプ、やや粗粒で、大きいもので21mmの斜長石や輝石を少し含む。微晶質と思われる。
AN3	灰黒色タイプ、やや粗粒で、大きいもので11mmの斜長石や角閃石、輝石を少し含む。微晶質と思われる。
AN4	灰黒色タイプ、風化で進行するもので粗粒。微晶質と思われる。
AN5	まだらタイプ、灰黒色でやや粗粒。やや大きめの斜長石が見られる。基質は粗粒、洞隙面の肌はやや粗い。
AN6	粗灰色タイプ、灰黒色で斜長石輝石をわずかにふくむ。洞隙面の肌はやや粗い。
AN7	ガラス質タイプ、黒色、灰色、灰黒色で、基質はややガラス質と思われる。微細な斜長石輝石がわずかにふくまる。
〔灰王山系流紋岩群〕	
流紋岩 RH	流紋岩。RHT場灰黒色～明灰色、露黃褐色、暗灰褐色など色調が多彩。石英、斜長石などの結晶がわずかに含まれ、基質はガラス質、基質が粒度の大きいものは微晶質と思われる。
露凝灰岩 WT	露凝灰岩。WT灰黒色、明灰褐色で模様が見られる流紋岩質のもの、白色、細粒なものでもよく見ると部分的に網目状レインズ状の透明部(ガラス)が観察できるものがある。露凝灰岩との見分けが難いものが多い。
露凝灰岩 TU	露凝灰岩。TU灰黒色、明灰色、灰黒色で斜長石のガラスが集まつた露凝岩質のものが多い。やや大きめの石英や斜長石の結晶が含まれることがある。洞隙面の肌は比較的細かいものからや粗いものがある。露凝岩、露凝灰岩との見分けが特に悩むものもある。
〔玉鶴〕	
CL1	透明タイプ、やや褐色を帯びた灰黒色で、すこし褐色があり、完全な透明ものではない。洞隙面の肌は細かい。
CL2	灰色～ビーグルタイプ、透明感はない(少なし)。洞隙面の肌は細かいがCL1よりはやや粗い。
CL3	明褐色タイプ、透明感あり、明褐色の部分と黄褐色～透明な部分が入り混じる。コロフォーム組織が認められ、透明部の透明感は強い。洞隙面の肌は細かい。
CL4	短柱状褐色タイプ(明透感あり)、玉鶴(男精子岩洞見)などもので、短柱状褐色部分が多く、褐色の部分と黄褐色の部分との境線などの薄いところは、対照的に透けて見える(らう)。透明感がある。短柱状褐色部分は隕物質粒子(主に石英)が多く集まつて色調が濃くなっているように見える。黒、灰色の隕物質粒子と思われる。洞隙面の肌は細かいがCL2よりはやや粗い。
CL5	青褐色～褐色タイプ(透明感ない)。透明部分の中に灰褐色の微細な粒子(主にコロフォーム組織)が認められ、洞隙面の肌は細かい。約 3mm程度の円形の構造を見せる。部分的に短柱状褐色部分を含むものがある。
CL6	白色タイプ、透明感ない。微細な不明瞭で細長い橢円形や卵形の透明部が含まれ、白色部は粗粒均質で、洞隙面の肌は細かく透明感はない。
〔碧玉〕	
JA1	赤色タイプ(赤玉)、赤い赤褐色部分と明灰色～黄褐色部分が混じる。赤褐色部分には不透明感がない。コロフォーム組織が認められ、洞隙面の肌はやや粗い。
JA2	暗褐色タイプ(赤玉)、赤い赤褐色部分と明灰色部分、黒褐色部分が入り混じる。赤褐色部分には不透明感がない。コロフォーム組織が認められ、洞隙面の肌は細かい。
JA3	赤玉～黄色タイプ(赤玉・黄玉)、赤い赤褐色部分と黄褐色部分が混じる。不透明感がない。コロフォーム組織が認められ、洞隙面の肌はやや粗い。後から光埴した複数部分があり、玉鶴(玉)よりも光埴される。
JA4	黄色タイプ(黄玉)、黄い黄褐色部分と赤玉、一部に明黄色色部を含む。亜鉛ができたところを後から透明玉鶴が光埴している。洞隙面の肌はやや粗い。
JA5	緑灰色タイプ、灰黒色で、洞隙面の肌は粗い。
JA6	その他のタイプ。黒褐色で、洞隙面の肌はやや細かい。粗い肌の灰白色部分を含む。
〔珪質頁岩〕	
SH2	暗褐色系は質粗質頁岩、光沢なし。暗褐色の頁岩で、輝屈光作用を受けておりやや弱い輝屈光光沢がみられる。洞隙面の肌は比較的細かく、微細な褐色に見える鏡点の一部は放散状の微細化の空洞であり、明灰褐色の隕物質が充填しているものもある。
SH3	暗褐色系は質粗質頁岩、光沢なし。暗褐色の頁岩で、輝屈光作用を受けており、光沢は少なし。洞隙面の肌はやや細かく、微細な褐色に見える鏡点の一部は放散状の空洞であり、内部は光沢はない。明灰褐色を含むものは火成岩を含んでいためだと想われる。
SH4	暗褐色系質粗質頁岩、光沢なし。暗褐色の頁岩で、輝屈光作用を受けており、光沢は少なし。洞隙面の肌は比較的細かく、微細な褐色に見える鏡点の多くは放散状、有孔虫等の微細化の空洞であり、主張が充填しているものもある。明灰褐色を含むものは多少とも火成岩を含んでいためだと想われる。
〔頁岩・凝灰質頁岩〕	
SH1	黒色頁岩、灰黑色の頁岩で、光沢はない。洞隙面の肌はやや粗く灰白色に見える微細な鏡点は放散虫等の空洞であり内部はあまり光沢していない。
SH5	明灰色凝灰質頁岩、灰黑色の頁岩で、輝屈光作用を受けており、光沢は少なし。洞隙面の肌はやや細かく、微細な褐色に見える鏡点の多くは放散虫等の微細化の空洞であり、内部は光沢はない。明灰褐色を含むものは火成岩を含んでいためだと想われる。
SH6	暗灰色凝灰質頁岩、灰黑色の凝灰質頁岩で、輝屈光作用は少なく、光沢はない。洞隙面の肌はやや粗い。微細化は認められない。
〔チャート〕	
CH1	赤色、赤チャート。赤褐色のチャートで、基質は多くない。鏡面部分には暗褐色の石英が光沢する。微細な透明の透円形の斑点が多く見られるが、放散虫化石の中に玉鶴が充填している。玉鶴が充填している。洞隙面の肌は細かい。
CH2	灰褐色チャート。玉鶴のチャートで、鏡面はらららんがそれほど多くない。微細な透明の透円形の鏡点が多く見られるものもあるが放散虫化石の中に玉鶴が充填している。洞隙面の肌は細かい。
CH3	灰白色～透明白チャート。灰白色～透明白のチャートで、鏡面は少ない。透明感のある明暗灰色の部分と暗灰色部分が混じる。洞隙面の肌は細かいがCH1, CH2に比較すると粗い。
CH4	緑灰色系チャート。緑灰色のチャートで、鏡面が多く、洞隙面の肌はチャートとしては粗い。
〔透閃石岩〕	
A1	板状玉型・縞状玉型系、暗灰～暗褐色系で透明感がある板状玉タイプ。結晶は小さい。
A2	板状玉白色系、白色系で透明白感がある板状玉タイプ。結晶は小さい。
B	混合型褐色系、褐色系と白色系の両者が混じる混合型で褐色系が優先のもの、結晶は大きい。
C	混合型白色系、褐色系と白色系の両者が混じる混合型で白色系が優先のもの、結晶は大きい。
B0	單一褐色系、結晶が大きく褐色のもの。
C0	單一白色系、結晶が大きくて白色のもの。
D1	細粒型褐色系、透明白感がないが結晶が小さく細かなもの、細褐色系。
D2	細粒型白色系、透明白感がないが結晶が小さく細かなもの、白色系。
〔鉱紋岩〕	
EA	明暗灰色で褐色のすじが入るもの、比重は小。
EB	網目構造が認められるもの、比重は小、265～287。
EC	その他のもの、比重は小、243～283。
ED	暗褐色部が充填して鏡面があり、比重が大きいもの、296～300。

### 3 種実遺体同定

#### (1) 試料と分析方法

試料は、発掘調査中に現地で取り上げられたものである。試料を肉眼及びルーペで観察し、同定は種の階級で、現生標本との対比で行った。

#### (2) 同定結果と分類群の記載

同定の結果、木本のオニグルミ、クリの2分類群であった。以下に、結果をまとめ（第18表）、形態的特徴を示す（第19表）。

第18表 種実遺体同定結果一覧

分類群 (和名／学名)	部 位	OIKO-C X123 Y74 I層 141002	OIKO-C X117 Y96 I～II層 141028	OIKO-D SK781 141023
オニグルミ <i>Juglans ailanthifolia Carr.</i>	核		1	
クリ <i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i>	炭化子葉	1		1

第19表 形態的特徴

オニグルミ (*Juglans ailanthifolia Carr.*) 核：縫合線で割れた半分の個体が得られた。淡褐色で、広卵形を呈する。表面にはオニグルミ特有の不規則な小隆起がみられる。長さ 31.2mm、幅 28.4mmである。

クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) 炭化子葉：黒色で、広卵形を呈する。表面には縦方向の小皺が走る。完形の個体で長さ 14.8mm、幅 17.8mm、厚さ 7.0mm。半分程度の個体で長さ 13.4mm、幅 13.0mmである。

#### (3) 所 見

今回、得られた種実遺体の中で縄文時代中期中葉まで遡る個体は、SK781から出土したクリの炭化子葉のみである。炭化子葉は著しく炭化しており、被熱によるものと考えられる。また、時期は特定できないもののI層から出土したクリ炭化子葉も被熱した後に埋没したと考えられる。オニグルミは未炭化の核であり、I～II層から出土している。未炭化であることから、比較的新しい個体であり、縄文時代中期中葉まで遡らないと考えられる。

クリの子葉部分はアケ抜きをしなくても食用が可能である。また被熱により炭化していることから、集落内で広く利用されていたと考えられる。  
(島田亮仁)

#### 参考文献

朝田並紀子 2015「小糸・尾萩野遺跡」『平成26年度埋蔵文化財年報』公益財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所

## 4 放射性炭素年代測定

### (1)はじめに

富山市小糸地内に所在する小糸尾萩野遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定を行った。

### (2) 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第20表のとおりである。試料No.1(PLD-31813)は、土坑墓SK204より出土した土器の内面底部に付着する炭化物である。試料No.2(PLD-31814)は、土坑墓SK218より出土した土器の内面胴部に付着する炭化物である。試料No.3(PLD-31815)は、土坑墓SK390より出土した土器の外表面部に付着する炭化物である。試料No.4(PLD-31816)は、埋設土器SK391の内面底部に付着する炭化物である。試料No.5(PLD-31817)は、堅穴住居SI400より出土した土器の外表面口縁部に付着する炭化物である。土器はいずれも深鉢で、上山田・天神山式土器とみられている。

第20表 測定試料および処理

測定番号	遺跡アーティ	試料データ	前処理
PLD-31813	試料No1 地名:名 出土遺跡:SK204 遺物種類:土坑墓	種類:土器付着炭化物 形態:深鉢(上山田・天神山式) 試料採取位置:内面底部 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ酸洗浄(塩酸12N,水酸化ナトリウム10N,塩酸12N)
PLD-31814	試料No2 地名:名 出土遺跡:SK218 遺物種類:土坑墓	種類:土器付着炭化物 形態:深鉢(上山田・天神山式) 試料採取位置:内面胴部 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ酸洗浄(塩酸12N,水酸化ナトリウム10N,塩酸12N)
PLD-31815	試料No3 地名:名 出土遺跡:SK390 遺物種類:土坑墓	種類:土器付着炭化物 形態:深鉢(上山田・天神山式) 試料採取位置:外表面部 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ酸洗浄(塩酸12N,水酸化ナトリウム10N,塩酸12N)
PLD-31816	試料No4 地名:名 出土遺跡:SK391 遺物種類:埋設土器	種類:土器付着炭化物 形態:深鉢(上山田・天神山式) 試料採取位置:内面底部 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ酸洗浄(塩酸12N,水酸化ナトリウム10N,塩酸12N)
PLD-31817	試料No5 地名:名 出土遺跡:SI400 遺物種類:堅穴住居	種類:土器付着炭化物 形態:深鉢(上山田・天神山式) 試料採取位置:外表面口縁部 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ酸洗浄(塩酸12N,水酸化ナトリウム0.1N,塩酸12N)

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### (3) 結果

第21表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第65図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第21表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm$ 1σ)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm$ 1σ)	<sup>14</sup> C年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-31813 試料No.1 SK204出土	-26.11±0.18	4378±22	4380±20	3016-3000 cal BC (13.1%) 2993-2900 cal BC (52.1%)	3086-3062 cal BC (8.0%) 3029-2915 cal BC (87.4%)
PLD-31814 試料No.2 SK218出土	-26.41±0.19	4400±22	4400±20	3096-3061 cal BC (18.2%) 3030-3007 cal BC (16.2%) 2987-2933 cal BC (33.8%)	3091-2926 cal BC (95.4%)
PLD-31815 試料No.3 SK390出土	-27.64±0.20	4425±21	4425±20	3095-3021 cal BC (68.2%)	3306-3302 cal BC (0.5%) 3282-3279 cal BC (0.2%) 3266-3241 cal BC (6.5%) 3106-2928 cal BC (88.2%)
PLD-31816 試料No.4 SK391出土	-28.72±0.19	4381±22	4380±20	3018-3001 cal BC (14.1%) 2993-2900 cal BC (54.1%)	3087-3060 cal BC (9.8%) 3030-2917 cal BC (85.6%)
PLD-31817 試料No.5 SI400出土	-27.47±0.19	4407±22	4405±20	3090-3046 cal BC (24.3%) 3036-3011 cal BC (19.2%) 2978-2961 cal BC (9.7%) 2951-2943 cal BC (5.0%)	3095-2927 cal BC (95.4%)

#### (4) 考察

以下、<sup>14</sup>C年代および2σ暦年代範囲（確率95.4%）に基づいて結果を整理する。

土坑墓SK204より出土した土器の内面底部付着炭化物（試料No.1：PLD-31813）は、<sup>14</sup>C年代が $4380 \pm 20$  <sup>14</sup>C BP、2σ暦年代範囲が3086-3062 cal BC (8.0%)および3029-2915 cal BC (87.4%)であった。

土坑墓SK218より出土した土器の内面胴部付着炭化物（試料No.2：PLD-31814）は、<sup>14</sup>C年代が $4400 \pm 20$  <sup>14</sup>C BP、2σ暦年代範囲が3091-2926 cal BC (95.4%)であった。

土坑墓SK390より出土した土器の外面胴部付着炭化物（試料No.3：PLD-31815）は、<sup>14</sup>C年代が $4425 \pm 20$  <sup>14</sup>C BP、2σ暦年代範囲が3308-3302 cal BC (0.5%)、3282-3279 cal BC (0.2%)、3266-3241 cal BC (6.5%)、3106-2928 cal BC (88.2%)であった。

埋設土器SK391の内面底部付着炭化物（試料No.4：PLD-31816）は、<sup>14</sup>C年代が $4380 \pm 20$  <sup>14</sup>C BP、2σ暦年代範囲が3087-3060 cal BC (9.8%)および3030-2917 cal BC (85.6%)であった。

堅穴住居SI400より出土した土器の外面口縁部付着炭化物（試料No.5：PLD-31817）は、<sup>14</sup>C年代が $4405 \pm 20$  <sup>14</sup>C BP、2σ暦年代範囲が3095-2927 cal BC (95.4%)であった。

今回測定した試料の年代は、縄文土器編年と<sup>14</sup>C年代や暦年代との対応関係を示した小林（2008）、工藤（2012）や、北陸地方の縄文時代中期の土器の<sup>14</sup>C年代を集成した加藤（2008）、小島（2008）、

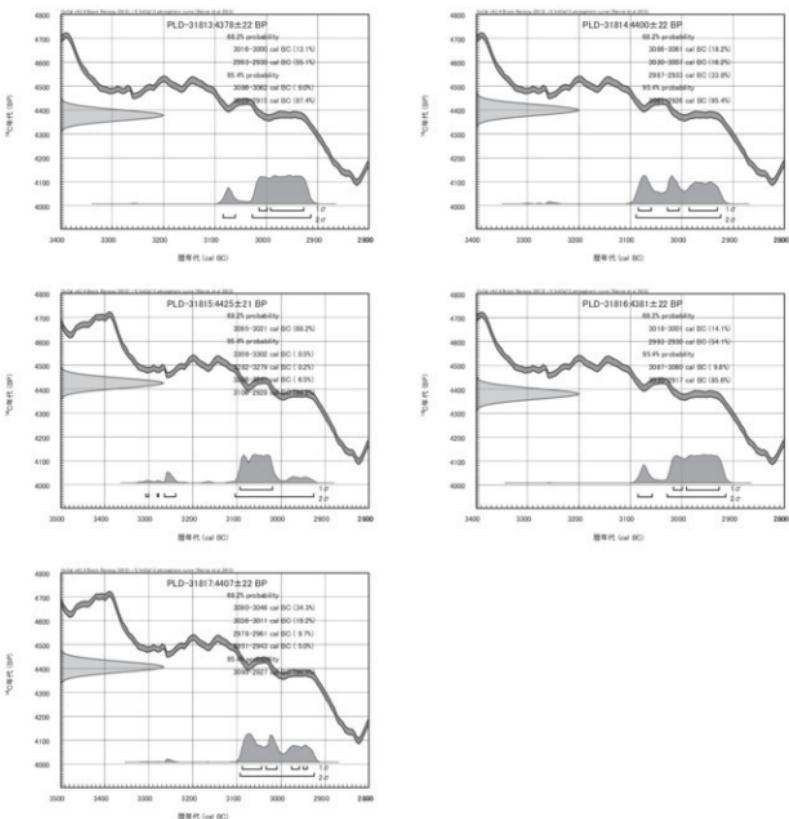
狩野（2008）を参照すると、いずれも縄文時代中期中葉にあたる。第66図に曆年代の分布を示す。

（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ 伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹  
小林絢一・Zaur Lomtadidze・竹原弘展）

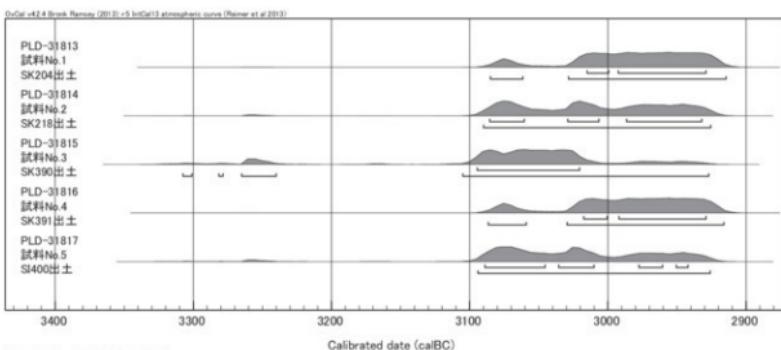
#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 狩野 雄（2008）串田新式・大杉谷式土器・小林達雄編「絶覧縄文土器」：480-485。アム・プロモーション。
- 加藤三千雄（2008）新保・新崎式土器・小林達雄編「絶覧縄文土器」：450-457。アム・プロモーション。
- 小林謙一（2008）縄文時代の曆年代・小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和詞・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」：257-269。同成社。
- 小島俊彰（2008）上山田・天神山式土器・小林達雄編「絶覧縄文土器」：466-471。アム・プロモーション。
- 工藤雄一郎（2012）後氷期の考古編年と<sup>14</sup>C年代 旧石器・縄文時代の環境文化史, 212-229。新泉社。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」：3-20。日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

#### 4 放射性炭素年代測定



第65図 曆年較正結果



第66図 曆年代の分布

## 5 漆塗膜分析

### (1)はじめに

富山市小糸地内に所在する小糸尾森野遺跡では、C 地区の土坑墓 SK390 から縄文土器の深鉢のほかに、外面が赤彩された有孔鍔付土器が出土した。ここでは有孔鍔付土器の赤彩塗膜について、薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。

### (2) 試料と方法

第22表 分析対象						
試料 No.	地区	出土土器	遺構種類	器種	型式	備考
1	C	SK390	土坑墓	有孔鍔付土器	上山田・天神山式	外面に赤彩・赤漆か

点である（第22表、写真2-1-2 写真2は147頁に掲載）。赤彩された土器の一部を精密グライダで採取し、分析試料とした（写真2-1～3）。なお、土坑墓 SK390 より有孔鍔付土器とともに出土した深鉢の、外面付着炭化物の放射性炭素年代測定の結果、縄文時代中期中葉の値が得られている（詳細は別項）。分析にあたっては、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X線分析を行い、報告は竹原がまとめた。

分析は、表面の漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

赤外分光分析は、手術用メスを用いて赤色部分から薄く削り取った試料を、押し潰して厚さ1mm程度に截断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形し、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 FT/IR-410、IRT-30-16 を使用し、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約50μm 前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV、以下 SEM）による反射電子像観察を行った。さらに、SEM に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム (#1000) を用いて厚さ約20μm 前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

### (3) 結果および考察

以下に、塗膜分析結果について述べる。なお、第67図の赤外吸収スペクトルは、縦軸は透過率 (%T)、横軸が波数 (Wavenumber ( $\text{cm}^{-1}$ )；カイザー) である。また、各スペクトルはノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す（第23表）。赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収No.6～8）は認められなかった。有機物を示すCH基に由来する 2950.55 ( $\text{cm}^{-1}$ )、2923.56 ( $\text{cm}^{-1}$ ) の吸収が僅かであったことから、漆などの成分が

第23表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	位置	生漆 強度	ウルシ成分
1	2955.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1220.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

残っていないと考えられる。また、吸収No.9付近の大きな吸収は劣化に伴うゴム質の吸収である(第67図)。以上、赤外分光分析の結果からは、劣化とともに無機化が進み、漆を検出できなかった。しかし、後述の生物顕微鏡観察では黄褐色透明の塗膜層が認められるため、現状では劣化しているものの、漆は使用されていたと考えられる。

塗膜薄片の観察では、土器胎土a層の上に、透明塗層c1層とc2層、赤色塗層c3層が観察された(写真2-5・6)。c3層は、黄褐色透明の塗膜層中に赤色粒子が多量に混和されている様子が観察できる(写真2-5)。

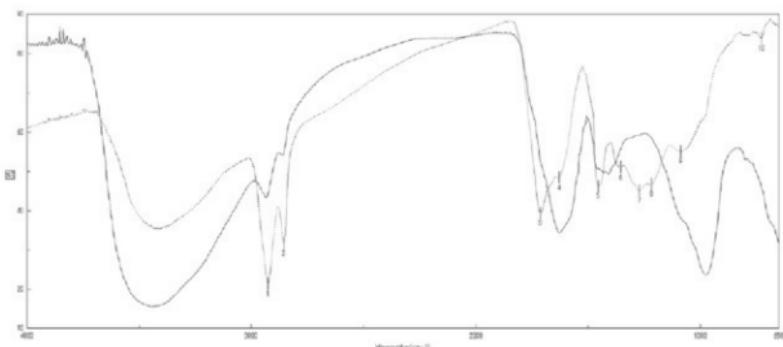
各層のX線分析結果を第24表に示す。c3層は、  
鉄(FeO)が多く検出されており、赤色顔料としてベンガラが使用されていると考えられる。なお、赤色顔料を別途極少量採取して生物顕微鏡で観察したところ、直径約1μmの赤色パイプ状粒子が認められた(写真2-4)。よって赤色顔料は、いわゆるパイプ状ベンガラであったと考えられる。  
塗膜の特徴を第25表にまとめる。

#### (4) おわりに

土器外面の赤彩塗膜について分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、透明塗層2層の上に赤色塗層が1層塗られる構造と考えられた。赤色顔料としては、パイプ状ベンガラが使用されていた。(パレオ・ラボ 竹原弘展・藤根 久・米田恭子)

第25表 塗膜分析結果

試料No.	採取部位	下地	塗膜層
1	赤色塗膜	無し	3層 透明塗膜2層、赤色塗膜(パイプ状ベンガラ)



第67図 土器外面赤色塗膜の赤外分光スペクトル図(実線:塗膜試料、点線:生漆、数字:生漆の赤外吸収位置)

# 第VI章 総 括

## 1 繩文時代

### (1) 遺構の分布

小糸尾萩野遺跡では堅穴建物は3棟、掘立柱建物は9棟が確認された。堅穴建物はA地区で1棟、C地区で2棟が確認され、それぞれは直線距離で約260m離れており、標高差は12mある。A地区では他に性格を特定できる遺構は無く、堅穴建物単独で存在している。ただ、北に約20m離れた土坑群付近の包含層からは縄文土器とともに黒曜石の剥片が出土し、堅穴建物付近以外での出土遺物が少ないA地区において、建物の存在を推測できる。C地区的2棟は重複しており、調査区北端に位置することから、北への広がりを推測するが、北西に向かって急傾斜の地形となることを考慮すれば、建物が立地可能な範囲は狭いとみられる。

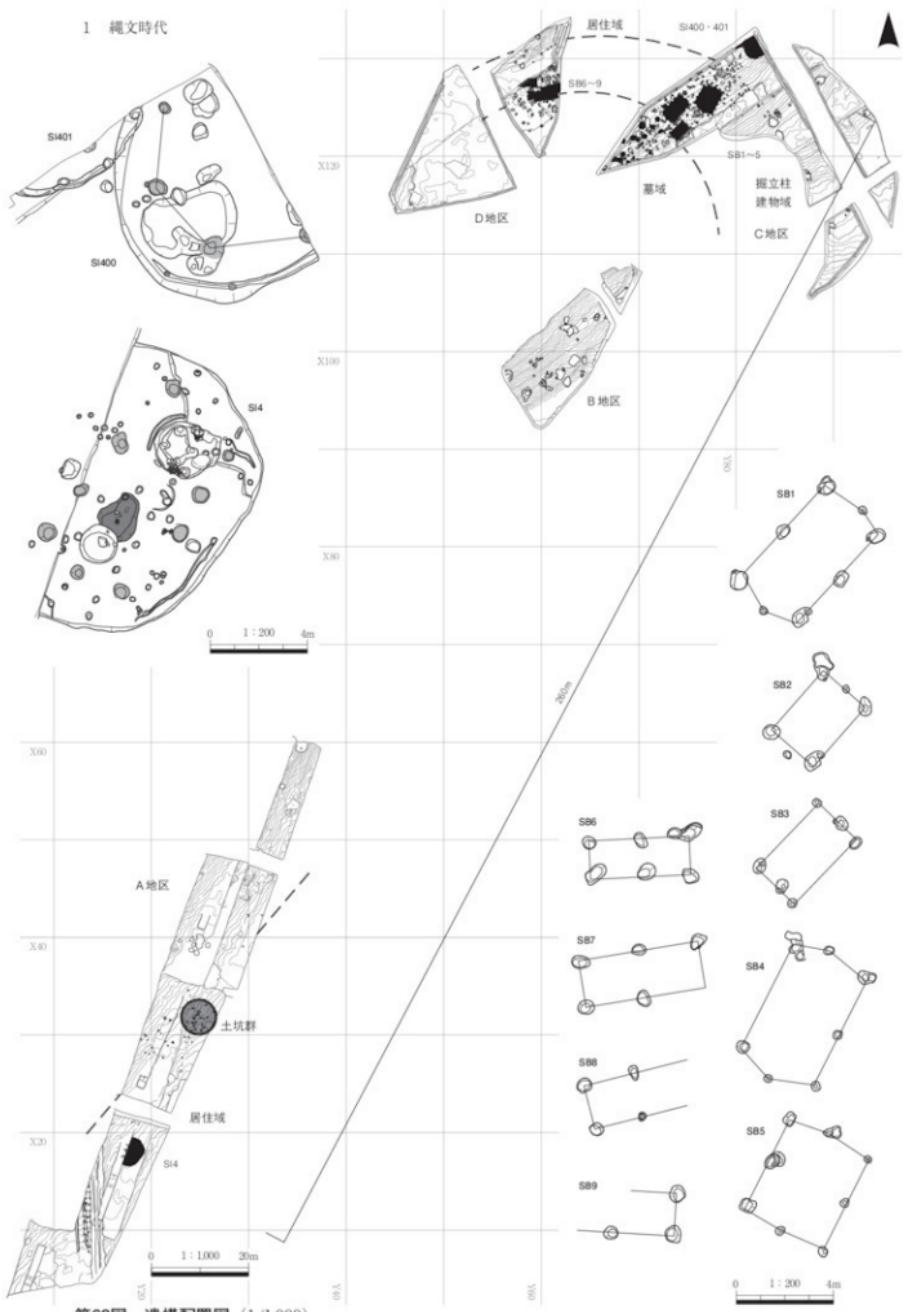
掘立柱建物はC地区的堅穴建物の南西にあり、C地区からD地区にかけての南北20m、東西40mの範囲に9棟が位置しており、最大3棟の重複を確認した。C地区とD地区とは比高差が2mほどあり、掘立柱建物の主軸方向を異にする。掘立柱建物は弧を描くように建ち並び、その南西には掘立柱建物域に囲まれるように土坑群が広がり、その中に14基の土坑墓を確認した。堅穴建物と掘立柱建物に重複はみられず、掘立柱建物と土坑墓の重複は1基を除きみられないことから、掘立柱建物域を含む居住域と墓域との明確な区別がみてとれる。建物や土坑墓が集中する場所は小糸尾萩野遺跡の中では緩斜面であり、その勾配はA地区6.16%、C地区4~4.5%、D地区3.1%と緩やかで、限られた緩斜面に継続して暮らしている様子が伺える。一方、遺構群から少し離れた場所の勾配は、A地区北端12%、B地区9.5%、C地区南東7%、D地区北端10%と急傾斜地となり、倒木痕が確認されただけである。

#### A 堅穴建物と掘立柱建物

堅穴建物はA地区的SI4とC地区的SI400・401の3棟であり、単独で存在したとみられる。建物構造において、貼り床をもたない、壁溝がある、壁溝内に柱穴があるという共通点がある一方、SI4の平面形が橢円形、柱穴の並びが平行、地床炉とロート状ピットをもつて対し、SI400は平面形が円形、柱穴の並びが円形、炉は未確認、貯藏穴があるという相違点がある。SI401は確認された建物の範囲がわずかであり、比較できる内容は少ないが、SI400と類似した構造とみられる。出土遺物においては、SI4が若干古い様相をもつ遺物を含むが、SI400はSI401廃絶直後の建て替えではなく、SI401とはある程度の時期差があること、SI400の遺物出土状況が住居廃絶後の窪地利用として廃棄された様相を示すことを考慮すると、SI4とSI400はほぼ同時期に存在していたと考えられる。

掘立柱建物は2間×1間4棟、1間×1間4棟、6間×1間1棟がある。この内C地区にある2間×1間の建物の中には梁から張り出す位置に棟持ち柱をもつため、平面形が六角形状となるものが3棟、一方のみが張り出し五角形状となるものが1棟ある。D地区的掘立柱建物は平面形が桁行方向に細長い長方形を呈する。主軸方向は、C地区にあるSB1~5はN-28°~45°-Eであり、D地区にあるSB6~9はN-76°~87°-Eとなり、C地区的建物は梁側が中央の土坑墓群を向くのに対し、D地区的ものは桁側が中央を向く。建物の時期は、SB1の柱穴出土遺物に混入と考える前期初頭のものが1点ある以外、ほぼ新崎式~上山田式に収まり、主軸方向と時期には関連ではなく、建物の機能ま

1 繩文時代



第68図 遺構配置図 (1/1,000)

たは性格による相違と推測する。

## B 土坑墓

土坑墓は掘立柱建物が弧を描くように開む内側に14基確認され、SK390を除き掘立柱建物とは重複しない。土器被覆葬とみられるSK260・SK390からは、遺体を被覆していた深鉢の外、副葬品として石鏡、琥珀製の丸玉や有孔鍔付土器が出土した。被覆する深鉢はいずれも倒置、横倒しであるが、前者は渦巻き文が施された大型破片、後者は全面縄文ではほぼ完形という相違がある。このような土器の使い分けは、関東では関係性がみられる事例も報告されており<sup>注1</sup>。意図的である可能性を考えたい。一方、配石や立石などの上部構造がわかる例ではなく、平面形と規模および副葬品の有無またその内容とに関係性はみられない。これらの土坑墓とSI400は同時期に存在したことが、副葬品の放射性炭素年代測定の結果から裏付けられた。

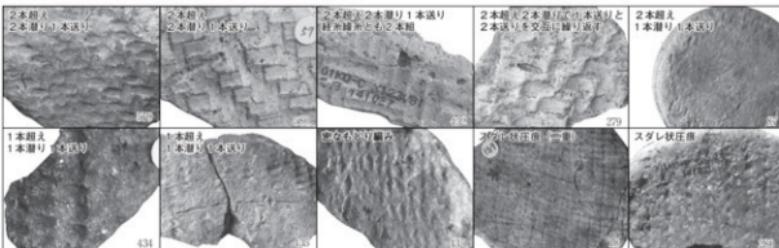
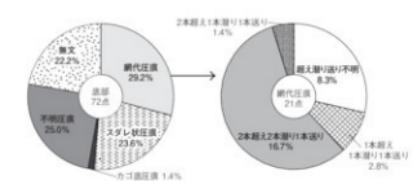
## (2) 縄文土器

小糸尾萩野遺跡から出土した縄文土器の時期は、本文中にも記述したが、早期中葉から晩期までと幅はあるが、中心となるのは中期前葉～中葉（新崎式～上山田式）。次に多いのが串田新式～気屋式（とくに串田新式～前田式が中心）である。前期の遺物は、初頭の花積下層式併行期のものが1点確認できたほかはなく、断続しているとみられる。在地産の土器が主体であるが、外來系の土器には、信州の新道式の影響を受けたとみられる隆帶で三角形や楕円形の区画を創出し、その周間に爪形刺突を施す土器、東北地方の大木7b式の影響を受けたとみられる頭部に縄文原体を押圧する土器、勝坂式の土器が少量ではあるが出土している。小糸尾萩野遺跡における外來系の土器様相は、在地の新崎式系統や上山田式系統に供伴すること、新道式と大木7b式とでは後が多いことにおいて、同時期の砺波市徳万頃成遺跡における様相と類似する<sup>注2</sup>。

## A 敷物圧痕

底部外面の残る破片のうち、固化したものは72点で、そのうち敷物圧痕を確認できた破片は56点、77.8%である。敷物圧痕には網代圧痕、もじり編み圧痕、不明圧痕があり、網代圧痕が最も多く

29.2%を占める。網代圧痕では2本超え2本潜り1本送りのものが最も多く、過半数を占めるなかに、2本超え2本潜りで1本送りと2本送りを繰り返す網代圧痕がある。次いでもじり編み圧痕が25%を占め、カゴ底圧痕とみられるもの1点を除けば、全てスダレ状



第69図 純文土器底部の圧痕種類

注1 中村耕作「2015「土器被覆葬にみる社会関係－中期後半の南関東の事例分析－」」『季刊考古学』第130号（株）雄山閣

注2 町田賢一「2016「第VII章総括 1 純文時代」」『徳万頃成道路発掘調査報告』（公財）富山県文化振興団理蔵文化財調査事務所

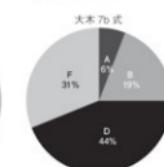
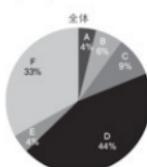
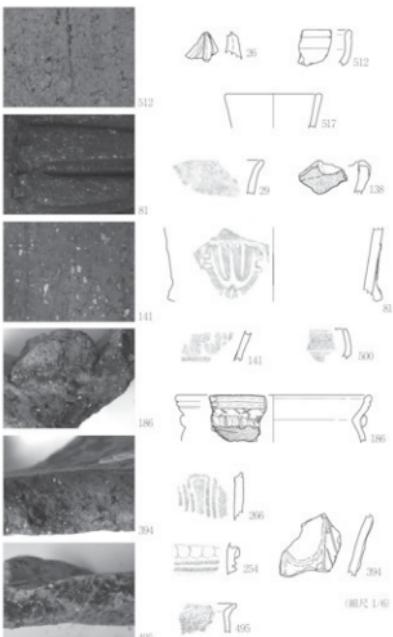
圧痕である（第69図）。2本超え2本潜り1本送りや1本超え1本潜り1本送りの網代圧痕は北陸・東海地方から西日本でよくみられ、スタレ状圧痕は北陸地方を含む日本海側地域に卓越すること（北陸では特に中期と晚期に多い）。中期後半から後期前半の岐阜県山地部では2本超え2本潜りで1本送りと2本送りを繰り返す網代圧痕が卓越することが知られており<sup>33</sup>、小糸尾萩野遺跡でみられる敷物圧痕の傾向は、遺跡の立地と関連して縄文時代中期における特徴を示している。

### B 胎土

縄文土器の胎土については、肉眼観察により確認できた鉱物などを観察表（第10表）に記入しているが、肉眼でも識別可能な特徴をもつ胎土があることから、石材鑑定を依頼した中村氏に顕微鏡観察を行っていた。その結果、6タイプに分類でき、各タイプの特徴を第26表に記し、その特徴をもとに肉眼観察から分類した結果を観察表に記載している。DタイプとFタイプは肉眼での判別が困難で、より砂粒が顕著なものをFタイプとした。また、Eタイプは本来顕微鏡観察が必須だが、

第26表 小糸尾萩野遺跡出土の縄文土器胎土

タイプ	遺物番号	胎 土
A	26	角が丸まつた石英（高温型石英=クリスタルアッシュ）黒雲母を多く含む。混和剤にて含む。アフライト含む。512に同じ。
	512	石英（高温型石英）、斜長石を多く含む。角ばった時に角が丸くなつた石英を多く含む。正長石、カリオーネ、シルバーフィeldspat、花崗岩類、火山灰（くわんじや）に混じる。40万年前の火成岩（軽石）と火山灰に混じる。アフライト含む。混和剤にて含む。風化した火山灰などに分類される火山灰山火（山火）と同形態の火成岩。鉱物類が高山北方に広く分布している。したがって、飛騨地方の大砂流かクリスタルアッシュを採集して混和剤とした可能性が考えられる。
	517	石英、斜長石（角ばつた）を多く含む。チャート隕石、海綿骨針を含む。火山灰（クリスタルアッシュ）が火成岩群（かせいがんぐ）で分類される。粘土は海成粘土（新第三紀～更新世のもの）を用いたと思われる。
B	29	石英、アフライト、斜長石など角ばつた鉱物粒子を含み、アフライト+花崗岩岩脈（かげんがんがんめき）に花崗岩類の風化した跡を混和剤として加えていると思われる。花崗岩類は例えば安曇野市、湖西市周辺山脈など各地にみられる。
	81	黒雲母が多く花崗岩類の跡、石英、正長石を含む。花崗岩類の風化した跡を混和剤として加えていると思われる。花崗岩類は例えば安曇野市、湖西市周辺山脈など各地にみられる。
C	138	チャートなどの跡を含むが黒雲母（Biotite）、石英（Quartz）、石英（Flint）など風化した鉱物を多く含む。Biotite+Quartz+Flintに312。
	141	角ばつた石英、正長石、斜長石（多くはない）などを含む。海綿骨針を含む。
D	500	石英、長石の跡（多少水磨された跡=川跡）、海綿骨針（化石）を含む。海成粘土を使っていると思われる。
	186	石英、長石、アフライト、花崗岩類、花崗岩などの跡を含む。あおむ門跡（水磨）していない川跡。飛騨地方の胎土とする可能性は十分考えられる。
E	266	花崗岩、アフライトなどの砂、石英、正長石などを多く含む。花崗岩岩帶を流下する川河の川跡を証している。
	254	石英、長石類、花崗岩類、黒色の岩石などの跡を多く含む。ローム層（火山灰層）起源のシルicate、磁鐵錫も含む。花崗岩地帯=ローム層は飛騨地方にある。
F	394	斜長石、石英、アフライト、スコリオアガベを含む。ローム層（風化火山灰）が混じる。ローム層のある所（飛騨地方？）の胎土と思われる。
	495	石英砂、長石、石英、鉱物（石英の結晶）をわずかに含むが大半は砂粒子である。



第70図 縄文土器胎土のタイプ別比率

注3 松永篤知 2012「『敷物圧痕』について」『早月上野遺跡発掘調査報告』(公財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

今回は肉眼で比較し類似したものとした。

タイプ別の比率は第70図に示した。全体では飛騨地方や中部高地にみられる砂や火山灰を混和剤とするAタイプ・Bタイプ・Eタイプは1割強である中で、外来系の信州の新道式の影響を受けた土器ではBタイプが72%、東北地方の大木7b式の影響を受けた土器ではA・Bタイプが25%と高い比率を示す。土器型式的に搬入品とみられる81(勝坂式)はBタイプ、146はE?タイプとなり、胎土においても搬入品であると裏付けられた。また、Dタイプが在地産とみられる土器の中で高い比率を示すのは、小糸尾萩野遺跡で作られた土器に混和剤として使用した砂が花崗岩帯を流下する神通川で採取されたものであることに起因すると考えられる。

### (3) 石器

小糸尾萩野遺跡において、石材は在地系の外、新潟・富山県境域、飛騨系、信州系、新潟系、および遠来の琥珀など、多くの地域から搬入されている。堅穴建物出土の石器・石製品をみても、SI4では剥片に黒曜石(信州系)2点、擦石に砂岩、顎晶質安山岩、閃緑斑岩各1点、石皿に砂岩1点がみられ、SI400では磨製石斧に透閃石岩4点・角閃岩1点(新潟・富山県境域)、剥片では緑色凝灰岩、礫岩、濃飛流紋岩(飛騨系)各1点、二次剥片では珪質頁岩(新潟系)1点、擦石では閃緑斑岩、顎晶質安山岩、花こう閃綠岩各1点、石皿では4点全てが砂岩である。

顎晶質安山岩は在地系、濃飛流紋岩や礫石器石材の閃緑岩、花こう閃綠岩、凝灰岩、マイロナイトなどは飛騨産のものもあると思われるが、小糸尾萩野遺跡は富山・岐阜県境に近く、主として神通川に流下した河川礫として供給されたものと推定される<sup>注4</sup>。出土する石材において偏在がみられるのは黒曜石で、出土石器・石製品に占める割合が1%であるが、その全てがA地区から出土しており、堅穴建物から2点、土坑群が確認されたX 32~35 Y 21付近の包含層から剥片3点が出土している。出土地点の偏在と建物の性格や時期に関連があるのかは今後の検討課題である。

### (4) まとめ

小糸尾萩野遺跡は狭隘な河岸段丘上の限られた緩傾斜地上に営まれた、縄文中期前葉～中葉を主体とする集落遺跡である。遺構の分布はA地区とC・D地区に集中するが、C・D地区にみられる土坑墓群を弧状に開む掘立柱建物、さらにその外周に堅穴建物が配置される集落構造は、環状集落の構造に類似する。A地区的堅穴建物から、C地区的堅穴建物までは約260m離れているが、A地区には堅穴建物以外は確認されていない。縄文時代中期に環状集落が増加する全国的な傾向は富山県内でも同様で、東日本の中でも最大級の規模をもつ魚津市早月上野遺跡をはじめとして、富山市開ヶ丘谷谷Ⅲ遺跡、富山市北代遺跡、富山市北代加茂下Ⅲ遺跡、富山市東黒牧上野遺跡、富山市花切遺跡、立山町吉峰遺跡などがある。小糸尾萩野遺跡の集落構造は環状集落を意識しながらも、帶状にある限られた緩傾斜地上に制約された結果と考えられる。

堅穴建物や掘立柱建物の重複関係から、少なくとも3時期にわたり建て替えを繰り返し住み続いていることがわかる。また、今回の調査では遺構が確認されなかつたが、出土遺物には串田新式～気屋式(主に串田新式～前田式)のものも多いことから、周囲にはその時期の集落が存在すると推測できる。A地区に比して、C・D地区での出土遺物量が圧倒的に多いことから、集落は標高の低い北へと時代とともに移動しているとみられ、比較的長期にわたり定住していたと推測される。

土器は形態や文様、胎土により、在地産や模倣品、外來産を判別していたが、顕微鏡観察により混注4 詳細は第V章2参照。

和剤の詳細が明らかになることで土器製作地域が絞られる可能性がある。小糸尾萩野遺跡の場合、飛騨地方、信州地方を主とする中部高地からの搬入品の外、遺跡眼下を流れる神通川で採取した砂を混和剤に使用したこと、飛騨産の胎土に類似する土器が作られたと推測される。石製品は石材鑑定により、新潟・富山県境域、飛騨、信州、新潟、および東日本地域など多くの地域から搬入されていることがわかった。このような土器・石製品にみられる文化・物資の交流・移動は、昔も今も変わらず滔々と流れ、豊かな恵みを育む神通川水系を利用していたと考えられる。

(田中道子)

## 参考文献

- 有山桂世 2000「鏡坂I 遺跡・遺物」「外輪野I 遺跡・鏡坂I 遺跡発掘調査報告書」編田町教育委員会
- 池野正男 1975『遺構』『松原遺跡緊急発掘調査概報』庄川町教育委員会
- 荒原雄大 2007「富山県・石川県における縄文時代の小型住居について」『脈切遺跡G 地区発掘調査報告書』黒部市教育委員会
- 大山町教育委員会 1990「東黒牧上野遺跡A地区発掘調査概要」
- 大山町教育委員会 1996「東黒牧上野遺跡A地区」
- 大山町教育委員会 1999「富山県大山町花切西道跡発掘調査概要」
- 大山町教育委員会 1999「富山県大山町花切道跡発掘調査概要」
- 大山町教育委員会 2000「富山県大山町東黒牧上野遺跡G 地区発掘調査概要」
- 岡田義樹 2003「開ヶ丘猿谷Ⅲ遺跡・堅穴住居」開ヶ丘猿谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山道跡・開ヶ丘孤谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書 - 县営畠地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) -」富山市教育委員会
- 小矢部市教育委員会 2007「富山県小矢部市鶴坂遺跡発掘調査報告書」縄文時代総括編
- 加藤三千博 1988「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観』3 小学館
- 桐生直彦 2005「堅穴住居」から「堅穴住建物」へ『季刊 考古学』第131号 雄山閣
- 源田一秀 2001「松原遺跡」庄川町教育委員会
- 久々忠義 2011「縄文集落と串田新式土器 境A遺跡の様相」「大境」第29号 富山考古学会
- 柳原功一 2009「北陸・中部地方の縄文集落と世界観」「集落の変遷と地域性」シリーズ縄文集落の多様性 I 雄山閣
- 小島俊彰 1975「北陸の縄文時代中期の編年」戦後の研究と現況」「大境」第5号 富山考古学会
- 小島俊彰 1979「縄文土器・土器品」「上山田貝塚」宇ノ木町教育委員会・石川考古学研究会
- 小島俊彰 2005「バケット型土器と三ツ山装飾環状把手」「大境」第25号 富山考古学会
- 小島俊彰 2008上山田・天神山土器群「能登・縄文土器」アム・プロモーション
- 小林達雄 2008「紀見・縄文土器」アム・プロモーション
- 酒井重洋 1977「遺構」「遺物・土器」「宇奈月町浦山寺藏遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- 笛森健一 2014「堅穴住居の構造」「講座日本の考古学4 縄文時代(下)」青木書店
- 神保孝造 1977「遺物」「堅穴寺藏跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- 立山町教育委員会 1990「吉峰遺跡」第7次発掘調査報告書
- 谷口康晴 2005「環境集落と縄文社会構造」学生社
- 砺波市教育委員会 2012「松原遺跡発掘調査報告 - 庄川流域における縄文時代中期の集落遺跡の調査 - 」
- 富山県教育委員会 1977「富山県宇奈月町浦山寺藏遺跡緊急発掘調査概要」
- 富山県教育委員会 1989「北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編4 境A遺跡構造編」
- 富山県教育委員会 1990「北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編5 境A道路石器編」
- 富山県教育委員会 1991「北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編6 境A遺跡土器編」
- 富山県教育委員会 1992「北陸自動車道遺跡調査報告 朝日町編7 境A遺跡絆括編」
- 富山県埋蔵文化センター 1997「縄文のなりかわり」平成9年度特別企画展図録
- 富山市教育委員会 1998「史跡・北代遺跡発掘調査概要 II」第VI章 組括
- 富山市教育委員会 2003「富山市開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山道跡・開ヶ丘孤谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書」
- 富山市教育委員会 2004「富山市開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘孤谷Ⅳ遺跡発掘調査報告書」
- 西田泰民 2008「畠和材・縄文土器」アム・プロモーション
- 能都町教育委員会真駒遺跡発掘調査団 1986「石川県能都町真駒遺跡」
- 古川知明 2009「富山県における下呂石の搬入状況「越中と美濃を結ぶ考古学記念講演会」富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 堀祐一 1991「北代加茂下Ⅲ遺跡の縄文柱建物について」「富山市考古資料館報」No.30富山市考古資料館
- 堀祐一 1997「縄文時代中期掘立柱建物の一考察 - 北代加茂下Ⅲ遺跡掘立柱建物の検討 - 」「富山市考古資料館報」第16号 富山市考古資料館
- 堀祐一 2003「富山県内の縄文時代堅穴住居について - 前期から中期にかけて - 」「富山市北押川C 遺跡発掘調査報告書 - 主要地方道新添平岡線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 - 」富山市教育委員会
- 麻柄一志 1981「魚津産黒曜石と縄文遺跡」「富山市考古資料館報」5 富山市考古資料館
- 麻柄一志 2011「縄文環状集落の広場」区画された空間「考古学は何を語るか」同志社大学考古学シリーズX 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 町田賢一 2010「富山県における縄文道路のあり方 地形分類図から見た遺跡分布」「富山考古学研究」紀要第13号 富山県文化振興財團
- 松永萬知 2004「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」「金沢大学考古学紀要」第27号
- 松永萬知 2008a「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」「考古学雑誌」第92卷第2号 日本考古学会
- 松永萬知 2008b「網代・敷物」「能登縄文土器」アム・プロモーション
- 森 秀典 1985「遺物」「野沢幅道遺跡発掘調査概報」立山町教育委員会
- 八尾町教育委員会 1985「富山県八尾町長山道遺跡発掘調査報告」
- 柳井 雄 1975「遺物」「松原遺跡緊急発掘調査概報」庄川町教育委員会
- 山本正敏 2007「桙町遺跡の石器・石晶品の様相について」「桙町遺跡発掘調査報告書 縄文時代総括編」小矢部市教育委員会

## 2 近世の道路状遺構について

小糸尾萩野遺跡A地区で検出された道路状遺構SF3は、出土遺物から近世段階の所産と考えられることと、その位置が從来から推定されている近世飛驒街道の東道と概ね一致していることから、その一部であった可能性が高い。ここではまず、越中と飛驒を結ぶ交通路がどのような様相を呈していたのかを概観する（第71図）。加えて、SF3の規模や構造についても、近世における道路状遺構の諸例を踏まえて検討し、近世飛驒街道の東道との関連性を探っていきたい。

### （1）飛越間交流の様相

#### A 中世

鎌倉時代においては政権所在地である鎌倉に向かう経路として、有峰を通り飛驒の高原郷を経由して信州へ抜ける道筋があったとされる。高原郷は飛驒や北陸諸国と信州を結ぶ交通の要衝であった。この高原郷に向かって神通川沿いを通る道筋を示す史料として、詩僧である万里集九の『梅花無尽巻』がある。その中では、長享二（1488）年に集九が越中の滑川から吉野・猪谷を通って飛驒の高原郷に赴き、江馬氏の歓待を受けたことが記されている。また、永禄八（1565）年には江馬氏の配下である河上氏が神通川沿いにある吉野・庵谷・篠津（笠津）の関所を通過する商人紅屋に役銭等免除の特権を与えており、万里集九の例とともに、神通川沿いの交通路の存在を示している。

戦国時代の終わりには、越中では天正十三（1585）年に前田利家が新川郡を除く三郡を支配し、文禄四（1595）年には全域を領地とする。利家は文禄三（1594）年に牛ヶ増から東猪谷の村々に荷役の特権を保証する書状を出し、慶長六（1601）年には加賀藩家老の前田長種によって再度その特権が保証されている。飛驒では天正十四（1586）年に金森長近が封ぜられ、その下で茂住宗貞が飛越国境付近の茂住銀山を開発する。これに関連し、宗貞は文禄四（1595）年から慶長四（1599）年に横山村の牛役の請取状を残しており、鉱山経営に関わる牛方の物資運搬があったことが分かる。

このように飛越間の交流において、特に中世末期には神通川沿いの道筋が物資運搬路の性格を強めていった様子を見ることができる。

#### B 近世

江戸時代に富山と高山を結ぶ神通川沿いの交通路については、過去に実施された「歴史の道調査」（富山県教育委員会 1979）を参考としていきたい。交通路の呼称は、越中では飛驒街道・飛州往来・高山道、飛驒側では越中街道などがあり一様ではないため、ここでは飛驒街道の名称を用いる。その道筋は、平野部では時期により変遷するが、神通川渓谷部入口の笠津で右岸と左岸に分かれる。

右岸は飛驒街道東道（以下、東道）である。国境の口留番所は越中側が東猪谷、飛驒側が荒田口にある。飛驒国内では高原川の右岸沿いを船津まで湖行し、そこで高原川を渡り、高山へと通じる。飛驒側では越中東街道、大東路と呼ばれた。この推定ルート上にSF3は位置している。

左岸は飛驒街道西道（以下、西道）である。国境の口留番所は越中側が西猪谷、飛驒側が小豆沢にある。そのまま宮川沿いを進み高山へと通じる。飛驒側では越中西街道、大西路、西地と呼ばれた。また、西道では西猪谷を過ぎた蟹寺で「籠の渡し」により宮川を渡り、高原川沿いに進み船津を経て高山まで通じる道筋もあり、飛驒側では中道、中通りと呼ばれた。

飛驒街道においては、当初は東道の利用が多くあったと考えられている。それは、戦国時代末期から江戸時代初期に最盛期であった飛越国境付近に分布する鉱山に対する物資運搬路としての役割が大

きかったためである。その後、鉱山産出量の減少や富山藩の成立などに伴い、西道の方が主要な飛越間の交通路になったとされる。また、物資の運搬方法は渓谷地帯を通る道路では、道幅が狭くて起伏も激しいため、牛に背負わせる牛方あるいは人が背負う歩荷によるものであった。

このように、近世における神通川両岸の交通路は、その利用状況が時期によって変化しながらも、飛越間の交通において重要な役割を担っていた。

#### C 東道沿いの鉱山

東道沿いの鉱山には越中国内に吉野銀山、飛騨国内に茂住銀山が存在する。また、飛騨国を通過する経路で越中国内の長棟鉛山にも通じていた。

吉野銀山は発見が天正元（1573）年で、最盛期は慶長年間（1596～1614）とされる。「山況がよくなつて山師数が増加すると、伏木・舟渡・小糸の諸村にも散在することになった」（富山県 1982）とされる。寛文十（1670）年頃からは山勢は衰えるが、その後も吉野銀山には飛越双方から関所を通らずに物資が運び込まれたため、文政二（1829）年には特定の移入品に口銭が課された（大沢野町誌編纂委員会 1958）。鉱山衰退以降も東道を利用した物流が存続していたことを示している。

茂住銀山はその成立時期は明かではないが、17世紀終わり頃まで銀の産出が多くあり、その後は鉛の産出が主となった。その鉱山経営に関連する物資運搬について東道を通る牛方が担っていたことは先述の通りである。また、鉱床とは離れた飛騨街道沿いに鉱山経営の中枢部が形成されており、茂住銀山と東道には密接な関連性が指摘されている（原田 2011）。

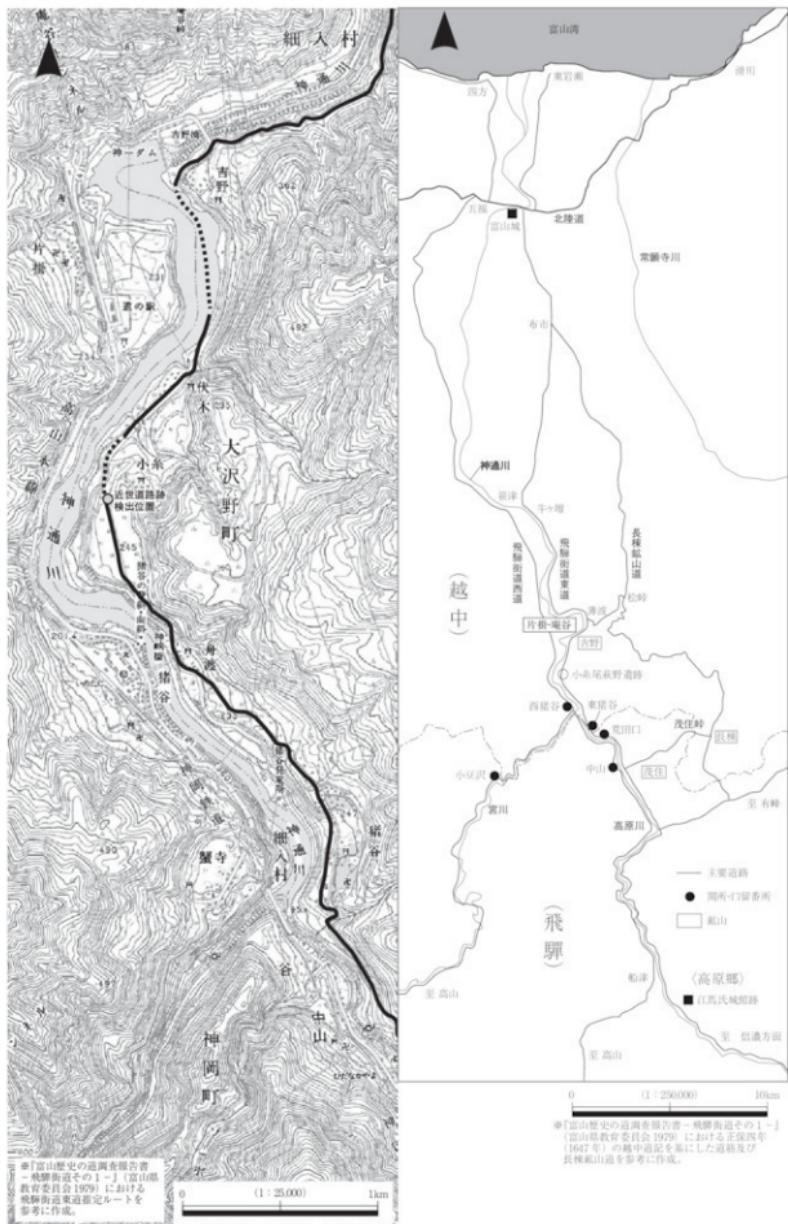
長棟鉛山は寛永三（1626）年の発見後、約20年間が最盛期とされる。産出された鉛は富山の鉛蔵、富山藩分藩後は東岩瀬の鉛蔵まで運ばれた。その経路となる長棟鉱山道は、上道と下道の二つがある。上道は長棟川沿いから桧峠を経て黒川沿いを通って富山平野に通じる。下道は飛騨の茂住に一端出て、東猪谷を経由して東道を通る。富山からの距離は下道の十三里に対し、上道は十二里と短いが、上道の通行は難路であったため、下道も利用されていた（大沢野町誌編纂委員会 1958）。

以上のように、東道に接続する鉱山に関わる物資運搬が行われており、その流通経路上にある小糸尾萩野遺跡の道路整備にも少なからず影響を及ぼした可能性がある。

#### D 運搬された主要物資

物資の運搬は、鉱山はもとより、高山を中心とした飛騨国北部域に向けて多く行われた。主要な物資としては、米・魚・塩が挙げられる。それらの運搬経路は、先に示したように近世初めには東道が主流であったが、その後は西道が優位になったと考えられている。ただし、近世末期における飛越間の商品流通の検討（矢ヶ崎 1960）では、飛騨国側の口番留所の史料から、米に関しては西道の中山口と東道の荒田口を通過する米の石数がほぼ同等であったとしている。魚については加賀藩領から飛騨へ魚商の活動が盛んだったことが示されている。また、こうした荷主が東道沿いの山間地の村落に分布が多く、単なる運送業ではなく、商業活動が活発であったことも指摘されている。

塩は富山藩や加賀藩から移入された。高山藩は文化年間（1804～1817）から領内の円滑な塩供給を目的として、年間1万俵の塩を富山藩から移入することを取り決めた。これは「定式塩」と呼ばれ、その運搬は富山藩領を通る西道が利用された。一方、東道を経路とする加賀藩領の東岩瀬から送られる塩は「別廉塩」とされ、安永年間頃からは年間2～3千俵あったとされる（高瀬 1974）。時代が下がって、元治元（1864）年の史料によると、東道に対し西道は約2.6倍の流通量があったとされる（大沢野町史編さん委員会 2005）。このように塩の運搬も、輸送量に変動はありながら、東道でも継続的になされていたことが分かる。



第71図 飛驒街道東道推定ルートと周辺の主要交通路

こうした米・魚・塩の他にも様々な食料品や生活雑貨が飛驒街道を利用して運搬され、近世を通じて東道がその物流の一翼を担っていたと言えよう。

## (2) 近世道路状遺構の諸例との比較

小糸尾萩野遺跡のSF3が、その位置から東道の一部である可能性が高いことは先述した。東道については、加賀藩による正保期の街道報告書を模写したとされる『越中道記』において、遺跡付近での道幅は2~3尺（約0.6~0.9m）と記載されている。これに対し、SF3の路面幅は約1間半（9尺：27m）となっている。道路が立地する地形等の制約により、その規模や構造が一律でない可能性は高く、文献の記載との相違をもって東道の可能性が否定されるものではないだろう。いずれにしても、東道との関係性を考える上で、近世段階での路面幅がどの程度の規模であったのかを把握する必要があり、いわゆる五街道や脇街道等と推定される事例を中心に、その規模を確認していく。加えて、SF3の路面上にみられるピット群に関しては諸例を参考に検討していきたい。

### A 道路状遺構の規模

近世に整備された五街道には東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中、さらに付属街道が水戸佐倉道とされる。それ以外に脇街道があるが、その規定は明確ではなく、その他にも各地域の幹線道となる街道が多く存在した。しかし、これらの路線や名称を統一的に捉えることは難しいとされている（武部2003）。なお、飛驒街道は主要な脇街道に次ぐ位置付けとなっている。

今回、道路状遺構の事例として示したのは、五街道や脇街道の他、各地の主要な幹線道と推測される道を中心とした。また、近世においても時期が不明確な例も多く、ここでは近世全般のおおよその傾向を把握することを目的とする。なお、城下で確認された事例については、小糸尾萩野遺跡の立地条件とは異なっているため、比較検討に適さないと考え対象外とした。

#### ①五街道

奥州街道（4：第27表の遺跡番号、以下同様）で28~5.7m、甲州街道（17）で1.0~1.2mの道幅であった。ともに丘陵尾根上に位置している。中山道（31・32）は平坦地では最大で6.5mあるが、山間地の勾配がある地点では2.4m程度である。東海道については、概ね3~4間（5.4~7.2m）で、山間部では2間（3.6m）であったとの指摘もある（武部2003）。なお、焼場遺跡（21）の東海道の前身と推測される幹線道路では、丘陵地を通過する地点の路面幅は3.0mであった。このように、五街道においても、路面幅は立地条件等により左右され、一定ではないものだったのだろう。

#### ②脇街道など

平坦な路面では、最大で上中・西屋敷遺跡（24）で4.8mあり、廻間遺跡（23）では推定で6mの規模となる。幅が狭いのは近世山陰道推定地の荒磯谷地区（46）での1mである。路面に傾斜はないが、山間地に立地する地区であり、幅員を確保することが困難な場合であるためであろう。同様に路面の傾斜はないが、山間地に位置する近世熊野街道（34）では2mの道幅が確認されている。平坦な路面として22例を示した。各事例での確認できた最大幅では、2m未満が3例、2m以上4m未満の事例が10例、4m以上が6例、不明が3例となった。おおよその傾向として、2mを越える幅員が比較的多いことが分かる。

特に近隣の事例として、水上・本開発遺跡（27）を挙げておきたい。ここでは近世北陸道の下街道が検出されており、17世紀中頃の整備期には1.5~1.8m、その後2.7mへ拡張される。また、水橋金広・中馬場遺跡（富山市教育委員会2001）では16世紀末~17世紀前半の2.7~3.0m幅の道路が検出され

ている。周辺地域でも近世段階に、こうした規模の道路が形成されていた様相が分かる。

勾配がある傾斜路では、最大幅は名木沢櫛跡（6）で検出された近世羽州街道が約6mある。調査区では平坦な路面が10m程の長さで検出されるが、調査区外に街道の続きが22.8%の勾配をもって段丘を登っていく。遺跡が最上川に隣接し、河川・陸上交通の要衝であることが、路面規模にも反映されていると思われる。一方、幅が狭いのは近世山陰道推定地のカモト地区（46）における0.3mであるが、急斜面に位置しており、崩落や流出した可能性がある。近世山陰道推定地では概ね2mの道幅を確保しようとしたと指摘されている。勾配のある路面として25例を示したが、最大幅で2m未満の事例が7例、2m以上4m未満が11例、4m以上が7例となった。なお、勾配は立地条件により異なり、2.4%の蘿野遺跡（1）から近世山陰道推定地の原地区（46）の40%まである。

これらの事例は、線的な広がりを持つ道路の一部分における路面幅であるが、勾配の有無に関わらず立地条件に応じて2mを越える路面幅が確保される傾向があったことを指摘できよう。SF3は平坦な段丘面に登り切る寸前の位置にあり、傾斜地にありながらも東道の中においては比較的路面幅を確保しやすい条件を満たしていたと思われる。

#### B 路面上のピット群について

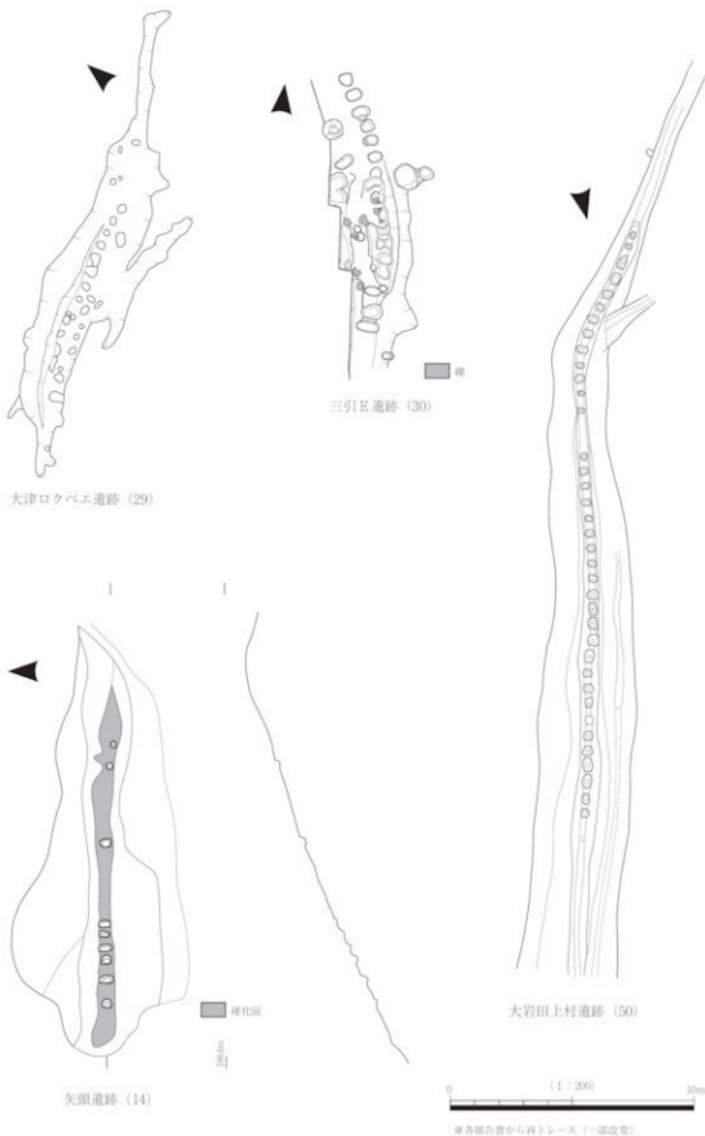
SF3の路面上で検出されたピット群については、波板状凹凸面の中でも円形の浅い土坑が一定間隔で並ぶIV群（近江1995）に相当すると考えられる。こうした構造は五街道の事例では確認されなかった。その他の街道や主要幹線道においても事例は少ない。近江氏による検討では主に中世以前の事例が用いられていたが、波板状凹凸面を伴う道路は「圧倒的に生活道であるものが多い」と指摘されており、そうした傾向が近世にも続いている可能性がある。

以下ではピット群の事例を見ていく。なお、事例が多くないため、街道や主要幹線道以外や、一部中世段階のものも含めて提示する（第72図）。

大津ロクベエ遺跡（29）では、勾配5.6%で幅12mの道路状遺構の底面に円形・楕円形ピットが0.5～0.7mの間隔で検出される。硬化面は無く、底面がそのまま路面であったとされる。矢頭遺跡（14）では斜面を段切りし、その底面にピット列が並ぶ。幅狭い段階状を呈し、40.5%の勾配を持つ。三引E遺跡（30）は中世の事例である。道路もしくは道路側溝と推測される複数の溝が検出され、それらの底面に円形・楕円形のピットが連続する。この内、3.5%の緩い勾配を持つSD32Nは溝自体が道路となる可能性がある。ただし、平坦な箇所に位置する他の溝でもピット列が形成されており、路面勾配に関わらずそうした造作がなされていたことを示す。大岩田上村遺跡（50）は中世の事例である。勾配5%の切り通し状となった遺構の底面が硬化しており、その下から楕円形のピット列が検出された。路面形成の基礎工事、あるいは登坂のための足掛かりの可能性も指摘されている。

以上のようなピット群が検出された事例では、ピットによる凹凸面がそのまま路面となる場合と、硬化面下で検出されるような基礎工事に関連すると考えられる場合に分かれる。SF3では廃絶段階の路面上にはピット群や溝・段差がある状態だったと考えられ、凹凸のある路面であった点は前者と同様だが、ピット群が2～3列で規則的に並んだ点が特徴的である。また、SF3のピット群は浅く、柵や杭列等の構造物があった可能性も考えにくいくことから、別の性格を考える必要がある。

こうした路面上のピット群については、重量物を運搬する際に用いる梱子の支点や足を踏ん張る為の穴等の諸説がある。その内、牛方の活動という東道の特徴を念頭に置いた場合、興味深いものとして牛馬歩行痕説がある（東2003）。これによると、ピットなどにより形成された凹凸面の間隔が0.6～0.7mで牛馬の歩幅と同等であることや、絵画資料や現在の牧場での観察などが根拠とされており、坂



第72図 道路状遺構で検出されたピット群

の上りはじめと水の溜まりやすい低い部分に生じやすいとされる。一方、SF3のピット群は約1m間隔で、坂を登り切って平坦面に移行する位置にあることから、条件が一致しない点もある。

もう一つ、東道の特徴である歩荷の利用を考えた場合、歩荷輸送の道具である荷杖が注目される。歩荷の歩行速度は遅く、短い距離を歩いては休憩を入れ、また歩くことを繰り返す。野麦峠の事例では、一度の歩行距離は20～30間（約36～54m）程度であったとされ、休憩時には背負った荷物の下部に当てて支えるために荷杖が不可欠な道具であった（胡桃沢2008）。こうした荷杖の先端を休憩時あるいは登坂時に、安定して路面に維持させるため、ピットが機能した可能性もある。ただし、そうした荷杖の利用に明確な凹みの存在やそれらの規則的な配置が必要であったのか明かでない点もある。牛方・歩荷の往来という東道の特徴を踏まえ、ピット群を積極的に評価するならば、こうした性格も想定できようが、現段階では各地の諸例やこれまでの研究成果においてもピット群の性格は明確でない場合が多い。ここでも可能性の一つとして示すに止め、今後の検討課題としておきたい。

### （3）まとめ

小糸尾萩野遺跡の道路状遺構SF3は、遺構の時期や位置から飛騨街道東道の一部である可能性が高いが、その規模は文献史料による記録と乖離があった。これに関して、各地の街道等の事例を検討したところ、近世全般の傾向としてSF3と同等規模の道路整備が認められた。また、SF3と同様に鉱山経営に関わり山間部を通る道路でも場所によっては2mを越える路面幅が認められた。例えば石見銀山に関係する梨ノ木坂遺跡（39）では17世紀初め頃から利用され、1.7～2.3mの路面幅が確保されている。また、現況の踏査からではあるが、鞆ヶ浦道（40）では0.5～2.4m、温泉津沖泊道（41）では0.8～4.3mの路面幅が確認されている。小糸尾萩野遺跡周辺では、東道沿いのみならず飛越国境付近には多くの鉱山が存在する。これらは、「16世紀後半から17世紀初頭にかけての鉱山開発盛期にあっては、対外交易のため多くの金銀が必要とされ、これが鉱物資源開発の一連のブームともいえる状況を招來した」（原田2011）と言われる社会情勢下で開発が推し進められた。こうした近世初めを中心とした鉱山の盛期、さらに比較的路面幅を確保し易い立地条件が重なり、SF3が整備されたものと思われる。

SF3における路面幅の確保は、東道の輸送形態に関わる可能性もある。SF3は段丘上へ登る、もしくは下位の段丘へ下る傾斜路であり、歩荷や牛方の通行にとっては負担の大きい場所である。特に牛方の通行では、牛同士がすれ違う際に角で突きかからないようにすることが必要であった（胡桃沢2008）。安全な通行の為には路面幅がある程度必要とされたのであろう。なお、路面上で検出されたピット群については、牛方・歩荷の通行に関わる可能性も示したが、現時点では不明とせざるを得ない。近世での道路状遺構の調査例、特に山間部の傾斜路における事例の増加を待って再考する必要があろう。

こうして整備されたSF3であったが、鉱山の衰退や西道利用が活発になる時期には放棄され、埋没していく。物資輸送による利益は減少し、道路の維持管理に見合うものではなくなり、より簡素な道を利用して東道での飛越問流通は続いていったと考えられる。

（青山 晃）

## 引用・参考文献

- 近江俊秀 1996「道路構造の構造－波板状凹凸面を中心として－」『古代文化第47巻第4号』(財)古代学教會
- 大沢野町誌編纂委員会 1968『大沢野町誌 上巻』
- 大沢野町史編 5.委員会 2005『大沢野町史』
- 大山の歴史編纂委員会 1990『大山の歴史』
- 胡桃沢勸助 2008「牛方・ボッカと海産物移入」岩田書院
- 高瀬一深 1974「能登堀の他領進出と深戸内堀」『日本歴史311号』日本歴史学会
- 武部健一 2003『道Ⅱ』法政大学出版局
- 田中啓爾 1957「近世および魚の移入路－鉄道前夜の内陸交通」古今書院
- 富岡儀八 1978「近世飛驒の堀道」『歴史地理研究と都市研究(上)』藤岡謙二郎先生退官記念事業会
- 富山県 1982『富山県史 通史編Ⅲ 近世 上』
- 富山県 1983『富山県史 通史編Ⅳ 近世 下』
- 富山県教育委員会 1979『富山県歴史の道調査報告書－飛驒街道(その1)－』
- 富山市教育委員会 2001『水橋金廣・中馬場道路発掘調査報告書』
- 原田洋一郎 2011「近世日本における航路資源開発の展開－その地域的背景－」古今書院
- 東 和幸 2003『波板状凹凸面牛馬歩行軌跡再論述』『縦文の森から 創刊号』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 細入村史編纂委員会 1987『細入村史 通史編Ⅰ 上巻』
- 丸山雍成 1989「日本近世交通史の研究」吉川弘文館
- 三井金属鉱業株式会社修史委員会 1970『神岡鉱山史』
- 矢ヶ崎 孝雄 1960「神通川筋飛越間の江戸末期における商品流通」『人文地理』12巻3号
- 第27表 文献一覧**
- 1 青森県教育委員会 2003『毛上山道路・蘆野遺跡』
  - 2 青森県教育委員会 2010『上野道路Ⅱ』
  - 3 (財)岩手県文化振興事業団 1985『曲田Ⅰ 道跡発掘調査報告書』
  - 4 大衡村教育委員会 2009『奥州街道・大衡一里塚はがき』
  - 5 (財)山形県文化財センター 2010『上の寺道跡第1・2次発掘調査報告書』
  - 6 山形県教育委員会 1993『名木坂跡発掘調査報告書』
  - 7 (財)山形県文化財センター 2006『小松原廻跡・長者屋敷跡・坂ノ上道路発掘調査報告書』
  - 8 (財)茨城県教育財団 2003『中山道跡』
  - 9 (財)とちぎ生涯学習文化財団 2006『下土道跡』
  - 10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998『白井遺跡群－中世・近世編－(白井丸岩遺跡・白井北中道道路)』
  - 11 (財)印旛郡市文化財センター 1986『千葉郡印旛郡八街町 大間大曲道路・柳沢沢・御成街道発掘調査報告書』
  - (財)印旛郡市文化財センター 1988『千葉県印旛郡八街町 御成街道Ⅱ 発掘調査報告書』
  - 12 平塚市教育委員会 2002『厚木道道路』
  - 13 (公財)かながわ考古学財団 2013『馬場総内道跡』
  - 14 (財)かながわ考古学財団 1997『宮畠道跡(No.34)矢頭道路(No.34)大久保道路(No.36)』
  - 15 (財)かながわ考古学財団 2009『三ノ宮・下木津根遺跡』(公財)かながわ考古学財団 2012『三ノ宮・下木津根道路Ⅱ』
  - 16 (公財)かながわ考古学財団 2013『上柏稻・石倉中道跡』
  - 17 山梨県教育委員会 2000『長峰岩跡』
  - 18 山梨県教育委員会 1991『獅子之前道跡発掘調査報告書』
  - 19 山梨県教育委員会 2012『町屋口遺跡』
  - 20 山梨県教育委員会 1998『鷹沢河岸跡』
  - (財)静岡県埋蔵文化財研究所 1994『焼場道跡A地点』
  - 22 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992『勝川道跡Ⅲ』
  - 23 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990『廻間遺跡』
  - (財)愛知県埋蔵文化財センター 2004『上中・西屋敷遺跡』
  - 25 神林村教育委員会・山武考古学研究所 2002『大屋道跡群 前坪道路・鋼鉄道路・ヶケ田道跡・天王前道路・水口沢道路』
  - 26 石川市教育委員会 1994『歴史の道(旧松本街道)』発掘調査報告書
  - 27 大島町教育委員会 2000『水上・本開発道路』
  - (財)富山県文化振興財團 2007『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦道路・近世北陸道道路発掘調査報告書』
  - 29 石川県立埋蔵文化財センター 1993『大津ロクエベ遺跡』
  - 30 (財)石川県埋蔵文化財センター 2001『田舎浜町三日E道跡・三引F道跡』
  - 31 忠霊社 1992『歴史の道 中山道 保存整備事業報告書』
  - 32 (財)岐阜県文化財保護センター 2001『中山道』
  - (財)岐阜県文化財保護センター 2000『南整理遺跡』
  - 34 三重県埋蔵文化財センター 2009『旅籠江戸廻跡・近世熊野街道路発掘調査報告書』
  - 35 京都大学埋蔵文化財研究センター 1979『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
  - 京都大学埋蔵文化財研究センター 1981『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
  - 36 四条畷市教育委員会 2011『清瀧街道路発掘調査報告書』
  - (財)広島県教育事業団 2003『近世山陽道路・日向・里塚・石立廻窓跡』
  - 38 大山町教育委員会 2010『町内道路発掘調査報告書Ⅱ』
  - 39 烏娘県教育委員会 2010『梨ノ木坂道跡・廢寺古墳群・庵寺道跡Ⅱ』
  - 40 烏娘県教育委員会 2003『石見銀山街道・辆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書』
  - 41 瑞穂町教育委員会 1993『石州街道発掘調査報告書』
  - 42 浜田市教育委員会 2006『唐谷坂道』
  - 43 津市教育委員会 2011『浜田三次往還・道平道跡はか発掘調査報告書』
  - 43 津市教育委員会 2011『浜田三次往還・道平道跡はか発掘調査報告書』
  - 44 舟和野町教育委員会 2008『山陰道(野坂町越え・徳城町越え)』
  - 45 島根県教育委員会 2011『近世山陰道推定地(力石地区・荒磯谷地区・原地区・カモト地区)・片良ケ平道跡・馬ノ太郎道跡・北ヶ迫道跡』
  - (財)山口県ひとづくり財团 2009『三見はうろく廻跡・はうろく茶屋跡』
  - 47 福岡県教育委員会 1999『堀池口ヶ坪道跡』
  - 48 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『教塚道跡・橋屋遺跡・大郎道跡』
  - 49 宮崎県埋蔵文化財センター 2003『大岩田上村道跡』

第27表 近世道路状況の諸例（1）

施設名	地名	通称	道筋名	通石	路面(木)	路面(土)	路面(石)	面積(%)	面積	時期	施設は古跡など
高砂橋	高砂	通石	第1号通石	42~45	27~25	50%~1	2%	近世	近世以前の通路の一部。時代が進むにつれて、16世紀(1560~72)。	9	
音森橋	音森	通石	通石	14~	63~66	0.4~0.5	4%	近世	音森橋(音森の川の上に架かる木橋)。	2	
音森橋	音森	通石	通石	26	0.2~0.7	4~9%	4~9%	近世	音森橋(音森の川の上に架かる木橋)。	3	
音森橋	音森	通石	○ SOKA 通石	28~37	0.28~1.22	0.1~0.5	24~40%	近世	音森橋(音森の川の上に架かる木橋)。	4	
山形橋	山の手	通石	○ SOKA 通石	0.1~1.4	0.5~1	0.1~0.5	10.0%	中世~近世 古代	山形橋(山の手川の上に架かる木橋)。	5	
山形橋	山の手	通石	通石	1~6	80~	80~	22.0%	近世 不詳	山形橋(山の手川の上に架かる木橋)。	6	
山形橋	山の手	通石	通石	33~36	0.1~0.5	21~25	21%	近世 不詳	山形橋(山の手川の上に架かる木橋)。	7	
通石	通石	通石	通石	3~6	0.06~	6~9%	9~10%	近世	通石(土面の通路)。	8	
通石	通石	通石	通石	32~	0~4	0~13%	0~13%	近世	通石(土面の通路)。	9	
通石	通石	通石	通石	4~	0~13	0~13%	0~13%	近世	通石(土面の通路)。	10	
通石	通石	通石	通石	2~	80~	80~	20.0%	近世	通石(土面の通路)。	11	
通石	通石	通石	通石	11~15	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	12	
通石	通石	通石	通石	17~23	0.21~0.72	0.04~0.13	0.04~0.13	近世	通石(土面の通路)。	13	
通石	通石	通石	通石	20~40	0~11	0~11%	0~11%	近世	通石(土面の通路)。	14	
通石	通石	通石	通石	33~39	0~19	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	15	
通石	通石	通石	通石	40~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	16	
通石	通石	通石	通石	47~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	17	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	18	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	19	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	20	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	21	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	22	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	23	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	24	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	25	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	26	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	27	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	28	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	29	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	30	
通石	通石	通石	通石	51~55	0~15	80~	80~	近世	通石(土面の通路)。	31	

第27表 近世道路状構の諸例（2）

都道府県名	通名	通名	通名(m)	通名(m)	通名(m)	通名(%)	利用	新造も既存もど	備考	
石川県	30 五郎通	30 SUD33	—	5.40	105	13%	歩道 1.4m 平野 1.5m	溝を走る狭い人馬共用道路・耕作地の小分が隣接して並ぶ。	30	
福井県	31 小山道	○ 小山道	24	6.40	105	13%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路狭く斜面の上に開けた狭い人馬共用道路。	31	
福井県	32 小山道	○ 小山道	6~6.5	6~6.5	104	28%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路狭く斜面の上に開けた狭い人馬共用道路。	32	
福井県	33 おとせ道	○ おとせ道	—	—	—	—	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路狭く斜面の上に開けた狭い人馬共用道路。	33	
福井県	34 おとせ道	○ おとせ道	2	8m	106	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路狭く斜面の上に開けた狭い人馬共用道路。	34	
三重県	28 旗山山口町定置町筋	三重郡御前町筋	2	8m	106	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路狭く斜面の上に開けた狭い人馬共用道路。	28	
奈良県	26 伏見大内町内通路 (AV26-SF1)	45	0.3	105	千原	100%	歩道 1.8m~190cm 平野	Q10川、伏見大内町の内通路	26	
奈良県	36 清水通	清永通	2.4	12~16	0.1~0.2	7.7%	歩道 1.4m 平野	通路狭く合てて歩道・平野とも狭い。	36	
近畿他	35 京都山科筋	京都山科筋	1.8~2.1	1.8~2.1	90~95	122%	歩道 170cm 平野 1.5m	一度一ノ鳥居の山科筋、歩道 103~107cm が現行です。	37	
滋賀県	39 伏見・朝日	云林寺町東	4.80	7.40	104	6.8%	歩道 1.4m 平野 1.5m	云林寺町東	39	
高島郡	29 望天坂	石舟通	1.7~2.3	0.3~0.5	105~135	26.8%	歩道 1.4m 平野 1.5m	石舟通へ向かう通路が狭い小分岐へ足跡が残るところ。	30	
高島郡	30 朝日坂	新今庄北町筋 (106~24)	5.90	104	105	100%	歩道を走る通路	通路の筋に2段の踏道がある。	40	
高島郡	31 朝日坂	新今庄北町筋 (106~24)	5.40	104	105	100%	歩道を走る通路	通路の筋に2段の踏道がある。	41	
高島郡	32 朝日坂	通路新井筋 (106~4.3)	—	—	—	—	歩道を走る通路	通路の筋に2段の踏道がある。	42	
高島郡	33 朝日坂	通路新井筋 (106~4.3)	—	—	—	—	歩道を走る通路	通路の筋に2段の踏道がある。	43	
高島郡	34 朝日坂	石舟通	2.1	7.40	104	12.7%	歩道 1.4m 平野 1.5m	石舟通へ向かう通路が狭い小分岐へ足跡が残るところ。	44	
高島郡	35 朝日坂	E10朝日坂	2.5~3.2	0.4~0.6	0.1~0.2	—	180cm 平野 1.5m	石舟通へ向かう通路が狭い小分岐へ足跡が残るところ。	45	
高島郡	36 朝日坂	吉沢通	0.7~1.4	0.60	1~9	122%	28cm 平野 1.5m	吉沢通へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	46
高島郡	37 朝日坂	吉沢通	1.2~2.8	0.15~0.2	0.1	120~200%	28cm 平野 1.5m	吉沢通へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	47
高島郡	44 丹波三木通	御田二・御田三通	0.7~1.0	8m	106	100%	歩道 11.6~20.4% 平野	御田二・御田三通	48	
高島郡	44 丹波三木通	御田二・御田三通	0.9~1.0	8m	106	100%	歩道 11.6~20.4% 平野	御田二・御田三通	49	
高島郡	45 朝日坂	青丸通	2.0~4.0	0.25~0.45	0.10~0.45	85~100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	青丸通へ向かう通路が狭い小分岐へ足跡が残るところ。	50	
高島郡	45 朝日坂	櫻坂	2.6~4.0	0.4	4.80	95~98%	歩道 1.4m 平野 1.5m	櫻坂へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	51
高島郡	46 朝日坂	近江山城東方石垣	1.2~2.4	8m	106	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	近江山城東方石垣へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	52
高島郡	46 朝日坂	近江山城東方石垣	1.2~2.4	0.4~0.6	0.1	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	近江山城東方石垣へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	53
高島郡	47 朝日坂	近江山城東方石垣	1.6~2.5	0.5~1.5	0.1~0.5	3.5~12.5%	3.5~12.5% 平野 1.5m	近江山城東方石垣へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	54
高島郡	48 朝日坂	近江山城東方石垣	0.3~2.8	8m	106	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	近江山城東方石垣へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	55
高島郡	49 朝日坂	通路	2	0.2~0.5	0.05~0.17	11.1%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	56
高島郡	50 朝日坂	S03	0.90	4.00	9m	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	57
高島郡	50 朝日坂	通路	1.2~2.0	8m	106	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	58
高島郡	50 朝日坂	通路	1.6~2.0	8m	106	100%	歩道 1.4m 平野 1.5m	通路へ向かう通路	通路の筋に2段の踏道がある。	59
○ 未開通	51 朝日坂	通路	—	—	—	—	—	未開通の朝日坂へ向かう通路	未開通	60
高島郡	52 朝日坂	通路	—	—	—	—	—	未開通の朝日坂へ向かう通路	未開通	61
高島郡	53 朝日坂	通路	—	—	—	—	—	未開通の朝日坂へ向かう通路	未開通	62

注記：歩道 1.4m 平野 1.5m

歩道 1.5m 平野 1.5m

歩道

歩道 1.5m 平野 1.5m

歩道



写真1 主な石器石材の顕微鏡写真（1）

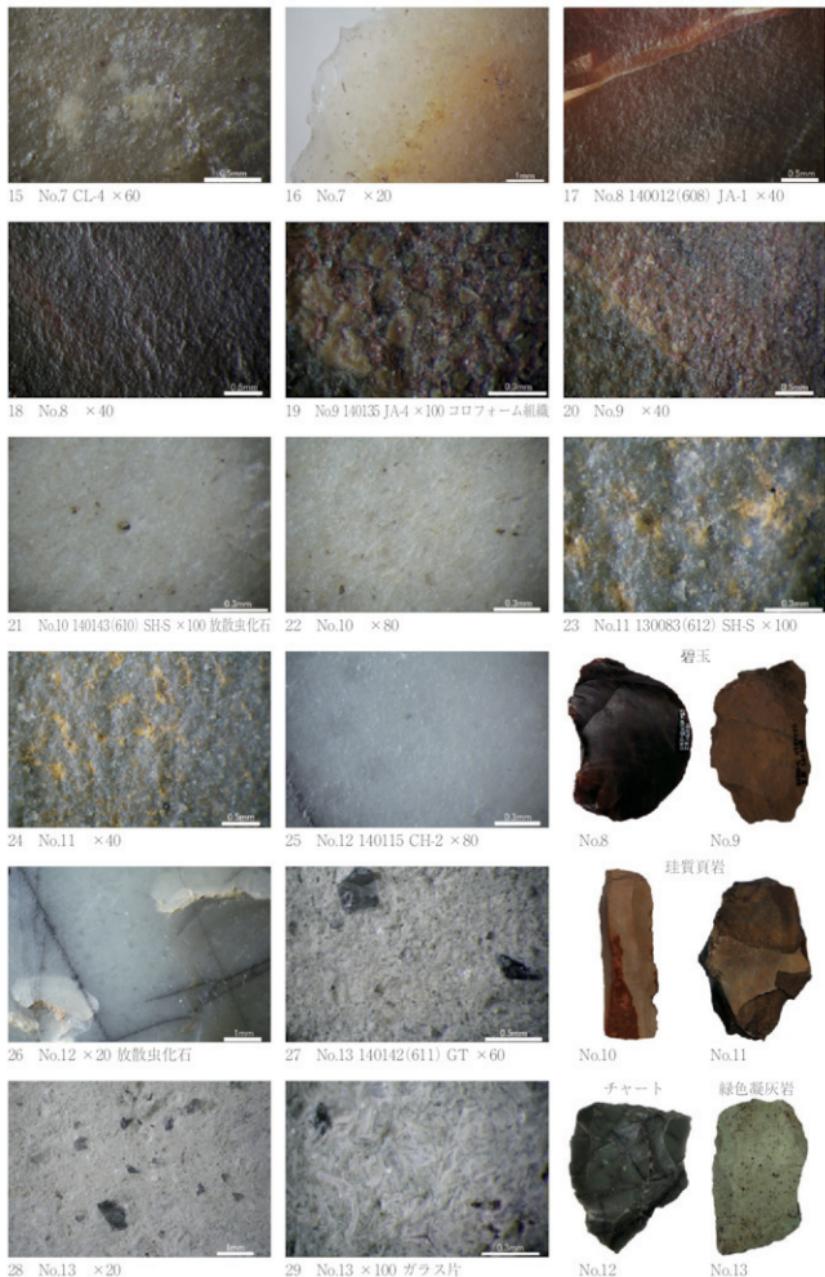


写真1 主な石器石材の顕微鏡写真（2）



42 No.20 140015 TRC ×100 緑閃石～透閃石

写真1 主な石器石材の顕微鏡写真 (3)



写真1 主な石器石材の顕微鏡写真 (4)



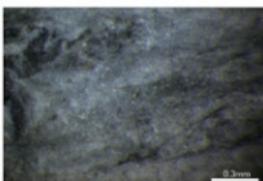
写真1 主な石器石材の顕微鏡写真（5）



写真1 主な石器石材の顕微鏡写真 (6)



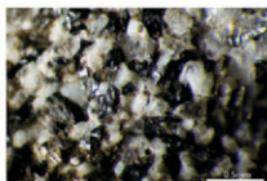
86 No.42 CON ×20



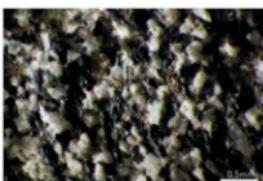
87 No.43 130072 SCH ×80



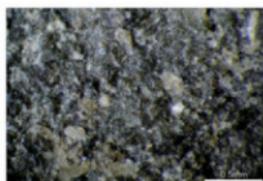
88 No.43 ×20



89 No.44 140004(624) GNS ×60



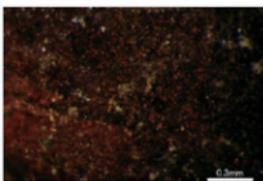
90 No.44 ×40



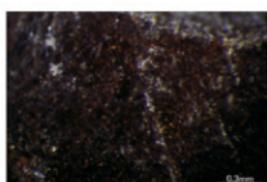
91 No.45 130084(615) DIA ? ×60



92 No.45 ×20



93 No.46 140144(601) AMB ×80



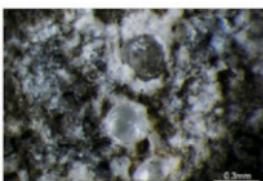
94 No.46 ×80



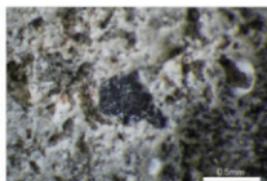
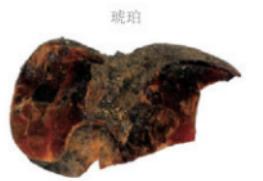
95 No.46 ×20



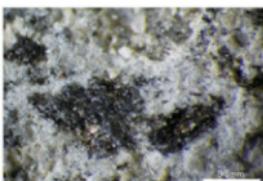
96 No.46 ×20



97 No.47 130077(645) TU ×80



98 No.47 ×60 黒雲母



99 No.48 130088(634) AN-C ×60

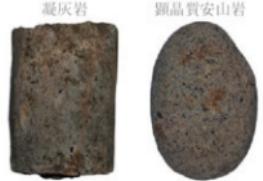


写真1 主な石器石材の顕微鏡写真 (7)



写真1 主な石器石材の顕微鏡写真 (8)

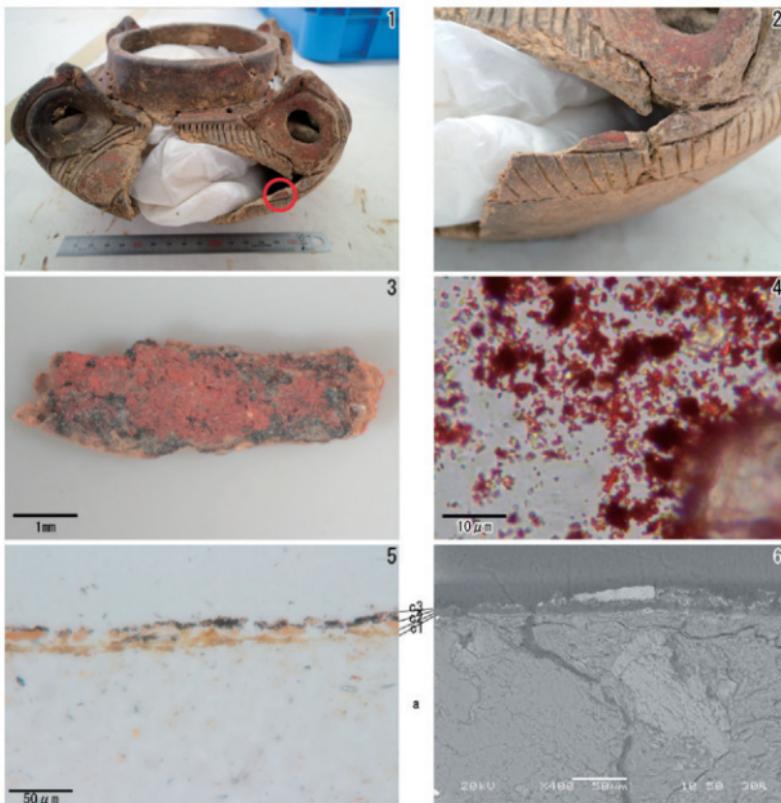


写真2 土器外面赤色塗膜の塗膜構造

1. 分析対象土器
2. 試料採取位置拡大
3. 採取試料
4. 赤色顔料の生物顕微鏡写真
5. 塗膜断面の生物顕微鏡写真
6. 塗膜断面のSEM反射電子像

図版1



遠景

1. B・C・D地区遠景（南から） 2. A地区堅穴建物・道路状遺構（北東から）

**竪穴建物・土坑墓**

- |                           |                       |                           |
|---------------------------|-----------------------|---------------------------|
| 1. SI400・SI401遺物出土状況（東から） | 2. SI400縄文土器出土状況（東から） | 3. SK203・SK204遺物出土状況（南から） |
| 4. SK204縄文土器出土状況（南西から）    | 5. SK207縄文土器出土状況（北から） | 6. SK218縄文土器出土状況（南西から）    |
| 7. SK225縄文土器出土状況（南から）     | 8. SK255縄文土器出土状況（東から） |                           |

図版3

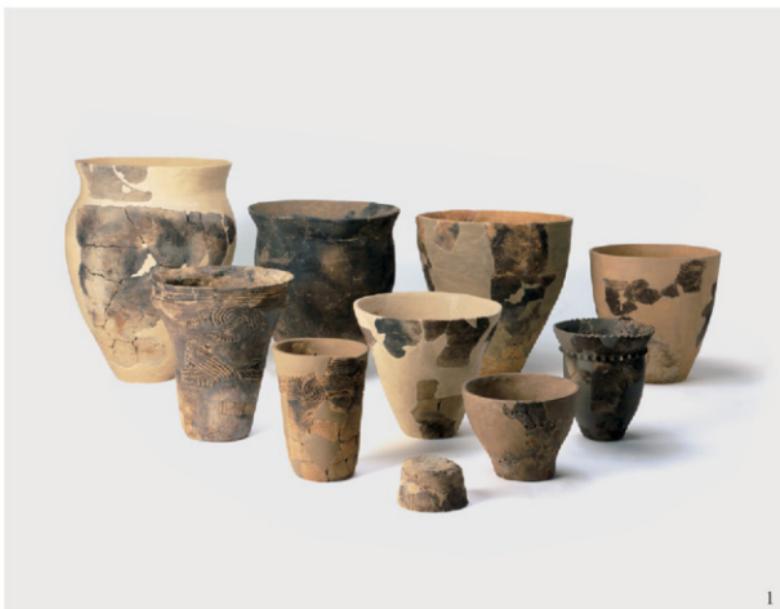


土坑墓

1. SK260縄文土器出土状況（西から）
2. SK261（北から）
3. SK265（北西から）
4. SK266縄文土器出土状況（北から）
5. SK390（南から）
6. SK390縄文土器出土状況（南西から）
7. SK391（南東から）
8. SK810縄文土器出土状況（東から）



縄文土器



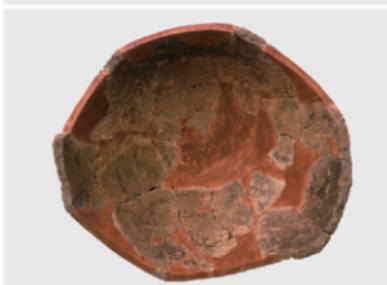
1



2

縄文土器

1. SI400出土土器 2. 土坑墓出土土器



100

89



181

縄文土器

SK207 (89) SK390 (100) 包含層



石製品・陶磁器・金属製品

SI4 (605・606) SI400 (610・611) SK772 (607) SK260 (604) SK390 (601) SD1 (701~704)  
包含層



航空写真

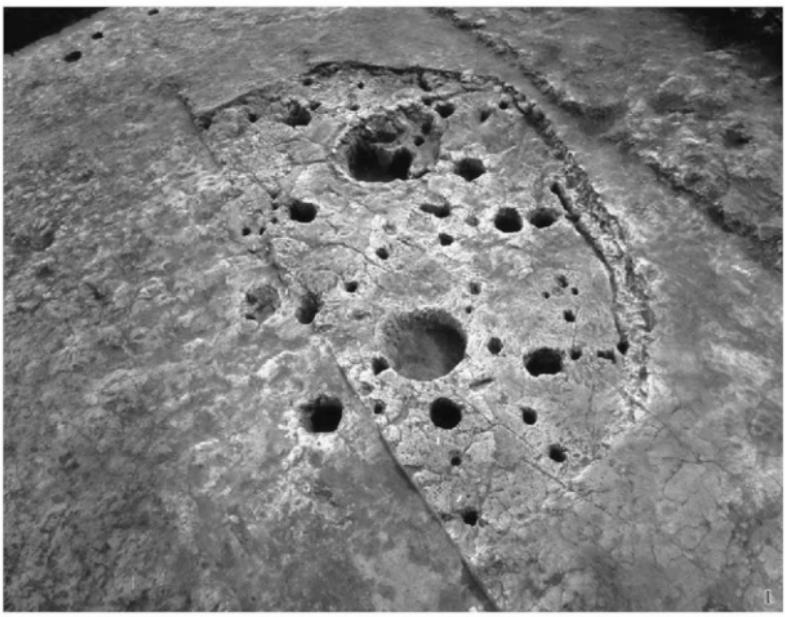
1. 1947年11月米軍撮影 2. 2001年9月国土地理院撮影

図版9



全景

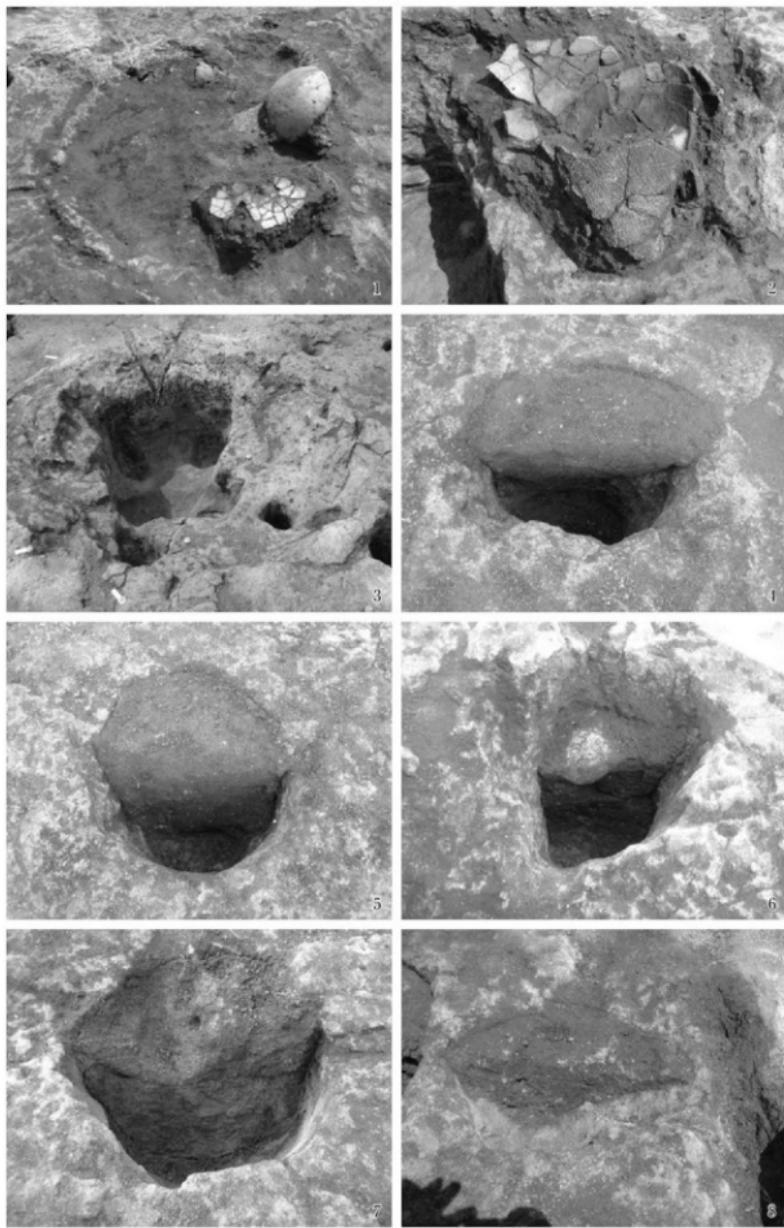
1. A地区全景（北から） 2. A地区中央の土坑群（東から）



竪穴建物

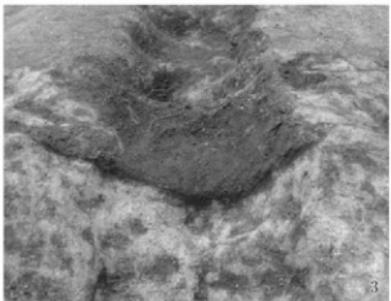
1. SI4 (南から) 2. SI4-P12縄文土器状況 (北から)

図版11



竪穴建物

1. SI4-P12検出状況（北から）
2. SI4-P12縄文土器出土状況（南から）
3. SI4-P12（東から）
4. SI4-P1（南西から）
5. SI4-P2（南西から）
6. SI4-P9（西から）
7. SI4-P11（東から）
8. SI4-P8・溝（南から）



道路状遺構

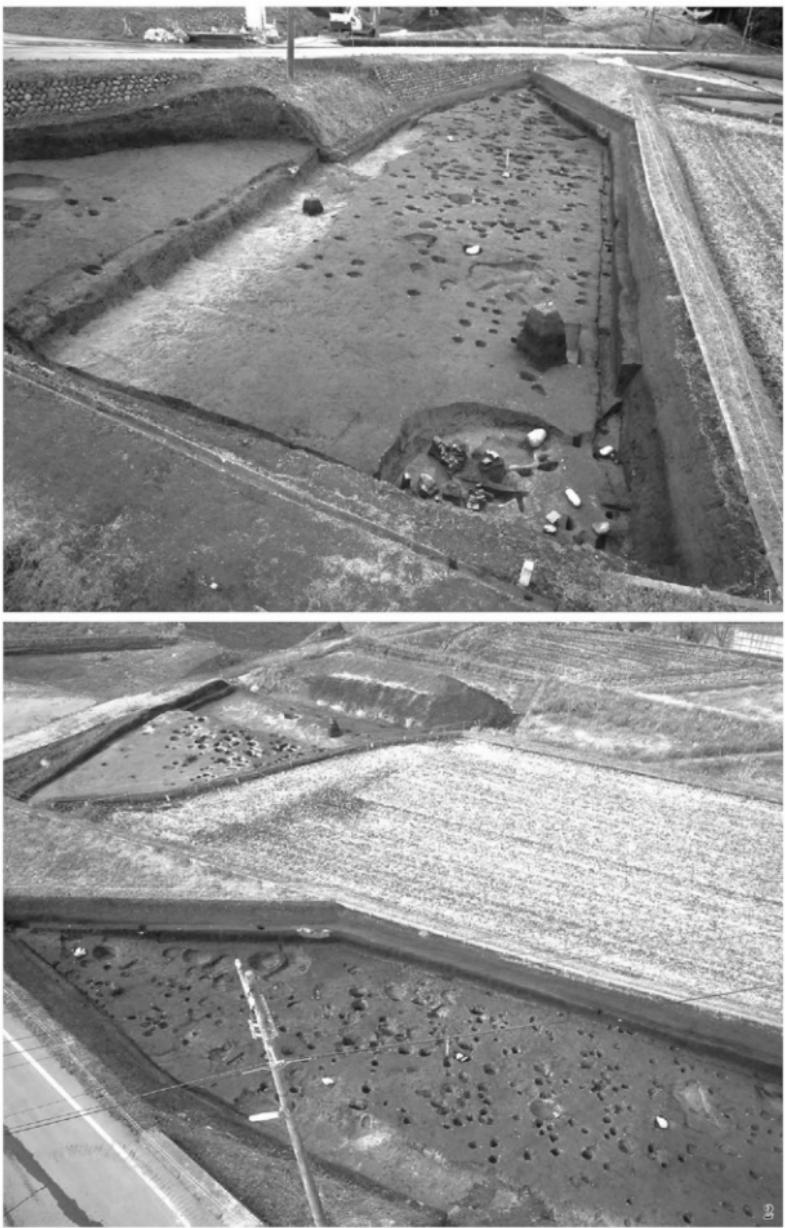
1. SF3 (北から) 2. SD1 (南から) 3. SD2 (北から) 4. SD1 (北から) 5. SF3 (東から)

図版13



全景

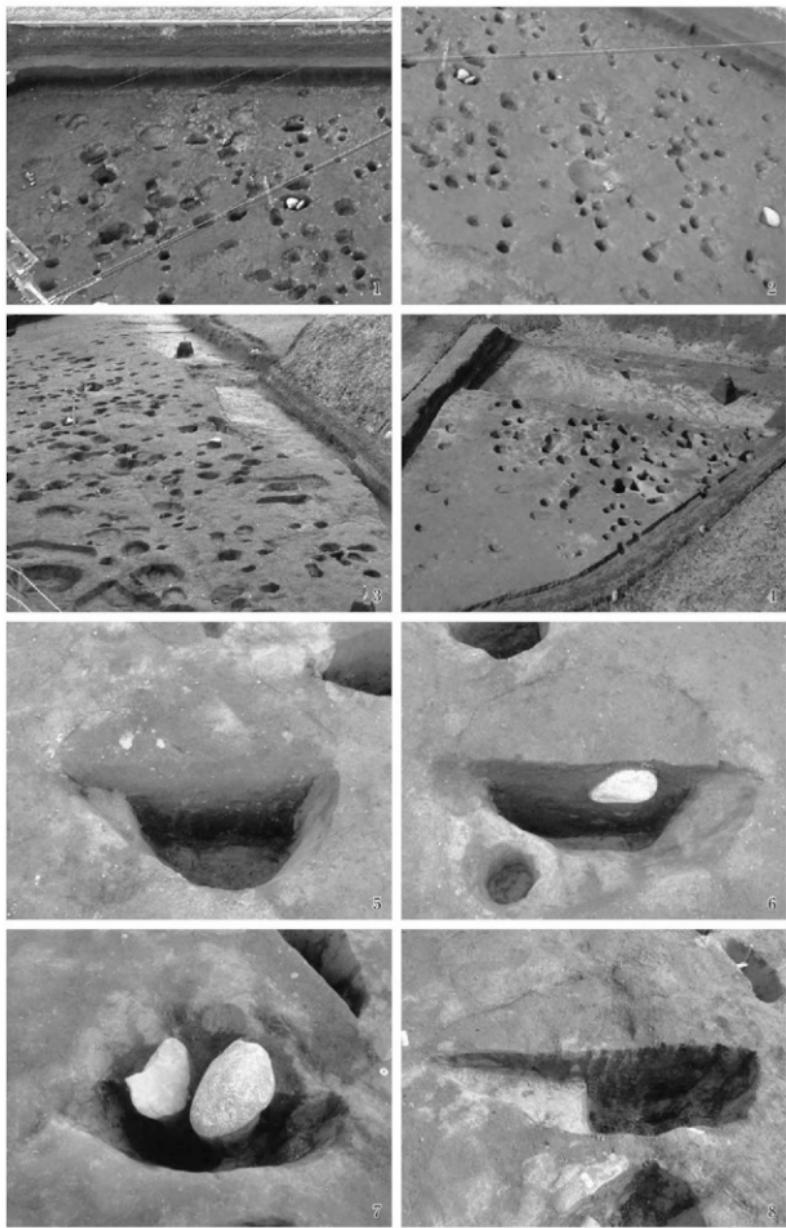
1. B・C地区全景（北から） 2. D地区全景（東から）



竪穴建物・掘立柱建物

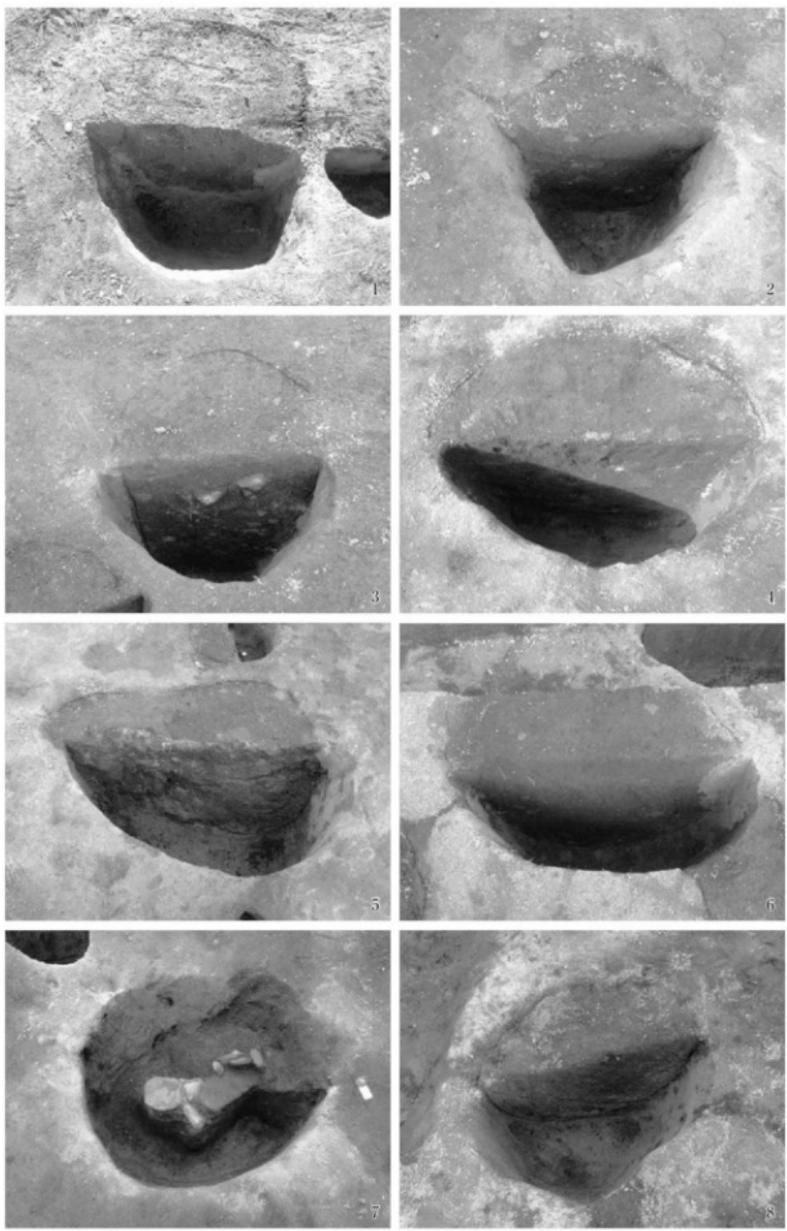
1. SI400・SI401（北東から） 2. SB1～SB9（南東から）

図版15



石立柱建物

1. SB1・SB2 (南東から) 2. SB4・SB5 (南東から) 3. SB1～SB5 (西から) 4. SB6～SB9 (南東から)  
5. SB1・SP295 (南西から) 6. SB1・SP423 (東から) 7. SB1・SP331 (北西から) 8. SB2・SP473 (西から)



## 掘立柱建物

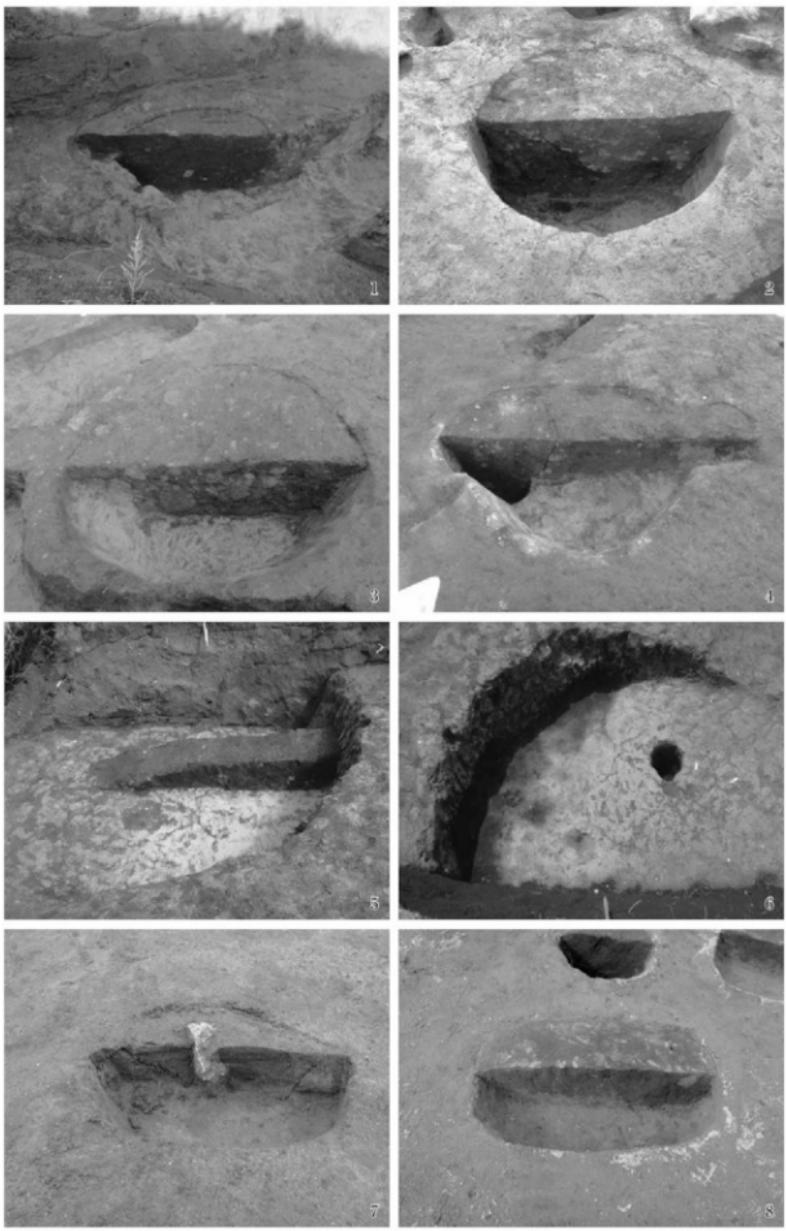
1. SB3・SP276 (北から) 2. SB4・SP345 (北東から) 3. SB5・SP398 (西から) 4. SB6・SP729 (南から)  
5. SB7・SP758 (北西から) 6. SB7・SP770 (西から) 7. SB8・SP781 (北から) 8. SB9・SP741 (南から)

図版17



土坑墓

1. 土坑墓群（南西から） 2. SK260（南東から） 3. SK260（北から） 4. SK260石器出土状況（南から）  
5. SK390（北西から）



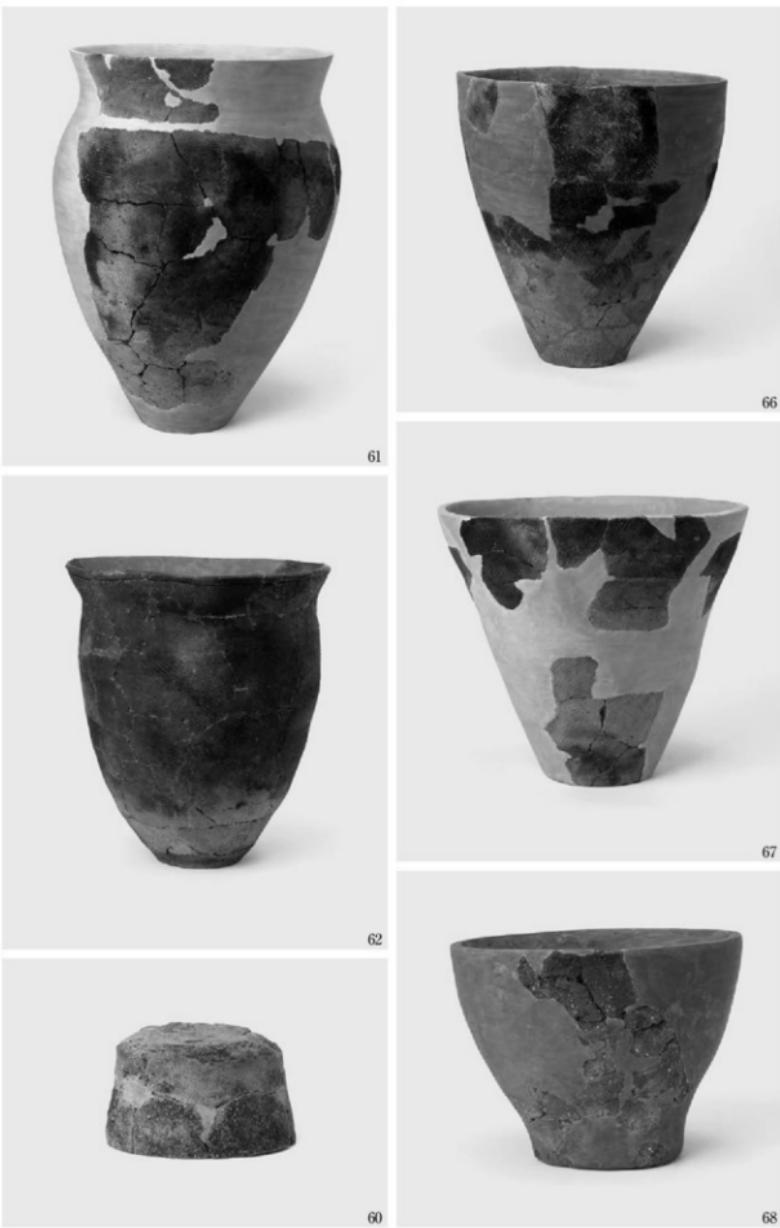
## 土坑墓・土坑

1. SK201 (南東から) 2. SK208 (北西から) 3. SK258 (北西から) 4. SK305 (北から) 5. SK59 (南西から)  
6. SK59・60 (北から) 7. SK496 (南西から) 8. SK705 (南から)



縄文土器

SI4 (11・17) SI400 (20・54・57・58)



縄文土器

SI400 (60~62・66~68)



87



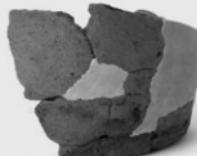
91



90



92



83



93

縄文土器

SB8 (83) SK204 (87) SK207 (90) SK218 (91・92) SK225 (93)



96



99



97



105



101



106



127

## 縄文土器

SK260 (96) SK265 (97) SK266 (99) SK319 (105) SK390 (101) SK391 (106) SK788 (127)

图版23



159



160



169



338



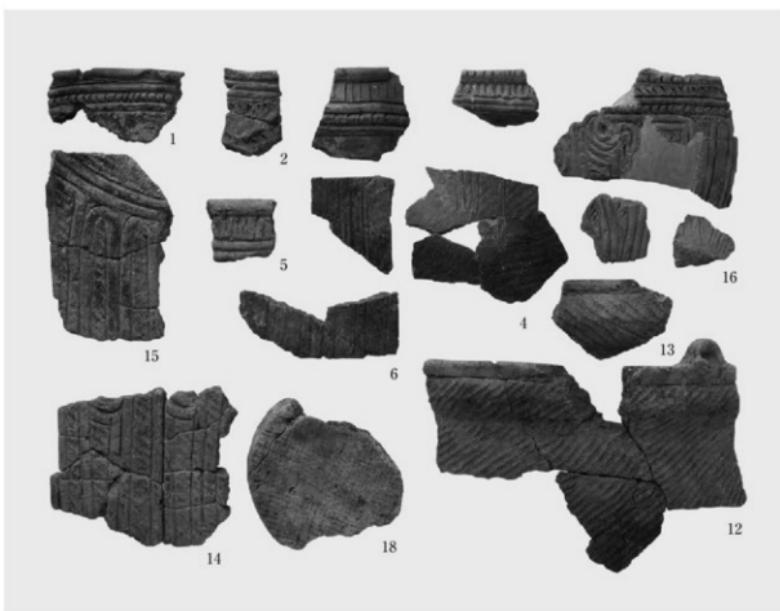
461



193



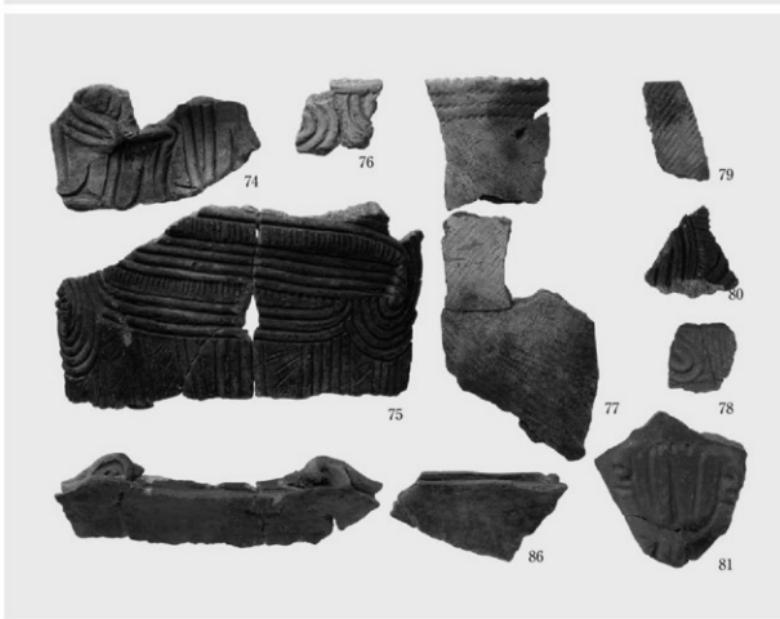
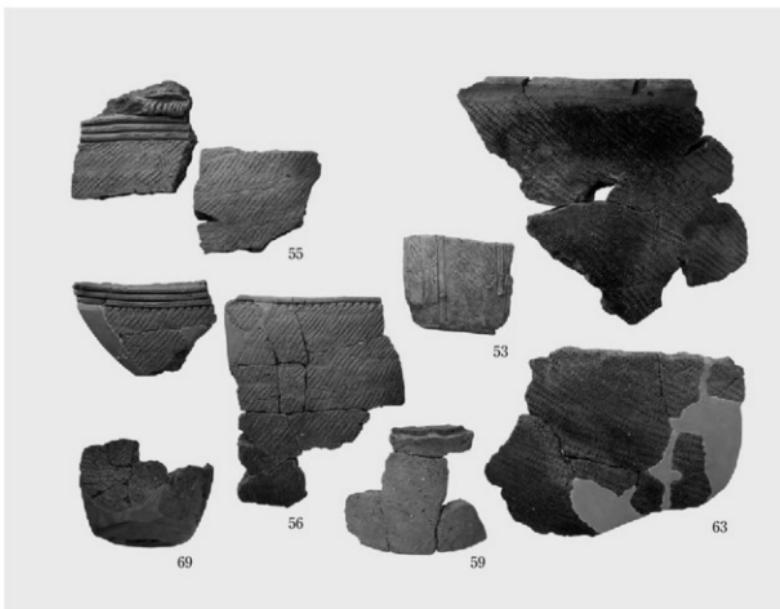
502



## 縄文土器

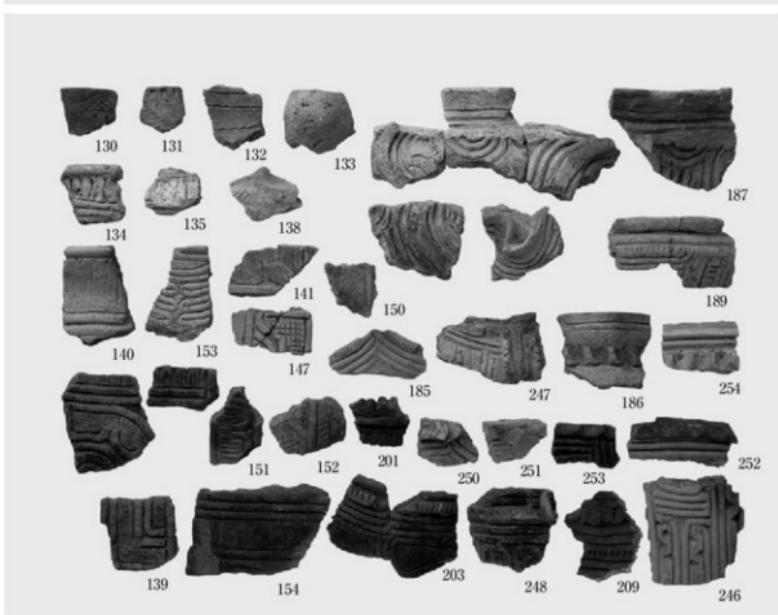
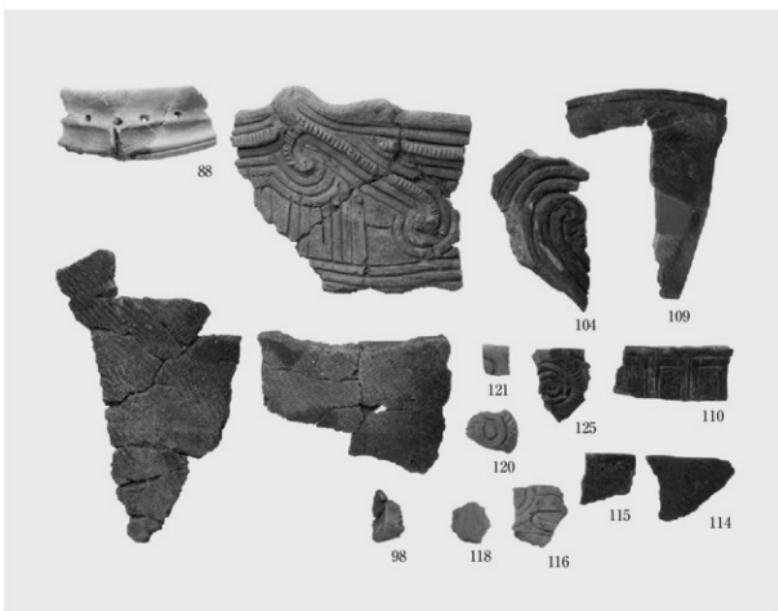
SI4 (1・2・4~6・12~16・18)

SI400 (19・21~23・25~28・32~34・36~38・43・44・46・47・49・50)



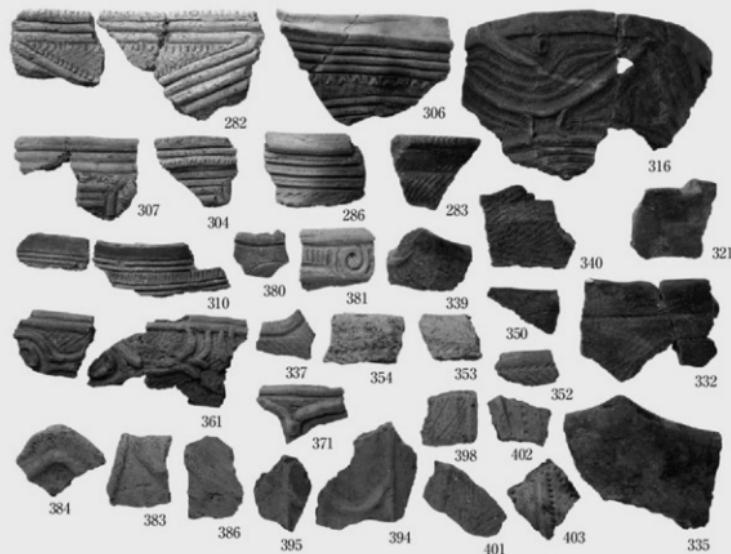
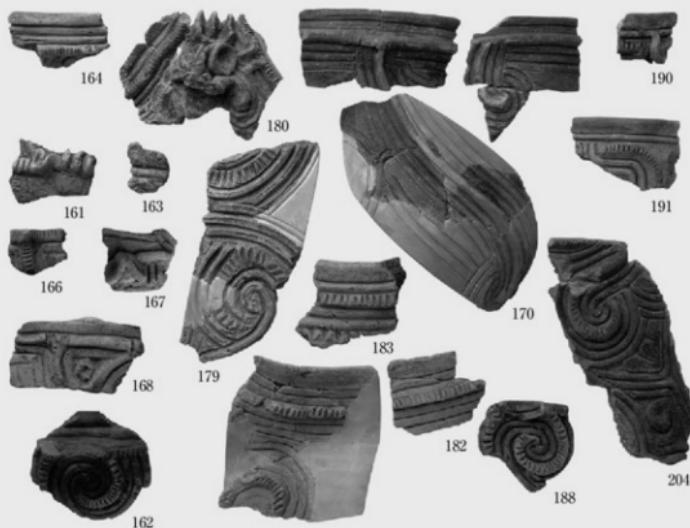
縄文土器

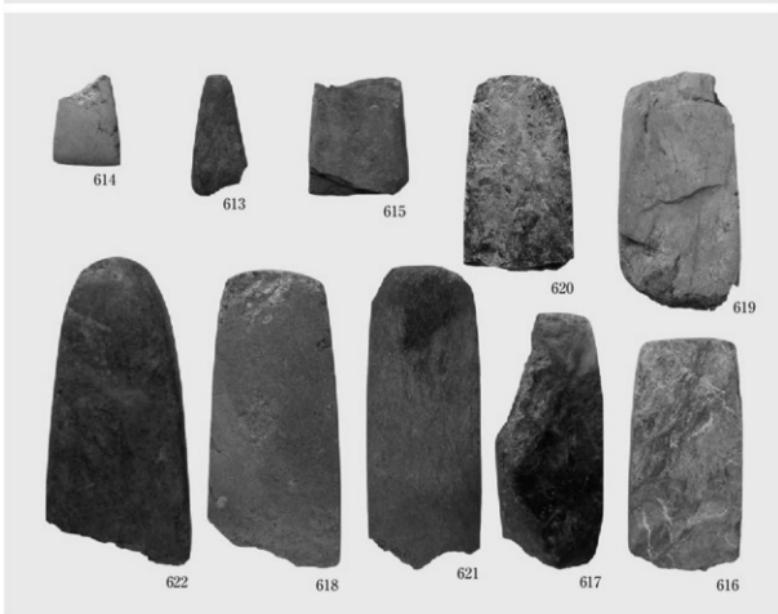
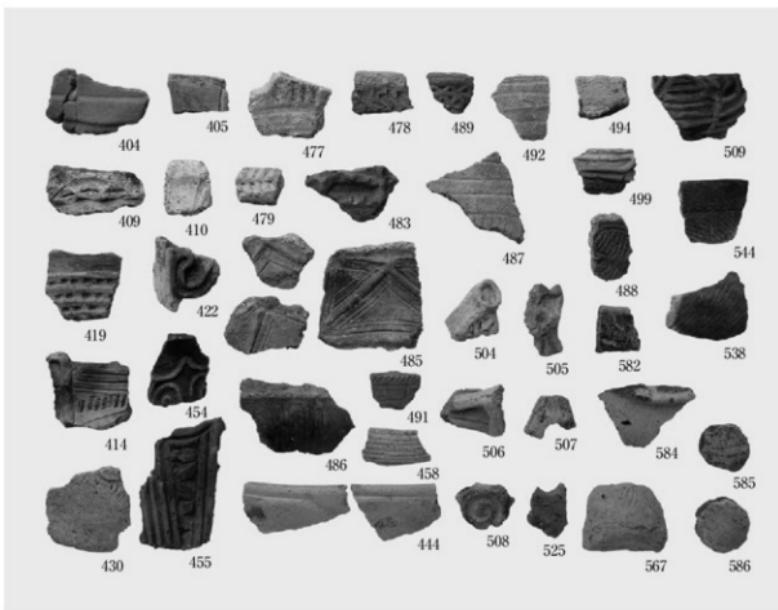
SI400 (53・55・56・59・63・69) SI401 (74～76) SP295 (77) SP423 (78) SP764 (86)  
SP796 (79) SP798・799 (80) SP798・800 (81)



## 縄文土器

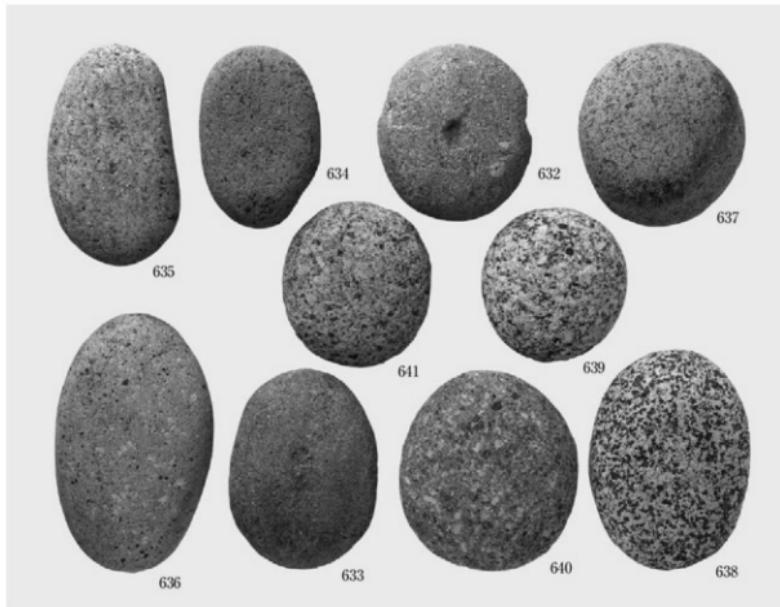
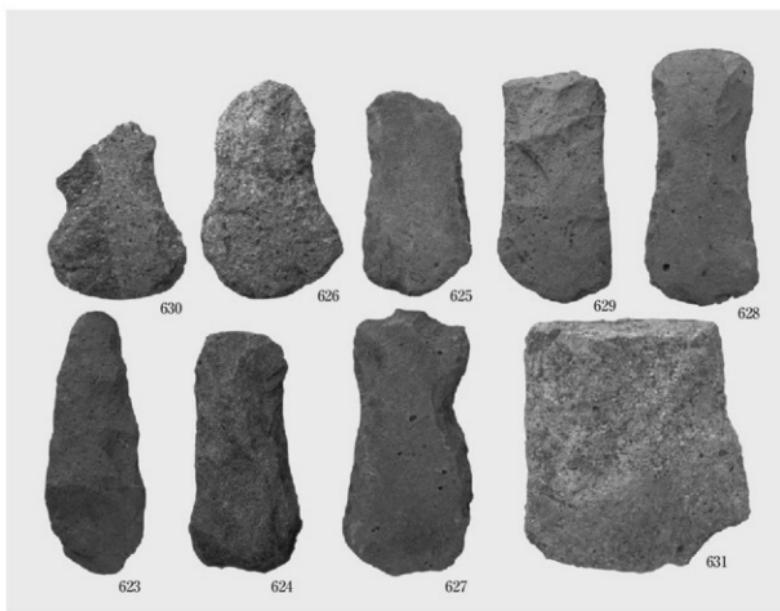
SK5 (109・110) SK201 (104) SK207 (88) SK261 (98) SK364 (114) SK403 (115)  
SK448 (116) SK495 (118) SK496 (120・121) SK761 (125) 包含層





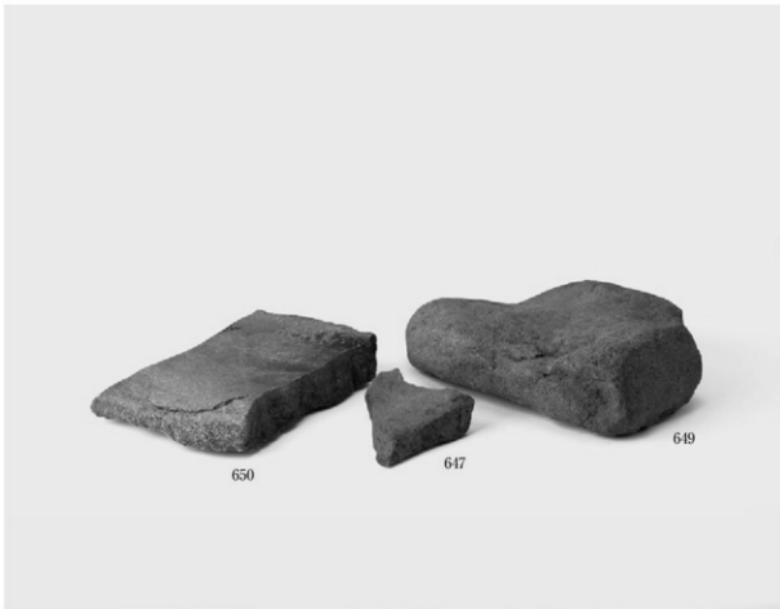
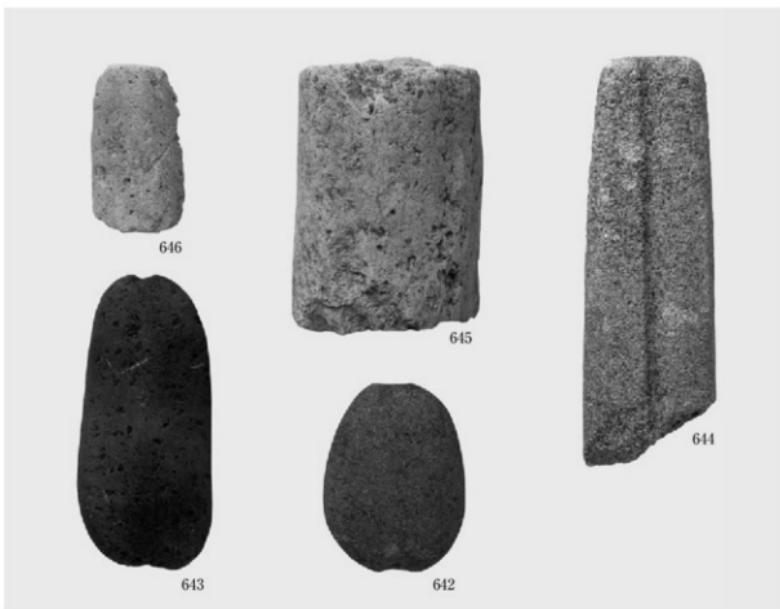
縄文土器・石製品

SI400 (619-620) SK5 (615) SD1 (613) 包含層



石製品

SI4 (633・634・640) SI400 (636・637) SI401 (638・639) SP287 (641) SK265 (635) SD1 (631)  
包含層



石製品

SI400 (647・649・650) 包含層

# 報告書抄録

ふりがな	こいとおはぎのいせきはくつちょうさはうこく						
書名	小糸尾萩野遺跡発掘調査報告						
副書名	猪谷権原道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ						
シリーズ名	富山県文化振興財团埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第73集						
編著者名	田中道子、青山 見、島田亮仁、朝田華紀子						
編集機関	公益財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229						
発行年月日	西暦 2017年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
小糸尾萩野	富山県 富山市 小糸	16204 301034	36° 28° 51°	137° 14° 17°	20130610 ~ 20130722 20140916 ~ 2014127	4,160	道路（猪谷権原道路） 建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
小糸尾萩野	集落	縄文	堅穴建物 掘立柱建物 土坑墓 土坑	3棟 9基 14基 多数	縄文土器・石器・玉	堅穴建物・掘立柱建物・土坑墓を 検出 縄文中期を主体として多量の土器 と石器が出土	
		近世	道路状遺構 溝 土坑	2条 多数	越中瀬戸・唐津・伊万里・ 埋管	道路状遺構は飛騨街道東道の一節 である可能性が高い	

**要約**

縄文時代の集落は中期前葉末～中葉にかけてそのピークを迎えた。堅穴建物1～2棟、掘立柱建物、土坑墓で構成される小規模な集落が、限られた平坦面に立々と立地しているとみられる。土坑墓には副葬品の外、遺体や遺体の頭を覆ったと推測する縄文土器が出土しており、葬送文化の一端が明らかになった。また、縄文土器の文様や船形・石器の使用石材などから、他地域との交流が盛んであったことが伺える。

近世の飛騨街道東道の一部とみられる道路状遺構は、幅27m、長さ20mにわたり確認した。道路は南から北に向かって下降斜していく。両側に傾溝が設けられ、路面には溝や段差、規則的に並ぶピットがみられるが、その機能は不明である。この道路が整備された背景には周囲で開発された鉱山との密接な関係があり、鉱山の衰退や西道の利用により17世紀後半以降には廢れていったと考えられる。

2017(平成29)年3月1日 印刷  
2017(平成29)年3月10日 発行

## 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第73集 小糸尾萩野遺跡発掘調査報告 —猪谷権原道路建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ—

編集・発行 公益財団法人富山県文化振興財團  
埋蔵文化財調査事務所  
〒930-0887 富山市五福4384番1号  
TEL 076-442-4229

印 刷 とうざわ印刷工芸株式会社  
〒939-2745 富山市婦中町広田5210  
TEL 076-466-2711